川口順二教授退任記念論集

『川口順二教授退任記念論集』

喜田 浩平（編）

© the several contributors, 2012

まえがき

慶應義塾大学文学部教授の川口順二先生が 2013 年 3 月をもって同大学を定年退任されます. 本論集は，川口先生を敬愛してやまない友人知人や教え子がこれを記念して執筆した文章を集めたものです.

すでに慶應義塾大学藝文学会が機関誌『藝文研究』第 103 号（2012 年）を同趣旨の記念号として刊行しました．これは同大学文学部の同僚が中心となって作成したもので，いわば「公的」な論集です．本論集は，各執筆者の個人的な思いに端を発し実現したもので，多分に「私的」な特徴を備えています.

川口先生は慶應義塾大学での教育に寄与し，また研究活動によってフランス語学・文学や言語学に大きな足跡を残されました（川口先生の略歴や研究業績については上記『藝文研究』ご参照ください）. それに加え，日本フランス語学会の発展のために奮闘されたことをぜひともここに記しておきたいと思います．川口先生は同学会の様々な活動の企画運営では中心的存在として文字通り東奔西走され，機関誌の刊行における煩瑣な作業にも常に立ち会われ，例会では活発な議論を通じて後進の指導に力を注がれるなど, 筆舌に尽くしがたい貢献をなさいました. 現在，同学会がフランス語学研究の日本における傑出した研究拠点として機能しているとすれば, それは川口先生のご尽力なしにはありえなかったことと確言できます. 本論集の参加者も，その多くは同学会の活動を通じて川口先生とゆかりの深い方々です.

退任記念論集というものは一般に単なる社交辞令に過ぎないことがあります．また，それが捧げられる当事者の研究活動に終止符を打つような印象を与えることもあります．しかし本論集の刊行にはそのような意図は全く含まれていません．退任は一つの区切りに過ぎず，川口先生にはこれからもますますフランス語学・文学や言語学の分野でご活躍いただきたいという願いが込められています.

諸般の事情により PDF ファイルの Web 出版という形態をとりましたが，日頃 iPad を愛用される川口先生には返ってお喜びいただけるのではないかと期待しています．近い将来，本論集の内容について川口先生と楽しく議論する機会を持ちたいと願う次第です.

2012 年 12 月

喜田浩平

目次

空間移動表現の意味拡張について
「くる」と venir の場合 1
阿部 宏

Quand les restaurants restauraient 15
France Dhorne

フランス語におけるオノマトペ効果について 25
春木 仁孝

中間構文と総称的受動文 39
井口 容子

反実仮想条件文に見られる半過去に関する一考察 45
井元 秀剛

対立の接続詞 tandis que, alors que, pendant que の意味と用法について 55
石野 好一

一人称のトリック的用法について 61
泉 邦寿

メトニミ・メタファと人物名をめぐって
「区別の解消」と「抽象度」 69
川島 浩一郎

「発話者」から「トーン」へ
論証的ポリフォニー理論の可能性 81
喜田 浩平

Émile Benveniste lecteur des penseurs antiques
sur *Noms d'agent et noms d'action,* pp. 166-167 et *Catégories de pensée et catégories de langue* 89
Kazuya Maejima

商品名をめぐって
冠詞の使用と発話者の態度 97
中尾 和美

アイロニーの談話戦略
フランスの新聞・雑誌におけるアイロニーを例として 109
西脇 沙織

副詞 juste とその周辺 117
小熊 和郎

Transmettre があらわす伝達と全体性 137
須藤 佳子

フランス語と日本語における指示と照応
談話モデルの観点から 149
東郷 雄二

Toujours と「やはり」
ステレオタイプ再確認型の副詞 173
渡邊 淳也

空間移動表現の意味拡張について
「くる」と venir の場合

阿部　宏
東北大学

0. はじめに

空間移動を表す代表的な動詞である「くる」と「いく」は，原則的に「くる」であれば発話者の方に近づく，「いく」であれば発話者から遠ざかる，という意味であり，出現頻度が高い基本語彙であるという以上に，発話者＝基準点を指向するという点で他の移動動詞とは性質を異にしている[1]．他方，発話者指向という点では，いわゆる直示表現である「ここ」や「いま」とむしろ共通性があり，これが「くる」と「いく」が直示動詞とも呼ばれる所以である．

ところで，各国語で「くる」と「いく」にあたる語彙は文法化の対象になりやすく，補助動詞化して種々の派生的意味を発達させ，多義化しているが，例えば (1) のような日本語の「くる」や (2) のようなフランス語の venir においては，文法化の程度はまだ低く，元々の空間的意味は十全に保たれており，日本語とフランス語で意味的平行関係も観察される．

(1)　彼女は私に会いに来た．

(2)　Elle *est venue* me voir.

他方，空間的意味から変質した用法として最もわかりやすいのは，フランス語における近接過去形 venir de inf. や近接未来形 aller inf. のような時制形成辞としての機能であろう[2]．ただし，日本語の「くる」と「いく」は，始動相を表す「暖かくなってきた」に典型的に見られるようなむしろアスペクト・マーカーの方向に用法を発達させており，(1) と (2) のようなまだ文法化が進んでいない用法を別にすれば，「くる」と venir の対照においても，「いく」と aller の対照においても，意味拡張の様相は一見かなり異なっているように思われる．

しかし興味深いのは，時制化の方へであれアスペクト化の方へであれ時間概念の方への比喩的意味拡張という点では，共通するものがあり，また，また両言語ともに，空間概念でも時間

[1] 主語が発話者自身である「私はまた仙台に来ます」，「私は仙台に行く」のような場合であっても，原則として発話者が現在いる場所が基準点となる．なお，「いく」には「彼は転勤で今度は東京から大阪に行く」など，発話者は基準点として機能せず単なる移動のみを表す用法もある．

[2] 例えば，Bybee et al. (1994: 105) は過去時制の成立について，類型論的観点から，i) BE と HAVE，ii) COME，iii) FINISH と GO (のような移動表現)，の三つの起源の存在を指摘している．フランス語では複合過去形は i) に，venir de inf.は ii) にそれぞれあたり，aller inf. は過去とは逆の未来の方へではあるが，やはり時制形成辞として文法化した．

概念でもないより抽象化した用法をもっている，ということである．したがって，両言語におけるこれら移動動詞の補助動詞的用法の対照は，日本語とフランス語との外界把握の違いを浮き彫りにしてくれるだけではなく，ある種の言語普遍的側面をも窺わせてくれるように思われる．

1. 先行研究

川口 (2006) はこれまでほとんど分析対象になっていない aller の空間移動や時制形制辞以外の用法に着目し，これら種々のモダリティ的用法の起源に「出発点（発話者）」から「到達点」への空間移動概念の比喩的意味拡張がある，とする．Forest (1993) は venir や aller を含めたある種の動詞の補助動詞 (explicateur) 化は類型論的にけっして稀な現象ではないこと，また Forest (1999: 59) は « « aller » est le terme qui correspond à une empathie contrariée, alors que « venir » correspond à une empathisation plus «normale» et continuiste, » という興味深い指摘を行っている．川口・阿部 (1996) はフランス語の具体例を素材として文法化研究の現状を紹介したものであるが，この中で文法化の一側面としてのメタファー化や主観化に言及している．徐 (2010) は韓国語の補助動詞 ota（くる）と e kata（いく）に，日本語ほど多義化されていないとはいえ，やはり類似の用法が観察されるとする．これらは「くる」や「いく」，venir や aller の多義化現象の解明にヒントを与えてくれる貴重な考察である．

フランス語と日本語との対照研究としては，泉 (1978: 154) が，フランス語では (3) と (5) のように移動は動詞だけで表されるのに対し，日本語では (4) と (6) のように補助動詞としての「くる」と「いく」が付加されることが多く，これは移動が発話者の位置との関係でとらえられやすい日本語の傾向を反映している，とする．

(3) Il *court* vers moi.

(4) 彼は私の方に走ってくる.

(5) Françoise *s'est avancée* vers nous.

(6) フランスソワーズは私達の方に進んできた.

守田 (2011) もまた，(7) と (8) に見るように，フランス語から日本語，また日本語からフランス語への翻訳を対照させ，日本語の同種の傾向を指摘している．

(7) A chaque arrêt, j'observais les gens qui *montaient*, survaillais les visages. (Salle)

(8) ぼくは停留所ごとに，乗ってくる人を観察し，警戒した．

ところで，(4) の「走る」や (6) の「進む」において，これらの行為と補助動詞「くる」が表す行為は同時進行であり，「くる」はいずれにおいても元々の空間移動の意味を保っているのに対し，(8) の「くる」は空間移動概念が希薄化し，単に「乗る」という空間移動が発話者の方向に向いた行為であることだけを示しているかのように思われる．つまり，空間移動用法に

おいても補助動詞「くる」はすでに多義的である．また， (9) のように空間移動動詞以外の動詞に付加されれば,「くる」は始動相のようなアスペクト･マーカーとして機能するようになる．これらの各ケースは，フランス語ではどのように表現されるのであろうか？また，空間移動でもなく，アスペクト・マーカーでもない (10) のような「くる」や，やはり空間移動でもなく時制形制辞でもない (11) のような venir については，どう考えるべきであろうか．本論で扱ってみたいのは，具体的にはこの種の問題である．

(9)　空がだんだん明るくなってきた.

(10)　彼は僕の仮説について反論を書いてきた.

(11)　*Par ailleurs* exprime donc une concession que l'on fait à la vérité, mais qui ne *vient* pas nuire à l'affirmation. (Bernard Cerquiglini (2008) : *Merci Professeur !*, Bayard, p. 27)

2.「くる」の多義性と日仏対照

補助動詞「くる」の多義性については，研究者によって語義区分が必ずしも一致しないが，代表的な研究である坂原 (1995)，澤田 (2009)，森田 (1968) の各用法のラベルを対照表にまとめると以下のようになろう．

坂原 (1995) は各語義の関係について，まず＜継起＞と＜同時＞に分岐し，＜継起＞から＜継起系往復運動＞が派生したとする．他方，＜同時＞からは，＜移動方向＞，次いで＜授与方向＞の派生，また，＜同時＞から＜継続＞へ，＜移動方向＞から＜始動＞へ，＜授与方向＞から＜受益・受害＞へ，という派生のルートを想定している．

澤田 (2009) は，坂原 (1995) によって指摘された＜受益・受害＞の意味のうち，「くる」が担うのはもっぱら＜被害＞（＝坂原の＜受害＞）の方であり[3]，またその＜被害＞も語彙的意味ではなく語用論的意味である，としている．

また，森田 (1968) は坂原 (1995) にも澤田 (2009) にもない「経験」用法に言及している．

坂原 (1995)	**澤田 (2009)**	**森田 (1968)**
継起	継起移動	順次
継起往復運動		
同時	同時移動	平行
移動方向	移動方向	一つの動作・作用
継続	継続	継続

[3] これは Forest の主張する venir の意味基盤と矛盾する現象であり，興味深い．澤田は，日本語では補助動詞「くれる」があるために，「くる」は＜受益＞を表さない，とする．

		経験
始動	変化	発生，開始，進行
授与方向	行為方向	
受益・受害	（被害）	

ところで，これらは大まかに，（甲）空間移動系：空間移動を表す動詞が従属動詞になり，「従属動詞＋くる」全体としても空間移動を表す，（乙）アスペクト系：空間移動以外の動詞が従属動詞になり，「くる」はアスペクトを表す，（丙）働きかけ系：空間移動以外の動詞が従属動詞になり，「くる」は事態の発話者への働きかけを表す，に三分類され，それらはさらに以下の各用法に下位分類されると考えられる．（坂原の＜受益・受害＞用法については，本稿では扱わない）．

（甲）空間移動系
A)　＜継起＞　パンを買ってくる．太郎が東京で遊んできた．
B)　＜継起系往復運動＞　パンを買いに行ってくる．案内板を見てくる．
C)　＜同時＞　太郎は花子を連れてきた．太郎が，畦道を走ってくる．
D)　＜移動方向＞　太郎が帰ってきた．見知らぬ男が近寄ってきた．
（乙）アスペクト系
E)　＜継続＞　私は，この商売をして生きてきた．灯りががだんだんついてきた．
F)　＜経験＞　彼は海外生活も経験してきて話題が豊富だった．
G)　＜始動＞　サボテンが枯れてきた．雨が先ほどから降ってきた．
（丙）働きかけ系
H)　＜授与方向＞　太郎が本を送ってきた．太郎から，電話がかかってきた．

空間移動系において，＜継起＞は従属動詞の行為と「くる」が継起的であること，＜継起往復運動＞は従属動詞の行為を行うために出発してまた戻ってくること，＜同時＞は従属動詞の行為と「くる」が同時であること，＜移動方向＞は従属動詞によって表される空間移動が発話者の方向においてなされること，をそれぞれ表す．アスペクト系において，＜継続＞は従属動詞の行為・状態の現在までの継続，＜経験＞は従属動詞が表す行為の経験をもっていること，＜始動＞は従属動詞の行為・状態が開始され現在に至っていること，をそれぞれ表す．働きかけ系の＜授与方向＞は従属動詞の行為が発話者に向けて行われること，を表す．

3.「語り」における「くる」と venir

「くる」と venir の対照に入る前に，これらが基準点とする発話者の概念について，若干の検討を行いたい.

原則として「くる」と venir は発話者に近づくこと，「いく」と aller は発話者から遠ざかることを表すが，これは移動が発話者を基準点としてとらえられているということであり，発話者は当該事態をそれが起こっている時空間の外側からではなく，内側から描写している，ということになる．したがって，これらはもっぱら会話において用いられ，文章語，特に現在とは直接の関係がない過去の事態を述べるいわゆる「語り」とは無縁であると考えられるかもしれない[4]．しかし実際の日本語やフランス語の文章語においては，「くる」や「いく」，venir や aller は頻出する．(12)–(16) の「くる」と venir を参照されたい.

(12) 勘定をして宿を出て，停車場へ着いた時，女ははじめて関西線で四日市の方へ行くのだということを三四郎に話した．三四郎の汽車はまもなく来た．時間のつごうで女は少し待ち合わせることとなった．（夏目漱石『三四郎』，青空文庫）

(13) 祖母はなるべくこっちを見ないようにして乱雑にしてある夜具のまわりを廻って押し入れを開けに来た．彼は少しどいてやった．そして夜具の山に腰を下ろして足袋を穿いていた．（志賀直哉「ある朝」，『志賀直哉・ちくま日本文学』，筑摩書房，p. 14）

(14) しかも渠は交番を出でて，路に一個の老車夫を叱責し，而して後この処に来れるまで，ただに一回も背後を振りかえりしことあらず．（泉鏡花：「夜行巡査」，岩波文庫，p. 91）

(15) Une jeune femme, en robe de mérinos bleu garnie de trois volants, *vint* sur le seuil de la maison pour recevoir M. Bovary, qu'elle fit entrer dans la cuisine, où flambait un grand feu. (Flaubert : *Madame Bovary*, Michel Lévy frères, 1839, p. 19)

(16) Elle se leva, et, tout en ayant l'air de suivre de l'oeil quelqu'un qui passait dans la rue, elle *vint* se placer rapidement entre lui et le billard : ... (Stendhal : *Le Rouge et le Noir*, Conquet, p. 10)

この現象は，「語り」においては作者たる「発話者」とはまた別に疑似主体としての「語り手」が潜在し，これが基準点として機能することを示唆するものである．作者は執筆の時点にいるが，「語り手」は語られる当該の事件が生起するその都度の現場におり，その場所が「語り手」

[4] Benveniste は発話者と共発話者の存在を前提とする discours とそれを前提としない histoire とを対照させたが，後者においては，事件が自らを語るとする：A vrai dire, il n'y a même plus alors de narrateur. Les événements sont posés comme ils se sont produits à mesure qu'ils apparaissent à l'horizon de l'histoire. Personne ne parle ici; les événements semblent se raconter eux-mêmes. Le temps fondamental est l'aoriste, qui est le temps de l'événement hors de la personne d'un narrateur. (Benveniste 1966: 241).

にとっての「ここ」であり，「いま」なのである．したがって，「語り」における基準点は作者ではなく，原則的にはこの「語り手」であり，この「語り手」に近づくことが「くる」ことであり，「語り手」から遠ざかることが「いく」ことになる[5]．なお，一人称の「語り」の場合においては，登場人物たる「私」と「語り手」の区別は必ずしも明瞭ではないが，いずれにせよ「発話者」たる作者ではなく，「語り手」というこの疑似主体が基準点になるという構造自体は同じと考えなければならない．

したがって次節以下での実例分析における「発話者」とは，「語り」においては疑似主体たる「語り手」の意味であることを了解されたい．

4. 日本語とフランス語の具体例の対照

「くる」の空間移動系およびアスペクト系の用法について，フランス語の翻訳がどのように処理しているかを，以下で見てみる．

＜継起＞

(17) 翌日，妻が医者を見つけて来た．風呂屋のすぐ近くに内科と書いた保険医の看板が出ているのを見たと言う．（遠藤周作：『海と毒薬』，講談社文庫，p. 8）

(18) Ma femme en *découvrit* un (= un médecin) le lendemain. Tout près du bain public, elle avait vu une enseigne de généraliste agréé par la sécurité sociale, avec cette inscription : Médecine interne. (Shusaku Endo : *La mer et le poison*, pp. 10-11)

＜継起往復運動＞

(19) 「今夜は，私，妹のところに行って来たいと思っているのですけど．」（太宰治：「桜桃」，『ヴィヨンの妻・桜桃』，岩波新書，p. 215）

(20) « Ce soir, je comptais *aller voir* ma soeur. » (Osamu Dazai : Les cerises, *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, Gallimard, p. 379)

＜同時＞

(21) （馬は）鼻から火の柱のような息を二本出して飛んで来る．それでも女は細い足でしきりなしに馬の腹を蹴っている．馬は蹄の音が宙で鳴るほど早く飛んで来る．（夏目漱石：『夢十夜』，岩波文庫，p. 24）

(22) Galopant vers cette lueur, le cheval *volait* dans l'obscurité, et ses naseaux semblaient cracher

[5] Vuillaume (1990) は小説の地の文にあらわれる maintenant と aujourd'hui のような直示的表現を分析し，これらの基準点は常に語られる事件の現場に潜在するものとして想定された疑似主体 narrateur-lecteur であるとした．他方，やはり小説の地の文にあらわれる直示的表現 à gauche，à droite などを考察した Détrie (2011) は，これらの基準点としては i) 読者，ii) 登場人物，iii) 不特定の主体，のそれぞれのケースがあるとする．これはフランス語の「語り」中にもある頻度で直示表現が出現するのみならず，それらの基準点の性質は必ずしも均質ではない，という興味深い指摘であるが，この基準点の不均質性の問題については本論では踏み込まないことにする．

du feu. La femme sans relâche lui excitait les flancs. Le cheval *galopait* si vite que le roulement de ses sabots montait jusqu'au firmament. (Soseki Natsume : Dix rêves, *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, Gallimard, p. 16)

(23) その時，四，五歳ぐらいの男の子が建物のかげから走ってきました．日本人の顔はしているが髪の毛が栗色だったので，わたしはそれがヒルダさんと橋本先生の子だとすぐ気づきました．（遠藤周作：『海と毒薬』，講談社文庫，p. 92）

(24) Au même moment, un petit garçon de quatre ou cinq ans *accourut*, mais ses cheveux châtains me firent tout de suite penser que c'était l'enfant de Mme Hilda et du professeur Hashimoto. (Shusaku Endo : *La mer et le poison*, pp. 106-107)

＜継続＞

(25) 無影燈のまぶしい青白い光も，海草のようにゆっくり動いている白い手術着をきた人間たちの姿も自分には長年，見慣れてきたものである．（遠藤周作：『海と毒薬』，講談社文庫，p. 139）

(26) La lumière aveuglante et blême du réflecteur, les silhouettes en blouses blanches aux lents mouvements d'algues *étaient* depuis longtemps *familières* à sa vue, … (Shusaku Endo : *La mer et le poison*, p. 162)

＜経験＞

(27) 医学生としての数年間，僕は多くの病人が苦しんでいる生活の苦痛やその死にたいしても平気なのだ．医学生としての数年間，僕は多くの病人が苦しんでいる生活の中で暮らしてきた．彼等が死ぬのも数多く見てきた．時には手術で患者を殺してしまう場面にもたち会ってきた．それらの一つ，一つにこちらまで頭をかかえるわけにはいかないのだ．（遠藤周作：『海と毒薬』，講談社文庫，p. 120）

(28) Pendant mes années de médecine, j'*ai vécu* avec de nombreux malades qui souffraient. J'en *ai vu* mourir beaucoup. J'*ai* même alors *assisté* à des scènes d'opérations où les patients trépassaient. Jamais rien de tout cela ne m'a fait prendre la tête entre les deux mains. (Shusaku Endo : *La mer et le poison*, p. 138)

＜移動方向＞

(29) どぶ板の向こう側に芸妓の家があって，表で待っている内に，（芸妓は）じきに支度をして出て来た．（内田百閒：「サラサーテの盤」，『内田百閒・ちくま日本文学』，筑摩文庫，p. 258）

(30) La maison était là, au bout d'un petit pont qui enjambait le caniveau. Tandis que nous l'attendions dehors, elle s'apprêta et *sortit*. (Hyakken Uchida : Airs bohémiens, *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, p. 127)

＜始動アスペクト＞

(31) だんだんと薄暗くなってきた．いつまで往っても，先の角はあった．もうここらで引きかえそうと思った．（志賀直哉：「城の崎にて」，『志賀直哉・ちくま日本文学』，筑摩文庫 p. 324）

(32) Le jour *baissait*. A quoi bon poursuivre ? Il y avait toujours devant moi de nouveaux tournants. Je me décidai à faire demi-tour. (Naoya Shiga : A Kinosaki, *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, p. 83)

(33) その時，胸壁や内臓をかくした組織が下の肺の圧力で赤い風船のようにもり上がってきた．（遠藤周作：『海と毒薬』，講談社文庫，p. 60）

(34) Alors, le tissu qui recouvrait les plèvres, sous la pression du poumon qui était dessous, *se mit à gonfler* comme un ballon rouge. (Shusaku Endo : *La mer et le poison*, Gallimard, p. 69)

(35) 空が遠く，森や丘の起伏の具合が間が抜けた様で，荒涼とした景色が展けた．その中を小さな汽車がごとごとと走り続ける内に，どこからともなく，夕方の影がかぶさって来た．（内田百閒：「サラサーテの盤」，『内田百閒・ちくま日本文学』，筑摩文庫，p. 253）

(36) Le ciel semblait éloigné, et les accidents de terrain, forêts ou collines, rompaient de manière incongrue la monotonie du paysage désolé qui se déroulait devant nous. Et tandis que le petit train traversait péniblement ces étendues, les premières teintes du crépuscule *commencèrent à s'emparer* du ciel. (Hyakken Uchida : Airs bohémiens, *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, p. 124)

以上からわかることは，空間移動の意味を保持している＜継起＞，＜継起往復運動＞，＜同時＞，また空間移動の意味が希薄化し単に方向性を示すだけになった＜移動方向＞のいずれの場合にも，フランス語では単独の動詞で表され，結果的に「発話者の方へ近づく」という情報は盛り込まれない，ということである[6]．＜継続＞については，(26) のように être の半過去形を用いるなどあえて構文を変えて「継続性」を表現する工夫がなされる場合がある．ところで，(27) の各「くる」が＜継続＞であるか＜経験＞であるかの判断は微妙であり，日本語でこの二用法は本質的には連続しているのではなかろうか．(28) のフランス語複合過去形の j'ai vécu は

[6] ただし，(15) の accourir（= venir en courant, en se pressant, *Le Petit Robert*）のようにやはり直示系の動詞が用いられれば，必ずしもこの限りではない．なお，こうした日仏の対照は，補助動詞が用いられない場合においても発話者の位置が参照されないとは必ずしもいえず，フランス語では発話者の位置は補助動詞とは別の方法で示されうる可能性がある，という興味深い示唆を与えてくれる．例えば，次の例では，regagner の接頭辞 re-がやはり同種の機能を果たしているのではなかろうか．「自分は淋しい気持ちになって，ようやく足元の見える路を温泉宿の方に帰って来た（志賀直哉：「城の崎にて」，『志賀直哉・ちくま日本文学』，筑摩文庫 p. 325）」；Sentant la mélancolie m'envahir, je redescendis le sentier encore visible à mes pieds pour *regagner* l'hôtel (Naoya Shiga : A Kinosaki, *Anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, Gallimard, p. 84).

継続用法であるが，j'en ai vu と j'ai même assisté はむしろ経験用法といえよう．＜始動＞については，(32) のようにこのニュアンスは無視されるか，あるいは (34) や (36) のように積極的に対応する表現（se mettre à，commencer à）が用いられる場合もある．

ところで「くる」は，＜継続＞，＜経験＞，＜始動＞などのアスペクトマーカーに変質したとしても，単に事態の時間的ありかたを客観的に記述しているのではなく，事態に対する発話者の認識を積極的に感じさせるものであることは，上記の実例から明らかであろう．「くる」の空間移動概念が希薄化した場合，発話者は空間的基準点ではなく，今度は事態の直接的な認識主体として機能するようになるのである．したがって，この場合においても空間移動系と同様に発話者は事態を状況の外側からではなく，状況の内側から記述することになり，「くる」は単なるアスペクトマーカにとどまらず，発話者が事態を状況内的に認識していることを示すマーカーでもあるのである[7]．他方，フランス語においては，「くる」のアスペクト的側面は種々の手段で表現することは可能であるが，発話者の状況内的事態認識の側面の方は欠落してしまわざるをえない．

5.（丙）働きかけ系

働きかけ系である＜授与方向＞は，事態を状況内的に認識するだけではなく，発話者自らが直接的にその影響を被ることへの認識を表すマーカーであるが，フランス語では，(37) に対する (38) のように，やはり単独の動詞があてられることになり，「事態の発話者への直接的影響」の認識は，表現からは欠落してしまう．

(37)　ある日，上田は突然，わたしのお腹に顔をこすりつけて手を握ってきました．（遠藤周作：『海と毒薬』，講談社文庫，p. 81）

(38)　Un jour, brusquement, il frotta sa tête contre mon ventre et me *saisit* la main. (Shusaku Endo : *La mer et le poison*, Gallimard, p. 94)

ここで，(39) と (40)，(41) と (42) を対照してみる．(39) の「睨む」，(41) の「つまむ」のような行為が自分に向けられた時は，(39) と (41) で明らかなように，日本語では「くる」をむしろ付加しないと文は不自然になってしまう．日本語では発話者は状況内的であるために，自らが事態の影響を直接的に被った場合は，これを「くる」なしに客観的に叙述するのはむしろ不自然なことになる．他方，(40) と (42) のようにフランス語においても venir を付加することは可能であるが，その場合は，日本語と異なり自動的に空間移動の情報も付加されることになってしまう．このことは，空間移動の解釈が生じ得ない (43) については，(44) のように

[7] この点で，森田 (1968: 86) の指摘は示唆的である：「いっぽう観念的はあく一本でなされるのが変化を表す〜テイク・〜テクルである．時間的作用のばあいは，作用をとらえる話し手の観念的立場によってその選択が決定される．話し手の立つ時点に対して接近するか遠ざかるか，換言すれば，作用を受けとめるか，見送るかによって〜テクル・〜テイクが決定する．この点は継続のばあいも同じである．」．

venir の付加は不可能である，ことからも了解されよう．

(39) その喫茶店の前を通る度に，ヤクザが睨めてくる（? 睨める）．

(40) Chaque fois que je passe devant ce café, un yakuza me *regarde* de travers (*vient me regarder* de travers).

(41) 地下鉄である男が私の鼻をつまんできた（?つまんだ）．すごく変だった．

(42) Dans le métro, un homme m'*a pincé* (*est venu me pincer*) le nez. C'était très bizarre.

(43) ポールは毎朝私に電話をかけてくる（*かける）．

(44) Paul me *téléphone* (* *vient me téléphoner*) chaque matin.

しかしながら注目すべきは，具体的行為を離れた抽象的な事態については，(45) ~ (48) に見るように，フランス語においても venir が状況への関与を表すかのような具体例がしばしば観察されることである．この意味の venir が出現するためには，空間移動の解釈が排除される文脈になっている必要があり，また事態は抽象的性質のものであり，主語は無生物あるいは抽象概念，でなければならないようである．

(45) Certains pays comme le Royaume-Uni ont d'ailleurs mis en place des plans pour attirer davantage d'hommes dans l'enseignement, avec l'objectif de réduire ainsi les difficultés des garçons. / Une recherche *vient* démentir ce présupposé souvent tenu pour évident. (*Sciences Humaines*, Nº 236, Avril 2012, p. 17)

(46) DEPUIS DIX ANS, LES NUAGES PERDENT EN ALTITUDE … Et effet, plus l'altitude d'un nuage est faible, plus sa température est élevée, et plus il évacue d'énergie vers l'espace. L'abaissement de l'altitude *vient* donc s'opposer au réchauffement climatique. (*Science & Vie*, mai 2012, p. 28)

(47) Effet Doppler. En cette fin du XXe siècle, de nouvelles techniques d'investigation *viennent* aider les observateurs. La spectroscopie, notamment, étudie la lumière des astres et sa répartition en différentes couleurs ou longueurs d'ondes. (*La Recherche*, No. 442, juin 2010, p. 93)

(48) Ah, merveilleux, rassurant cinéma hollywoodien : pas l'ombre d'une surprise, pas une fausse note, rien ne *vienne* vous déstabiliser, pire, vous FAIRE REFLECHIR!!! (Frédéric Boilet (2006) : *L'Apprenti Japonais*, Les Impressions nouvelles (Paris-Bruxelles), p. 132)

仏々辞典におけるこの venir inf. の用法の記述は，いずれも明快とは言い難いが，Grand Robert, Trésor，Logos において，不定詞によって表される行為が「可能性（possibilité）」のレベルにとどまることが指摘されていることに注目したい．これは venir inf. の空間移動の意味（～しにくる）において，不定詞が表す行為は「くる」ことの目的にとどまり，その実現までは保証されていない，ということと平行しており，venir inf. の基本的枠組みが，＜比喩的空間移動＞とも

いえるこの抽象的用法においても継承されていることを窺わせるものである．したがって，動詞単独の場合の意味は単に「(主語が補語に）〜する」であるのに対し，この venir inf.は「(主語が補語に）〜すべく関与する」ということになろう．

— *Grand Robert* : « Se mettre à (faire), faire en sorte d'être dans la possibilité de, (pour marquer une idée d'intervention plus ou moins fortuite) » (Tome 7, p. 1739)

— *Trésor* : « (venir + inf.) 2. indique le caractère fortuit ou possible de l'action exprimée par l'inf.; 3. indique une mise en relief de l'action exprimée par l'inf. » (Tome 16, p. 986)

— *Grand Larousse* : « (venir + inf.) marque une simple intervention possible ou plus ou moins fortuite; s'emploie pour insister simplement sur l'action » (p. 6407)

— *Logos* : « (venir suivi de l'infinitif sans préposition) se mettre dans la possibilité de » (Tome 3, p. 3046)

— *Littré* : « Quelquefois venir, devant un infinitif, ne fait guère que renforcer l'idée exprimée par cet infinitif » (Tome 7, p. 1595)

ここには，＜生物主語・空間移動＞ Elle *est venue* chercher les enfants → ＜生物主語・比喩的空間移動＞ Et quand un philosophe *viendra* vous dire que …[8] → ＜無生物主語・比喩的空間移動＞ Des images sombres *venaient* m'assaillir → ＜無生物主語・関与＞ Une expérience que rien n'*est* jamais *venu* contredire（いずれも Grand Robert の例）といった，派生の方向性が想定可能で，おそらくフランス語では，こうした順序での比喩的意味拡張が行われたのであろう．

しかし，「くる」と venir の関与を表す用法には大きな相違点がある．日本語の＜授与方向＞においては，事態が発話者に関与するのに対し，フランス語のこの用法においては，主語が動詞を通じて補語に関与するのであり，ここに発話者は参与しない．つまり，フランス語の venir inf. の比喩的意味拡張においては，意味の抽象化はあっても，主観化は起こっていないか，あるいは，日本語「くる」のアスペクト・マーカー的用法に見られたような空間的基準点から認識主体の方への主観化が若干は起こっているとしてもその程度は低い．これはフランス語において，発話者は基本的に状況外的であることをやはり反映するものといえそうである．

6. まとめとして

直示動詞「くる」と venir には，いずれも補助動詞化した用法があり，さらに空間移動以外の用法へと意味拡張している．日本語において，補助動詞「くる」は，従属動詞と結びつき「〜てくる」を構成しやすい．この空間移動系の用法においては，発話者は空間移動の基準点として機能している．アスペクト系においては，単にアスペクトを表すのみならず，発話者の事態

[8] Venir inf. における「空間移動」は，Monsieur A, ancien PDG de l'entreprise X, *est venu sauver* notre préfecture qui était près de la faillite.のようにかなり抽象化されたケースもありうる．この種の用法が，本節で扱う意味拡張への契機となったのであろう．

への認識を，働きかけ系においては，自らへの直接的影響の認識を，それぞれ表すマーカーとして機能することになり，いずれも発話者は状況内的である．補助動詞 venir は venir inf.の形態においても，もっぱら空間移動的意味であり，コンテクストが具体的空間移動の解釈を排除する場合においてのみ, 比喩的空間移動としての状況への関与を意味する用法の可能性が生じる．しかしこの場合においても，関与は「主語の動詞を通じた補語への関与」であり，発話者への関与ではないという点で, 日本語の働きかけ系の用法とは根本的に異なっている. したがって，補語を欠き，主語自らの変化を意味する (49) や (50) のような文への venir の挿入は (51) や (52) のように不可能である．

(49) La situation s'est améliorée.

(50) Le niveau de vie s'est élevé ces dernières années.

(51) *La situation *est venue* s'améliorer.

(52) *Le niveau de vie *est venu* s'élever ces dernières années.

しかし, (49) や (50) に (53) や (54) のように venir à の挿入は可能であり, この venir à inf. の形態は日本語の「くる」的な事態の発話者の方への関与を窺わせるものである．また (55) のような en venir à inf. の形態で，当該の事態が発話者の「望ましくない」という判断下におかれるかのような，単なる比喩的空間移動の延長線上とは性質が異なり，主観的判断に関わっている可能性のある用法が観察される．

(53) La situation *est venue à* s'améliorer.

(54) Le niveau de vie *est venu à* s'élever ces dernières années.

(55) La psychologie des faux aveux. Régulièrement, des personnes placées en garde à vue *en viennent à* s'accuser de crimes qu'ils n'ont pas commis. Comment peut-on arriver là? (*Sciences Humaines*, No. 215, Mai 2010, p. 6)

これらの用法をも射程に入れた補助動詞的 venir の総合的分析，またそれを川口 (2006) や Lansari (2009) が扱ったもう一つの直示動詞 aller の補助動詞的用法の現象とも対照させ，日本語およびフランス語の直示動詞の意味拡張を分析することが次の課題である．

参考文献

Benveniste, E. (1966), "Les relations de temps dans le verbe français", *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard.

Bybee, J. et al. (1994), *The Evolution of Grammar, Tense, Aspect, and Modality in the Language of the World*, The University of Chicago Press.

Détrie, C. (2011), "*À GAUCHE, À DROITE*, ETC. : DE L'ESPACE DU DESCRIPTEUR ET DE LA DESCRIPTION À CELUI DU LECTEUR", B. Verine et C. Détrie (éds), *L'actualisation de l'intersubjectivité : de la langue au discours*, Lambert-Lucas, 139-156.

Forest, R. (1993), ""Aller" et l'empathie", *BSLP*, LXXXVIII, fasc. 1, 1-24.

Forest, R. (1999), *Empathie et linguistique*, PUF.

Lansari, L. (2009), *Linguistique contrastive et traduction*, *Les périphrases verbales* aller + *infinitif et* be going to, Ophrys.

Vuillaume, M. (1990), *Grammaire temporelle du récit*, Minuit.

泉邦寿 (1978)『フランス語を考える 20 章』白水社.

川口順二・阿部宏 (1996)「展望・文法化」『フランス語学研究』30，51-58.

川口順二 (2006)「モダリティ動詞 *aller*」『藝文研究』91/3（慶應義塾大学），328-312.

坂原茂 (1994-1995)「複合動詞「Vてくる」」『言語・情報・テクスト』2（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻），109-143

澤田淳 (2009)「移動動詞「来る」の文法化と方向づけ機能 ― 「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ ―」『語用論研究』11，1-20.

守田貴弘 (2011)「翻訳論としての対照言語学」『Résonances』7（東京大学大学院総合文化フランス語系学生論文集），48-49.

森田良行 (1968)「「行く・来る」の用法」『国語学』75，75-87.

徐珉廷 (2010)「日本語話者の＜好まれる言い回し＞としての「ていく／くる」の補助動詞的な用法 ― 対応する韓国語の「e kata / ota」との比較を通して ― 」『日本認知言語学会論文集』10，248-258.

Quand les restaurants restauraient

France Dhorne
Université Aoyama Gakuin

Partageant avec Junji Kawaguchi le goût pour les mets délicats, et notre esprit ayant été happé au gré de conférences par l'histoire culinaire, nous aimerions lui offrir ce petit essai sur ce que nous dit la langue de l'histoire et du devenir du goût et de la gastronomie en France.

1. Gastronomie et santé

Il fut un temps, dont J. Kawaguchi est spécialiste, où les restaurants n'étaient pas ces lieux de convivialité où l'on partage avec des amis un repas qui flatte vos papilles, mais des mets qui ouvraient l'appétit, notre actuelle mise en bouche en quelque sorte. Formé par conversion d'un verbe en substantif, il s'agissait donc d'un plat qui avait pour fonction de restaurer le corps, de lui redonner santé. Si le restaurant pouvait débuter un repas normal, il était de rigueur pour les invités malades. L'ouvrage *Du Fait de cuisine* (1420) de Maître Chiquart nous renseigne à cet égard. Il nous livre le menu lors des trois jours de banquet au fameux Château de Ripaille, dont un menu spécial pour les malades. La gastronomie française est réputée s'être développée à la Renaissance, mais on constate que les hôtes du Moyen Âge savaient au moins porter une attention dévouée à leurs invités. Le restaurant de ce jour était un chapon (jeune coq) en bouillon, mais pas n'importe quel bouillon.

> « Mettez-le au bain-marie avec un demi verre d'eau de rose et autant de belle eau fraîche, une petite quantité de sel, une once ou plus de fines perles mises dans un petit sac fait de joli et net drap de soie forte ou de lin. Et aussi de très bonnes, vertueuses, vaillantes et dignes pierres précieuses, à savoir : diamants, marguerites, rubis, saphirs, turquoises, émeraudes, corail, ambres, jaspes, jacinthes, calcédoines, cristaux, onyx, crisbéryls, topazes, chrysoprases, améthystes, et de toutes autres pierres précieuses, bonnes et vertueuses. Toutefois on les utilisera selon l'ordonnance des médecins. » (FDC, p.144)

On comprend qu'avec des bouillons aussi luxueux, le Château de Ripaille soit devenu célèbre et qu'on

vienne y faire ripaille coûte que coûte, même malade, ou plutôt surtout malade. En fait, le premier trait remarquable, quand on lit cet ouvrage, est l'attention portée au corps, qu'il s'agisse de malades ou de bien-portants (la majorité des convives). Le bien-manger à l'époque reposait sur la qualité de l'alimentation au regard de la santé. Les aliments étaient d'ailleurs appelés *viandier,* mot venant du latin *vivenda* (pour vivre), qui est aussi le titre du premier livre de cuisine française écrit par le fameux Taillevent au XIVème siècle.

Le lexique le plus éloquent à cet égard est celui des adjectifs. Nous venons de le voir avec les pierres précieuses qui sont *vertueuses*, bénéfiques donc à la santé, et *dignes*, c'est-à-dire « qui possèdent des vertus curatives ». Les pierres précieuses n'étaient pas seulement esthétiques, elles étaient censées avoir des propriétés médicinales, tout comme les épices d'ailleurs, qui, à l'origine, étaient considérées comme des médicaments. Pour Maître Chiquart, poser les mets dans des plats d'or et d'argent (les *beaux plats*), ce n'est pas seulement faire miroiter la vaisselle, c'est surtout transmettre aux aliments les propriétés vertueuses des métaux précieux. Les adjectifs appréciatifs les plus remarquables sont cependant ceux liés à l'hygiène. Ils sont peu variés, mais d'une occurrence particulièrement fréquente (quasiment toutes les recettes), surtout en ce qui concerne les ustensiles. Les plats pour le service doivent être beaux qu'on peut prendre au sens esthétique, à celui de la taille (= grand), ou à celui de l'hygiène (= propre). Les oules (= marmites) belles, nettes et claires, les planches à découper belles, blanches et nettes, les poêles et les cornues elles aussi belles et nettes, l'eau toujours belle, autrement dit pure.

> « Et encore un gravé d'oisillons et de volaille. Pour donner entendement à celui qui le fera, qu'il prenne un millier de petits oisillons. Qu'ils soient bien plumés et adroitement nettoyés afin qu'il ne demeure ni plume ni ordure. Prenez une centaine de *belles, nettes et grosses* poulailles, coupez-les par moitié et dépecez-les en quatre pièces. *Lavez-les très bien et nettement* avec les oisillons, posez-les sur de *belles, blanches et nettes* planches à trancher. Essuyez-les. Prenez du lard à grand foison, faites-le fondre dans de *belles, grandes et nettes* poêles. Faites en sorte d'avoir une *belle et nette* chaudière où vous mettrez vos oisillons et poulailles…» (FDC, p.88)

Le second élément linguistique, un mot composé, qui nous interpelle est là encore un moment du repas, c'est l'*entremets*. Il ne s'agit pas de ces crèmes sucrées actuelles qui ont tendance à être consommées en dessert, mais comme son nom l'indique, d'un plat qui se sert entre deux mets principaux. Il peut être sucré ou non, mais de toute façon moins consistant que les mets des services. L'entremets est avant tout un moment de divertissement. Il a deux fonctions. La première est d'introduire un temps de repos dans le cours du repas. On ne considère jamais le facteur temps quand on s'interroge sur la gastronomie, mais

c'est pourtant un élément essentiel. Le service à la française, qui introduit un ordonnancement dans le service des plats (1er service- -entremets – 2ème service – entremets –boute-hors) laisse au corps et à l'esprit le temps d'apprécier et de digérer les mets et surtout de construire autour du repas un halo de bien-être. La deuxième fonction de l'entremets est justement de divertir, soit par des attractions musicales ou autres soit par l'apparence visuelle des plats. C'est essentiellement avec les entremets que Maître Chiquart joue sur les couleurs comme pour ce « blanc-manger réparti en quatre couleurs dans un plat, à savoir de l'or, de l'azur, de la goule et de l'argent. » (FDC, p.107) Mais le mets peut aussi devenir spectacle. Qu'on en juge :

> « Encore plus, pour un entremets de hures (= têtes) de sanglier dorées, armées d'un blason, crachant du feu. (…) Pour donner entendement aux maîtres queux en charge desdites hures, pour qu'elles donnent et lancent du feu par la gorge, prenez une chandelle de cire à deux mèches, enveloppez le tout avec du coton imbibé d'eau-de-vie et purifiez-le avec un peu de camphre. Et, pour autant que les choses doivent se faire en l'honneur des seigneurs et des maîtres ouvriers, il faut que le maître queux demande aux hérauts quels seront les seigneurs invités à ladite fête, et les armes de chacun pour mettre sur lesdites hures les bannières aux armes du seigneur devant lequel elles seront présentées. » (FDC, p.79-70)

Car la seconde caractéristique du service à la française est de présenter les mets entiers sur la table. Chacun se servant à sa guise et l' 'écuyer tranchant' coupant pour vous des morceaux. On imagine la joie et l'allégresse du seigneur au spectacle grandiose de cette hure de sanglier flambante qui lui était dédiée !… Face à la vigueur de la présentation, on est d'autant plus surpris pour ne pas dire ému par la délicatesse des gestes de cuisson, qu'on découvre dans le lexique adverbial principalement : « mélangez-le tout subtilement », « broyez-les adroitement », « lavez-le avec adresse », « versez avec précaution », «mélangez-le doucement », mais aussi des adjectifs : « sur un feu gracieux », « sur un joli petit feu ».

Quant au résultat gustatif, il laisse un peu dubitatif. Les directives consistent en majorité à prêter une attention particulière à la quantité et ne pas avoir la main trop lourde. « Quand tout sera ensemble, goûtez pour vérifier s'il n'y a rien de trop afin d'y remédier. Avisez-vous du sel. Veuillez à ce que le grain ne cuise pas trop, car le chevreau et le veau sont plus tendres que la volaille.» (FDC p.64) Rares sont les indications du résultat attendu : « Adoucissez le jus avec un peu de sucre et agrémentez de cannelle pour lui donner *sa saveur cameline* et sa teinte de poil de chameau. » (FDC p.72). En général, la profusion invraisemblable d'épices utilisées dans un seul plat et les diverses sauces acides (verjus) ou vinaigrées laissent planer un doute sur l'existence d'une recherche subtile du goût.

Le vocabulaire des préparations culinaires et des diverses cuissons (comme les différences entre *frire, suffrire, surfrire* chez Taillevent) ainsi que le lexique varié des ustensiles de cuisine prouvent une avancée technique. Mais la gastronomie des classes privilégiées au Moyen Âge semble reposer sur une chère abondante, pourvoyeuse d'énergie et de santé (suivant les critères de l'époque bien entendu, car la rareté des légumes la ferait déclasser par nos diététiciens contemporains) et un repas-spectacle. Il n'empêche que *le temps* du repas à la française est déjà installé et que ce sera sans nul doute un élément décisif pour son avenir.

2. La grande cuisine

Deux siècles plus tard, en 1651, paraît *Le cuisinier françois* de La Varenne*,* et là plus aucun adjectif lié à l'hygiène de la cuisine. On peut supposer qu'elle allait de soi. Même un adverbe comme *proprement* semble indiquer un nettoyage complet de l'aliment, sans référence particulière à l'hygiène : « Prenez vos concombres, les pelez, & les videz bien proprement » (Nº 27, p.160). En revanche un adjectif apparaît fréquemment, l'adjectif *bon*, ainsi que son superlatif, *le meilleur*. Le terme qu'ils déterminent le plus souvent est le mot *bouillon.* « Faites mitonner des croustes de gros pain avec *du bon bouillon* de votre marmite, assaisonnez de poivre, sel, & peu de persil aché, puis servez. » (N° 42, p.19) ; « Faites mitonner votre pain avec *du meilleur bouillon de vos bouillons maigres,* puis prenez six petits pains, faits exprès » (N° 23, p.158).

On trouve aussi cet adjectif avec les herbes (*bonnes herbes)*, nom qui peut être souvent précédé de l'adjectif *fines.* Les adjectifs appréciatifs ont donc changé de domaine puisqu'ils caractérisent le goût. Or, on sait que c'est à partir du XVIIème siècle que les cuisiniers français ont commencé à être appréciés dans toute l'Europe. En témoigne la dédicace de la traduction du *Cuisinier françois* en Angleterre en 1653 : « My Lord, Of all the cookes in the World, the French are esteem'd the best. » (cité par P. Rambaud, 2010, p.141)

Comment expliquer cet engouement pour la cuisine française ? Qu'avait-elle de particulier ? Entre le Moyen Âge et le « Grand Siècle » se situe bien sûr la Renaissance. Or au XVIème siècle, les plus grands livres de cuisine sont italiens, dont certains seront traduits en français, comme *Le Platine en François.* Les grands textes français concernant les repas sont des règles de bonne tenue en société, entre autres autour de la table. Même Erasme nous prodique des conseils fort avisés : « le mangeur bien éduqué ôtera son chapeau, ne plongera pas ses doigts dans la sauce et ne les essuyera pas à son habit, il ne jettera pas les restes sous la table, ni dessus ni dans le plat, il évitera de lécher son assiette » (cité par M. Jeanneret, 1987, p.42). Comme dans le domaine des arts, l'Italie est pionnière et va sonner l'envoi d'une révolution des tables. Et comme pour les arts, la cour de France va savoir importer la culture de sa voisine. Cela dit, si les

dolce font leur entrée en compagnie des belles manières et de la fourchette (qui, elle, mettra quand même deux siècles pour s'installer véritablement), il faut supposer que c'est plutôt l'esprit Renaissance, à l'origine d'un bouleversement des idées et des mœurs, qui a marqué la France et pas nécessairement l'intégration telle quelle des habitudes italiennes. Dans le peu d'ouvrages français de cette époque, on trouve quand même un anonyme *Petit Traicté auquel verrez la maniere de faire cuisine,* qui présente 133 recettes inédites.

En reprenant *Le Cuisinier françois*, on est frappé par un grand nombre de changements. Le premier tient dans les éléments qui ont pour épithète un adjectif appéciatif, comme nous l'avons noté plus haut : *bon bouillon et bonnes / fines herbes*. Maître Piquart aussi, deux siècles plus tôt, appliquait son savoir à son bouillon aux pierres précieuses, mais ce n'était pas de goût qu'il s'agissait. Avec le bouillon au XVIIème siècle, on travaille le goût à la base : « Or pour *affermir & rendre bon bouillon* pillez les os & les faites bouillir avec le meilleur de vos bouillons bien assaisonnés. » (N°48, p.21) L'utilisation des épices décroît drastiquement pour être remplacées par quelques herbes et condiments sélectionnés en fonction du résultat recherché : « Faites mitonner des croustes de gros pain *avec du bon bouillon* de votre marmite, *assaisonnez de poivre, sel, & peu de persil aché,* puis servez. L'entameure de pain boüilly se sert de mesme, sans persil ny poivre si vous voulez. » (nº42, p.19). Le résultat attendu est très souvent mentionné, introduit par *en sorte que* :

> « Choisissez *les mieux faits* pour tenir la farce que vous ferez de quelques viandes ou bonnes herbes, *en sorte qu'elle soit délicate,* & liée avec jaunes d'œufs » (nº72, p.131)
> « assaisonnez bien le tout, & le faites mitonner avec le meilleur de vos bouillons, *en sorte qu'il soit de haut goust,* & la sauce bien liée, puis servez. » (N° 16, p.95)
> (…) assaisonnez les bien, *en sorte qu'elles soient un peu aigrelettes* à force d'ozeille ; (…) *pour rendre votre potage aigret,* prenez la moitié des herbes à moitié & les passez : & *pour le rendre vert,* il faut piller de l'ozeille. (N° 25, p.159)

A part le musc et l'ambre (« Si vous voulez, mettez y musc et ambre appropriez, aussi avec sucre à quantité, mais fort peu de musc. N° 18, p.96), les herbes et condiments ressemblent beaucoup à ce que nous utilisons de nos jours. La restriction des épices n'est pas propre à la France, à l'époque, elle a cours aussi en Italie. En revanche, ce qui va particulariser la cuisine française va être l'introduction du beurre, qui fait au XVIIème siècle une entrée fracassante dans la cuisine en France. Tous les potages du *Cuisinier françois* en contiennent, sauf un, *Le potage sans beurre*. Les potages n'étaient pas restreints à nos soupes actuelles (potages de légumes), mais à tout ce qui se faisait cuire en pot, ce qui correspondrait plutôt à nos

potées. Le beurre qui existait déjà au Moyen Âge mais était méprisé, semble-t-il, par les classes privilégiées à l'époque, a sans doute été pour beaucoup dans la spécification de la cuisine française, car il entre dans beaucoup de sauces.

> *Lottes frittes en ragoust* : « Estant habillées (= parées), si elles sont grosses, découpez les par dessus & les farinez, puis les faites à moitié frire avec *du beurre affiné* : mettez les en ragoust, & y passez *beurre frais*, capres, jus de champignons, persil, ciboules, sel & poivre, & la sauce estant fort courte & liée, servez. » (N° 17, p.183)

Enfin la garniture, qu'on met autour de la viande ou du poisson, mais qui joue aussi le rôle de décoration, très importante au Grand Siècle, le Siècle de l'œil. Les garnitures les plus récurrentes sont les pistaches, le citron, l'orange et les grenades. Mais la décoration peut aussi être florale :

> « Avant que de discourir sur la façon d'appreter les viandes, je vous donne advis de *garnir vos plats de fleurs*, selon les saisons & les commodités ; » (p.67)

Même la hure de sanglier, qui n'a pas encore quitté la table française à l'époque, abandonnera son allure mâle et guerrière que nous lui avons vue au Moyen Âge pour prendre des allures de jeune demoiselle :

> « Coupez la proche des espaules pour la rendre plus belle & plus apparente, & pour conserver le col, qui en est le meilleur, (…) Estant bien cuite servez la froide, entiere, *& garnie de fleurs*. » (nº 92 p.120)

On retiendra trois apports au XVIIème siècle, un travail sur le goût, la recherche d'une décoration colorée sans être spectaculaire, et le début d'une vulgarisation de la cuisine par les livres imprimés.

3. La nouvelle cuisine ou la cuisine bourgeoise

Comme le XVIème siècle, le XVIIIème va être celui de grands bouleversements de société. Au XVIème, les rois reprenaient la main, et, de ce fait, la tête du royaume, et au XVIIIème, ils perdaient les deux. Il est intéressant de voir, à travers les livres de cuisine, que la Révolution ne fut pas un mouvement brutal apparu sous le coup d'un mécontentement du peuple, mais la conclusion inévitable de grands changements dans la société, essentiellement un changement de la classe dirigeante. L'importance

accordée par la bourgeoisie à la haute cuisine réservée jusque là à l'aristocratie est révélatrice. On voit apparaître les premiers *restaurateurs,* ancêtres de nos restaurants étoilés, avec un choix à la carte et les prix (élevés) fixés pour chaque mets, et que Diderot goûtait fort : « Si j'ai pris du goût pour le restaurateur ? Vraiment oui ; un goût infini. On y sert bien, un peu chèrement, mais à l'heure que l'on veut. » (Diderot, 1970, p.590) Il est de coutume de voir dans la chute de l'aristocratie et la mise à pied conséquente des cuisiniers qu'elle employait la naissance des restaurants, mais les restaurateurs étaient déjà présents avant la Révolution.

Le repas était plus intimiste, plus convivial aussi. L'attrait pour les grands banquets avait disparu. Si la cuisine a continué à se raffiner, et les sauces à se diversifier (d'après P. Rambaud, 2010, le *Dons de Comus ou les Délices de la table* en 1739 en présente une cinquantaine), les cuisiniers du XVIIIème siècle cherchent à innover, à travers *la Nouvelle cuisine.* Déjà ! Terme qui est un exemple parfait de ce que le sens n'est pas le produit de la somme de ses composants. Il s'agit bien au XVIIIème siècle comme au XXème d'une cuisine différente et plus récente que la précédente (nouvelle donc), mais le signifié du mot complexe *nouvelle cuisine* ne renvoie pas nécessairement au même type de cuisine pour les deux siècles. Les deux « nouvelle cuisine » partagent cependant des qualités communes : la recherche d'une cuisine plus digeste et plus saine, l'élévation de la cuisine à l'état d'art, la quintessence du goût. Mais si elle passe par la confection de sauces subtiles au XVIIIème, la Nouvelle cuisine du XXème rejettera ces dernières.

Suivant le même processus que les deux siècles précédents, c'est au XVIIIème siècle que les bouleversements ont eu lieu, mais c'est au XIXème siècle, l'âge d'or de la cuisine française, que les règles se sont fixées. La cuisine y occupe une place prépondérante, en se développant de quatre points de vue. Le plus important est celui d'une recherche de la perfection chimique, qui apparaît dans le vocabulaire spécialisé. On lira Antonin Carême, le grand chef des cours d'Europe, pour s'en convaincre :

> « Dans le ménage de l'artisan, le pot-au-feu est sa nourriture la plus substantielle, quoi qu'en puisse dire le journal intitulé *Le Gastronome.* C'est la femme qui soigne la marmite nutritive, et sans avoir la moindre notion de chimie ; elle a simplement appris de sa mère la manière de soigner le pot-au-feu. D'abord elle dépose la viande dans une marmite de terre, en y joignant l'eau nécessaire (pour trois livres de bœuf deux litres d'eau) ; puis elle la place au coin de son feu et, sans s'en douter, elle va faire une action toute chimique. Sa marmite s'échauffe lentement, la chaleur de l'eau s'élève graduellement, et dilate du bœuf les fibres musculaires en dissolvant la matière gélatineuse qui y est interposée. Par ce moyen de chaleur tempérée, le pot-au-feu s'écume doucement ; *l'osmazôme,* qui est la partie la plus savoureuse de la viande, se dissolvant peu à peu, donne de l'onction au bouillon, et *l'albumine*, qui est la partie des muscles qui produit l'écume, se dilate

aisément, et monte à la surface de la marmite en écume légère.» (A. Carême, 1994, p.23-24)

L'osmazôme, à l'étymologie trop compliquée (*osmé* : odeur ; *zomos* : soupe) n'a pas eu une grande destinée linguistique, mais elle montre la volonté des plus grands cuisiniers de l'époque de faire de la cuisine une science. Le terme est repris par Brillat-Savarin, dans sa *Physiologie du goût,* dont le titre dit assez l'approche scientifique qu'il réserve à son domaine. Il semble que l'osmazôme corresponde à l'*umami* japonais, qui est maintenant reconnu internationalement comme une saveur (à côté du sucré, du salé, de l'amer et de l'acide). Au XIXème siècle, la haute cuisine devient d'une très grande technicité, ce qui va justifier l'ouverture d'écoles pour la profession. Il ne s'agit plus seulement de répéter les gestes du maître, mais d'apprendre tout un lexique et les combinaisons des diverses saveurs. Toujours le grand A.Carême établira les 4 sauces fondamentales (l'espagnole, le velouté, l'allemande et la béchamel) de la cuisine française, à partir desquelles se feront toutes les autres, (environ 200) et qui sont le fondement de la haute cuisine française.

La deuxième caractéristique, quasi antithétique de la précédente, est la popularisation de la cuisine, avec la naissance des bouillons-restaurants. Jusqu'au XVIIème siècle, le restaurant avait le sens que nous lui avons vu au Moyen Âge de mets (c'était un bouillon) qui restaure et vous remet en état. On le trouve encore sous cette appellation chez A. Carême : « Pot-au-feu de maison ou Bouillon restaurant : Voilà un bouillon de maison qui est sain, restaurant, et qui convient dans les ménages où la nourriture des enfants est soignée.» (id.p.25). Vers 1765, un dénommé Boulanger va en faire la spécialité de sa boutique, ouverte à toute heure du jour. Un dénommé Duval, boucher de son métier, au XIXème siècle, va ouvrir lui aussi des bouillons-restaurants, dans lesquels il pourra écouler les bas morceaux de sa boucherie, qui ne trouvaient pas preneurs. Le bas coût et le bon goût valent aux deux la notoriété. La chaîne de restaurants Chartier (les bouillons Chartier) que nous connaissons maintenant datent du XIXème siècle. Le « restaurant » va alors, par métonymie, changer de sens et devenir le lieu de consommation de ces bouillons, puis de ce style de vente à la carte et à toute heure. Corollairement à cette popularisation, on assiste à une reconnaissance de la cuisine de province. Un certain nombre de recettes d'A. Carême en portent le nom : « potage tortue à la rouennaise », « potage tortue à la toulouse », « sauce à la clermont ».

La troisième particularité, qui tient un peu du même besoin d'élévation du statut de la cuisine que l'était l'approche scientifique, est celle de son élévation au statut d'art. (« Je le répète sans crainte, la cuisine française du XIXème siècle restera le type du beau de l'art culinaire »). Toujours le fameux Carême, qui est décidément un personnage riche de personnalité, pâtissier au départ, et autodidacte, considérait la cuisine comme une branche de l'architecture. Il allait à la Bibliothèque nationale reproduire des dessins de temples, de pyramides ou de ruines antiques. De là viendront les fameuses pièces montées,

posées sur un piédestal, les galantines sur des coupes à décoration florale et rehaussées par des hâtelets (petites broches), des plats donc tout en hauteur. Mais l'art ne devient art finalement que s'il y a des gens pour en parler. C'est ce qu'avait bien compris Grimod de la Reynière, un fin gourmet, qui dès l'année 1803 commence à publier un *Almanach des gourmands*, qui donne des informations sur la cuisine et les restaurants, mais où il lance aussi l'idée d'une notation et d'une critique de la cuisine, avec un jury de dégustateurs. Il publiera aussi un *Manuel des amphitryons* en 1808 qui sera un guide destiné à la nouvelle bourgeoisie. Il faut rappeler que le mot « gastronomie » dans son sens actuel date de 1801 (*Gastronomie ou l'homme des champs à table,* poème de Joseph Berchoux). Si les almanachs et les revues spécialisées dans l'art culinaire ont pour vocation la critique (explication, information, jugement) des diverses cuisines et cuisiniers, il faudra aussi, pour être honnêtes, que les critiques (personnes) soient des connaisseurs avisés, autorisés à porter un jugement. C'est ce qu'exigera Brillat-Savarin, qui mettra en avant la notion de goût : « L'odorat et le nez ne forment qu'un seul sens, dont la bouche est le laboratoire, et le nez la cheminée » (Brillat-Savarin, 1965, p.54), capacité que devront acquérir les amphitryons et les critiques, et qui peut elle-même être jugée à travers des « éprouvettes gastronomiques ». D'où nos « nez », dégustateurs qui savent reconnaître les qualités d'un vin lors du « premier nez ».

4. Vers le *wabi-sabi*

La première bonne moitié du XXème siècle n'a fait qu'entériner le savoir du XIXème, ce que fera Escoffier. Ce qui se développera sera la critique, qui deviendra professionnelle, et qui sera cruciale pour l'aura de la gastronomie française, même si certains chefs la décrient. En revanche, le trait le plus remarquable est l'extension de la cuisine à la province sous deux formes. D'une part par une reconnaissance plus grande des cuisines de province, en particulier celle des « mères » lyonnaises, où iront apprendre P. Bocuse et A. Platel. D'autre part par une extension des restaurants à la province, alors que la très grande majorité des restaurants au XIXème siècle étaient parisiens. Cette extension est aussi en relation avec la critique gastronomique, qui balisera tout le territoire français. Mais conserver et protéger la cuisine telle qu'elle était au siècle précédent, c'est la faire passer d'un art à un artisanat. Le changement viendra à partir des années 1970 avec la Nouvelle cuisine sous sa conception vingtièmiste. Entre temps, dans les années 60, le Japon devient une puissance économique, les chefs cuisiniers s'y déplacent et sont introduits à une cuisine épurée. Le rejet de la culture bourgeoise par les jeunes et l'esprit écologie aidant, les Français éprouveront un peu le même étonnement devant la cuisine japonaise que les peintres impressionnistes devant les *ukiyoe* et leur absence de perspective un siècle plus tôt. Non seulement on fréquente le restaurant de *sushi* comme on irait dans le restaurant de quartier, mais les plus grands chefs utilisent le *wasabi*, présentent leurs plats à la manière des comptoirs de *sushi-ya* (A. Robuchon), délaissent

les plats mijotés pour une cuisson rapide (A. Passard) en présentant leurs assiettes dans un esprit minimaliste largement inspiré du *wabi-sabi* japonais. Je ne suis pas complètement sûre que ce soit ce que préfère Daisensei, qui a une prédilection pour les bouchons lyonnais, mais comme au XVIIIème siècle, la cuisine française est toujours une recherche de la quintessence, que les critiques trouvent sans doute au Japon, le pays ayant le plus reçu d'étoiles au Michelin ces dernières années. Un seul ingrédient bien français a réussi à éviter toutes les trappes, et reste fièrement dans la cuisine française, le beurre.

En espérant que cet entremets aura su divertir le lecteur.

Bibliographie

Bocuse, P. (1998), *La cuisine du marché,* Paris, Flammarion.

Bouas, F. & F. Vivas, (2008), *Du fait de cuisine – traité de gastronomie médiévale de Maître Chiquart,* Paris, Actes Sud (1ère publication 1420).

Brillat-Savarin J.A. (1965), *Physiologie du goût*, Paris, Julliard (1ère édition 1825).

Carême A. (1994), *L'art de la cuisine française au XIXe siècle,* Paris, Payot (1ère édition 1832).

Diderot, D. (1970), *Œuvres complètes, t.7,* Paris, Le club français du livre.

Drouard A. (2010), *Le mythe gastronomique français*, Paris CNRS Éditions.

Escoffier, (1934), *Ma cuisine*, Paris Flammarion.

Jeanneret, M. (1987), *Des mets et des mots,* Paris, Librairie José Corti.

La Varenne, P.F. (1651), *Le cuisinier françois,* Source : gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France.

Rambourg, P. (2010), *Histoire de la cuisine et de la gastronomie française,* Paris, Perrin.

Pichon J. & G. Vicaire, (1892), *Le viandier de Guillaume Tirel dit Taillevent;* Source : gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France.

フランス語におけるオノマトペ効果について

春木 仁孝
大阪大学

1. はじめに

すべての言語がオノマトペを備えていると考えられるが, そのあり方に関しては言語により大きな違いが見られる. 日本語のオノマトペが豊富なことはよく知られているが, そのような日本語に比べればフランス語の持つオノマトペの数ははるかに少ない. 特にフランス語には擬態語は原則として存在しないと言われる. 一方, 擬音語に関してはフランス語においてもその数はかなりにのぼると思われる. オノマトペに関してフランス語が日本語ともっとも大きく違うのは, オノマトペ的な要素が日本語のような形態的な一定の規則をもっていないという点, 言い換えれば生産的な形態的システムを持っていないという点と, 統語上, どのような扱いを受けるかという点であろう. 本稿では, 日本語と比較しつつフランス語におけるオノマトペ効果のありようについて考察すると同時に, 日本語ほどは明確ではないフランス語のオノマトペの特徴についても考えていきたい.

2. 動詞に組み込まれたオノマトペ

2.1 液体などの音

この節では日本語ではオノマトペで表わされている擬音的な効果がフランス語ではどのように表わされているかについて考察していく.

日本語ではオノマトペが副詞的に用いられることが多い. すなわち, 「ニコニコ(と）笑う」のように多くの場合に省略可能な引用形式の「と」を伴なって用いられることが多い. 一方, フランス語ではオノマトペが副詞的に用いられることはないが, 擬音的な部分が動詞そのものの中に直接反映されている場合がかなり見られる[1]. ただし, フランス語のある動詞がオノマトペ効果を持っているかどうかについての客観的な判断基準はないので, 出来るだけ典型的な例で見ていくが, 周辺的な例についてはオノマトペ効果の有無についての判断の相違が出ることは承知の上での議論になる. 重要なのは, どの動詞がオノマトペ効果を持っているかどうかでは

[1] 歴史的に見た場合, 日本語に限らずフランス語などでもオノマトペ的な語源を持つ語彙が多いと思われるが, 本稿で問題にするのは共時的にオノマトペ的な効果を持つ要素である.

なく，日本語に比べた場合のフランス語におけるオノマトペ効果を表わす方策の一般的な傾向を探ることである[2].

まずは擬音的な要素を反映していると考えられる実例を見てみよう.

(1) gargouiller「(流れ落ちる水が) ゴボゴボという音をたてる，お腹がゴロゴロと鳴る」

(2) se gargariser「うがいをする」

いずれも何らかの液体の立てる音を表している. 日本語では「ゴボゴボ，ゴロゴロ，ガラガラ」というようなオノマトペが対応するかと思われる. [g]の音は共通だが全体の印象は日本語とはかなり違うと言える. うがいに関しては，日本語でも子供に対して「ガラガラする」と言えるので少し近くなる[3]. これらの例では語の一部分もしくは同じ音が繰り返されることでオノマトペ効果が強められている. 繰り返しはオノマトペのほぼ普遍的な特徴だと思われるが，フランス語の場合もオノマトペ効果を持つ語に常にではないがある程度の繰り返しが観察される. 以下の動詞もやはり g と r を含んでいる.

(3) gromeler「ブツブツ言う，イノシシなどがうなる」

(4) grogner「ブツブツ不平を言う，豚などがうなる・鳴く」

(1)〜(4) 総ての語に共通するのは g と r を含んでいる点である. また意味的には，人間の喉の様な半閉鎖的な空間で水や空気の振動で一定の連続音がする様を表わしているという共通性がある. そこから g と r の組み合わせ（併存）は今述べたような喉の音やそれに似た音のイメージを喚起することが多いとして[4]，このような関係を音象徴と言うこともある. ただ，本稿では一音一音のレベルではなく，より大きな単位としての単語そのものが表わすオノマトペ効果を重要と考える. やはり g と r を含む以下の例は喉の音や水の音とは関係はないがある種のオノマトペ効果があると思われるが，そのような判断はおそらく例番号と共に難しくなる.

(5) greloter「(寒さや怖さで) 激しく（ブルブル）震える」

(6) grouiller「ひしめく，うごめく」

(7) se grumeler「(牛乳などが) 凝固する，だまになる」

ちなみに，r と l は流音としてグループ化されることがあるが，g と l の組み合わせも以下の例ではオノマトペ効果を持つと考えられる.

(8) glouglouter「(液体などが) ゴボゴボ，ドクドク音をたてる，(鳩などが) クウクウ鳴く」

しかし，田守・スコウラップ(1999) も言うように，たとえば gr-という音の組み合わせはオノ

---

[2] 本稿ではフランス語について考察するが，オノマトペ効果の表わし方についての特徴の多くは英語などについても当てはまる.

[3] 現代フランス語の[r]の音と日本語のラ行の子音は音声学的にはかなり異なる音ではあるが，聴覚印象的には近いものがあるのではないかと筆者は考えている.

[4] 犬などのうなり声は一般に grrr と表わされる.

マトペ効果とは関係のない語（例：grand「大きい」, grenier「屋根裏部屋」）においても用いられているので, gr-という音要素を含むこと自体はオノマトペ効果を持っている語の記号的特徴ではない. あくまでも gr- や gar- などを含む単語全体の音声的特徴が一定のオノマトペ効果を感じさせるかどうかということが問題なのである. ただ, それではどのような音声的特徴があればオノマトペ効果を感じさせるのかという点については, 語の部分的な繰り返しの存在や一定の音の出現と一定の意味領域の対応等, 多少の指摘はできるが, それ以上の分析のためにはより広範な観察と分析を待たなければいけない. 少なくともこの時点で言えることは, フランス語にはオノマトペ特有の接辞や「型」は存在しないのではないかということである.

2.2 murmurer「ささやく」, その他

小さな声で話したりささやくことを表わす動詞がオノマトペ的であることはよく知られている. フランス語では murmurer, chuchoter, susurrer などの動詞が「ささやく」の意味を持つ. はっきりしない音, 軽い音がするということから, 「ざわめく」「(木の葉などが) サラサラいう」というような意味でも用いられるが, これらの動詞においても繰り返しが観察される. 日本語でも, 「ヒソヒソ（と）話す」のようにオノマトペを副詞的に用いる言い方だけでなく, フランス語同様「ささやく」や「つぶやく」のように動詞そのものがオノマトペ効果を持つ語も存在する.

「ささやく」という意味以外の軽やかな音に関係する動詞を少し挙げてみる.

(8) frissonner「震える, そよぐ, せせらぐ, きらめく」

(9) froufrouter「(衣服・葉などが) 軽く音をたてる, サラサラと音をたてる」

音としては murmurer の両唇音[m]を除けば[ʃ, f, s]などの無性摩擦音が目立つ. [g]と共に用いられる r は日本語のラ行音に近い聴覚印象を持つのではないかと述べたが, [f]音と共に用いられる r はその摩擦音的な側面がオノマトペ効果に貢献していると思われる. 無声摩擦音は組み合わせによっては鋭い音を表わすオノマトペ効果を持つこともできる.

(10) se fissurer「ピシッと罅がはいる」

(11) siffler「口笛を吹く, 汽笛が鳴る」

(12) souffler「ビュウビュウ風が吹く」

3. フランス語に擬態語はないのか

3.1 une fille pétillante「ピチピチした女の子」

既に述べた様に一般にフランス語には擬態語は存在しないとされるが, 本当に擬態語は存在しないのだろうか. この問題について次の語を例に少し考えてみよう.

(13) pétiller「(薪が) パチパチはぜる, (発泡性の飲み物が) 泡立つ」

この動詞がオノマトペ効果を持っていることは明らかだろう. この動詞の現在分詞から来た形

容詞に pétillant [petijã] という語があるが，「キラキラ輝く，はつらつとした，ワクワクさせる」といった意味がある．たとえば une fille pétillante という表現があるが，これはまさに「ピチピチとした女の子」と訳せる[5]．もちろん「活発な女の子」と訳せば日本語ではオノマトペ効果の感じられない通常の表現になるが，フランス語ではもとの動詞が明らかにオノマトペ効果を持っていることから，この表現はかなり擬態語的な性格を持っているのではないだろうか．さらに un œil pétillant「キラキラ輝く眼」，un ciel pétillant d'étoiles「星でキラキラ輝く空」の様にも使えるが，これらの場合は完全に擬態的表現と見なせるだろう．

(14)　branler「グラグラする，揺れる」

pétiller の場合は，もともと動詞が持っていた擬音的な効果が人の性格の比喩的な描写へと転移されたものであった．一方，(14) の branler の場合は日本語では「グラグラする」のように擬態語が対応するが，フランス語では視覚的な現象を表わす動詞なのでオノマトペ効果があるとは言えない．しかし，やはり現在分詞からきた形容詞を用いた un cou branlant「グラグラ揺れる首」に擬態語としてのオノマトペ効果を感じるのは筆者が日本語のネイティブだからだろうか．balancer「揺り動かす，揺する」，balançoire「ブランコ」などの語にも同様の効果があるとは言えないだろうか．「揺れる」を表わす trembler や trembloter，さらには osciller, vaciller にも幾分かのオノマトペ効果が認められる．

いずれにしろ，pétillant のような語は例外的な例と言えるだろう．ただ une fille pétillante の pétillant も真の意味で擬態語的とは言えないかもしれない．たとえば純粋に擬態語と言える「ニコニコ笑う」の「ニコニコ」とは違って，pétillant にはいまだ擬音語的な側面が強く残っていると考えられるからである．泡が盛んにピチピチ，パチパチとはじけている様子が，活気のある様子として人の性格という領域に転移されているので，擬音語的な側面を強く残す擬態語と分析できる．（ただし「キラキラ輝く眼／空」となるとほぼ純粋に擬態語と言っていいだろう．）日本語においても，擬音語と擬態語の境界は常に明瞭という訳ではない．たとえば「ソヨソヨと風が吹く」と言った場合，「ソヨソヨ」は擬音語なのか擬態語なのか．おそらく擬音語的な側面を持った擬態語とでも言うべきであろう．このように擬音語的な側面を残しつつ幾分かは擬態語的な性格を持つ語はフランス語にも多少はあると考えられる．

(15)　frémir「震える，軽い音をたてて揺れる」

(16)　Laurent frémit de froid.　「ロランは寒さで震えている」

(17)　Le feuillage frémit au vent.　「葉むらが風にそよいでいる」

(16) の例にもしオノマトペ効果を認めるならば完全に擬態的表現と言えるが，(17) は擬音的

[5] 小学館仏和大辞典では un esprit pétillant が「才気煥発な人」と訳されているが，une fille pétillante の場合は「活発な，はつらつとした」という意味になる．小さな男の子について un garçon pétillant と言うこともあるようだが，若い女性についての表現 une fille pétillante の方が遙かに頻度の高い表現である．

効果と擬態的効果が複合した例と考えられる. もちろん, frémir がオノマトペ効果を持っているかどうかという問題が先ずあるが, 名詞の frémissement や主語が複数の時の活用形 ils frémissent など[s]音があってオノマトペ効果がより明瞭な形態の助けや, その他 fr を含んで軽やかな音を表わす以下のような一連の語があることなどにより, 動詞 frémir にオノマトペ効果を認めてよいのではないだろうか. 特に (18) の frissonner は frémir の場合と類似して, 用例によってはやはり擬音的効果と擬態的効果が複合していると考えられる.

(18) frissonner「(身体が) 震える, (ものが) 揺れる, かすかな音をたてる, そよぐ, ざわめく, せせらぐ」

(19) Luc frissonne de plaisir. 「リュックはうれしさで身体を震わせている」

(20) La feuille frissonne. 「木の葉がそよいでいる」

(21) froufrouter「(衣服・葉などが) 軽く音をたてる, サラサラと音をたてる」

(22) fredonner「歌をくちずさむ, ハミングする」

(23) froissement「(紙・布などがこすれる) 軽い音, サラサラいう音, かすかなざわめき」

(24) frôlement「軽く触れること, 軽く触れる音」

(25) frottement「こする (こすれる) こと, こすれる音, 摩擦音」[6]

これらの語の中で後でも取り上げる (21) froufrouter の名詞形 froufrou には,「衣擦れの音, 木の葉のざわめきの音」以外に, 女性や子供の服についている「フリル」という意味もあるが, フリルのことを日本語でも日常的には「フリフリ」とか「ヒラヒラ」というのに対応していて, 擬態語的な名詞と言えるだろう. 同じように衣服の派手な飾りを fla fla と言うが, これも擬態語的な名詞である. ちなみに以下の例にも出て来る「玉房, ポンポン」を意味する pompon も擬態語的な名詞と言えそうである.

(26) On me livra un carton plein de robes à pompons, à *frou-frou*, à *flafla*. (Enckell et Réseau p. 232)「ポンポンやフリフリ, はでな飾りがついた服が一杯入った箱が配達されてきた」

このほかに擬態語的な語として以下のようなものが思い浮かぶ.

(27) zigzaguer「ジグザグに進む」

(28) briller「キラキラ輝く」

(29) piquer「チクッと刺す」, Ça pique. 「チクチクする」

(30) chatouiller「くすぐる, チクチクする」

(31) gratter「ひっかく, チクチクする」[7]

---

[6] (23)の名詞の派生元である動詞 froisser「(紙や布を) しわくちゃにする」は結果的に音を含意はしているが, 音そのものは意味の前面には出ていない. (24)の動詞 frôler「軽く触れる」, (25)の動詞 frotter も結果的に音が出る可能性があるだけである.

(32) tituber「ふらつく, よろめく」

3.2 その他の擬態語的オノマトペ

以上のようにフランス語でも擬態的効果を持つ語が全く無いわけではなさそうだが, 日本語のオノマトペのように動詞から独立して副詞的に用いられる形をしておらず, 上で見たように動詞の中に様態として取り込まれて一体化していることから抽出するのが難しく, また数も少ないためにあまり注意を引いてこなかったのだと考えられる. フランス語においては, 慣習化している間投詞的なオノマトペもその殆どが擬音語であるが, Enckell et Rézeau(2003) の収録語の中には, 擬音語でない項目もごく僅かではあるが存在している. 目についたものを説明と共にいくつか以下に挙げておく.

(33) gla gla (寒い感じを表わす marque une sensation de froid)「ブルブル, ガタガタ」

(34) hop (跳ぶこと, 登ること, 急激な動作を表わす marque un élan, un saut, une escalade, un geste rapide)「エイッ, ヤッ, パッ」

(35) prrt, prout (急に行ってしまうこと, 急に姿を消すことを表わす marque un départ ou une disparition rapide ／無関心, 軽蔑, 拒否を表わす pour marquer l'indifférence, le mépris, le refus)「ドロン／フン」

(36) guili-guili (多くの場合赤ん坊に対して, くすぐるときに言う accompagne un chatouillement, le plus souvent sur un bébé)[8]「コチョコチョ」

(37) miam-miam (美味しいと思っていることを表わす marque une appréciation gustative favorable)[9]

4. オノマトペ効果を持つ名詞

4.1 オノマトペの直接的名詞化

日本語でも赤ん坊をあやすガラガラのように, 時にオノマトペがそのまま普通名詞として使われることもあるが[10], フランス語でも pschitt[pʃit] (pscht(t)[pʃt]) という発泡性の飲み物を開けるときなどに聞こえる「プシュ, シュウ」という音を表わすオノマトペが, 日常語でスプレー式

---

[7] この語は「ひっかく」の意味の場合は擬音語であるが, 「ちくちくする, かゆい」などの意味では擬態語と考えることができる.

[8] この語は名詞として使用される場合も多い.

[9] この語には擬態語的な側面と共に幾分かは擬音語的な側面もあると考えられる. いずれにしろ, 日本語にはぴったりと対応するオノマトペはないようである. パクパク, ムニャムニャなどは食べている様子を表わすが, 美味しく思っていることを表わすために使うのではないだろう.

[10] 幼児語には「ワンワン」や「ポンポン」, その他臨時のものも含めていろいろあるが, 一般の人も使うものとしてはキャンディーの商品名でもあるガリガリ, 梱包用エアーキャップを意味するプチプチ, ガス警報機のピコピコ, トゲを表わすイガイガ, ポン菓子, ペロペロキャンディー, 料理名のシャブシャブ, ハリハリなどが思い浮かぶ. 家庭やグループ内などの狭い範囲で使われているものもかなりあると思われる.

のカンや霧吹きの意味で使われる[11]. また, pschitt ほどは元の音との結びつきは強くないが, 若者によるサプライズパーティーを表わす boum[bum]もオノマトペが名詞化した例と言える. もともとは鈍い爆発音や心臓の音を表わすオノマトペが, 若者のパーティーにつきものの騒がしい音楽と結びついたところから生まれた意味かと思われる. さきに見た, froufrou「フリフリ」もオノマトペの直接的名詞化と言えるだろう. しかしこのような例はフランス語ではやはりまれなようである.

4.2 オノマトペ効果を持つ名詞と記号性

フランス語でオノマトペ効果を持つ名詞の多くは bourdonnement「ブンブンいう音, ざわめき」(＜bourdonner), chuchotement「ささやき, ヒソヒソ声, ざわめき」(＜chuchoter) のように動詞から派生して名詞語尾-ment を伴なう形がもっとも多いと思われる. ここまでに見た動詞の多くが派生語としてこの形式の名詞を持っている. 一部の動詞においては, 対応する名詞として語尾-ment を伴なう形を持たなかったり, 比較的最近に-ment を伴なう名詞が作られたものの間投詞的なオノマトペが普通名詞としてより高い頻度で用いられている場合もある. そのような場合の名詞は一般に繰り返しを含んでいる.

(38) froufrouter ← froufrou ; murmurer ← murmure ; glouglouter ← glouglou
ronronner ← ronron

これらの場合はむしろ間投詞的なオノマトペが先に存在し, そのオノマトペがより名詞的になり, さらに名詞として安定した後に動詞が派生したものが多いと考えられる. ただし, 間投詞的なオノマトペがどのような場合に, より慣習化して形態的にも安定して名詞として確立するのかという問題がある.

少し違うケースを見てみよう. (39) の動詞は明らかにオノマトペ効果を持っている.

(39) vrombir「(エンジン・虫などが) ブンブン (ブルンブルン) 音をたてる」

そしてこの動詞には以下のような-ment 語尾を伴なう派生名詞がある.

(40) vrombissement「ブンブン (ブルンブルン) いう音, 爆音, 羽音」

一方で間投詞的な vroum という語があり, 主としてエンジン音を表現するために使われる. 動詞 vrombir はこの間投詞的オノマトペである vroum から作られたもののように見えるが, DHF によると両者は別々に存在していて, 振動する音を表わす vrombir はもちろんオノマトペ起源ではあるが, エンジン音について使われるようになったのはオノマトペ vroum の影響で 20 世紀になってからのことである. 従って froufrou から froufrouter が作られたのとはまた別のケースということになる. いずれにしろ vroum は名詞としては用いられない. この語は他の間投詞的な

[11] 正式には, 塗料の吹きつけ器は pistolet あるいは(pistolet-)pulvérisateur, 噴霧器の類は pulvérisateur, atomiseur, vaporisateur などという. poudre「粉」や poussière「ちり, ほこり」などと語源的につながるこの pulvérisateur にもオノマトペ効果を感じるのは筆者だけだろうか.

語と同じく, 繰り返して vroum-vroum のような形で使われることが多いし, また場合によっては, vrououoummm のように引き延ばした形など, 実際にはいくつかのヴァリエーションがあることも他の間投詞的なオノマトペと同様である. 語形にヴァリエーションがあるということはよりオノマトペ的である証であり, たとえ時には冠詞や数詞などが付いた名詞的な例があったとしても, まだ名詞としての安定した地位は獲得していないということになる.

(38) に挙げた例のうち, froufrou と glouglou については, -ment を伴なう派生名詞同様に名詞として辞書にも登録されている.

(41) Seuls, arrivaient du jardin la trille d'un oiseau et le *frou-frou* du vent dans les feuilles du cerisier. (Enckell et Réseau p. 233)「庭から鳥のさえずる声と, サクランボの木の葉が風にサラサラとそよぐ音だけが聞こえていた」

(42) ils [les oiseaux] remontent vers vous et, *frrou frrou* ! Vous les entendez contre votre oreille battre l'air en sens contraire du vent. (Enckell et Réseau p. 232)「鳥たちはあなたの方へと向かっている. そして, パタパタ, あなたは風に逆らってそれらの鳥が羽ばたくのを耳にする」

(43) Le *glou-glou* du Beuvron proche couvrait bien sûr nos pas [. . .]. (Enckell et Réseau p. 239)「近くのベヴロン川がゴボゴボ流れる音がもちろん我々の足音に重なっていた」

(44) Le vin versé fait *glouglou* dans le verre. (ロワイヤル仏和辞典)「注がれたワインがグラスの中でトクトクと音をたてている」

(45) On n'entend que clapotis, *glouglous* et gargouillades. (Enckell et Réseau p. 239)「ポトポト, トクトク, ゴボゴボという音しか聞こえない」

(41) の例は冠詞類を伴なう通常の名詞としての例であり, 日本語的に言えば「〜という音」ということになる. 一方, (42) の例は間投詞としての例であり, 直接引用的に用いられている. frrou frrou のように分かち書きされている上に, 綴り字についても r が二重化されており, 間投詞的なオノマトペと同様の現象を呈している. (43) は定冠詞を伴なった名詞としての用例である. 一方, (44) は faire の目的語という間投詞的オノマトペが用いられるときの典型的な形式の中で用いられている. 雪解けで家の屋根などから水が落ちてきている情景を述べた (45) では, いずれもオノマトペ効果を持つ三つの語が entendre「聞こえる」という動詞の目的語として用いられている. clapotis も gargouillade[12]もオノマトペ起源ではあるが普通名詞であり, 間にはさまれた glouglou も複数の-s を取っており, この例では名詞として扱われている.

これらの例からも分かるように, froufrou と glouglou は間投詞的な性格を強く残したまま通常

[12] gargouillade は通常はバレーの用語であり, 水の音を表わす時は gargouillement もしくは gargouillis が用いられるが, この例では明らかに水の音を表わす語として用いられている.

の名詞としての性格も獲得しているのである[13]. 従ってこれらの語の場合は, たとえ-ment 型の名詞が存在しなくても不都合はないのである[14]. vrombir に関係づけられる vroum の場合はおそらく実際の音をまねているという擬音性が強く, そのことが間投詞から名詞への移行を難しくしていると考えられる[15]. この違いは同じ間投詞的なオノマトペであっても, 実際の音との距離, つまり抽象性の違い, 記号としての「成熟度」の違いによっていると分析できる. 実際, vroum はほぼ車やバイクのエンジン音専用の間投詞だが, froufrou は衣擦れの音や木の葉がそよぐ音, 小川のせせらぎ, 鳥の羽音などかなり広く小さな音を表わしている. glouglou も主として容器から液体が流れ出る音を表わすが, 日本語であればゴボゴボ, ブクブク, ドクドク, トクトクなどと表わし分けられる場合をカバーしているので, それだけ対象となる音との結びつきが vroum の場合よりは緩いということになる. つまり関係の抽象度が高くなり, それだけ記号としての性格が強くなっているのである. ただ, froufrou, glouglou という語形そのものは明らかにオノマトペ的であり, そのことが注 14 に記したように類推により-ment 語尾の名詞も作り出された理由かもしれない. froufrou にはさらに froufrouteux という形容詞もある. この語は「(衣服などが) さらさらと音をたてる」, あるいは人にかかって「さらさらと音をたてるような衣服などを持っている」という意味を表わす. このように froufrou を出発点として動詞や形容詞などの派生語群を形成しており, このことからも froufrou の名詞性が高いことが分かる. glouglou の方には形容詞は存在しない. また glougloutement は「(液体が瓶から) ごぼごぼ (とくとく) と流れでる音 (こと)」と, 単に音だけでなく出来事名詞としての意味もある. 語尾-ment を持つ派生名詞は動詞を経由して派生されていると考えられるので, 出来事名詞や行為名詞になる可能性も大きい. (39)にあげた ronron も「ゴロゴロ, 猫が喉を鳴らす音」を表わすが, 派生名詞 ronronnement はむしろ「(猫が満足して) 喉をゴロゴロ鳴らすこと」という行為名詞の側面が強い. また音を表わす場合も, DHF によると間投詞 ronron に比べて集合的であるとのことである. このように-ment という語尾を持つ名詞は, たとえ間投詞的オノマトペを出発点としていてもやはり, 記号化, 抽象化が進んでいると言える.

いずれにしろこれらの語のあり方は, 語彙の抽象性, 記号性をどこで落ち着かせるか, 一般的に語彙の抽象性が高いフランス語が形態的にオノマトペ性の高い語を普通名詞として受け入れる境界が那辺にあるかを探る糸口となるかもしれない.

最後に語源的なことを補えば, DHF によると froufrou の初出は 1738, 動詞 froufrouter の初出は

---

[13] これらの語が間投詞的なオノマトペである点は, 繰り返される部分が分かち書きされていたり, ハイフンでつながれていたりする綴り字によっても分かる.

[14] 実際には froufroutement, gloug(l)outement という語尾-ment による名詞が存在するが, 比較的新しく類推により 20 世紀初頭に作られた語のようであり, 使用頻度も froufrou, glouglou よりも低く, 他の-ment 型の名詞ほどは一般的ではない.

[15] 同じくエンジン音を表わす broum という間投詞もあるがこちらは対応する動詞を持たない.

1876年である. またglouglouは1619年, 動詞glouglouterは1569年とのことであり, いずれも名詞として成熟するのに十分な時を経ていると言える. 後者は, 上での想定とは逆に動詞の初出の方が古い確認例になっているが, おそらく glouglou が先に存在していたのではないかと推測される. ちなみに低ラテン語にはすでに glutglut というオノマトペが存在していたようである. ronronは初出が1761年, 動詞ronronnerの初出は1853年, ronronnementは1862年が初出である.

5. オノマトペ効果と繰り返し

オノマトペ, 特に擬音語がその形態的特徴として繰り返し部分を持つというのはほぼ普遍的な特徴であろう. 爆発音や銃の発砲の音のように瞬間的な音に対するオノマトペを除けば, 自然にあるいは人工的に産出されて時間的に一定の長さをもって聞こえてくる音をまねるためには, 繰り返しという手段が有効である. フランス語においても間投詞的なオノマトペの場合は繰り返しが特徴的であるが, 本稿で見てきたようなオノマトペ効果を持つ動詞の場合は, 間投詞的なオノマトペから作られたfroufrouter, glouglouter, ronronnerのような場合を除けば, susurrer, murmurer のように明瞭な繰り返しを含む場合は少ないようである. (se) gargariser「うがいをする」なども gar-ga-ri-ser と音節が切れるので, 厳密な意味では繰り返しとは言えないかもしれない. 数は多くないが, 母音を変化させて子音部を繰り返すタイプも存在する.

(46) chuchoter, tâtonner「手探りする」, tituber, zigzaguer

この母音を変化させて子音部を繰り返すという形式は, 鐘の音を表わす ding dong (dong)のように間投詞的なオノマトペにも多い.

(47) flic flac「平手打ちや鞭の音, 寄せる波や水の中を歩く音, ピシャピシャ」

(48) clic clac, clic cloc, clip clap, cric crac, bing bang, tic tac, tip tap, pif paf, plic ploc, vli (et) vlan,

(49) patati patata「おしゃべりを表わす, ペチャクチャ」

(47) (48) に挙げた表現は, 二つの似た効果を持つ単独のオノマトペの組み合わせの場合が多い. 書かれるときには二語, もしくはハイフンで複合された形で書かれる. 一語では効果が薄いが, 同じ語を繰り返すのは単調であると感じられてこのような使われ方をするのかと思われる. 従って日本語のオノマトペの繰り返しとはその成立要因が違うと考えるべきかもしれない[16].

ところで, オノマトペそのものとは関係がないように見えるが, 母音を変えた二つの似た形態を重ねるという造語法あるいは表現がフランス語には時々見られる.

(50) trictrac「西洋すごろく」

[16] 同じ要素を繰り返すオノマトペが圧倒的に多い日本語の場合は, 古くは母音調和があったことも関係しているのだろう. チャイムを表わすピンポンのような新しい擬音語だけでなく, カラコロ, チラホラ, ドサクサのようにもともと母音（および子音）が変わるオノマトペはもちろん存在するが, 相対的には少ない言える. ガッタンゴットン, ビシバシなども歴史的には新しい語と言えるだろう.

(51) ric rac「きっちり, ぴったり」(ric-à-rac, ric-et-rac という形もある)

(52) méli-mélo「ごたまぜ」

(53) pêle-mêle「ごちゃごちゃに ; ごちゃまぜのもの」

(54) cahin-caha「どうにかこうにか」, couci-couça「どうにかこうにか, まずまず」

(55) clopin-clopant「びっこをひきながら, どうにかこうにか」

trictrac は実はさいころがぶつかり合う音からきた擬音語起源の語であるが, 現用の擬音語としては tric も trac も Enckell et Rézeau(2003) には収録されていない. 他の表現はオノマトペ起源ではないようだが, いずれにしろこれらの語や表現は概ね口語的であり, オノマトペ同様に感覚的で擬音的, 擬態的なものを幾分かは感じさせる[17]. 「どうにかこうにか」という意味を持つ表現が 3 例あがっているが, 英語でも willy-nilly「いやおうなしに(副詞), 手当たり次第の(形容詞)」, shilly-shally「ぐずぐずする」といった表現があるが, 日常性の強い一定の意味領域とオノマトペにも通じる感覚性の強い表現との対応という現象が存在しているようである.

6. オノマトペ使用上の統語的特徴と隠喩性

ここまで, フランス語におけるオノマトペ効果がどのような語によって担われているかを見てきた. 最後に, フランス語においてオノマトペが実際に使用される際の統語的特徴について少し見ておきたい.

既に述べたように, 省略の可能性, 義務性等の問題があるが, 日本語では引用の「と」によりオノマトペが動詞と共に副詞的に使われるのが一般的である. つまり様態の一種としてオノマトペが副詞的成分を構成する. 他にも先ず「チンする」「ビクビクする」のように<オノマトペ+する>という形式がある. しかし, これらも「チンとする」「ビクビクとする」のように構造的には引用の「と」を前提としていると考えられ, 「する」以外の動詞の場合と同様の統語的構造を持っている. このように, 引用の「と」を基底に持った構造は直喩的構造と言える. 一方, フランス語のように動詞の中に分化できない形でオノマトペ効果を持つ要素が取り込まれ, 動詞そのものがオノマトペ効果を持つような構造は隠喩的構造と言うことができる.

日本語には, <オノマトペ+(と)+動詞><オノマトペ+(と)+する>という構造以外にも, 「はためく」「ざわめく」「きらめく」「いらつく」「ざわつく」などのようなオノマトペを含む動詞形があるが, これらの場合もおおむねオノマトペの部分を明確に分離することができ, また「~めく」「~つく」の部分に一定の意味を認めることができるので, この場合も直喩的構造と言うことができる[18].

---

[17] peu ou prou「多かれ少なかれ」や sain et sauf「無事に」のような音の似た語を繰り返す熟語, あるいは sac et ressac「寄せ波引き波」のような表現の構成などもあわせて考えるべきかもしれない.

[18] 日本語には「ささやく」「つぶやく」「そよぐ」「ころがる」のように明らかにオノマトペ的要素を含むが, 「~めく」

日本語では, オノマトペそのものを導入するときにも,「～という音がした／～という音が聞こえた／～という音をさせた」などのように, やはり「～という音」のように引用形式を取るのが一般的である[19]. 一方, フランス語の場合は文中においても(56)のように間投詞的な使用も多いし, また faire「する, ～の音をたてる」などの動詞の目的語として用いられる場合も(57)に見られるように＜faire +オノマトペ＞という直接的な構造, 言い換えれば直接的な引用になる. ここにも両言語の直喩的・隠喩的という性格の反映を見ることができる.

(56) Quand il traverse les flaques, *flic, flac, flic, flac,* le sabot de ma jument va plus vite que le vent ! (Enckell et Rézeau, 2003, p. 223) 水たまりを渡る時, ピシャ, ピシャ, パシャ, パシャ, 私の雌馬（のひずめ）は風よりも早く進む. 」

(57) [...] des sabots qui font *flic flac* dans les ruisselets filtrant sur le chemin. (Enckell et Rézeau, 2003, p. 222) (font は動詞 faire の 3 人称複数形)「道の上にしみ出してきている水の流れの中でピシャパシャ（という音を）たてる木靴」

また, 辞書に間投詞としてのみ登録されていて, はっきりと名詞としても登録されていないオノマトペでも, 冠詞類を伴なっていたり, 複数形の-s を取っている場合がある. 以下の例で分かるように, そのような場合は一般の普通名詞とほぼ同様の扱いを受けており, 前置詞の目的語になっていたり前置詞に導かれる補語を伴なっていたりもする.

(58) Le judas fut refermé avec *un* c*lac* catégorique. (Enckell et Rézeau, 2003, p. 141)「のぞき窓は有無を言わせぬピシャリという音とともに閉められた」

(59) [...] deux. . . trois *ronrons* d'avion très loin [. . .]. (Enckell et Rézeau, 2003, p. 385)「とても遠くに飛行機のブーンという音が 2 回, 3 回. . . 」

このような例は先にみたオノマトペの意味の抽象化, オノマトペの語彙化, ひいては文法化という問題が関わってくるが, 構造的には引用形式や比較の構造（「～のような音」）なしで直接的に間投詞が一時的に名詞として用いられており, やはり隠喩的なフランス語の性格を反映していると考えることが出来る.

日本語の引用形式を取るオノマトペに比べて, フランス語のオノマトペは動詞の中に取り込まれているというその形態的なあり方や[20], 上で見た統語的な取り扱いなど, 相対的に隠喩的であると言える. 筆者は, 春木(2012) においてフランス語の全体的特徴として直喩的な日本語に対して, フランス語は隠喩的であることを論じた. フランス語の隠喩性については, 川口氏

「～つく」のタイプのようにその構成をつまびらかに出来ないものもあるが, ここでの議論は圧倒的多数の構造をもとにしている.

[19] もちろん, かなり口語的な小説などでは「ガシャン, A子は驚いて飛び上がった」のような裸の形での使用もあり得るし, 漫画などではより直接的な使用が多いが, 一般的には「～という音」型が普通だろう.

[20] 本稿では取り上げなかったが, 動物や鳥の鳴き声を表わす動詞はオノマトペを含む動詞の一群を構成している. 例 : miauler「(猫が) ニャーと鳴く」, meugler「(牛が) モーと鳴く」.

が道具の命名などのあり方を通じて, 川口(1998, 2000) などで論じておられるが, オノマトペのあり方もこのフランス語の全体的な特徴の一部をなしていると考えられる.

7. 結びにかえて

オノマトペという範疇はインタラクションを通した認知, 中村(2009) の言う I モード認知を反映する言語要素と言える. このオノマトペが豊富である日本語はまさに I モード認知の性格が強い言語である. それに対して, フランス語にもオノマトペは多数存在するが, 擬態語が殆ど無いなど日本語に比べるとその数は相対的には少ないと言えるだろう. また, 新しいオノマトペや一時的なオノマトペを作り出す鋳型を持つ日本語に比べれば, フランス語のオノマトペの生産性は低いと考えられる.

一方, 日本語のオノマトペが多くの場合, 引用形式で用いられるという点は 5. で述べた日本語の直喩的な性格の反映であると同時に, ある意味, メタ認知的な側面を示しているとも分析出来る. 日本語では「鈴のような音をたてる虫」→「鈴虫」という命名が一般的で, 直接「鈴」という命名は普通は行われないのと同じである（川口(1998, 2000) などを参照）[21].

フランス語ではオノマトペが相対的に少なく, 生産性も低いにも関わらず, そのあり方は隠喩的であり, その点はインタラクションによる認知, すなわち I モードの反映とも考えられる. 春木(2012) で詳しく見たように, フランス語は一見, 英語と同様にメタ認知的な側面が強い D モード言語のように思えるが, 実はインタラクションによる I モード認知的な側面がかなり強い言語である. オノマトペのありようもフランス語のこのハイブリッドな性格に対応しているのではないかと考えられるが, この点については典型的な D モード言語である英語との比較をしたうえでの考察が必要である.

今後, フランス語のオノマトペをより組織的に検討することで, オノマトペのありよう, およびオノマトペ効果の表し方とフランス語の全体的な性格との関係を認知モードの観点からさらに追求していくことが必要である.

（注記：本文中の用例に Enckell et Rézeau とあるのは Enckell, P. et P. Rézeau (2003) に収録されている例であるが, 煩雑になるので原作品のレフェランスは省略した. ）

[21] カブトムシをカブト, クワガタムシをクワガタなどと言うのは, 直喩による命名が忘れられて完全に一体化した上での 2 次的な省略であって, 隠喩的命名ではない.

参考文献

青木三郎 (2006)「フランス語のオノマトペについて」『実験音声学と一般言語学：城生伯太郎博士還暦記念論集』, 東京堂出版.

泉邦寿 (1976)「擬声語・擬態語の特質」, 鈴木孝夫『日本語の語彙と表現』(日本語講座４), 大修館書店, 105-151.

川口順二 (1998)「動物名から道具名へ ―メトニミ・メタファ・意味の変化」『藝文研究』75, 254-269.

川口順二 (2000)「命名における直喩と隠喩 ― 動物, 道具, そして河川の名称 ― 」筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告, 901-914.

田守育啓, ローレンス・スコウラップ (1999)『オノマトペ ― 形態と意味 ― 』, くろしお出版.

中村芳久(2009)「認知モードの射程」, 坪本篤郎他編『「内」と「外」の言語学』, 開拓社, 353-393.

春木仁孝 (2011)「生物主語から無生物主語へ ― 日仏対照研究 ― 」『言語文化研究』37（大阪大学言語文化研究科), 99-119.

春木仁孝 (2012)「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』38（大阪大学言語文化研究科), 45-65.

DHF = *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction d'Alain Rey, Paris, Le Robert.

Enckell, P. et P. Rézeau (2003), *Dictionnaire des onomatopées*. 584p. Paris, PUF.

中間構文と総称的受動文

井口 容子
広島大学

1. はじめに

フランス語の受動的用法の再帰構文（代名動詞の構文）は，英語等においてみられる，いわゆる「中間構文」に対応するものとみなされることが多い．だがこの両構文の間には，異なるふるまいが少なからずみられることもまた，しばしば指摘されるところである．本稿においてはまず，Lekakou(2002)が示した，英語における「中間構文」と「総称的受動文」の比較をとりあげ，これを出発点として，「総称性」の観点からこの問題を考察していきたい．

2. 総称的受動文

Lekakou(2002)は，(1)に示す英語の「中間構文」と，(2)にみられるような，任意動作主(arbitrary agent)[1]の存在を含意する「総称的受動文(generic passive)」を比較している．

(1) a. These glasses clean easily.
　　b. This book reads easily.
(2) a. These glasses are easily cleaned.
　　b. This book is easily read.

(1)と(2)は一見同義であるようにみえる．だが Lekakou は「可能」のモダリティがコード化されているか否かという点において，この二つの構文は異なるとする．Lekakou によれば，(2)のような「総称的受動文」はイベントを一般化したものの域を出ない．(2a-b)において「可能」のモダリティが感じられるとしても，それは「もし何事かが習慣的になされるのであれば，そのことは可能であるはずだ」という推論によって，語用論的に導き出されたものにすぎない，というのである．これに対して中間構文の場合は，「可能の読み ability reading」，すなわち「いかなる動作主であってもそのように行うことができる」という解釈が，(1a)の clean や(1b)の reads といった述語そのものにコード化されているという(Lekakou 2002 : 403).

---

[1] 「誰でも」「誰がやっても」という解釈を受ける，不定の動作主を指す.

このことは，この両構文と明示的な法助動詞 can の共起可能性に表れている．

(3) a. These glasses *can* be easily cleaned. / These glasses *can* be cleaned easily.

b. This book *can* be easily read. / This book *can* be read easily.

(4) a. ??These glasses *can* clean easily.

b. ??This book *can* read easily. (以上，Lekakou 2002 : 403)

(3)の総称的受動文は，can と全く問題なく共起する．これに対して中間構文の場合は，(4)が示すように can を付加すると非常に容認可能性が低くなる，というのである(Ibid.).

フランス語の受動的再帰構文は，この点において英語の中間構文とは異なる．(5)は can に相当する準助動詞の pouvoir を伴う例であるが，このような文はよく目にされるものである．

(5) En fait, les vêtements *peuvent* indifféremment *se porter* l'été ou l'hiver.

(Le Monde, le 7 juillet 2007)

この問題にかんしては，4 節において改めて述べることにして，ここでは Lekakou(2002)の指摘する中間構文と総称的受動文の間の相違が何を意味するのか，もう少し考えてみたい．

3.「習慣的総称」と「傾向的総称」

英語の中間構文が「可能」のモダリティを述語のうちに組み込んでいるのに対して，総称的受動文はイベントを一般化したものであり，「可能」の解釈を受けることがあるとしてもそれは語用論的に推論されたものにすぎない，という Lekakou(2002)の指摘は，Fagan(1992)や Lekakou(2008)によって提起された，中間構文における「総称性」をいかにとらえるか，という問題を想起させる[2]．Fagan は現在時制におかれた(6a-c)のような文と，中間構文を比較して以下のように述べる．

(6) a. This car goes 200 kph.

b. Kim reads German.

c. Robin rides horses. (Schubert & Pelletier 1989 : 216)

(6a-c)は，Schubert & Pelletier(1989)が指摘するように総称(generic)/習慣(habitual)の解釈と「可能(capacity)」の解釈の両方を持つ．これに対して英語の中間構文の場合は「可能」の解釈(capacity reading)のみである，というのである．これは中間構文が出来事(event)を一般化したものではないことを意味する(Fagan 1992 : 151-152).

Lekakou(2008)も同様のことを述べている．Lekakou は総称性に「習慣的総称 habitual generic」と「傾向的総称 dispositional generic」の二つのタイプを設け，以下の(7), (8)をそれぞれの代表例

[2] Ackema & Schoorlemmer(1995)等，英語の中間構文は「非対格 unaccusative」ではなく，「非能格 unergative」の構造をもつものであるという分析がみられる．中間構文の統語構造をめぐるこの議論は，意味論的にはこの総称性の問題にかかわってくるものと思われる．この点については井口(2010)を参照されたい．

とみなす.

(7) John goes to school on foot.

(8) This machine crushes oranges. (以上, Lekakou 2008 : 255-256)

「習慣的総称」が繰り返し生起する出来事を一般化したものであるのに対して,「傾向的総称」は主語名詞句の指示対象の属性を表す. (8)は主語である機械(this machine)に本来備わっている「能力 ability」を表現しているのであり, 出来事の積み重ねを前提とするものではない.

Lekakou(2008)は中間構文は「傾向的総称」を表すものであるとする. そして中間構文である(9a)と, 総称的受動文（Lekakou(2008)においては « nonepisodic passive » と表記）である(9b)の相違は, 前者が dispositionality を表すのに対して, 後者が habituality を表す点にあるとする.

(9) a. Plastic cups do not recycle.

b. Plastic cups are not recycled. (Lekakou 2008 : 256)

4.「習慣的事象」を表す受動的再帰構文

前節でみた二つのタイプの総称性の観点からみると, フランス語の受動的再帰構文はどうなるのだろうか. 筆者は井口(2007)において, 受動的再帰構文に「中間構文型」と「未完了受動型」の二つの下位クラスを設けることを提案したが, このうち未完了受動型は「習慣的総称」を表すものと思われる[3]. 特に顕著なのは, 次の(10)のような, モダリティは含意せず, 習慣的事象を述べるものである.

(10) a. Le français *se parle* aussi au Canada.

b. Ce modèle *se fabrique* en Chine.

これらが事象を一般化したものであることは明らかである. この点においては, これらの文は 2 節, 3 節でみた総称的受動文に近いものであるように思われる.

5. フランス語の受動的再帰構文と準助動詞

2 節においてもふれたが, フランス語の受動的代名動詞は, 英語の中間構文とは異なり, 可能のモダリティを表す準助動詞 pouvoir と共起可能である.

(11) En fait, les vêtements *peuvent* indifféremment *se porter* l'été ou l'hiver. (=(5))

(*Le Monde*, le 7 juillet 2007)

(12) (…) : son slogan, écrit en lettres anglaises sur fond d'azur, cernait une harpe éolienne d'époque incertaine, de ces cinq mots : « *In mare te musica sperat* », ce qui pour un latiniste pas trop pointilleux *pouvait se traduire* par : « La musique vous attend sur la mer. »

[3] この点については, 井口(2010, 2011)を参照されたい.

(F. Sagan, *La femme fardée*, p. 10)

「規範」の準助動詞 devoir と共起する例もしばしばみられる.

(13) Les asperges *doivent se cuire* à feu doux. (Melis 1990 : 88)

(14) l'heure pleine, sans minute, *doit s'écrire* avec *heure* : « Il est 15 heures. À 18 heures, le président fera sa déclaration. » (http://fr.wikipedia.org/wiki/Heure)

次の(15)は pouvoir と devoir が対比的に用いられている例である.

(15) Par exemple, avant 1948, « un million trois cent mille vingt-deux » *pouvait s'écrire* en français« 1.300.022 » ; depuis 1948, il *doit s'écrire* « 1 300 022 ».

(http://fr.wikipedia.org/wiki/Point_(signe))

このあたりのふるまいは, むしろ迂言的な形態による英語の総称的受動文に似ているといえる. これら不定詞の形態の代名動詞は, 自身ではモダリティを担うことなく,「受動」を表す機能に徹していると考えられる. (15)において二回用いられている s'écrire は, それ自体はモダリティにかんしてニュートラルであり, 法的価値は準助動詞によって表されているものと思われる.

ただ, このような不定詞の形で準助動詞に従う場合と, 時制や人称を担ったいわゆる定形(finite)の場合を同列に扱ってよいものか, という問題は残る. 例文(12)は *pour un latiniste pas trop pointilleux* という前置詞句を伴っているが, これは非常に興味深いといえる. なぜなら, 井口(2010)で示したように, フランス語の受動的再帰構文は, (17)にみられるような英語の中間構文とは異なり,「経験者」を表す « pour NP » との共起が困難だからである[4].

(16) a. *?Ce livre se lit facilement *pour Paul*.

b. ?Ce livre se lit facilement *pour un professeur*.

(17) That book reads quickly *for Mary*. (Stroik 1992)

(12)が「経験者の pour NP」と共起しているということは, pouvoir に続く不定詞形態の受動的代名動詞の構文と, 自ら主動詞となっている場合のそれとは性格が異なる可能性があることを示唆している.

また Melis(1990)は, 規範の意味を表す(18)にかんして以下のような指摘をしている.

(18) a. Les asperges *se cuisent* à feu doux.

b. Les asperges *doivent se cuire* à feu doux. (=(13))

(19) a. Les asperges s*ont cuites* à feu doux.

b. Les asperges *doivent être cuites* à feu doux. (以上, Melis 1990 : 88)

Melis は迂言的受動文の場合, (19a)のような devoir を伴わない形では, « prescriptif » な解釈を受けることはできないという. これに対して(18a)の受動的再帰構文は, 準助動詞なしで規範の

[4] (16a-b)を三人のインフォーマントに示したところ, (16a)に対しては [可 : 0, 疑 : 1, 不可 : 2] , (16b)は [可 : 1, 疑 : 1, 不可 : 1] という結果であった.

解釈を受けることが可能である．この指摘は，定形動詞として用いられる場合の受動的再帰構文と総称的受動文の間には，モダリティに関して大きな相違があることを示すものであるといえる．

「可能」と「規範」の相違も考慮すべきであろう．3 節でみた英語の例文(6a-c)が示すように，「可能」のモダリティは，中間構文に限らず，未完了の形態そのもの（この場合は現在形）が「習慣」とともに含意し得るものである．「規範」の場合は事情が異なる．いずれにしても(18a)のような文における「規範」のモダリティが何に由来するものか，さらなる検討を要するものであるといえる．

6. 結語

フランス語の受動的再帰構文は，英語の中間構文に比べて「受動」に近い性格をもっているように思われる．用例によっては，総称的受動文と機能的にかなり近いと考えられるものもある．だが他方において，本稿で指摘したような相違点がみとめられることも事実である．

いずれにしてもこの構文は，総称性およびモダリティの点において，非常に興味深いものであるといえる．さらに考察を重ねていきたい．

参考文献

Ackema, P. & M. Schoorlemmer (1995), “Middles and Nonmovement”, *Linguistic Inquiry* 26-2, 173-197.

Fagan, S.M.B. (1992), *The syntax and semantics of middle constructions*, Cambridge : Cambridge University Press.

井口容子 (2007)「代名動詞の意味・機能的ネットワーク――自発, 受動, 非人称――」『フランス語学研究』41, 31-44.

井口容子 (2010)「フランス語の受動的代名動詞と中間構文」『ステラ』29 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 67-77.

井口容子 (2011)「フランス語受動的再帰構文の意味構造」『ステラ』30 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 55-62.

Lekakou, M. (2002), “Middle semantics and its realization in English and Greek”, *UCL Working Papers in Linguistics*14, 399-416.

Lekakou, M. (2008), “Aspect Matters in the Middle”, Biberauer, T. (ed), *The Limits of Syntactic Variation*, Amsterdam : John Benjamins, 247-268.

Melis, L. (1990), *La voie pronominale*, Paris : Duculot.

Schubert, L.K. & F.J. Pelletier (1989), "Generically speaking, or, using discourse representation theory to interpret generics", Chierchia, G., B.H. Partee & R. Turner, *Properties, types and meaning*, Vol.2, *Semantic issues*, Dordrecht : Kluwer, 193-268.

Stroik, T. (1992), "Middles and Movement", *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.

Sagan, F., *La femme fardée*, Pauvert / Ramsay, Paris, 1981.

反実仮想条件文に見られる半過去に関する一考察

井元 秀剛
大阪大学

1. はじめに

半過去を統一的に説明しようとする試みにおいて，(1)の反実仮想条件文に生じる法的な用法の代表とされる半過去の用法をどのよう捉えるか，それが過去性とどのように関係するのか，あるいはしないのかという問題は最大の課題である．

(1) S'il *faisait* beau demain, je me promènerais dans la forêt.

純粋に現象だけを捉えるなら，(1)が結果として表す意味の中に「過去性」は存在しない．このことは(1)の半過去を現在形に入れ替えるというミニマルペアーを作って比較してみれば明らかである．

(2) S'il *fait* beau demain, je me promènerai dans la forêt.

こうして並べてみると，(1)も(2)も，demain(明日)で指示される何らかの形で未来と関係づけられるスペースに，「晴れる」という事態を仮定するというのが前件が表している共通の内容であり，異なっているのはその事態が成立する蓋然性を高いと見なしているのか，低いと見なしているのかということにすぎない，ということがわかる．つまり有標の半過去が無標の現在形に対して持っている働きは「蓋然性の低さ」のみであって，時間軸上の前後関係に関するずれは全く見いだされない．しかしながら，過去性と反実仮想条件文の前件との親和性はフランス語特有の現象ではなく，英語にも見られるし，ドイツ語にも接続法第二式という多少変形した形であるが存在することなどから，かなり汎用性のある現象である．本稿ではこの「蓋然性の低さ」と「過去性」がどう関わっているのかという問題を，フランス語に限定して再考してみようとするものである．

2. 法的用法をめぐる３つの立場

問題をやや一般化し，半過去のもつ過去の状態を表す用法を時制的用法，(1)のような発話態度にかかわる用法を法的用法と呼び，時制的用法と法的用法の関係という形でとらえることにしよう．この関係をめぐる立場は３つに集約される．

2.1 時制用法からの派生説

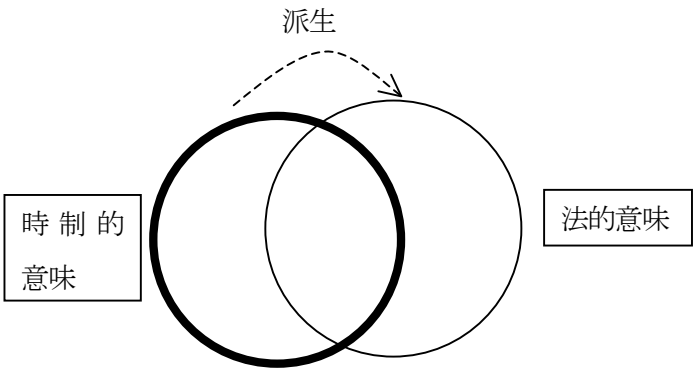
時制的用法が半過去の本質的な働きであり，ここから法的意味が派生して独自の意味的価値をになうようになったのが法的用法である，とする立場である．代表的なのが古典的な Imbs (1960)である．

(3) [...] l'imparfait de l'indicatif, au lieu d'exprimer un fait passé réel, exprime un fait hypothétique passé, présent ou futur : l'écart temporel entre le présent et le passé est utilisé pour traduire un écart modal entre le réel et l'imaginaire. (Imbs 1960:98)

このように述べており，時制的な隔たりが法的隔たりを表現するのに用いられたという説明をしている．しかしながらこの考え方は時制的な意味を第一義とするものの，法的な意味はそこからの変形であり，結果的には別物であるので，多義説と捉えることが出来る．

この関係を図示するなら以下のようになるだろう．

(4)



共時的には半過去は時制的意味と法的意味の双方を兼ね備えており，文脈に応じてどちらかの意味が選択されることになる．

2.2 共通変異体説

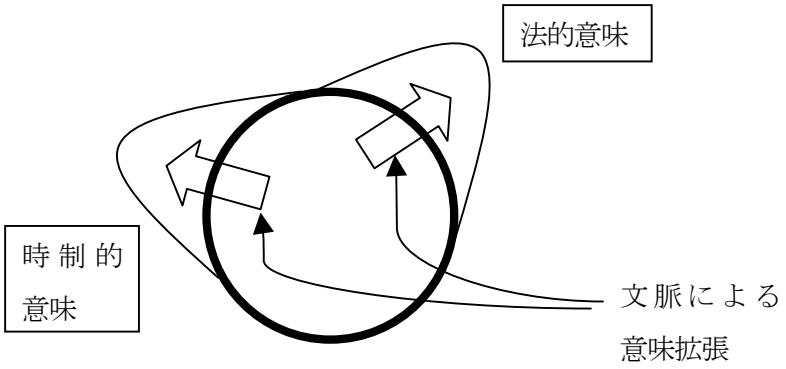
前節の派生説はあくまでも時制的用法を本義ととらえる立場だが，時制的用法も法的用法もともに本質的用法からの拡張であり，その意味で同列におかれる．この場合の拡張とは通時的な変化を意味するものではなく，本質的意味が一定の文脈におかれることによってさらなる意味効果を生じることを言う．この説を代表するのは Le Goffic (1986)である．

(5) L'imparfait n'est pas fondamentalement un "temps du passé", mais un temps "inaccompli — certain — non présent" qui situe le procès verbal dans un cadre référentiel déterminé contextuellement, ce cadre pouvant être bien entendu le passé effectif, mais aussi [...] d'autres types de situations transposées ou imaginaires. (Le Goffic 1986:55)

つまり，半過去という形態が形態として持っている本質的な意味は"inaccompli — certain — non présent"という意味にとどまるのであって，この核としての意味が一定の文脈に置かれたときに「過去」や「反実仮想」といった意味効果が現れるという立場である．これは単義説であるが，

時制的意味も法的意味も本質的意味から別々に拡張してでてきた結果であって直接的な関係は持たない．図示すると以下のようになる．

(6)

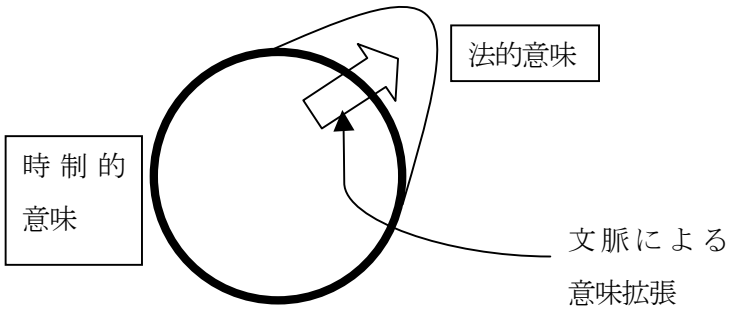


この図で「法的な意味」は円で表した中心的意味に，突起のようにできた文脈的拡張が加わった全体であり，「時制的意味」も円に別な突起が加わった全体である．このとき，「法的な意味」と「時制的な意味」とは円の部分は重なるが突起部分は重ならない．

2.3 時制的意味の拡張説

これも前節と同様の単義説なのだが, 中心となる形態的な意味を Le Goffic (1986)のように「時制的意味」と「法的意味」に共通する抽象的な属性に求めるのではなく，時制的意味そのものが核となる意味であって，時制的意味が特定の文脈におかれることによって法的意味の意味効果が生じるとするものである．図示するなら以下のようになるだろう．

(7)



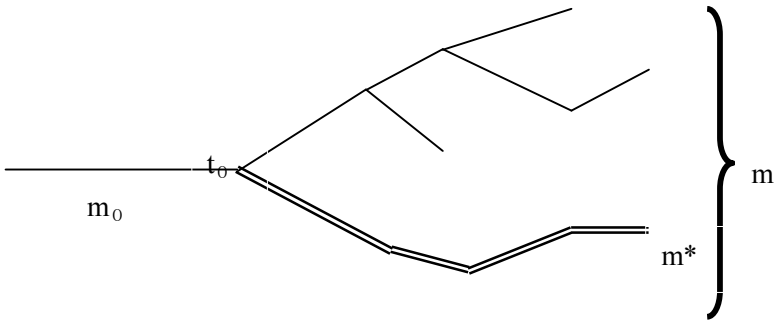
これは，(6)における「時制的意味」の突起部分を取り除き，「時制的意味」を中心円に完全に重ねた形である．このとき「法的意味」は「時制的意味」を完全に包含しており，「時制的意味」は文脈と相まって「法的意味」の創出に何らかの形で貢献することになる．この立場は「時制的意味」がどのように「法的意味」を生成するのか，の説明によってさらに 2 つに分けることが出来る．1 つは Cutrer (1994)や曽我(2012)がとっている矛盾創出説で，もう一つは Gosselin (2006)や渡邊 (2008)などに代表される基準点遡及説である．まず矛盾創出説であるが，今一人のフランス人話者が以下の文を発話したという状況を考えてみる．

(8) Si j'étais japonais, j'apprendrais le français.

このとき，聞き手は，この話し手が現在のことを話しているのだ，ということを文脈によってはっきりと知っている．そのような状況で si によって仮定的な世界が作られることが示されている，というのが文脈的条件である．この条件のもとで，現在のことをわざわざ過去で言うのだから，そこには矛盾が生じており，この矛盾が現実ではない，という属性をこの述定がなされるスペースに与えるとするものである．現在のことなのに「過去」という遠くの世界においやることで，「なさそうな」という効果が生まれると説くこともある．

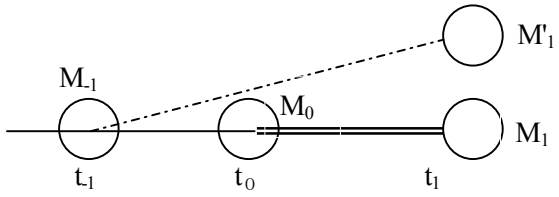
これに対し基準点遡及説は，そうなったかもしれない可能性が過去にあり，そのあり得なかった過去の可能性に言及するために過去になっているというような説明で，どれも極めて難解である．ただ，その中では「分岐的時間の表象」という概念を用いた渡邊 (2008)の説明が最もわかりやすい．渡邊は時間の経過を無数にある可能世界の中から 1 つの世界を現実として選び取る行為の連続であるととらえている．

(9)



(9)は Martin をもとに渡邊が示したものだが, m は可能世界(monde possible)を表す. 現実世界(m_0)は現在(t_0)まで確定しているが，未来は分岐的に広がる無限の可能世界が広がっているというイメージは捉えられると思う．しかしながら t_0 における m_0 も過去(t_{-1})においては選択可能であった無数の可能世界のうちの 1 つにすぎない．そうすると，より単純化すると以下のような図が書けることになる．

(10)



可能世界は筆者の用語ではスペースである．現在スペース(M_0)の延長に，あり得そうな未来の可能世界(M_1)も想定できるが，過去(t_{-1})に分岐したあり得なさそうな未来の可能スペース(M'_1)

も想定できる．蓋然性の低い(1)の si 節が導入するスペースはこの M'_1 であるが，このスペースを描くためにこの世界を分岐させた M_{-1} に言及するために過去形が用いられるという説明である．demain という副詞は M_{-1} の時間とは対応しないが，このずれについては

(11)　Lundi prochain, il y *avait* un match ; mais je n'irai pas.

(Maingueneau 1999, in 渡邊 2008)

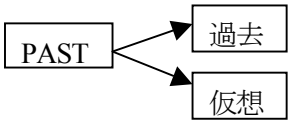
という例を持ち出し，問題にならないと説明する．(11)は，予定自体は未来であり lundi prochain という副詞に対応しているが，まだこの予定が成立していた過去について言及しているために動詞は半過去になっているのである．

以上あげた３つの説を以下で検討してみたい，

3. 検討

まず，筆者自身の立場を明確にしておく．筆者は井元 (2010)において，半過去などの過去時制がもつ意味素性 PAST を

(12)



井元 (2010:234)

のように記述し，一見すると 2.2 の共通変異体説のような書き方をしたが，これはあくまでも共時的な解釈レベルでの働きを述べたものであり，そこでも機能的多義と明言しているように，基本的には多義説であり，2.1 の時制用法からの派生説をとっている．

3.1 時制用法からの派生説検討

ここではこのような派生が単語のレベルでも，文法標識のレベルでも多義の一般的な仕組みと合致していることを述べておく．

単語のレベルでは cercle という名詞をとりあげてみよう．本来は円の形を意味する語であるが, cercle littéraire などのように趣味の仲間やサークル, クラブを意味するようにもなってきた．このとき，「趣味の仲間」の中には本来の意味である「円」は含まれておらず，「円」からの派生で多義を構成しているということができるだろう．

文法のレベルでは devoir などの法助動詞をあげることができる．本来は「～しなくてはならない」という義務的意味(modalité déontique)を表すものであったが，「～に違いない」という認識的意味(modalité épistémique)の意味を派生している．ここでも義務的意味と認識的意味は常に重なるとは限らない．認識的意味は peut-être とは共起せず，次例は義務的意味でしか解釈できない．

(13)　Si le médecin doit se méfier de l'impatience de ses malades, il *doit peut-être* encore

davantage se méfier de la sienne. (甲斐 2005 :157)

ここで重要なのは，動機付けと必然性，さらに意味の差異である．意味の派生が生じるためにはそれなりの動機付けが必要であり，cercle の場合も devoir の場合にもその動機付けを容易にたどることができる．Cercle の場合は，円の形が囲って仲間を確定することにつながり，そこから仲間の意味が生じたと考えられるし，devoir の場合も，そのような状況では必然的に述定される事態の実現に結びつくために認識的意味を派生されたものであろう．しかしこのような動機付けはあくまでも動機付けにすぎず，動機付けが必然的に派生を生むわけではない．日本語の「円」や「〜しなくてはならない」に仲間や必然の意味は存在しないように，あくまでもそのような動機付けの結果，個々の言語で派生的な意味を発達させていったという言語の意味の恣意的発展のプロセスを経なくてはならない.

最後に意味のずれ，であるが，これは筆者が「拡張」と区別するために導入している特徴である．派生によって多義が構成されるためには，元来持っていた意味の喪失もしくは変質がなくてはならない. Cercle や devoir の例で, そうなっていることは上述の説明で明らかであろう.

半過去の反実性，すなわち「ありそうにない」という意味の派生はこれらの条件をすべて満たしている．まず動機付けであるが，(3)の Imbs があげた「隔たり」の他に(5)の Goffic があげた「確実性」も加えることができるだろう．英仏語の場合，日本語などと違って反実仮想の世界もあくまでも BASE から指定しなくてはならない．このとき，BASE から離れた場所で，確実にそれらの事態が成立しているということは，反実仮想の世界そのものである．そのような状況を仮定するスペースの中ではその述定は確実に成立している，さらに現実とは離れた遠くの世界で成立しているのである．この性質が現実世界の「過去」と容易に結びつくことは想像に難くはない．動機付けとしては十分であろう．一方日本語の場合がそうでないように，すべての言語で過去形が反実性と結びつくわけではないのでその結びつきはあくまでも動機付けのレベルにとどまっていると言えるだろう. 意味の差異という点に関しては(1)と(2)の文意の比較によって明らかであるし，汎言語的な観点から見た場合，英語やドイツ語において同様の構文が過去形と密接に結びついていながら一部異なっていることを指摘できるだろう．英語では反実仮想の場合１人称で if I *were* という時制的用法の場合は現れない形が生じうるし，ドイツ語でも接続法第二式であって過去形とは完全には重ならない．これらの事実から少なくとも英語やドイツ語の話者は「過去」と「反実性」を異なった意味として認識していることがわかるだろう.

3.2 共通変異体説検討

純粋にフランス語の半過去だけを問題にするなら Goffic の共通変異体説が最もシンプルで，論理的にも矛盾のない説明となるだろう．フランス語の半過去には照応的時制という特徴があり，同時に使用された単純過去もしくは複合過去の過去性をひきついで「過去」の意味をにな

っているだけではないか，と考える余地は大いにある．さらに時制的用法の場合も反実的用法の場合も「遠方性，非現在性，確実性」は保持しており，どちらも拡張と考えることができ，単義説であり，理論としては派生説よりシンプルですぐれていると言えよう．

しかしながら，汎言語的な観点から見てみると，英語でもドイツ語でも過去性と反実性の結びつきは明らかであり，フランス語でも反実性と結びつくのは半過去だけではない．

(14) Notre grand-mère qui nous a quittés, si elle {avait été / *était} avec nous demain, cela aurait été tellement mieux. (曽我 2012)

(14)においては，半過去 était を用いると，可能性は少ないもののまだある，と解釈できるために，全くその可能性がない大過去 avait été が選択される．ということは半過去ではなく，大過去を用いることで反実性がより強化されているということができる．しかしながら形態的にみると大過去は「半過去＋半過去」なのではなく，「半過去＋先行性(avoir＋pp.)」と分析されるべきものである．成り立ちの上からも用法の上からも先行性としてしか解釈することのできない avoir+pp.の構造が反実性の表現に使われていることから，反実性と結びついているのは半過去ではなく，過去性そのものだということがわかる．Si で導かれた反実仮想の条件文において半過去しか生じない[1]のは，井元 (2010)でも述べたように，後件を導くための V-POINT を前件で構築したスペースに置くことのできる過去時制がフランス語の場合半過去に限られるからにすぎず，反実性と結びつくのは半過去ではなく過去性そのものなのである．従って，「過去性」と「反実性」が何らかの形で直接結びつく論理が必要とされるのである．さらにまた，半過去のもつ時制的用法の圧倒的な広がりに対し，純粋に法的用法とされる反実用法は極めて限定的で，限られた文脈の中でしか生じない．このことも半過去の本義は依然として「過去性」の中にこそあり，反実性は二義的なものでしかないと分析することの妥当性を示唆するものなのである．

3.3 時制的意味の拡張説検討

前述したように，半過去の圧倒的な用法は時制的なものであるから，ここから法的な用法も説明しようと試みることは自然な発想である．実際これまで法的な用法とされてきたものの中に時制的な用法の拡張として説明可能なものも数多く存在する．

(15) Je *voulais* te dire quelque chose pendant que nous sommes seuls.

(Duhamel in Imbs 1960 :97)

(15)は「語調緩和の半過去」と呼ばれ，法的用法として分類されるが，(15)が文字通り表しているのは「過去にそのようなことを欲していた」という過去の意味である．過去にそのように欲していたのだから現在もそう思っているだろうという含意と同時に，過去の話だから今な

[1] これはあくまでも反実仮想の条件文に限られるのであって，認識的条件文とよばれる論理的結論を問題にするような条件文ではそもそも時制制約はかからない．Si elle a tapé la thèse de Paul, elle l'aimait.など．

らキャンセルしてもよい，という含意をになうことから「語調緩和」の意味が拡張として生じてきていると考えられる．これはあくまでも拡張であって，「過去」の意味そのものは「語調緩和」のニュアンスが生じた後も消失していないことに注意してほしい．(15)は発話者の意図を重視して現在のことを述べていると解釈したとしても，過去においてそうであったという事実も常に真なのである．このように拡張の場合は，本来の意味の消失もしくは完全な変質は生じない．

このような観点から矛盾創出説を検討した場合，意味的には拡張と言えないことがわかる．まず明らかに現在や未来のことを話しているのに過去形を用いることで，それが可能になるような反実仮想のスペースを創出しているという説明だが，この場合，過去性のもつ本質的な時間の先行性はまさに文脈によって否定されるためだけに用いられており，反実性の意味を帯びた段階で完全に喪失してしまっている．過去という遠方においやることで「なさそうな」という意味を生み出すという説明は Imbs の派生の説明と同様であるが，遠方というのは過去性のもつ属性にすぎず，これが「なさそうな」という意味として実現した段階で先行性の意味はなくなっているのである．言語における拡張において，わざわざその本来の意味を否定するためにその語が使用されるなどということは普通は考えられない．文脈によって明らかであることと言語記号の意味とが異なる場合は非文となるか，あるいは(11)や(15)のように，その本来の意味を保持しながら矛盾を生じないような解釈を生むか，皮肉ととらえるかのどちらかであり，意味を変質させることはない．今あらためて(8)を検討してみると，半過去が反実仮想の意味を表すために使われるということを知らなくては，この文は過去のある時期に日本人であったなら，という仮定，すなわち

(16) Si j'avais été japonais, j'aurais appris le français.

の意味で解釈するのがもっとも自然であると思われる．仮に状況から現在のことを話しているということが明らかであっても，反実という方向よりは過去の基準点を探すという方向に向かうのが自然である．(8)の半過去の étais の中に反実性の意味を感じ取るのは，そうであることを知っていて後付に論理を構築するからできることであって，過去の意味しか知らない学習者が教わらなくても導き出せるような意味ではない．そのような形で意味が創出できるのであれば，(16)にも反実性がゼロの仮定というような解釈が容易にでてくるはずだが，そうであるよりは死人の発言のようなニュアンスを感じ取ることの方が多いのではないだろうか．さらに，(14)のように過去性が二重に重なった場合は「過去性」に戻って説明することはほとんど不可能である．曽我自身も(14)は「過去性」ではなく，過去性から一旦「なさそうな」の意味をひきだし，しかる後にこの引き出した意味を重ねているのであって，最初の導入で用いた時間の指定の矛盾などを持ち出してはいない．ただ，過去の「遠方性」が「なさそうな」という意味に単純に置き換えられて重ねられているだけなのである．従って筆者は「反実」の意味はあくまで

派生であって，そのような意味をフランス語が獲得したことを学ばなければわかり得ない意味であると考えるのである．

一方渡邊らの基準点遡及説は，過去の意味を保持しているという点において筆者のいう「拡張」に相当する．その意味ではあり得ない論理ではないが，筆者はメンタルスペースの時制論の観点からこの解釈はとらない．渡邊が比較のために持ち出した(11)の場合，副詞は未来であってもここで言及されているのは過去のまだ予定が有効であった頃の状態であり，筆者の用語で言えば FOCUS は過去にあるのである．この場合は FOCUS を過去にもってくる動機が明らかであるが，反実仮想の場合はそうではない．渡邊の説を踏まえる限り，(1)における前件の FOCUS は(10)の図における M_{-1} に，(2)の前件の FOCUS は(10)における M_1 にあることになる．しかしながら(2)の後件は，M_1 を V-POINT として M_1 から未来の位置にある仮定拡張スペースに FOCUS があると考えられる．筆者にとって，(1)と(2)の論理は蓋然性の多寡以外は全く同じもので構成されていると考えられるので，(1)の前件の FOCUS も M_{-1} ではなく，M'_1 であると考えるべきであり，フランス語の半過去はこの M'_1 に直接アクセスする価値を派生によって獲得したと考えるのが最も無理がないと思うのである．

4. 結論

以上の考察から，フランス語において反実仮想を表す半過去の法的意味は過去という時制的意味から派生的に生じた意味であり，半過去は時制的な過去の意味と法的な反実の意味とを多義としてそなえている，と結論づけることができる．

参考文献

Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language,* Ph.D.thesis, University of California San Diego.

Imbs, P. (1960), *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.

井元秀剛 (2010)『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.

甲斐基文 (2005)「認識的モダリティマーカーについて：仏日対照言語学の視点から」『フランス語を探る　フランス語学の諸問題 III』三修社, 156-166.

Le Goffic, P. (1986), "Que l'imparfait n'est pas un temps du passé", *Points de vue sur l'imparfait*, Centre d'études linguistique de l'Université de Caen, 55-69.

曽我祐典 (2012)「<si P> の動詞時制」日本フランス語学会第 281 回例会口頭発表

渡邊淳也 (2008)「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究　言語篇』54（筑波大学人文社会科学研究科文芸言語専攻）.

対立の接続詞 tandis que, alors que, pendant que の意味と用法について

石野 好一
愛知県立大学

0. はじめに

本論文では，対立の接続表現といわれる tandis que, alors que, pendant que について，それらの意味とニュアンスの違いを考察する．（なお，フランス語の例文は，末尾に引用出典，発行年，ページを記した．特に何も書いていないものは，自作してフランス語話者に受容可能性の判断を仰いだ．インフォーマントは，J.-P. Honoré, G. Kawai, G. Des Champhleere の 3 氏である．引用例文についてもあらためてインフォーマント・チェックをした．)

1. Tandis que, alors que, pendant que ― 同時的対立の接続表現

いずれも「～なのに対して，一方…」というように対立関係を表すために用いられる．また，時間の表現から形成されたため，同時的な対立を表すのが普通である．節内の叙法はいずれも直説法か条件法である．

(1) *Tandis que* Jean travaille, Pierre se repose.

(2) *Alors que* je me préparais à sortir, mes amis sont arrivés ! (Ruquet, 88, 123)

(3) *Pendant qu'*il pleut à Paris, il fait beau à Nice. (Charaudeau, 92, 523)

これらは，tandis que を除くと，「～しているときに」というように，時の表現として解釈することも可能だが，それだけではニュアンスを充分汲んでいるとは言えない．その意味に加えて，同時に起こっている２つの事柄の間に存在する何か理解できないものに対する感情，さらにはそこから生じる不満のようなものが感じられる．(2)の文末にある感嘆符は，それを表す標識と見ることができる．

Et や si，quand（さらに lorsque）にも対立の用法がある．これらはみな，ほぼ同時に生じている事態を並べることで対比的な意味合いをかもし出すという点で，意味的に類似していると言えるだろう．

それに対し，ここで取り上げる３つの表現は，既出の表現に比べると，対立の意味合いをより強く明白に伝えることができる．中でも，tandis que は特に強く対立の意味を表すと言われている（林編 1957, p.221）．

これら同時的対立の接続表現について，その対立の強さ（対立の意味の明確さ）を比較して順番に並べてみると，およそ次のようになる．（もちろん，対立の強さはコンテクストによって変化するから，あくまでも参考としての順序である．）

(4) et, si < quand, pendant que, alors que < tandis que

弱←----------対立の強さ（明確さ）----------→強

2. pendant que / alors que / tandis que ― ニュアンス

3 つの中で最も時間（同時性）のニュアンスを強く残しているのが pendant que である．

(5) Les uns se ruinent *pendant que* les autres s'enrichissent. (Hanse, 83,707)

(5)の例は，同時進行の事柄についてその対比的な事態を示している．

それに対して，tandis que や alors que は，明らかな時間的意味合いがなくても使われることがある．

(6) a. Jean est sérieux *alors que* [*tandis que*] je suis paresseux.

b. ?Jean est sérieux *pendant que* je suis paresseux.

従って，同時性が感じられない単なる対立（対比）の意味では，pendant que よりも tandis que や alors que を使う方がより自然だといえる．

ただし，いったん同時性が関わると，tandis que は厳密な時間の一致を要求する．

(7) a. Personne ne voulait aller ouvrir, *alors qu'*on sonnait à la porte depuis quelque temps.

b. ?Personne ne voulait aller ouvrir, *tandis qu'*on sonnait à la porte depuis quelque temps.

この例では，「呼び鈴が鳴って」から「開けに行かない」ことが生じており，2 つの事柄の間に時間的なずれ（因果関係）があることが tandis que を使いにくくしているのではないかと思われる．

3. tandis que, alors que, pendant que の従位性

この 3 つの対立節は，普通，前置も後置も可能だ．初めの 3 例について，それぞれ前節と後節を倒置してみよう．

(8) Pierre se repose *tandis que* Jean travaille. (= (1))

(9) Mes amis sont arrivés *alors que* je me préparais à sortir. (= (2))

(10) Il fait beau à Nice, *pendant qu'* il pleut à Paris. (Charaudeau,92,523) (= (3))

節の順序が変わっても，意味的にはほとんど変化しない．（これが，伝統的に従位接続詞と言われる理由の一つである．）

ただし，しばしば一つの文では，後ろの方に伝えたいこと（新情報）を置く．そのため，節の順序が変わると，文の焦点（主張の中心）が変化し，ニュアンスの違いが生じることがある．

しかしながら，いずれにせよ，これらの対立節はあいかわらず従位的であるという印象はぬぐえない.

また，次のような微妙な例もある.

(11) Il se plaint sans cesse, *tandis que* les autres sont souriants. (Hanse, 83, 904)

(12) Il parle, parle, *alors qu'* il faudrait agir. (Hanse, 83, 68)

(13) Pierre travaille pendant toute la journée, nuitamment, *pendant que* les autres dorment. (Soutet, 89, 117)

これらの例では，前節を受けて，後節に対比要素 les autres がある(11)(13)，前節に動詞の並置(parle, parle)がある(12)など，節の順序を変えにくい．しかしながら，これらの接続詞が等位的であるというまでには至らない.

4. 同時的対立表現の等位的用法

ところが，次の例では，どちらでもよいというわけには行かない.

(14) Plaire n'est pour lui qu'un moyen de succès ; *tandis que* pour elle, c'est le succès même. (*GRLF*)

(15) Les hommes croient que les machines travaillent pour eux. *Alors que* ce sont eux, désormais, qui travaillent pour elles. (Robbe-Grillet ,81,77)

これらの例では，後節から訳すのは不適切である．内容からみて，明らかに文の焦点は後節にあり，その意図を考慮して効果的に訳そうとすれば，前節→後節の順に訳すのが自然だろう．（alors que の例(15)では，対立節が独立して，2 文に分かれている．したがって，厳密に 1 つの文に 1 つの焦点があるとすれば，それぞれの文に焦点があるということになるが，ここでは話を単純にして，2 文ではなく 2 つの節とする.）

これらの対立節（後節）は，意味変化なしに前置することはできず，もはや従位的ではない．接続表現 tandis que，alors que は，前節を受け，それをテーマとして，「ところが」というように後に対立的な内容を導く標識になっている．これは，すなわち等位接続詞と同様の働きをしているのである.

この等位的な用法は，tandis que に最も多く，alors que にも見られるが，pendant que では明らかに等位的用法だと思われる例はあまり見かけない．これは，上で述べたように，pendant que の時間的なニュアンスの強さのためだと思われる．すなわち状況補語的な（従って従位的な）用法が多いのである.

5. 等位的用法の特徴

4 で見たような同時的対立の接続表現の等位的用法には，一般的にどのような特徴があるの

だろうか.

- 対立節が後置されている.
- 節と節の間に，強いポーズが置かれ，時には，句点 point « . » によって，対立節が独立節となっている.（上例(14)(15)参照）
- 先行節を受けて，後節（対立節）に，対比的な強勢形の人称代名詞や，修正・強調の副詞的表現，感嘆表現が置かれていることがよくある.

次も同様の例である.

(16) Moi, j'appartiens à son passé, *tandis que vous, Simon*, vous appartenez à son existence future. (Robbe-Grillet, 81, 113)

(17) Je me suis cru très habile, *alors que précisément* je ne voyais pas l'essentiel, c'est-à-dire que le seul problème, c'est l'eau... (Pagnol, 88, 60)

節同士の緊密度という概念を用いれば，これら等位的用法のいずれの特徴も，節間の緊密性を低め，後節の自立性を高めるために役立っていると言える．すなわち，後節の追加的なニュアンスを強化することになる.

会話などでは，この追加的な用法がしばしば効果的に用いられる.

(18) — Je ne savais pas que tu travaillais dans notre société.
— *Alors que* moi, je n'avais jamais imaginé que tu sois P. D. G. de cette société.

6. tandis que, alors que, pendant que — 特徴のまとめ

以上の 3 つの接続表現の特徴をまとめると次のようになる.

	時間性	同時性	対立性（従位用法）	等位用法
tandis que	強も弱もあり	強い	非常に強い	可能
alors que	強も弱もあり	強も弱もあり	強い	可能
pendant que	強い	強も弱もあり	強い	（あまり）ない

参考文献

Charaudeau, P. (1992), *Grammaire du sens et de l'expression*. Paris : Hachette.

Chuilon, C. (1986), *Grammaire pratique. Le français de A à Z.* Paris : Hatier.

Gadet, F. (1992), *Le français populaire*. Paris : PUF. (Que sais-je? 1172).

Hamon, A. (1987), *Guide de grammaire*. Paris : Hachette. (Marabout)

Hanse, J. (1983), *Nouveau dict. des difficultés du fr.moderne*. Duculot.

Lafaye, J.-P. (1858), *Dictionnaire des synonymes de la langue française*.

Popin, J. (1993), *Précis de grammaire fonctionnelle du français. 1: Morphosyntaxe*. Paris : Nathan.

Soutet, O. (1989), *Syntaxe du français.* Paris : P.U.F. (*Que sais-je?* 984)

石野好一 (1983)「等位接続詞 et, ou, ni について」『サピエンチア』17（英知大学論叢），167-86.

石野好一 (1987)「car... et que...の構文」『フランス語学研究』21，76-77.

石野好一 (1988)「フランス語の接続表現と文連結の緊密性について」『サピエンチア』22（英知大学論叢），199-209.

石野好一 (1993～1994)「戦略としての接続表現ー続・ファジーなフランス語 1 ～12」(連載)『ふらんす』1993 年 4 月～1994 年 3 月　(68-4～69-3)，白水社.

石野好一 (1999)「フランス語の並置構造について」(Sur la juxtaposition en français)　『人文学報』第 304 号（東京都立大学人文学部，167-192.

川本茂雄［編］(1982)『フランス語統辞法』（初版 1956），白水社.

林和夫編 (1957)『前置詞・接続詞』（フランス語学文庫 10），白水社.

辞典

GRLF : *Le Grand Robert de la langue française*. 2e éd. 1985. Paris : Le Robert.

例文資料

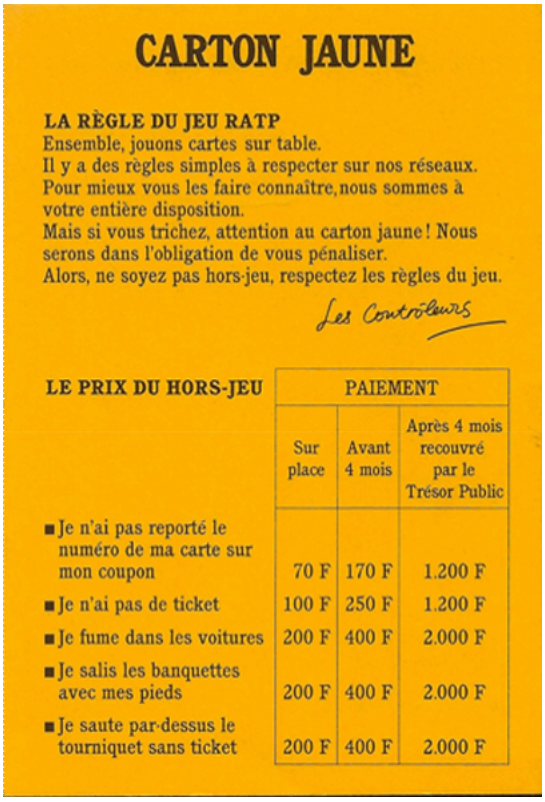
Pagnol, M. (1988),『仏和対訳シナリオ「愛と宿命の泉」』（窪川英水編訳），白水社

Robbe-Grillet, A. (1981), *Djinn*. Paris : Minuit.

Ruquet & Quoy-Bodin. (1988), *Raisonner à la française. (Comment dire ?)* Paris : Clé International.

一人称のトリック的用法について

泉　邦寿
上智大学名誉教授



CARTON JAUNE

LA RÈGLE DU JEU RATP
Ensemble, jouons cartes sur table.
Il y a des règles simples à respecter sur nos réseaux.
Pour mieux vous les faire connaître, nous sommes à votre entière disposition.
Mais si vous trichez, attention au carton jaune ! Nous serons dans l'obligation de vous pénaliser.
Alors, ne soyez pas hors-jeu, respectez les règles du jeu.

Les Contrôleurs

LE PRIX DU HORS-JEU

	PAIEMENT		
	Sur place	Avant 4 mois	Après 4 mois recouvré par le Trésor Public
■ Je n'ai pas reporté le numéro de ma carte sur mon coupon	70 F	170 F	1.200 F
■ Je n'ai pas de ticket	100 F	250 F	1.200 F
■ Je fume dans les voitures	200 F	400 F	2.000 F
■ Je salis les banquettes avec mes pieds	200 F	400 F	2.000 F
■ Je saute par-dessus le tourniquet sans ticket	200 F	400 F	2.000 F

0. ここに提示した画像は，かつてパリの地下鉄で 1986/87 年頃，乗客に配布された注意書きの紙で，見て分かるように，違法乗車に対する警告文である．

警告文であるから，読み手（=対話者）に対して，禁止事項と，それが守られなければ，どういう結果になるかが記されている．

しかしながら，同様のことを口頭で行った場合とは異なる，書きことば特有の形が目にとまる．それは，実際にどのような行為が行われた場合に幾らの罰金を支払わなくてはならないかが記されているところである．たとえば，Je n'ai pas de ticket.「（私は）切符を持っていない」とあるが，声に出して言われた場合には，Si vous n'avez pas de ticket　ないしは Vous n'avez pas de ticket 「（あなたは）切符を持っていない（なら）」になると考えられる．

この小論ではこのような一人称の用法をトリック的用法と名付けることにして，少々考えてみることにしたい．

人称の概念についてはこれまで多くの研究者たちの論考と学説がある．中でも，Emile Benveniste，鈴木孝夫，Antoine Culioli，川口順二，青木三郎らの業績が重要だが，ここではそれをいちいち吟味することはしないで，じかに問題を検討し，必要に応じてそれらに触れることにしたい．

1. フランス語の人称代名詞においては，発話行為がなされる「話の場」における話者（話し手）

であることを，発話そのものによって記すマーカーが一人称代名詞であり，これは発話行為がなされなければ意味をなさないという，まさに話の場に結びついた特別な語彙群の中の代表的な一つなのである．したがって，何かの名詞に代わるという意味での「代名詞」という用語は本来ふさわしくないのだが，定着した文法用語として便宜的にそれを一人称代名詞としておくことにする．

二人称代名詞は，早くから Benveniste や鈴木が述べているように，話者である一人称が定まって初めてその対話者として定まるのであり，その意味で一人称と二人称は拮抗関係をなすセットで，両者は電極のプラスとマイナスのように，一方でなければもう他方であるという，決して切り離すことのできない関係なのである．

これに対し三人称代名詞は，それらとは根本的に性質が異なった人称であって，まさに文字通り「代」名詞で，すでに文脈上に登場したか，あるいはこれから登場する名詞を指示する形式なのである．前方照応 anaphore，後方照応 cataphore といわれる現象がこれに相当する．したがって，ふつうフランス語では，話の場にいる第三者を指し示して，il ないし elle とは言えないわけで，もし言えば，大変失礼で，ぶしつけに当たる．しかし，一度その人の名を言語的に挙げておけば，問題はない．

(1) C’est monsieur Martin. *Il* est spécialiste en linguistique romane.「こちらはマルタンさんです．ロマンス語学の専門家です.」

したがって，フランス語の一人称および，二人称代名詞は発話の場での役割だけを表すものであり，日本語の人称代名詞が発話の場における役割以外に，なんらかの社会的な役割をも合わせもっているのとは大いに異なるわけだが，そのことはこれまでに多くの人に指摘されてきたことである（鈴木，川口，泉など）．さらに，また，日本語についてはいわゆる人称代名詞以外の親族名称，職業名称等を含んだ形で，自称詞，対称詞という枠組みで考える必要があることを鈴木は主張している．

フランス語でも対話者を示す人称代名詞には tu と vous があり，ここには単に発話の場における役割のみでなく，心理・社会的な意味が入りこんでいるわけで，これについても多くの人の具体的な記述があり，筆者もかつて取り上げて議論したことがある（泉（1989, 2004））．また，歴史的には権力（Power）から連帯（Solidarity）への移行・変化としてそれがとらえられている（Brown, R. and A, Gilman）ことは周知のことである．

2. さて，上記の carton jaune の分析に当たっては，以上のようなことが前提となるのでそれを述べたが，分析の前にもう一つ，類似のいくつかの表示を見ておくことにしよう．

パリの地下鉄で電車を待っていて，線路の方を見ていると，次のような表示が目に入ってくる．

(2) Ne pas descendre sur la voie. Danger de mort.「大変危険ですので，線路に降りないでください.」

前半は日本語なら，「線路に降りないでください」ということになるところだが，ここのフランス語では二人称は用いられず，不定法が使用されている．不定法は人称，時制，叙法が特定される以前，つまり，ことが発話の現実界に位置づけられる前の概念のみがそのまま提示されているのである．しかしながら，これが書かれた表示を見るという具体的な場においては，読み手（=対話者）はこれを自らに向けられたメッセージとして読むことによってこの文を解釈するのがふつうである．つまり，ここで不定法の形が使用されているのは，一般的な概念を提示しながらも，それが読まれる具体的な場において，ヤーコブソンのいう他動的な機能 (fonction conative) をこの文に持たせることが意図されているといってよいのである．

この不定法と同じ機能が発揮されているのが，後半の冠詞無しのはだかの名詞句 Danger de mort「死の危険」であるが，これも具体的な場での定位をおこなう冠詞を伴わない名詞だから，先の不定法と同じような機能を果たしていると考えてよいと思われるが，この小論では名詞句についての議論は差し控えることにしたい．

さて，地下鉄の車両の中に乗ると，こんどは次のような表示が目にとまる．

(3) Porteurs de carte orange　Vous devez valider votre coupon (Art. 19)

「カルトランジュをお持ちの方へ　切符を有効化してください（規則第１９条)」

ここでは不特定の人ではなく，カルトランジュを保持している乗客に対して呼びかけているので，後半の部分では言語的に対話者である二人称（ここでは複数）を用いているのである．呼びかけというのは，実際に対話者としてそこにいる（であろう）人物を想定しているのであるから，呼びかけに続く文を不定法で書くわけにはいかないのである．

3. ところで，パリの公園などでは次の写真のような表示を見かけることがある．

これは犬の糞を飼い主は拾いなさいということを示す表示なのだから，二人称の形を用いて，Aimez votre quartier. Ramassez.「街を愛してください．（糞を）拾ってください」としたら，ごく普通の要請文となろう．しかしながら，この表示では，一人称を用いて，

(4) J'aime mon quartier. Je ramasse.「私は自分の街を愛します．（糞を）拾います」

と書いてある．これはどうしてなのだろうか．

ふつう，je を用いれば，主語（文法機能）と動作主（意味機能）と話者の三つが一致していることがほとんどである．たとえば，

(5) Je te donne ce livre. 「この本を君にあげるよ」

という文であれば，発話する人はこの行動をとる人と一致しているのだから，発言した責任を負わなくてはならないのである．こう言っておきながらそうした行動をとらなければ，たとえば，嘘つきだと非難されることになる．

では，この写真の表示ではどうであろうか．ここではこの文の書き手（=話者１）と実際に行動をする人（=動作主）は別人である．このようなことはふつう je という人称代名詞を使用するときにはおこらない．もちろん，話者と動作主が別というのは当たり前な文でもおこり得るのであり，たとえば，

(6) Paul va partir pour l'Italie.「ポールはイタリアに行く」

では，主語と動作主は同一だが，話者と動作主は別人だし，

(7) Il pleut.「雨が降っている」

では，主語はあっても，動作主はない．しかし，話者はこの文の発話者（ないし書き手）である．しかし，主語が je の場合にはこういうことはないのがふつうだが，上の表示文では奇妙なことがおきているのである．

さて，上の J'aime mon quartier. Je ramasse.の je はどういうことなのであろうか．重要な点は，この文が実際の音声となって発話をされていないことである．書き手（=話者１）は文を生み出しはしたが，厳密な意味での発話はしていず，保留されていて，読み手（話者２）がこれを発話するのを待ち受けているのである．そして，読み手（=話者２）がこれを発話したとたんに，ふつうの je と同じく，話者２と動作主は一致するので，その行動をする責任が読み手（=

話者２）にでてくることになる．もちろん実際の発話が行われなくとも，読み手が意識の中でこの je と自分を一致させただけで，自分が責任をとらなければならないことになるのが分かるのである．この文が読み手へのかなり押しつけ的な勧告となるのは，このような仕組みをたくみに利用した結果だといってよいのである．このような一人称の使い方は本来の使用法と異なるある種，トリック的な用法といってよい．そして，フランス語の一人称の je について，ここでは，話者１と話者２を想定しておく必要があるということになるのである．

フランスでは以前，小学校で生徒が遅刻をしたり，宿題をしてこなかったり，何か悪さをしたときに，たとえば，Je ne dois pas arriver en retard. 「私は遅刻してはなりません」などとノートに百回書くといった罰を与えられたようだが，フランス語話者は上の表示文のような一人称代名詞を用いた文を見ると，それを思い出すと言う．

興味深いのは，このようなことが可能なのは書かれた表示文であって，口に出しての発話文ではないことである. つまり, 上の J’aime mon quartier. や, Je ramasse.を口頭で対話者に言って，ふつう勧告や命令の文として用いることはないのである．

その点で，まだ言葉ができないほど幼いこどもに対して，母親が je を用いて言う文，たとえば,

(8) Est-ce que j’ai été sage aujourd’hui ?「ぼくきょうはおりこうにしていたかな」（青木）

のような文とは異なるのである．この場合は，青木も言うように，話者と対話者の関係は対等ではなく，対話者は話者の支配下ないしは保護下にあって，話者と対話者の対等な拮抗関係を表す je – tu の場から相手を外して je の中に取り込んでしまう用法といってよく，日本語の「ぼくいくつ？」式のいい方に似たところがある用法なのであり，この文はまさに口頭で発話されなければならないもので，上の表示文とはまったく性質を異にするのである．

4. さて，ここで，はじめの Carton jaune の例に戻ることにしたい.

この例はすでに述べたように，地下鉄に関する違反事項を注意する文面だが，トランプのようなゲームを書き手（=les contrôleurs）と読み手（=乗客）で行うという設定をしている．そこで書き手（=話者１）は複数 (les contrôleurs) であるから，nous として表れている．また，読み手（=対話者）は vous とされている．そして，ルール違反をした場合にはイエローカードに注意しなさいといい, 前段の最後はごくふつうの vous に対する次のような命令文で終わっている.

(9) Alors, ne soyez pas hors-jeu, respectez les règles du jeu.「それで， 反則しないよう，ゲームのルールを守ってください」

さらに興味深いのは，このカード自体がイエローカードにもなっている仕組みなのであり，そこには，こういうことをするといくらの罰金で，それをいつ払うかで料金がこれだけになると，具体的な数字が挙げられている．だが，ここでは vous の形をとって，たとえば,

(10)　Vous n’avez pas de ticket.「あなたは切符をもっていない」

(11)　Vous fumez dans les voitures.「あなたは電車の中でたばこを吸う」

などと書かれているのではなく，一人称代名詞 je の形を用いて，

(12)　Je n’ai pas de ticket.「私は切符をもっていない」

(13)　Je fume dans les voitures.「私は電車の中でたばこを吸う」

となっているのであり，これも上に見た je ramasse の例と類似の意味・語用論的な構造をもっているのではないかと思われる．

(12)(13)の文の書き手（=話者１）は自分が責任を引き受ける通常の文としてこの文を書いたのではなく（第一，それなら発話者は複数のはずである），これを読み手が声に出す，ないしは読むことで，話者２となるように仕向け，それによって責任をとらせようとする仕組みにしているのである．これによって vous を用いて，単にこうしたらこうなるよ，というよりはずっと強い強制力をもたせる効果が生じていると考えられる．

ここでも je は話者１と話者２の二重性をもち，話者１は書いてはいるが，実際の発話はせず，これを発話する話者２に発話の責任を負わせる仕組みになっていると考えられるのである．芝居にたとえてみれば，ふつう je を用いた文では演出家と役者が一体なのだが，ここでは演出家と役者が別人になっていて，演出家の演出を役者が引き受けて演じるというような仕組みになっているわけである．これも上記(4)の場合と同様に一人称のトリック的用法ということができると思う．

5. このような一人称の用法は日本語ではなかなか見当たらないと思っていたが，この論集の編者である喜田浩平氏から次のような例があることを教示された．

一つは，化粧品メーカー「イオナ」が，1977 年に打ち出した広告で，そのキャッチコピーは「イオナ．私は美しい」というもの．テレビのＣＭで有名になったが，その後，ポスターや雑誌などにも見られ，当時のコピーのヒット作であった．

この広告は筆者もよく記憶しているが，その時の印象はなにかナルシスト的だなというものだった．それは筆者が男のせいであって，女性ならこのコピーに同化して，自分も美しくなれると思ったのかもしれない．しかしながら，言語の仕組みという観点から考えると，これはこのコピーに出てくる女性が話者として発話しているごくふつうの「私」であって，これが何らかの他動的機能をもつとすれば，それはこれを見た，あるいはこれを読んだ女性の心理的な同化によるものであって，言語的なトリックではないといってよく，上に見たフランス語の je の場合とは異なる用法だと言うことができる．

喜田氏から提供されたもう一つの例は，いわゆる「交通標語」として見かける文である．

(13)　私はいつも安全運転です.

(14)　私はプロです　事故は起こしません.

たしかに，これは上の(4)のような例に当たるものと思われる．これらの文が「交通標語」として使用されている場では，この文は書き手（=話者１）の自己表明ではなく，読み手に向けられたメッセージととられることがふつうであり，これを読み手が口に出すか読むことによって，読み手（=話者２）は発話者かつ動作主となり，その発話の責任を負うという仕組みになっているので，勧告文として他動的機能をとるようになるわけである．その点で，上のフランス語と同様のトリック的用法ということができるだろう．フランス語と異なる点は，ふつうの発話の場合に日本語では人称代名詞の「私」は出ないことが多いが，評語文ではこれがあえて使用されているところに，上に述べたようなトリックの効果が出ていると言えるのではなかろうか.

日本語の場合には,「ぼくいくつ？」のような，対称詞として一人称代名詞を用いる形はフランス語より圧倒的に多く存在するが，フランス語に比べて言語的な仕組みを用いたトリック的用法はそれほど多くないのではないかと思われる．これについては更に調査と考察を深めることが必要である.

参考文献

青木三郎 (1989)「人称に関する日・仏語対照言語学的研究」『筑波大学文芸言語学系文芸・言語研究（言語編）』16, 1-44.

Benveniste, E. (1966 et 1980), *Problèmes de linguistique générale, Gallimard, I , II.*

Brown, R. and A. Gilman (1960), “The Pronoun of Power and Solidarity”, T.A. Sebeok (ed), *Style in Language*, MIT Press, 253-276.

Culioli, A. (1984), “Théorie du langage et théories des langues”, *E. Benveniste d’aujourd’hui,* Société pour l’Information grammaticale, 77-85.

泉　邦寿 (1989)『フランス語の意味と表現 ― 日仏語の比較 ― 』大修館書店.

泉　邦寿 (2004)『フランス語の小径』白水社.

泉　邦寿 (2011)『ことば　フランス　ヨーロッパ』私家版.

Kawaguchi, J. (1984), “Le concept de personne”, *E. Benveniste d’aujourd’hui,* Société pour l’Information grammaticale, 119-125.

鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波書店.

鈴木孝夫 (1982)「自称詞と対称詞との比較」『日英語比較講座第 5 巻　社会と文化』17-59.

メトニミ・メタファと人物名をめぐって
「区別の解消」と「抽象度」

川島 浩一郎
福岡大学

1. はじめに

(1) から (6) に見られるように，固有名詞の一つである人物名が，メトニミあるいはメタファの材料として用いられることがある．

(1) Je lirai *Proust*. (Sébastien Japrisot, *Adieu l'ami*, Collection Folio, 1968, p.145)

(2) Tu écoutes *Madonna* ? *Kylie Minogue* ? (Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.36)

(3) Tu n'as qu'à vendre *le Picasso*. (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.99)

(4) Regarde-moi, je ne suis pas *un Adonis* [...]. (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.88)

(5) Je suis *le Don Juan* de la presse people, *le Casanova* du groupe Prisma. (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.97)

(6) [...], et les hommes croient tous jouer dans *un Scorsese*. (*Elle*, 2 mai 2005, p.138)

人物名はまた，メトニミ・メタファであるかないかにかかわらず，(1) の Proust や (2) の Madonna，Kylie Minogue のように名詞限定辞をともなわないこともあれば，(3) の le Picasso や (4) の un Adonis でのように，名詞限定辞によって限定されていることもある．

本稿の主な目的は，「区別の解消」という概念を援用して，人物名を「抽象度」という観点から分析することである．結論を先取りして言えば，人物名記号素は，通常の固有名詞であるかメトニミ・メタファであるか，名詞限定辞による限定があるかないかによって，実現形が持つ「抽象度」に階層性が見られる．人物名が示す「抽象度」には，多様性があるのである．

2. 事実と概念・用語の確認

2.1 名詞限定辞による普通名詞化

名詞限定辞による統辞的な限定は，非普通名詞クラスの記号素・連辞を，普通名詞クラスの

記号素に接近させる効果がある[1].

(7) Il avait insisté sur *le « très »*. (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.15)

(8) *Un « T'as vu ta gueule à toi ? »* a suffi pour que je me retrouve catapultée sur le trottoir. (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu , 2004, p.168)

たとえば (7) の très は定冠詞によって, いわば普通名詞化されている. (8) の T'as vu ta gueule à toi ?という連辞は, 不定冠詞の存在によって, 一種の名詞連辞として機能している.

(9) *Un Borg* ne devient pas *un Connors*, et inversement. (Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.28)

(10) *Les Schmidt* sont bruns, *les Neumann* sont blonds. (Tania de Montaigne, *Tokyo c'est loin*, Collection Pocket, 2006, p.146)

(11) *Des Camille*, j'en connais plein. (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.145)

(9) において un Borg や un Connors が特定の人物ではなく, Borg タイプや Connors タイプのテニスプレーヤーを意味するのは, 不定冠詞の限定によって Borg および Connors が普通名詞に接近しているからである. 同様に (10) の les Schmidt (シュミット家の人々) や les Neumann (ニューマン家の人々) における Schmidt や Neumann も, 純然たる固有名詞というよりも, むしろ普通名詞に近い存在だと考えてよい (3.2 を参照). (11) の des Camille は特定の人間を指示するのではなく「Camille という名前の人たち」を意味する.

名詞限定辞による限定には, 被限定項のステイタスを普通名詞のそれに, 統辞的に接近させる効果がある. 少なくとも, 名詞限定辞の存在によって「普通名詞」と「非普通名詞」(たとえば固有名詞) の分布に, 名詞限定辞と共起するという共通点が生じることは自明である.

2.2「区別」と「区別の解消」

言語単位の成立は, 他の言語単位との区別を前提とする[2]. 以下, 表意単位について検討しておこう.

表意単位 (X, Y, Z と記号化する) が成立するためには, 他の表意単位との区別が必要である. 表意単位は X であるか Y であるか Z であるかというように, 複数の可能性があるときに限って, X であることや Y や Z であることに意味がある. 仮に色彩に赤色しかなかったとしたら, その色を「赤」と呼ぶことに何か意味があるだろうか. そのような場合には, そもそも「色」

[1] 詳しくは, 川島 (2010a) を参照. 名詞限定辞による限定の可能性は「普通名詞」の定義そのものに関連する. また固有名詞と普通名詞の境界画定の問題については, 川口 (2011) を参照.

[2] 本稿では「区別 (distinction)」という用語を「対立 (opposition)」よりも広い意味で用いている. 大略, 話線上の同じ位置で X と Y を入れ換えて文意に知的な意味の変化が生じるとき, この位置で X と Y が対立すると言われる.

という概念すら明確には存在しえないはずである．また，猫という動物に三毛猫しかいなければ，「猫」の指示対象は「三毛猫」のそれに等しいのだから，「三毛」の部分には実質的な情報がないことになる．「三毛」という表意単位が意味を持つためには，ペルシャ猫や黒猫や白猫など，他の猫の種類との区別が前提となっていなければならない．

ある文脈で X，Y，Z の間に存在する区別が，別の文脈で消失する現象を「区別の解消」と呼ぶことにしよう[3]．文脈の条件づけなどによって論理的にXでしかありえないような場合は，YやZでないのはもちろん，それはいわばXでさえない．どれか一つでしかありえないのなら，XやY，Z という区別そのものが無意味だからである．つまり X，Y，Z の間の区別が消失していることになる．少なくとも X，Y，Z という区別があるときの X と，それがないときの X は，別物と考えなければならない．

たとえば，架空の A 言語が持つ果物の名称が「リンゴ」，「バナナ」，「メロン」の三つ，B 言語が持つ果物の名称が「リンゴ」，「バナナ」の二つ，そして C 言語が持つ果物の名称が「リンゴ」だけだと仮定しよう．このとき，A 言語の「リンゴ」，B 言語の「リンゴ」そして C 言語の「リンゴ」は，互いに別物であると考えなければならない．A 言語の「リンゴ」が「バナナ」あるいは「メロン」との区別を含意しているのに対して，B 言語やC 言語の「リンゴ」はそうではないからである．実際「リンゴ以外の果物を食べた」は，A 言語，B 言語，C 言語それぞれで意味が異なる．A 言語では「バナナあるいはメロンを食べた」を意味し，B 言語では「バナナを食べた」を意味する．C 言語における「リンゴ以外の果物を食べた」は (C 言語の枠内で解釈する限り) 意味不明の発話である．

(12) *Il* sort beaucoup. (Boileau-Narcejac, *Sueurs froides*, Collection Folio, 1958, p.134)

(13) *Il* faut gagner du temps ! (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.234)

(12) の il は他の表意単位 (elle など) との入れ換えが可能で，またその入れ換えによって文意に知的な意味の変化が生じる．このことから (12) の il が，他の表意単位との明確な区別を含意していることが分かる．一方，他の表意単位との入れ換えができない (13) の il は，他の表意単位との区別を含意していない．つまり il faut...の il は，il sort beaucoup の il が含意しているような区別が解消した存在である．

他の表意単位との区別を含意した il と，他の表意単位との区別を含意しない il は，同じ表意単位ではありえない．実際 (12) の il が人称代名詞であるのに対して，(13) の il は非人称代名詞と呼ばれる．

互いに区別される X，Y，Z に共通部分が存在する場合，X，Y，Z の間の区別が解消した結

[3] 「区別の解消」の古典的な事例としては「音韻対立の中和」がある．たとえば Kawashima (2010) を参照．また「区別の解消」の表意単位への適用例としては，たとえば川島 (2010b) がある．

果として現れる表意単位は，論理的な帰結として，X，Y，Z の共通部分であると考えざるをえない．共通部分がある X，Y，Z の区別が解消することは，「X，Y，Z の共通部分」以外の部分が無効化することと同義だからである．つまり「A＋ α」，「A＋ β」，「A＋ γ」の間の区別が解消するとすれば，それはα，β，γが無視されるからに他ならない．そこに残るのは共通部分の A だけである．たとえば，主辞代名詞の区別が解消する il faut...のような文脈に現れた il は，すべての主辞代名詞の共通部分だということになる．また，男性の人間 (homme) と女性の人間 (femme) の区別がなくなれば (男性と女性の区別がなくなれば)，そこに残るのは共通部分の人間 (homme) だけである．

2.3 メトニミ・メタファと「区別の解消」

一般に，メトニミやメタファが成立するためには，何らかの「区別の解消」が必要である (2.2 を参照)．ある X (喩えられるもの) を別の Y (喩えるもの) で喩えることができるのは，もともと X と Y の間にあった区別が解消するからに他ならない．

(14) *Lunettes rondes* prit le temps d'enregistrer et d'analyser les données. (Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.483)

(15) Et voilà ! Maintenant, *tout Paris* va savoir que j'écris un livre. (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.183)

(14) の lunettes rondes では「装身具」と「その装身具を身につけている人間」との区別が解消している[4]．装身具である「lunettes rondes」と「lunettes rondes を身につけている人間」の区別が解消した結果，そこに残ったのが共通部分の lunettes rondes なのである (2.2 を参照)．また (15) の tout Paris では，「都市」と「その都市に住んでいる人間」の区別が無視されなければ，tout Paris はメトニミではなくなってしまう．

(16) La mère Coste est *une encyclopédie vivante*, [...]. (Tonino Benacquista, *Trois carrés rouges sur fond noir*, Collection Folio, 1990, p.125)

(17) Grohm est *un vrai mur*. Il m'envoie paître dès que j'insiste. (*La théorie Gaïa*, p.142)

(16) の une encyclopédie においては，たとえば「百科事典的な知識の持ち主 (生物)」と「百科事典 (無生物)」の区別が解消していると言うことができる．このような区別が解消されない限り，(16) の une encyclopédie vivante はメタファとしてではなく，文字通りの意味 (彼女は人間ではなく百科事典だ) にとらざるをえない．「百科事典的な知識の持ち主」と「百科事典」の区別が解消した結果，そこに残ったのが共通部分の「百科事典」なのである (2.2 を参照)．

同様に (17) の un vrai mur においても，「壁のように振る舞う人間 (生物)」と「壁 (無生物)」の区別に相当するような区別は，解消していると考えざるをえない．でなければ，un vrai mur

[4] 個々のメトニミやメタファにおいて，どんな区別が解消しているのかを具体的に特定するためには，より厳密な議論が必要である．

はメタファとして成立しない (文字通りの意味にとらざるをえない).

メトニミやメタファに見られる「区別の解消」は，メトニミやメタファの目的でもなければ動機でもなく，いわば付随的に生じる現象に過ぎない．ただし少なくとも，ある種の「区別の解消」が介入しないかぎり，メトニミやメタファが成立しえないことは確かである．

2.4 表意単位における抽象度

本稿では表意単位が示す「抽象度」という概念を，およそ次のような意味で用いる．表意単位は，より多くの区別を前提にするほど「抽象度」が相対的に低い．逆に，前提とする区別が減少すれば，それにともなって「抽象度」も相対的に高くなる．これは「抽象度」という概念をどう定義するかという，単なる定義の問題ではない．抽象度の現実的な定義には必ず，この事実が反映されているはずである．

たとえば表意単位 X を X1 と X2 に下位分類すれば，下位概念である X1 や X2 の抽象度は，上位概念である X の抽象度よりも，必然的に低いことになる．X1 と X2 は，X1 と X2 の間の区別という，X にはない区別を含意するからである．実際「赤」や「青」という表意単位の持つ抽象度は，「色」という表意単位の持つ抽象度よりも，相対的に低いと考えられる．逆に「色」の抽象度は「赤」や「青」のそれよりも，相対的に高いと言ってよい．「色」は「赤」と「青」の区別を含意しないからである．

(18) Tu trouves qu'il est *l'élégance incarnée* ? (Marc Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, p.336)

(19) Tu vois cette étoile solitaire perdue dans l'immensité du ciel ? Eh bien, *cette étoile, c'est moi*. (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.307)

(18) の élégance がメトニミとして成立するのは，「ある性質」と「その性質の持ち主」の区別が解消しているからである (2.3 を参照)．言い換えれば (18) の élégance は，性質である「élégance」と「élégance を備えた人間」の共通部分の実現形である (2.2 を参照)．このことから，メトニミである (18) の élégance の抽象度は，通常の élégance の抽象度よりも高いことが推論される．(19) の élégance は，通常の élégance が前提とする区別 (性質とその持ち主の区別) を含意しないからである．

(19) のメタファでは，「その星」と「その星のような境遇」の区別および「わたし」と「わたしのような境遇」の区別が，解消していると考えられる (2.3 を参照)．「わたし」と「わたしのような境遇」はあくまでも別物であるという前提にたてば，(19) の moi はもはやレトリックではなくなってしまう (文字通りの意味に理解するしかない)．したがって「わたし」と「わたしのような境遇」を区別する通常の moi と比べれば，(19) の moi の持つ抽象度は相対的に高いと言うことができる．前提とする区別が相対的に少ないからである．

2.5 固有名詞と普通名詞の抽象度

一般に，固有名詞クラスの記号素の抽象度は，普通名詞クラスの記号素の抽象度よりも，相対的に高いと考えられる．

固有名詞クラスの記号素は，他の記号素との意味的な区別を含意しない．固有名詞クラスの記号素にあるのは，固有名詞というクラスに特有の特性を除けば，指示対象との対応関係 (一対一対応でなくてもよい) だけだからである．固有名詞であるという点を除けば，Marc にせよ Paul にせよ，Marc や Paul という記号素そのものに固有の意味があるわけではない[5]．固有名詞クラスの記号素はそれ自体に意味を持たないのだから，他の記号素との意味的な区別を含意しているはずがないのである．固有名詞クラスの記号素の成立は，記号素の間の意味の区別ではなく (2.2 を参照)，指示対象との対応関係の区別に立脚していると考えなければならない．固有の意味を持たない Marc や Paul に，意味の違いはない[6]．Marc と Paul の指示対象が異なるとすれば，それは単に言語外現実との対応関係が異なるからである．

一方，普通名詞クラスの記号素は，発話の他の部分に対する統辞関係だけでなく，他の記号素との意味的な区別を含意している．普通名詞クラスの記号素は複数存在するのだから，少なくとも普通名詞クラスの記号素の間 (たとえば vin と bière の間) に，何らかの意味的な区別が存在することは自明である (2.2 を参照).

固有名詞クラスの記号素が他の記号素との意味的な区別を含意していないのに対して，普通名詞クラスの記号素は他の記号素との意味的な区別を含意している[7]．したがって，普通名詞クラスの記号素と比べて含意する区別が相対的に少ない固有名詞クラスの記号素は，普通名詞クラスの記号素よりも抽象度が相対的に高い記号素であるということになる．

(20) Et *Charles*, ravi, hoche la tête en signe d'acquiescement. (Marc Levy, *Les enfants de la liberté*, Collection Pocket, 2007, p.138)

(21) Ainsi, Charlotte épouse *un Charles*. (*Chouette, une ride !*, p.38)

たとえば，通常の固有名詞である (20) の Charles の抽象度は，名詞限定辞によって普通名詞化された (21) の un Charles の抽象度よりも (2.1 を参照)，相対的に高いと考えるべきである．

3. 人物名とその抽象度の階層性

3.1 人物名と下位分類

人物名に名詞限定辞の限定があるとき，その人物名に下位分類の含意が生じることがある[8]．

---

[5] 固有名詞の意味と指示機能の問題については，川口 (2011) を参照.

[6] 固有名詞クラスの記号素に共通する性質をあげても，個々の固有名詞に意味があることにはならない．個々の固有名詞に意味があるとすれば，まずは固有名詞と固有名詞の間に意味の区別があるはずである.

[7] 固有名詞によるメトニミやメタファにおいては，固有名詞と普通名詞の区別が解消していると考えることができる.

[8] 詳しくは川島 (2010a) を参照.

(22) Et *Rolande* l'entraînait dans une petite rue, *une Rolande étrange*, aux vêtements fripés, au visage las, aux yeux inquiets. (Georges Simenon, *La maison des sept jeunes filles*, Collection Folio, 1945/1954, p.94)

(23) On peut dire qu'il y eut deux Aimée Favart. *Une Aimée avant la séparation*. *Une Aimée après*. (*Odette Toulemonde et autres histoires*, p.89)

たとえば (22) の une Rolande étrange は，複数種類の Rolande の存在を前提とする (いつもと違う Rolande もいれば，いつもと同じ Rolande もいる)．複数種類の Rolande を前提にできるのは，複数種類の Rolande を区別するからに他ならない．要するに une Rolande étrange は Rolande を下位分類したものである．(23) においても，une Aimée avant la séparation と une Aimée après が互いに区別されている．これらは単なる Aimée を，二つに分類したものである．

下位分類された人物名は，下位分類されていない人物名と比べて，抽象度が相対的に低い．下位概念は上位概念よりも，抽象度が低いからである (2.4 を参照).

したがって Rolande を下位分類した (22) の une Rolande étrange の Rolande は，単なる (通常の固有名詞の) Rolande よりも抽象度が低い．同様に考えて (23) の une Aimée avant la séparation や une Aimée après における Aimée は, 通常の Aimée よりも抽象度が低いと言うことができる．

3.2 人物名と名詞限定辞

名詞限定辞による統辞的な限定は，固有名詞の一つである人物名を，普通名詞に接近させる効果がある (2.1 を参照).

(24) *Un Henri* vaut mieux que *deux Fabien* tu l'auras ! (Agnès Abécassis, *Au secours, il veut m'épouser !*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.189)

たとえば (24) において，un Henri の Henri や deux Fabien の Fabien は，固有名詞というよりも普通名詞に近い存在である．

一般に，普通名詞クラスの記号素は，固有名詞クラスの記号素よりも抽象度が低い (2.5 を参照)．普通名詞クラスの記号素は，固有名詞クラスの記号素にはないような区別を含意しうるからである．

(25) J'ai eu une histoire très... très forte avec *un François*... (Tonino Benacquista, *Tout à l'ego*, Collection Folio, 1999, p.176)

(26) [...], *François* hurle un « NON » qui envahit l'espace. (*Les enfants de la liberté*, p.346)

(27) *Le Nathan*, j'ai bien l'intention de l'impressionner ce soir ! (Agnès Abécassis, *Toubib or not toubib*, Collection Le Livre de Poche, 2008, p.143)

(28) Tant mieux. Que *Nathan* mijote de jalousie. (*Toubib or not toubib*, p.144)

したがって, 名詞限定辞によって普通名詞化された (25) における un François の François は, (26) での François よりも相対的に抽象度が低い. 同様に (27) の le Nathan における Nathan の抽

象度は，名詞限定辞による限定のない (28) の Nathan の抽象度と比べて，相対的に低いと言うことができる.

4. メトニミ・メタファと人物名の抽象度

4.1 メトニミ・メタファと人物名

メトニミやメタファが成立するためには, そこに「区別の解消」が生じている必要がある (2.3 を参照).

(29) Pendant que tu lisais *Shakespeare*, moi je lisais *Alexandre Dumas*. (Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.443)

(30) Tu aimes toujours *Puccini* ? (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.383)

たとえば (29) の Shakespeare (Shakespeare の作品) と Alexandre Dumas (Alexandre Dumas の作品), そして (30) の Puccini (Puccini の作品) においては,「人物名」と「その人物の作品」の区別が解消しているからこそ，これらがメトニミとして成立する (2.3 を参照). 実際 (30) においては「Puccini 本人」と「Puccini の作品」の区別が解消した結果, 両者の共通部分としての Puccini が現れたと考えられる (2.2 を参照).

(31) [...], je suis étrange, je suis *Gulliver*. (*Tokyo c'est loin*, p.121)

(32) Pour moi, tu étais *Julia Roberts*... (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.17)

メタファである (31) の Gulliver においては,「Gulliver 本人」と「Gulliver のような (異邦の) 人物」の区別が解消している. (32) の Julia Roberts というメタファにおいても,「Julia Roberts 本人」と「Julia Roberts のような (素敵な) 人物」の区別が解消している. この区別が解消した結果あとに残ったのが，両者の共通部分としての Julia Roberts である (2.2 を参照).

(33) Elle veut lire *Stendhal*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, pp.76-77)

(34) J'étais *Henry Higgins*, elle était *Eliza Doolittle*. (Guillaume Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.359)

メトニミやメタファが成立するためには，そこに何らかの「区別の解消」が必要である. メトニミやメタファにおいても，人物名が対応しているのが「人物の名前」であることに変わりはない (固有の意味を持たない人物名には，それしかできない). 人物名に「区別の解消」が介入してはじめて，メトニミやメタファの可能性が生じる.

したがって，メトニミである (33) の Stendhal (Stendhal の作品) は，特定の個人を表す通常の固有名詞である Stendhal よりも，高い抽象度を持つと考えてよい (2.4 を参照). 同様にメタフ

ァである (34) の Henry Higgins (Henry Higgins のような人物) と Eliza Doolittle (Eliza Doolittle のような人物) は，通常の固有名詞としての Henry Higgins や Eliza Doolittle よりも，高い抽象度を持つと言える (2.4 を参照).

4.2 メトニミ・メタファと名詞限定辞

人物名を使ったメトニミあるいはメタファが, 名詞限定辞による限定と共起することがある.

(35) Mon chéri, suis-je amoureuse d'un homme qui préfère la névrose d'*un Picasso* aux sublimes résolutions d'*un Matisse* ? (Sophie Fontanel, *Fonelle est amoureuse*, Collection J'ai lu, 2004, p.129)

(36) C'est bien le minimum pour *un Sherlock Holmes*, non ? (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.233)

たとえば，メトニミである (35) の un Picasso と un Matisse には不定冠詞による限定がある. 不定冠詞をともなった (36) の un Sherlock Holmes はメタファである.

(37) On diffusait un concert [...]. C'était *du Brahms*, [...]. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.56)

(38) Patrick Besson dit de lui que c'est *du Beigbeder en classe éco*. (*Elle*, 2 mai 2005, p.56)

(39) Y a *du Debussy* dans l'air. (*Elle*, 19 septembre 2005, p.54)

(40) Porter *du Yohji Yamamoto*, [...], ce n'est pas cacher son corps, mais en conserver une partie dans l'ombre. (*Elle*, 2 mai 2005, p.79)

メトニミである (37) の du Brahms, (38) の du Beigbeder, (39) の du Debussy そして (40) の du Yohji Yamamoto においては，部分冠詞の限定がある.

(41) Où est *le Matisse acheté en 53* ? (*Trois carrés rouges sur fond noir*, p.59)

(42) J'apprenais beaucoup de choses en contemplant *les Cézannes* [...]. (Ernest Hemingway, *Paris est une fête*, Collection Folio, 1964, p.26)

(43) [...], et cette andouille de Grazzi pourra toujours jouer *les Sherlock Holmes* si ça l'amuse. (Sébastien Japrisot, *Compartiment tueurs*, Collection Folio, 1962, p.138)

(41) の le Matisse, (42) の les Cézannes そして (43) の les Sherlock Holmes は，どれもレトリックである．これらには定冠詞による限定がある[9].

ここで，普通名詞クラスの記号素は，固有名詞クラスの記号素よりも抽象度が低いという事実に着目しよう (2.5 を参照)．この事実からは，次のように推論することができる．固有名詞によるメトニミやメタファは，名詞限定辞によって普通名詞化された場合，名詞限定辞をとも

[9] 川島 (2011) や川島 (近刊予定) などで，定冠詞が「名詞限定辞の共通部分」であることを論証した．言い換えれば，定冠詞は無標の名詞限定辞である．この事実からは，定冠詞の限定がある名詞句は，他の名詞限定辞の場合と比べて，相対的に抽象度が高いことが推論される.

なわない場合と比べて，抽象度が相対的に低い.

(44) Ma main gauche est formidable. Elle retouche *un Kandinsky*. (*Trois carrés rouges sur fond noir*, p.169)

(45) As-tu lu *Marcel Proust* ? (Eric-Emmanuel Schmitt, *La rêveuse d'Ostende*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.202)

(46) Tout le monde s'excite sur *l'illisible Thomas Pynchon*. (*L'Égoïste romantique*, p.99)

(47) Je n'aime pas *Spinoza* ! (Amélie Nothomb, *Cosmétique de l'ennemi*, Collection Le Livre de Poche, 2001, p.85)

たとえば，メトニミである (44) の un Kandinsky (Kandinsky の作品) には，名詞限定辞による限定がある．一方，同じくメトニミである (45) の Marcel Proust (Marcel Proust の作品) には名詞限定辞の限定がない．したがって，名詞限定辞によって普通名詞化した (44) の Kandinsky の抽象度は，名詞限定辞をともなわない (45) の Marcel Proust の抽象度よりも相対的に低いということになる．同様に (46) の Thomas Pynchon (Thomas Pynchon の作品) の抽象度は，(47) の Spinoza (Spinoza の作品) の抽象度よりも低いと推論してよい.

5. まとめ

人物名という固有名詞クラスの記号素は，メトニミやメタファであるかないか，名詞限定辞による限定があるかないかによって，実現形が示す「抽象度」に段階性がある.

(48) Je n'ai jamais lu *Kundera*. (*Je reviens te chercher*, p.178)

(49) Abandonner un livre en cours de lecture ? Et *un Kundera* en plus ! (Internet)

(50) L'art du roman, *Kundera*, ça le connaît. (*Elle*, 25 avril 2005, p.52)

(51) D'abord, parce qu'il en a écrit plus d'une dizaine ; ensuite, parce qu'il en a même fait le titre de son essai le plus connu, faisant subitement surgir derrière *le Kundera romancier un Kundera analyste décidément brillant*. (*Elle*, 25 avril 2005, p.52)

メトニミやメタファとしての人物名は，通常の人物名よりも抽象度が相対的に高い．メトニミやメタファでは，人物名の通常の使用にとって前提とされるような区別が解消するからである．(48) や (49) の Kundera がメトニミとして成立するのは，「Kundera 本人」と「Kundera の作品」の区別が解消するからに他ならない．「Kundera 本人」と「Kundera の作品」の区別が解消した結果，あとに残ったのが共通部分の Kundera である．(48) や (49) の Kundera は，「Kundera 本人」と「Kundera の作品」の共通部分としての Kundera なのである.

名詞限定辞によって限定された人物名は，普通名詞クラスの記号素に接近するため，名詞限定辞をともなわない人物名と比べて，抽象度が相対的に低い．一般に，普通名詞クラスの記号素は固有名詞クラスの記号素よりも抽象度が低いからである.

以上の考察から，(48) から (51) の Kundera が示す抽象度に段階があることが分かる．メトニミである (48) と (49) の Kundera は，特定の人物を表す (50) の Kundera よりも，抽象度が相対的に高い．また，名詞限定辞をともなわない (48) の Kundera は，名詞限定辞による限定がある (49) の Kundera と比べて, 抽象度が相対的に高い. 同様に, 名詞限定辞の限定がない (50) の Kundera は，それがある (51) の Kundra よりも，抽象度が相対的に高い．これらの人物名のなかで，最も抽象度が高いのは (48) の Kundera であり，逆に最も抽象度が低いのは (51) の Kundera ということになる．

参考文献

Akamatsu, T. (1988), *The Theory of Neutralization and the Archiphoneme in Functional Phonology*, Amsterdam, John Benjamins.

川口順二 (1998)「動物名から道具名へ ― メトニミ・メタファ・意味の変化 ― 」『藝文研究』75 (慶應義塾大学), 254-269.

― (1999)「再び動物の名前をめぐって」『藝文研究』77 (慶應義塾大学), 109-123.

― (2011)「固有名詞をめぐって」『藝文研究』101-2 (慶應義塾大学), 1-16.

Kawashima, K. (2010), “Neutralisation en japonais. Une application de la théorie d’André Martinet au Japon”, Klein, J.R. et F. Thyrion (eds), *Les études françaises au Japon. Tradition et renouveau*, Louvain-la-Neuve, Presses Universitaires de Louvain, 119-126.

川島浩一郎 (2010a)「定冠詞と人の名前について」『ふらんぼー』35 (東京外国語大学フランス語研究室), 1-18.

― (2010b)「X (c')est X 型トートロジーとことばの遊び」『フランス語学研究』44 (別冊), 日本フランス語学会，39-56.

― (2011)「形容詞の相対最上級における冠詞 ― 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 ―」『福岡大学人文論叢』43-2, 445-457.

― (近刊予定)「定冠詞の諸用法の成立基盤 ― 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 ― 」『フランス語をとらえる　フランス語学の諸問題 IV』三修社，183-198.

Martinet, A. (1968), “Neutralisation et syncrétisme”, *La Linguistique* 4-1, 1-20.

「発話者」から「トーン」へ
論証的ポリフォニー理論の可能性

喜田浩平
慶應義塾大学

はじめに

Marion Carel（以下 M.C.）は Ducrot (1984)が提唱するポリフォニー理論 ― これを「古典的ポリフォニー理論」と呼ぶことにする ― を批判的に継承し，Carel (2008)(2010)(2011)などで「論証的ポリフォニー理論」（théorie argumentative de la polyphonie，以下 TAP）と呼ばれる新しい枠組みを提示した．TAP は，「発言主体 sujet parlant」と「話者 locuteur」の区別や，一つの発話の意味の中に複数の内容が存在し得るという仮説など，最も基本的なアイデアは古典的ポリフォニー理論から受け継いでいる．その一方で，M.C.は古典的ポリフォニー理論の「発話者 énonciateur」の概念を激しく批判し，それを「トーン ton」（口調，声色）という独自の概念で置き換えようとしている[1].

以下は，このトーンの概念を巡る覚え書きである．まず，この概念が導入されるようになった経緯を素描する．そして日本語の分析に応用し，問題点を指摘することで，概念の有効性を測ってみたい.

1. 事象

問題となる 2 つの事象を紹介しよう．いずれも，Carel (2011)の論述を参考にしながらも，この段階ではできるだけ理論的な枠組みに依存しない形で提示してみたい.

1.1 il paraît que P

まず注目すべきは il paraît que P の発話と単独の P の発話の意味の違いである[2]．両者とも，後続の談話やテクストでどのように展開することができるかという観点から見ると，同じような振る舞いを見せる.

---

[1] トーンの概念についてのモノグラフとしては，Lescano (2009)を参照されたい．なお，同じ概念を論じながらも，術語がまだ統一されていない点に注意が必要である．M.C.はトーンのことを「人称 Personne」と呼ぶこともある（その場合，いわゆる「人称」と区別するために，フランス語では語頭に大文字を用いる）．また，Ducrot (2010)は発話の意味内容の「存在様態 mode de présence」というような捉え方をしている.

[2] ここでは il paraît que P を成句表現のように扱い，動詞 paraître の様々な意味や用法の中に位置づけることはしない．このような試みの優れた研究としては渡邊 (2004)がある．また Bourdin (1986)，Thuillier (2004)も参照されたい．また，ここでは論じない il paraît que P の統語的側面については Kawaguchi & Koishi (1990)に極めて詳細な記述がある.

(1) Il va faire beau. Nous devrions sortir.

(2) Il paraît qu'il va faire beau. Nous devrions sortir.

(1)も(2)も，「天気がよくなる」という内容が起点となって，後続の「出掛けてはどうか」という内容が導かれている．このような共通点がある限りにおいて，両者は区別ができない．

では il paraît que P と P は何が違うのだろうか．一見すると，il paraît que P では発話の話者とは異なる特定の情報源が存在するのに対し，P にはそのような情報源が存在しない，と考えれば十分であるかのように思われる．ところが，このアイデアはうまくいかない．というのも，il paraît que P にはそのような意味での特定の情報源は存在しないからである．この点を以下の例で確認しよう．

(3) *Il y a toujours des optimistes : ainsi, il paraît qu'il va faire beau.

前半は optimistes の存在を言明している．後半で期待される解釈は，il va faire beau と発言した特定の情報源が存在し，それが optimiste である，というものである．しかし後半の発話はそのような特定の情報源の存在を意味しないため，全体として齟齬が生じるのである．なお，il paraît que P としばしば同義と見なされる on dit que P（あるいは on a dit que P）には，特定の情報源が存在する．

(4) Il y a toujours des optimistes : ainsi, on m'a dit qu'il va faire beau.

また，il paraît que P には特定の情報源が存在しないという点は次のような例でも確認できる．

(5) D'après Marie, il paraît que Pierre viendra.

(6) Il paraît que Pierre viendra. C'est ce que Marie m'a dit.

いずれも，Marie が Pierre viendra と発言し，話者がそれを il paraît que によって報告する，と解釈するならば極めて不自然である．つまり Marie のような特定の個体を情報源とみなすことはできないのである．ただし，やや強引なやり方で整合性のある解釈を求めるならば，「Marie 自身が il paraît que Pierre viendra と発言した」と読むことは可能である．また，(6)について，何らかの接続表現を差し挟むなら，Pierre viendra の発言を Marie に帰することは可能である．

(7) Il paraît que Pierre viendra. { En tout cas / Enfin }, c'est ce que Marie m'a dit.

1.2 X dit que P

X dit que P という発話には大別して二つの用法が認められる．一つ目の用法は，X dit que P という発話の内容の全体が後続の談話やテキストの展開の対象となるものである．この用法を M.C.は「属性的 attributif」と呼ぶ．以下の例でこの点を確認してみよう．

(8) Marie dit que tous les gens du coin sont partis au feu d'artifice avec des bottes jaunes.

この発話が属性的に解釈される場合，例えば elle le croit vraiment, elle est très bizarre ces temps-ci と続けることができる．ここで重要なのは Marie がしかじかのことを言う，という点である．なお，X dit que P が属性的に解釈される場合，ne ... pas で否定することができる．

もう一つの用法は，P の内容のみが後続の談話やテクストの展開の対象となるものである．この用法を M.C.は「様相的 modal」と呼ぶ． (8)が様相的に解釈された場合，例えば mettons nos bottes nous aussi のように続けることができる．なお，様相的用法の X dit que P は ne ... pas で否定することができない．

さて，ここで注目したいのは，様相的用法である．この場合，P の内容のみが問題になるため，X dit que P（様相的）と単独の P という発話と区別ができなくなる．ここでも，例えば「X dit que P と P の違いは，前者に X という特定の情報源が存在する点である」と記述できるように思われるかもしれない．しかしこれはせいぜい属性的用法の X dit que P には該当するかもしれないが，様相的解釈の X dit que P には該当しない．なぜなら，様相的解釈の X dit que P では P という内容を起点に後続の談話やテクストが展開するため，この内容に「X は発話者である」とか「X は情報源である」という要素は含まれないからである[3]．

2. TAP

以上のような観察データを説明し，予測するために考案されたのが TAP である．以下，その概要を粗描してみる．なお，発話の意味内容を表記するために [ ] というカッコを用いることにする．

まず TAP は，話者が発話の中の様々な内容に対して特定の「態度 attitude」を取る，と仮定する．ただしこの概念は心理的なものではないし，いわゆるモダリティや言語行為とも関係ない．話者が内容に何らかの談話的・テクスト的役割を与えることを「態度」と呼ぶのである．現在のところ，「主張する poser」，「同意する donner son accord (à)」，「排除する exclure」という三種類の態度が区別されている．まず話者がある内容を主張するとは，その内容を後続の談話やテクストで展開できるものとして提示することである．Il fait beau という発話の話者が Allons nous promener と続けた場合，この話者は内容 [il fait beau] を主張した，と言える．発話の中に複数の意味内容を区別できる場合，その一つだけを主張することもある．例えば，いわゆる「前提 présupposition」に関わる現象を見てみよう．Pierre a cessé de fumer という発話には，[Pierre ne fume plus] と [Pierre fumait] という二つの内容を区別することができるが，話者が主張するのは前者のみである．

発話の中の意味内容が後続の談話やテクストで展開できない場合，話者はその内容に「同意」する．この意味で，いわゆる「前提」はすべて同意される内容である．しかし同意される内容はこれにとどまらない．Carel (2011)によると，C’est difficile, même impossible の話者は[c’est

[3] M.C.は X dit que P の様相的用法に関して，さらに二つの下位区分を提案する．X が内容[P]を相対化し，「X によれば P」「X の観点から言えば P」と解釈できるようなケースと，X が[P]に全く関与しないケースである．ここでは後者のみを議論の対象とする．

difficile]に同意し，[c'est impossible]を主張する．一方，C'est difficile, voire impossible の話者は，[c'est difficile] を主張し，[c'est impossible] に同意する．

最後に, 話者が排除する内容とは, 否定的発話の中で否定の対象となる内容である. Pierre n'est pas là の話者は，[Pierre est là] を排除する．

次に重要なのが,「トーン」の概念である．トーンとは，発話の話者が特定の内容を提示する際の，提示の仕方のことである．いくつかのトーンが区別される．まず，話者自身が自分の考案したものとして内容を提示する場合の「話者」のトーン．特に，Je trouve que P という発話の話者は，[P]を話者のトーンで提示すると言える．また,「世界」のトーンもある．これは，すでに確立された事実に対応するものとして内容を提示する場合のトーンである.「世界」のトーンは，歴史的叙述や科学的論述で頻繁に用いられる．日常的な言語の使用でも，何らかの内容を独善的に断定し，c'est comme ça, rien à faire と続ける話者は，世界のトーンを用いていると言える．そして「他者」のトーン．話者がある内容を自分が考案したものではなく，他者から受け取ったものとして提示する．ただし，その他者が誰なのか，どのような存在であるのか，ということは問題にならない．この意味で他者のトーンは，情報源の第三者として定義される古典的ポリフォニー理論の「発話者」とは異質のものである[4].

TAP の概要が明らかになったところで，当初の問題に戻ろう．まず il paraît que P と P であるが，両者とも話者が[P]を主張するという点で共通している．では，その違いはどう考えたらいいだろうか．古典的ポリフォニー理論の「発話者」の概念は不的確である．というのも，これは「情報源」としての特定の存在のことであるが，上で観察したデータを適切に説明できないからである．M.C.は il paraît que P と P の違いをトーンの概念で記述する．単独の P という発話は，これだけではどのようなトーンが用いられているのか特定できない．デフォルトでは話者のトーンの可能性が高いが，その他のトーンの可能性も排除されない．一方，il paraît que P は他者のトーンで [P] を提示することに特化された表現と特徴づけることができる．

では次に X dit que P を見てみよう．まず属性的用法様と相的用法を「態度」の概念で再定義しておこう．X dit que P の属性的用法とは，話者が内容 [X a la propriété de dire que P] を主張するものである．一方，様相的用法とは，話者が [P] を主張するものである．

そして問題は，様相的用法の X dit que P と単独の P が区別できないことであったが，ここでも発話者の概念は不的確で，トーンの概念が有効である．すなわち，様相的用法の X dit que P の話者は，内容 [P] を他者のトーンで提示しつつ，主張しているのである．

しかしそうすると，今度は新たな問題が生じる．すなわち，X dit que P（様相的）と il paraît que P の区別がつかなくなるのである．この問題は，前者の意味に別の側面を仮定することで解決

[4] トーンにはこれ以外に「対話相手」のトーン，「目撃者」のトーンなどが仮定されているが，ここでは論じない.

する．すなわち，X dit que P（様相的）の話者は，[X a la propriété de dire que P] という内容に同意する，と考えるのである．「主張」のレベルでは il paraît que P と様相的用法の X dit que P は同じであるが，後者には「同意」のレベルがあり，この点で両者が区別されるのである．なお，この考え方では，X は（同意された）内容の一部であり，古典的ポリフォニー理論の発話者とは無関係である．

3. 日本語への応用

日本語の「そうだ」および「と言った」を観察し，TAP の枠組みで記述してみる．いずれも，フランス語の X dit que P の二つの用法に似たものを持っていることが確認できる．しかしこのままでは両者の違いを説明できないので，解決策を提案する．

まず日本語の伝聞の形式の代表である「そうだ」を取り上げる[5]．「そうだ」には，情報源を「〜によれば」あるいはそれに類する形式で明示する用法と，そうではない用法があるが，前者に議論を限定する．

「X によれば，P そうだ」には二つの用法を区別できる．まず一つ目は，「X が P と言った」という内容を起点に後続の談話やテクストが展開するものである．

(9)　太郎によれば，コーヒーをたくさん飲むと痩せるそうだ．頭がおかしくなったのではないだろうか．

後半で「頭がおかしくなった」と言われるのはもちろん太郎である．そして，なぜそのように言えるかというと，「コーヒーをたくさん飲むと痩せる」と言ったからである．つまり，後半の展開は，前半の内容の全体，すなわち「太郎が…と言った」を起点にしているのである．

次に，「X によれば，P そうだ」の二つ目の用法では，後続の談話やテクストが内容「P」のみを起点に展開する．

(10)　太郎によれば，コーヒーをたくさん飲むと痩せるそうだ．早速やってみよう．

ここでは，「コーヒーをたくさん飲むと痩せる」という内容だけが起点となり，後半が展開している．誰がそれを言ったのか，いわんやそれが太郎であるのかどうか，ということは問題にならない．

次に，「と言った」を見てみよう．「X が P と言った」という形式の発話でも，後続の談話やテクストの展開の起点が，「X が P と言った」であるケースと，「P」のみであるケースが確認できる．

(11)　太郎が，コーヒーをたくさん飲むと痩せると言った．頭がおかしくなったのでは

---

[5] 「伝聞」の諸形式の一般的特徴，および特に「そうだ」の個別的性質については澤西 (2002)，寺村 (1979)(1984)，中畠 (1992)，仁田 (1992)(2000)，日本語記述文法研究会［編］(2003)，益岡・田窪 (1992)，森山 (1989)参照．いずれの研究においても，本稿で論じるような問題を議論したものは見あたらない．

ないだろうか.

(12)　太郎が，コーヒーをたくさん飲むと痩せると言った．早速やってみよう.

以上の観察に基づいて，「X によれば，P そうだ」と「X が P と言った」を TAP の枠組みで記述してみよう．いずれの発話でも，まず話者が内容[X が P と言った]を主張する用法と，内容[P]のみを主張する用法を区別することができる. そして後者において話者は[P]を他者のトーンで主張する．また同じくこの用法では，話者は内容[X が P と言った]に同意する．こう考えると，結局「X によれば，P そうだ」も「X が P と言った」もフランス語の X dit que P の二つの用法，すなわち属性的用法と様相的用法に対応する用法を持つと言っていいだろう.

しかしここで疑問が生じる.「そうだ」と「と言った」は同じ二つの用法を持つ以上，区別ができないのではないか．この問題に対処するために，一方の用法で主張され，他方の用法で同意される内容[X が P と言った]を精査してみよう.「X によると，P そうだ」と「X が P と言った」の違いを仔細に観察してみると，それは X の実際の発言と P の類似度の違いとして現れることがわかる.

(13)　太郎によれば，コーヒーをたくさん飲むと痩せるそうだ．ただしこの通りの言い方をしたわけではないが.

(14)　?太郎が，コーヒーをたくさん飲むと痩せると言った．ただしこの通りの言い方をしたわけではないが.

X の実際の発言は P_0 であるとしよう.「X によれば，P そうだ」と言うにしても，「X が P と言った」と言うにしても，P_0 と P が形式的に一字一句同じであるということはむしろ稀で，何らかの加工が施されるのが普通である[6]．しかし，「そうだ」の場合は P_0 と P の内容が一致していれば十分であるが[7]，「と言った」の場合は内容だけではなく形式も類似している必要がある[8]. (13)と(14)の例では，例えば太郎の実際の発言が「コーヒーはダイエットにいいんだよ」であったと仮定すれば，それぞれの容認度の違いがわかりやすいであろう.「コーヒーはダイエットにいいんだよ」と「コーヒーをたくさん飲むと痩せる」は，内容的には近いが，形式的には同一ではない.

この観察が正しいならば，「主張」のレベルであろうが「同意」のレベルであろうが，「X によれば, P そうだ」の話者が対象とする内容は[X が P と同じ内容のことを言った]である. 一方，「X が P と言った」の話者が扱う内容は [X が P と同じ内容で形式も似ていることを言った]である.

---

[6] 寺村 (1984)，益岡・田窪 (1992)は，実際の発言を報告する場合の様々な変換について触れている．なお，「X が「P」と言った」という直接的な引用の場合は，P_0 と P の形式的類似性の制約はさらに強くなるのは言うまでもない.

[7] この点は Watanabe (2012)が多くの実例に基づいて論証している.

[8] このような意味での「類似性」の問題は，Sperber & Wilson (1995)が「描写 description」と「解釈 interpretation」の問題として示唆に富む議論を展開している.

結論にかえて

TAP の「態度」や「トーン」の概念によって，フランス語の il paraît que P や X dit que P，日本語の「そうだ」や「と言った」を記述する試みを概観した．TAP の理論的妥当性を高めるためには，さらに多くの事象によってそれを検証する必要があるのは言うまでもない．日本語であれば，例えば伝聞と推量の用法を持つとされる「らしい」を TAP の観点から分析すると興味深いであろう[9]．さらに，TAP が「伝聞」「報告」「引用」などについて一般的に論じるための理論的枠組みを提供することが期待される[10].

参考文献

Bourdin, Ph. (1986) “"sembler" et "paraître", ou les deux visages de l’apparence”, *Semantikos*, 10, 1-2, 45-67.

Carel, M. (2008) “Polyphonie et argumentation”. In M. Birkelund et al. (eds.), *L’énonciation dans tous ses états. Mélanges offerts à Henning Nølke.* Bern, Peter Lang, 29-46.

Carel, M. (2010) “Note sur la présupposition”. In Marion Colas-Blaise et al. (eds.), *La question polyphonique ou dialogique en sciences du langage. Actes du colloque Metz-Luxembourg 2008*. Université Paul Verlaine - Metz, 157-174.

Carel, M. (2011) *L’Entrelacement argumentatif*. Paris, Honoré Champion.

Carel, M. & O. Ducrot. (2009). “Mise au point sur la polyphonie”, *Langue française*, 164, 33-43.

Ducrot, O. (1984) *Le dire et le dit*, Paris, Éditions de Minuit.

Ducrot, O. (2010) “Ironie et négation”, V.Atayan et U. Wienen (ed.), *Ironie et un peu plus*, Bern, Peter Lang, 169-181.

Kawaguchi, J. & A. Koishi (1990) “À propos de "il paraît que" : Approche contrastive français-anglais-espagnol-japonais”, *Equinoxe*,5, 47-78.

Lescano, A. (2009) “Pour une étude du ton”, *Langue française*, 164, 45-60.

Sperber, D. & D. Wilson. (1995) *Relevance: communication and cognition*. 2nd ed. Oxford: Blackwell.

Thuillier, F. (2004) “Le verbe *paraître* : surgissement, manifestation, impression, ouï-dire”, *Linx*, 50, 15-32.

Watanabe, J. (2012), “L’auxiliaire *sooda* est-il un marqueur de l’ouï-dire ?”, Aoki, S., Dhorne, F. & D.

[9] 「らしい」については，上で伝聞形式一般および「だろう」についての研究として言及したものの多くが扱っている．また，紙谷 (1995)，菊地 (2000)，田野村 (1991)，中畠 (1990)，早津 (1988)，三宅 (1994)が参考になる．

[10] 川口 (1988)で提起された問題に関して，少し前進したと言えるだろうか.

Lebaud (eds.), *Conflits et Interprétations*, la revue électronique *Inter Faculty*, 3, pp.228-240. (https://journal.hass.tsukuba.ac.jp/interfaculty/article/viewFile/49/125)

紙谷栄治 (1995)「助動詞「ようだ」「らしい」について」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集　日本語の研究』東京，明治書院，549-573.

川口順二 (1988)「報告文について」『藝文研究』53（慶應義塾大学），p.99-112.

菊地康人 (2000)「「ようだ」と「らしい」 ― 「そうだ」「だろう」との比較も含めて ―」『国語学』51-1，46-60.

澤西稔子 (2002)「伝聞における判断性，及びその特性 ― 「そうだ」「らしい」「とのことだ」「ということだ」「と聞く」の談話表現を中心に ― 」『日本語・日本文化』28（大阪大学），29-49.

田野村忠温 (1991)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10（京都大学），62-78.

寺村秀夫 (1979)「ムードの形式と意味(1) ― 概言的報道の表現　―」『文藝言語研究　言語篇』4（筑波大学），67-89.

寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』東京，くろしお出版.

中畠孝幸 (1990)「不確かな判断 ― ラシイとヨウダ ―」『三重大学日本語学文学』1，25-33.

中畠孝幸 (1992)「不確かな伝達 ― ソウダとラシイ ―」『三重大学日本語学文学』3，15-24.

仁田義雄 (1992)「判断から発話・伝達へ ― 伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77，1-13.

仁田義雄 (2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3　モダリティ』[第 2 章]，東京，岩波書店，79-159.

日本語記述文法研究会（編）(2003)『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』東京，くろしお出版.

早津恵美子 (1988)「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7-4，46-61.

益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法（改訂版）』東京，くろしお出版.

三宅知宏 (1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『國語國文』63-11（京都大学），20-34.

森山卓郎 (1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』東京，くろしお出版.

渡邊淳也 (2004)『フランス語における証拠性の意味論』，東京，早美出版社.

Émile Benveniste lecteur des penseurs antiques

sur *Noms d'agent et noms d'action,* pp. 166-167 et *Catégories de pensée et catégories de langue*

Maejima Kazuya
Université Keio

Dès ses premières publications, Émile Benveniste n'hésitait pas à proférer sa prédilection pour la vieille métaphysique. Ainsi, la préface à ses *Origines de la formation des noms* (Benveniste 1935) finit en ces termes : «Notre tentative est à juger d'ensemble et c'est comme un tout qu'elle pourrait éventuellement se justifier, s'il était permis d'invoquer à son bénéfice le principe de Hegel : «Das Wahre ist das Ganze[1]». Nous nous demandons si chez lui la linguistique n'était pas indissolublement liée à une philosophie du langage, ou, du moins, si ses investigations linguistiques n'étaient pas menées dans le cadre d'une étude globale sur les langues et le langage. Sans doute, l'intérêt qu'il ne cesse de porter aux penseurs grecs, Platon et Aristote entre autres, nous paraît corroborer notre impression[2].

***

À la fin de ses *Noms d'agent*, Benveniste évoque un exemple de Platon, *Sophistes* 249d, à titre du premier emploi de *ἀκίνητος*, qui remplacerait une flexion de parfait passif **ἀκεκινημένος* :

> "Si... nous cherchons le point de départ et la raison de ce foisonnement des adjectifs en *–to-* du grec, nous nous trouvons ramenés... devant l'exemple, si frappant à première vue, du *Sophiste*: *ὅσα ἀκίνητα καὶ κεκινημένα.* La relation des deux formes n'est pas univoque. On pourrait penser que le participe *κεκινημένα* aurait été substitué à un *κινητά* impossible en tant que simple. Mais *κινητός* existe et chez Platon même: *εἰκῶ δ'ἐπινοεῖ* κινητόν *τινα αἰῶνος ποιῆσαι*[3] "il imagine de fabriquer une sorte d'image mobile de l'éternité." Ce n'est donc pas une déficience du vocabulaire, mais bien un choix délibéré qui a fait préférer ici le participe; *κεκινημένα* est donc la forme normale, et c'est

[1] G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes,* Vorrede.
[2] Dans ses derniers cours au Collège de France, le linguiste s'interroge toujours sur le statut de la langue écrite dans la pensée de Platon (Benveniste (2012), p. 119 et p. 125)
[3] Platon, *Timaeus,* 37 d.

> *ἀκίνητα* qui demande explication. La raison de l'emploi se laisse découvrir aisément: *ἀκίνητα* remplace une forme négative **ἀ-κεκινημένα* qui était exclue. Le fait que les participes grecs échappent à la composition obligeait de recourir à une forme supplétive quand on voulait donner au participe une forme négative. Là est, selon toute apparence, le point où la composition s'est amorcée: dans les composés négatifs en *-τος,* du type de *ἄμβροτος, ἄφατος,* qui procèdent eux-mêmes des formes négatives en *-τ-* telles que *ἀγνώς, ἀδμής*." (Benveniste (1948), p. 166)

Nous observons une erreur double: *ἀκίνητος*, déjà attesté chez Parménide et Empédocle, ne peut constituer chez Platon le point de départ du développement des adjectifs en *-τος* en forme négative; la forme **ἀκεκινημένος* ne peut exister pour une raison qu'il ne vaut même pas la peine de préciser.

L'exemple de Platon avait été évoqué par Meillet dans l'article cité par Benveniste (p. 164 et p. 166). Mais il ne soutient nullement que c'est le "point de départ" de l'expansion de l'adjectif verbal en *-τος* :

> "Le principe est celui-ci: pour le simple, le grec recourt aux participes proprement dits, de l'aoriste ou du parfait; pour les composés, à l'adjectif en *-τος*. Ainsi Platon écrit, *Soph*., 249d, *ὅσα ἀκίνητα καὶ κεκινημένα* "tout ce qui est immobile et tout ce qui se meut" (trad. Dies)[4]." (Meillet (1929), p. 635)

Il nous semble bien que le passage des *Noms d'agent* est un rajout rédigé à la hâte, afin de défendre sa propre théorie sur la valeur du suffixe **-to-* ("Entre le sens de l'adjectif en **-to-* et celui du participe parfait s'établit une liaison sémantique qui aide à préciser la valeur du suffixe." p. 167*)*. Relevons entre autres:

> "On pourrait penser que le participe *κεκινημένα* aurait été substitué à un *κινητά* impossible en tant que simple";

Non seulement la conjecture est exclue d'elle-même car *ἀκίνητος* est attesté avant Platon, mais on ne voit pas pourquoi l'auteur part de l'absence d'une forme **ἀκεκινημένος* qui est une pure impossiblité comme **ἀκινέω, *ἀπαιδεύω,* etc[5]. La forme *ἀκίνητος* ne peut remplacer **ἀκεκινημένος* qui n'a jamais existé au cours de l'histoire du grec ;

---

[4] Signalons que l'observation de Meillet sur le grec repose sur l'exposé de Wackernagel sur les faits indo-iraniens, comme le remarque lui-même, loc. cit.

[5] Les verbes en *ἀ-* sont tous dénominatifs: *ἀγνοέω, ἀμελέω,* κτλ.

> "Le développement de cette valeur ["possibilité passive"] tient à un de ces principes non formulés, difficilement formulables, sous-jacents à mainte catégorie sémantique et qui orientent spécifiquement, selon les "mentalités", les classifications nominales; on pourrait l'exprimer ainsi: ce qui n'a pas été fait une fois ne peut pas l'être (nous soulignons). Aussi *ἄβατος* "non franchi > infranchissable"; *ἄρρηκτος* "non brisé > infrangible"". (*loc. cit.*)

Toute la première phrase est inintelligible et la relation contextuelle obscure. En revanche, les exemples et gloses qui suivent démontrent que l'auteur fait dériver directement la valeur de l'adjectif en *-τος* de celle du parfait passif. Or *κεκινημένος* n'est pas un parfait passif, c'est une forme de *moyen*, dont le sens est rendu exactement par "qui se meut" de Dies. La dérivation sémantique "non mu > immuable" est invalidée d'ailleurs par le fait que la valeur primordiale du parfait grec est de dénoter l'état ou le mouvement du sujet avant d'acquérir tardivement la valeur de résultatif (v. p. ex. Chantraine (1953), p. 199). C'est cette valeur qui ressort ici sous la plume de Platon[6]. Entre *ἀκίνητος* ("immuable") et *κεκινημένος* ("qui est en perpétuelle variation"), il n'y a qu'un rapport d'exclusion totale.

Il faut dès lors retourner la question de Benveniste. Pourquoi Platon n'écrit pas *ἀκίνητος καὶ κινητός?* La réponse se retrouve dans un passage de l'article de Meillet que ne cite pas son élève. Ce premier écrit, *loc. cit.*, p. 636 :

> "...les participes offrent l'avantage de marquer précisément les oppositions d'aspect avec lesquelles le grec opère d'une manière si fine et si exacte.
>
> Les participes en *-θείς* [participe de l'aoriste passif], *-μένος* [participe du parfait moyen-passif] fournissaient des nuances que l'adjectif en *-τος* ne permettait pas de distinguer (nous soulignons)... Platon se sert de ces formes pour nuancer précisément sa pensée, ainsi *Soph.* 261a *φαίνεται γὰρ οὖν προβλημάτων γέμειν, ὧν ἐπειδάν τι προβάλῃ, τοῦτο πρότερον ἀναγκαῖον διαμάχεσθαι πρὶν ἐπ' αὐτὸν ἐκεῖνον ἀφικέσθαι. Νῦν γὰρ μόγις μὲν τὸ μὴ ὂν ὡς οὐκ ἔστι προβληθὲν διεπεράσαμεν, ἕτερον δὲ προβέβληται.* "Au fait, il apparaît fertile en problèmes: sitôt qu'il vous en oppose un, c'est défense qu'il faut nécessairement emporter de vive force avant que d'arriver jusqu'à lui. De celle qu'il nous opposa en niant le non-être, à peine, en effet, sommes-nous venus présentement à bout, qu'il nous en oppose une autre." (trad. Dies). On aperçoit immédiatement que *προβληθέν,* qui renvoie à *προβάλῃ,* ne saurait être remplacé par *προβεβλημένον*, et, du reste, s'oppose à *προβέβληται,* qu'il aurait mieux valu traduire "qu'un autre est déjà posé"."

---

[6] Sans doute Platon tire parti d'un proverbe *ὅσα ἀκίνητα καὶ* ὅσα *κεκινημένα,* comme le note Apelt (1922), Anm., p. 145.

L'adjectif verbal en *-τος* de formation primaire, en effet, ne saurait pas distinguer l'aspect. Dans l'exemple de Platon, nous l'avons déjà vu, *ἀκίνητος* ne remplace pas une flexion **ἀκεκινημένος* et l'adjectif *ἀκίνητος* est couplé avec *κεκινημένος* pour une raison aspectuelle: à la forme en *-τος,* indifférenciée à l'égard de l'aspect, s'oppose le participe parfait en *-μένος. ἀκίνητος* apparaît le premier en grec post-homérique, et la forme positive *κινητός* n'est attestée qu'en attique de l'époque classique, notamment chez Platon et Aristote (*E. N.* 1134b 29, 32). Il s'agit donc d'une formation régressive à partir d'une forme négative. Par ailleurs, au début du XX^e^ siècle, il était connu que l'adjectif verbal en **-to-* est productif notamment en composés, en grec et sanskrit, comme le signale Brugmann & Thumb (1900), pp. 197 et 201. Nous avons signalé plus haut que *κεκινημένος* n'est pas de sens résultatif, comme c'était le cas de *προβεβλημένον* (supra), mais il signifie "être en mouvement incessant, agité", p. ex.: *ὥστε τοῦτό γε αὐτὸ μὴ φοβώμεθα, μηδέ τις ἡμᾶς λόγος θορυβείτω δεδιττόμενος ὡς πρὸ τοῦ* κεκινημένου *τὸν σώφρονα δεῖ προαιρεῖσθαι φίλον*. (Plat. *Phdr.* 245b "Nous ne devons donc pas redouter cet état, ni nous laisser troubler par une doctrine qui veut nous faire peur et nous amener à croire qu'il faut préférer à l'amitié de l'homme passionné celle de l'homme qui est maître de soi." tr. Moreschini & Vicaire). Enfin, en assimilant (*op. cit.,* p. 164) *κεκινημένος* à *πεπαιδευμένος (*Aristt., *Rhet.* 1395b 27: *τοῦτο γὰρ αἴτιον καὶ τοῦ πιθανωτέρους εἶναι τοὺς ἀπαιδεύτους τῶν* πεπαιδευμένων *ἐν τοῖς ὄχλοις*. "C'est ainsi également que les incultes paraissent plus persuasifs que les cultivés à l'égard du peuple."*),* Benveniste se trouve témoigner de la servitude de la conception des modernes (v. "La phrase nominale," Benveniste (1966), p. 160).

***

Dix ans plus tard, Benveniste publie *Catégories de pensée et catégories de langue*[7]*,* où il soutient que le Stagirite dans ses *Categoriae* ne faisait que faire coïncider les catégories de pensée aux catégories grammaticales de sa propre langue. L'article a rencontré bien des objections de la part des philosophes tels que J. Derrida, des historiens de la philosophie à commencer par J. Vuillemin ou P. Aubenque ou encore des épistémologues comme G.-G. Granger[8]. Si peu d'auteurs ont souscrit à sa thèse, c'est que pour les philosophes, réduire le premier traité de l'*Organon* à une simple classification morphologique des mots grecs est un acte peu acceptable; pour les linguistes, un penseur de l'antiquité grecque peut bien avoir une vue erronée sur le langage avant la naissance d'une véritable grammaire avec les Denys le Trace ou les Appolonius Dyscole et la fameuse "hypothèse" de Sapir-Whorf avait déjà énoncé un déterminisme encore

[7] Publié en 1958, repris dans Benveniste (1966), pp. 63-74.
[8] Ildefonse & Lallot (2002), pp. 336-339.

plus radical que celui de Benveniste.

Mais les arguments techniques et le rapport que l'article tient avec d'autres études scientifiques de l'auteur semblent échapper aussi bien aux philosophes qu'aux linguistes. C'est le cas notamment de son analyse des catégories d'*ἔχειν* et de *κεῖσθαι*, i.e. de parfait et de moyen. Il soutient, pp. 69-70, qu'Aristote, tout en reconnaissant la spécificité du parfait moyen, l'a nommé *ἕξις*:

> "Il y a en effet, entre le parfait et le moyen grecs, diverses relations à la fois formelles et fonctionnelles, qui, héritées de l'indo-européen, ont formé un système complexe; par exemple une forme *γέγονα,* parfait actif, va de pair avec le présent moyen *γίγνομαι.* Ces relations ont créé maintes difficultés aux grammairiens grecs de l'école stoïcienne: tantôt ils ont défni le parfait comme un temps distinct, le *παρακείμενος* ou le *τέλειος;* tantôt ils l'ont rangé avec le moyen, dans la classe dite *μεσότης,* intermédiaire entre l'actif et le passif. Il est certain en tout cas que le parfait ne s'insère pas dans le système temporel du grec et reste à part, indiquant, selon le cas, un mode de la temporalité ou une manière d'être le sujet. À ce titre, on conçoit, vu le nombre de notions qui ne s'expriment en grec que sous la forme du parfait, qu'Aristote en fait un mode spécifique de l'être, l'état (ou *habitus*) du sujet."

Il s'agit, on le voit, d'une discussion proprement linguistique qui, de fait, a *peu de choses* à voir avec le rapport entre le langage et la pensée et qui, de surcroît, accomplit subrepticement, à la fin du paragraphe, le glissement d'une observation de grammaire comparée des langues indo-européennes (le rapport entre le parfait, le moyen et la conjugaison thématique (type véd. *bhárati, φέρω*) en indo-européen a suscité de vifs débats depuis le début du XX^{e} siècle auxquels les travaux du linguiste ont largement contribué) à une exégèse herméneutique d'un texte de la pensée ancienne. Qu'Aristote ait reconnu correctement la spécificité morphologique du parfait moyen du grec reste une hypothèse indémontrable: le fait est que, quand on lit le texte du Stagirite sans aucun préjugé, ce dernier a reconnu une classe à part à des *mots* – et non pas des flexions - comme *ὑποδέδεται* ou *ὥπλισται* qui dénotent l'habillement – de l'ordre de la contingence *(συμβεβηκός)* - du sujet. En un mot, il est arbitraire de défendre l'idée que l'auteur des *Catégories* identifiait ces mots de la même manière qu'un linguiste du XX^{e} siècle.

Benveniste indique à juste titre que les exemples cités de la catégorie d'*ἔχειν* ne sont autres que des parfaits (et non pas *avoir,* c'est-à-dire la possession) et ceux de *κεῖσθαι*, moyens (et nullement la posture ou telle position du corps) car dire que *ἔχειν* et *κεῖσθαι* correspondent à *avoir* et *posture*, comme l'ont fait les interprètes successifs du traité depuis l'antiquité, n'a pas de sens si ce n'est tautologie. Si toutefois il soutient que l'auteur des *Catégories* établit un nombre arrêté de catégories grammaticales du grec qu'il

identifierait "inconsciemment" à des catégories de pensée qui ne peuvent être qu'universelles (Benveniste (1966), p. 65 et p. 70), Aristote ne dit nullement que les catégories qu'il repère relèvent de la pensée universelle et il ne confond pas, loin de là, les deux niveaux d'analyse ou de réflexions, la pensée et la langue, comme le montre explicitement, entre autres, le passage suivant des *Sophistici elenchi* 4, 166b 10 sqq. :

> "Les arguments qui dépendent de la forme de l'expression (*τὸ σχῆμα τῆς λέξεως*) arrivent lorsque ce qui n'est pas le même est exprimé de la même façon; par exemple, un masculin est exprimé comme féminin, ou un féminin comme masculin, ou un neutre comme l'un d'eux; ou encore, un qualifié (*ποιός*) comme un quantifié (*ποσός*) ou un quantifié comme un qualifié, ou un agent (*ποιοῦν*) comme un patient (*πάσχον)*, ou un disposé (*διακείμενον*) comme un agent, et ainsi de suite, comme on a divisé précédemment. Il est en effet possible que ce qui ne compte pas parmi les *agir* (*ποιεῖν*) siginifie qu'il compte parmi eux. Par exemple, "être en bonne santé" *(ὑγιαίνειν)* se dit, du point de vue de la forme de l'expression, de la même manière que "couper" *(τέμνειν)* ou "construire" *(οἰκοδομεῖν).* Et pourtant l'un désigne un qualifié *(ποιός)* et d'une certaine manière un disposé *(διακείμενον),* tandis que les autres désignent un agir. Il en va de même pour les autres cas[9]." (cité dans Ildefonse & Lallot (2002), pp. 45 sq.)

Ce passage, que F. A. Trendelenburg (1846) avait relevé pour illustrer la récusation énoncée par Aristote lui-même du paralogisme fondé sur la confusion entre la forme et le sens[10], est souvent allégué à titre de contre-argument pour réfuter la thèse de Benveniste. Si en effet la forme de *ὑγιαίνειν* est la même que celles de *τέμνειν* ou de *οἰκοδομεῖν,* tandis que son sens est d'ordre de *ποιός* (qualité) ou de *διακείμενον* (disposition ou condition), la flexion en *-ειν* ne désigne pas uniformément la catégorie de *ποιεῖν* (diathèse de l'actif ou la *flexion* active), mais elle correspond en certains cas à celle, cette fois *sémantique*, de *ποιός*. Mais sans chercher ailleurs, nous trouvons dans le même traité des *Catégories* (8, 10b 3-5) un passage similaire :

> *"πυκτικὴ γὰρ ἐπιστήμη λέγεται καὶ παλαιστρική, ποιοὶ δὲ ἀπὸ τούτων παρωνύμως οἱ διακείμενοι λέγονται.* ("on dit "l'art du pugilat" et "l'art de la lutte"; on désigne d'autre part de manière

[9] *Οἱ δὲ παρὰ τὸ σχῆμα τῆς λέξεως συμβαίνουσιν ὅταν τὸ μὴ ταὐτὸ ὡσαύτως ἑρμηνεύηται, οἷον τὸ ἄρρεν θῆλυ ἢ τὸ θῆλυ ἄρρεν ἢ τὸ μεταξὺ θάτερον τούτων, ἢ πάλιν τὸ ποιὸν ποσὸν ἢ τὸ ποσὸν ποιόν, ἢ τὸ ποιοῦν πάσχον ἢ τὸ διακείμενον ποιοῦν, καὶ τἆλλα δ' ὡς διῄρηται πρότερον· ἔστι γὰρ τὸ μὴ τῶν ποιεῖν ὂν ὡς τῶν ποιεῖν τι τῇ λέξει σημαίνειν. Οἷον τὸ ὑγιαίνειν ὁμοίως τῷ σχήματι τῆς λέξεως λέγεται τῷ τέμνειν ἢ οἰκοδομεῖν· καίτοι τὸ μὲν ποιόν τι καὶ διακείμενόν πως δηλοῖ, τὸ δὲ ποιεῖν τι. Τὸν αὐτὸν δὲ τρόπον καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων.*

[10] v. Ildefonse & Lallot (2002), p. 333.

> paronymique[11], à partir de ces expressions, ceux qui sont [ainsi] disposés")." (v. Ildefonse & Lallot (2002), p. 109)

En d'autres termes, "de la boxe" ou "de la lutte" sont des qualificatifs (*ποιότητες*) *dont* dérivent les désignations de ceux qui sont ainsi disposés *(πυκτικοί, παλαιστρικοί)*. Aristote admet la dérivation de *ποιός* en termes de *διακείμενος* qui n'est nulle part choisi comme le nom d'une catégorie, ne fût-ce que pour éviter un chevauchement ou une complication supplémentaire: *πυκτικός* et *παλαιστρικός* font partie des *ποιότητες (πυκτικὴ ἐπιστήμη, παλαιστρικὴ ἐπιστήμη)*, mais ils désignent des qualités (disposition acquise, par opposition à *δύναμις φυσική*, aptitude innée, 10a 35) dans *ὁ πυκτικός* ou *ὁ παλαιστρικός*.

Citons encore un autre passage (*Cat.* 8, 8b 27):

> *"Εν δὲ οὖν εἶδος ποιότητος ἕξις καὶ διάθεσις λεγέσθωσαν. Διαφέρει δὲ ἕξις διαθέσεως τῷ μονιμώτερον καὶ πολυχρονιώτερον εἶναι.* ("disons qu'habitus et disposition [constituent] une espèce de la qualité. Toutefois, un habitus diffère d'une disposition en ce qu'il est plus stable et durable.") (*op. cit*. p. 99)

Aristote semble reconnaître ici que *ποιός* inclut *ἔχειν* et *κεῖσθαι,* mais l'interprétation de ce passage peut être équivoque car il met au lieu des formes verbales les formes nominales *ἕξις, διάθεσις*[12]. De toute manière, les catégories du texte appelé sous ce nom admettent la dérivation et l'inclusion entre elles[13].

Si dès lors Benveniste prétend qu'Aristote n'entend par les catégories appelées *ἔχειν* et *κεῖσθαι* que les formes grammaticales du parfait (moyen) et du (présent) moyen, son tort est évidence, car *ἔχειν* désigne au moins dans le chapitre 4 qu'il examine, un état momentané et extérieur du corps (*être chaussé, armé*)[14], et par *κεῖσθαι,* un état du corps lui-même, qui peut être également momentané quand il s'agit du corps humain (*être couché, assis*). On sait d'ailleurs que la terminologie d'Aristote dans ce traité est pour nous lecteurs modernes d'une redoutable instabilité.

Sans doute, l'intérêt de Benveniste en tant que lecteur de la littérature grecque n'était pas de suivre la pensée des auteurs. Dans la deuxième moitié de l'article sur les *Catégories*, il insiste sur la spécificité de l'être dans le monde occidental, dont le Stagirite a d'entrée de jeu posé la pierre de fondement en élaborant,

---

[11] i.e. par dérivation.

[12] Rappelons que *ἕξις* et *διάθεσις* sont respectivement les formes nominales de *ἔχειν* et de (*δια*)*κεῖσθαι.* Pour les problèmes d'interprétation que soulèvent ces termes, v. Ildefonse & Lallot (2002), pp. 139-144.

[13] Ildefonse & Lallot (2002), pp. 162-178.

[14] v. notes complémentaires de R. Bodéüs (2001), p. 87: "D'après les exemples cités, le fait visé est celui d'avoir une tenue vestimentaire; mais d'autres choses pourraient être en cause qui tiennent, par exemple, à la mise extérieure plutôt qu'à l'habillement: avoir le sourire, avoir un air sombre, etc."

après Platon, toute une terminologie technique autour d'*εἶναι,* notamment le fameux *τὸ τί ἦν εἶναι,* "qu'est-ce qu'était être."[15] Toutefois, à en juger par le ton irrité qui nous est familier, que prend le paragraphe entier qui commence par «Mais qu'en est-il des deux premières catégories, *ἔχειν* et *κεῖσθαι*? La traduction même ne semble pas fixée: certains prennent *ἔχειν* comme "avoir",» il nous semble bien que le point de départ de l'étude est fourni par l'insatisfaction à l'égard des "interprètes," les traducteurs inclus, du texte d'Aristote: «À les en croire, le philosophe distinguait bien mal l'important de l'accessoire, il donnait même à ces deux notions (i.e. *ἔχειν* et *κεῖσθαι*) jugées secondaires la préséance sur une distinction comme celle de l'actif et le passif.» (p. 69). Benveniste a donc voulu restituer la cohérence au traité d'Aristote qui échappait à la plupart des "érudits" cités dans l'avant-propos de l'édition de Cooke, au profit de sa propre théorie linguistique.

Bibliographie

Apelt, O. (1922), *Platon, Sophistes* (*Sämtliche Dialoge,* VI,), Leipzig, F. Meiner.

Benveniste, É. (1935), *Origines de la formation des noms en indo-européen,* Paris, A. Maisonneuve.

Benveniste, É. (1948), *Noms d'agent et noms d'action en indo-européen,* Paris, A. Maisonneuve.

Benveniste, É. (1966), *Problèmes de linguistique générale,* Paris, Gallimard.

Benveniste, É. (2012), *Dernières leçons au Collège de France,* Paris, EHESS-Gallimard-Seuil.

Bodéüs, R. (2001), *Aristote, Catégories,* Paris, Les Belles Lettres.

Brugmann, K. & A. Thumb (1900), *Griechische Grammatik,* 3e Aufl., München, O. Beck.

Chantraine, P. (1953), *Grammaire homérique,* II, *Syntaxe,* Paris, Klincksieck.

Cooke, H. P. (1938), *Aristotle, Categories. On Interpretation. Prior Analytics*, Cambridge, Harvard University Press.

Ildefonse, Fr. & J. Lallot (2002), *Aristote, Catégories,* Paris, Éd. de Seuil.

Meillet, A. (1929), "Les adjectifs grecs en *-τος*", *Donum natalicium Schrijnen,* Nijmegen-Utrecht, N. V. Dekker & V. de Vegt, pp. 635-639.

Trendelenburg, F. A. (1846), *Geschichte der Kategorienlehre,* Berlin, Bethge.

[15] *τὸ τἰ ἦν εἶναι* du texte de Benveniste (1966), p. 71, comporte une faute d'accentuation.

商品名をめぐって
冠詞の使用と発話者の態度

中尾 和美
東京外国語大学

1. はじめに

たとえフランス語を知らなくとも，カフェで「ペリエ」と言えば発砲水が，「レフ」と言えばビールが出てくる．このように商品名はときに普通名詞よりも雄弁である．現代の国際語であるかのように，普通名詞の代わりを果たす商品名は，まさに固有名詞と普通名詞の間を揺れ動くような特徴を示す．はたして商品名は，他の固有名詞と比較してどのような特異性を示すのだろうか．これを明らかにするために，本稿では，冠詞の使用から商品名に焦点を当てて分析を行う．コーパスは，主として昨今薬害を起こし話題になった糖尿病治療薬 Mediator について書かれたテクストを，*Le Monde* の記事を中心に調査し，商品名を限定する冠詞と発話者の態度について分析を行う．

2. 商品名のステータス

商品名に関しては，固有名詞か普通名詞かという議論がこれまでにもなされてきている．それらの多くは，概して，普通名詞のような振る舞いを認めながらも，固有名詞としての側面も否定してはいない[1]．その際，固有名詞として引き合いに出される特徴として，大文字での表記[2]，X という名前で呼ばれる対象を指すという指示機能の特徴[3]などが挙げられている．他方，普通名詞の特徴としては，指示対象が唯一物ではなく，多くの対象を総称する名詞として機能すること[4]，また統語構造における冠詞の使用[5]があげられる．このように，商品名は固有名詞と普通名詞双方の特徴を持つことからも，商品名を普通名詞または固有名詞のどちらかに規定する試みはいきおい乱暴な議論にならざるを得ない[6]．ここでは，商品名のステータスを追求するの

---

[1] Cf. VAXELAIRE (2005).
[2] Cf. MOLINO (1982).
[3] DE MULDER (2000), PETIT (2006).
[4] PETIT (2006).
[5] Cf. MOLINO (1982), JONASSON (1994), DE MULDER (2000), VAXELAIRE (2005).
[6] DE MULDER (2000)は，車の名前は他の固有名詞と比較しても冠詞で限定されやすいと指摘するが，商品名はある名前で呼ばれる指示対象Xを常に同定することからも普通名詞ではないとしている．PETIT (2006) は指示上の二面性からも商品名は固有名詞と普通名詞双方の特徴をそなえているとしている．

ではなく，商品名を特徴づける冠詞限定について，実例とともに詳細にみてみたい.

3. 商品名と冠詞

3.1 商品名と企業名

商品名は統語構造に入ると，冠詞で限定されるのに対して，企業名には冠詞がつかない傾向があると言われる[7]. (1)の Renault と Citroën はともに企業名だが， (2) と(3)では，それぞれ商品名として使われている.

(1) Renault vient d'acheter Citroën. (JONASSON (1994), p.29)

(2) Paul vient d'acheter une Citroën. (*Idid*)

(3) Même si François Mitterrand aimait les Renault, c'est bien au volant d'une Citroën que le président quittera le palais de l'Elysée.
(http://www.linternaute.com/auto/dossier/voiture-presidents-france/3a.shtml)

JONASSON (1994)は，企業名は冠詞で限定されないがゆえに固有名詞であり，逆に冠詞限定される商品名は普通名詞であると論じ，冠詞の有無については不明な点が多いとしながらも，商品名を大文字で始まる普通名詞のひとつとして扱っている．確かに，企業名が，メトニミー的に商品名として使われる際，冠詞で限定される傾向があることからも，両者は冠詞の表れにおいて異なる法則に従っているように見受けられる．しかし，商品名は常に冠詞を必要とするというわけではない．ここでは，実際のコーパスをもとに商品名の冠詞について詳細に見てみよう.

3.2 商品名 Mediator

商品名を調べるために，フランスの製薬会社 Servier が製造販売した薬 Mediator に関する 183 の記事を 2010 年から 2011 年にかけて *Le Monde* において調査し，865 例を収集した．Mediator について簡単に説明すると, 1976 年から 2009 年まで Servier が製造販売していた糖尿病薬だが, 効能とされていた食欲を減退させる効果がないばかりか, 服用した患者のうち 500-2000 人が死亡するという深刻な薬害をおこした薬である．また，薬害のみならず，Mediator の副作用についてすでに 1995 年から Servier 自身が認識していたこと，Mediator と同じ成分を持つほかの薬が他国で禁止されたのちも Mediator の販売をフランス政府が認可し続けていたこと，前サルコ

[7] Crédit Agricole や SNCF のように普通名詞が企業名の一部を成している場合，及び L'Oréal や La Redoute のように定冠詞が商品名に当初から組み込まれている場合には，その限りではない.
a) Le Crédit Agricole vous propose des solutions adaptées à vos priorités et spécificités professionnelles, afin de gérer au mieux vos comptes. (http://www.credit-agricole.fr/professionnel/quotidien)
b) La SNCF va embaucher plus de 40 000 personnes d'ici 2017 pour faire face à de nombreux départs à la retraite et à une hausse du trafic due à l'avantage comparatif accru avec l'automobile. (Le Monde)
c) L'Oréal lance "My loreal-finance", une nouvelle appli iPhone et iPad pour les Relations Investisseurs. (http://www.loreal-finance.com/fr/actualites/my-loreal-finance-833.htm)
d) La Redoute vous adressera ses offres commerciales par mail, sms, téléphone si vous l'avez accepté et par voie postale, si vous ne vous y êtes pas opposé lors du recueil de vos données. (http://www.laredoute.fr/espace-mentions_legales.aspx)

ジ大統領に Servier が多額の寄付をしていたことなど，政治と Servier の癒着も明らかになったことから，長期にわたってマスコミを賑わした薬害スキャンダルである．

Le Monde の記事で使われていた商品名 Mediator は，736 例がなんらかの冠詞類で限定されており，それは全例の 85%にあたる．なかでも定冠詞による限定が一番多く，678 例であった．これらはすべてが定冠詞のみの限定で, 関係詞節など修飾句による限定はなかった. Le Mediator が指す対象は，薬そのもの(cf. (4), (5))，さらに薬にまつわる事件をメトニミー的に指示する場合(cf. (6))など，意味の拡張も見られる．

(4) Le Mediator a été finalement retiré du marché en 2009, mais *"ce retrait aurait pu* intervenir *dix ans plus tôt",* selon l'IGAS.(*Le Monde*) (下線は筆者による．以下同様)

(5) Dominique de Villepin, premier ministre entre 2005 et 2007, est le dernier homme politique en date à affirmer qu'il n'avait pas été informé des dangers du Mediator. (*Le Monde*)

(6) Le président-fondateur des laboratoires Servier et cinq entités juridiques de son groupe ont été mis en examen le 21 septembre dans l'enquête sur le Mediator. (*Le Monde*)

定冠詞に次いで使用頻度が高かった冠詞は, 部分冠詞で, 全部で 49 例確認できた. この場合, もっぱら薬を指し，prendre, prescrire の動詞の目的語として使われていることが多かった．このような例からも，*Le Monde* では部分冠詞の使用については商品名 Mediator が普通名詞 médicament とほぼ同じように扱われていることがわかる．

(7) Depuis de nombreuses années, j'ai pris du Mediator et ce, que jusqu'à son retrait de la vente et épuisement des stocks en ma possession, j'en prenais trois par jour. (*Le Monde*)

(8) Chaque jour nous recevons des patients inquiets, auxquels un médecin a prescrit du Mediator et qui se plaignent aujourd'hui d'essoufflement. *(Le Monde)*

不定冠詞で限定されている例は，9 例のみだったが，いずれの場合も，nouveau または autres で限定されており，Mediator と似た薬，または Mediator の薬害事件に類似した事件を指している．なお，たとえ複数形を要求す d'autres に後続する場合であっても，Mediator に複数を示す-s はつかない[8].

(9) Le ministre de la santé, Xavier Bertrand, s'est engagé à bâtir *"un nouveau système"* de contrôle des médicaments plus indépendant de l'industrie pour éviter un *"nouveau* Mediator*"*, dénonçant la responsabilité des laboratoires Servier dans ce scandale sanitaire. (*Le Monde*)

(10) Existe-il d'autres Mediator actuellement dans le circuit ? **(** *Le Monde***)**

無冠詞で使われているケースも 129 例あった．無冠詞で現れる例では，記事のタイトル

[8] 固有名詞は形態上複数形に変化しない．(Cf. JONASSON (1994), GARY-PRIEUR (2000))

(cf.(11))，複合語の修飾語(cf.(12))，名前としてメタ言語的に使われている場合(cf.(13))，前置詞 de または sous の後に使用される場合(cf.(14) (15))がみられた.

(11) Mediator : une enquête préliminaire a été ouverte à Paris (*Le Monde*)

(12) L'affaire Mediator jette l'opprobre sur toute la filière pharmaceutique. (*Le Monde*)

(13) Mais il est resté sur le marché en version industrielle, sous le nom de Mediator, ce qui est une contradiction que les enquêtes en cours devront éclaircir. (*Le Monde*)

(14) Le premier cas de valvulopathie sous Médiator est décrit en France en 1999 par le Centre de PHV de Marseille, sans que suite soit donnée. (*Le Monde*)

(15) Bien qu'il conclut à un lien de cause à effet entre la prise de Mediator et les valvulopathies, ce rapport, rendu en octobre 2009, n'a conduit ni le groupe Servier ni les autorités sanitaires à réagir immédiatement. (*Le Monde*)

名詞が前置詞 de の後におかれる場合には, 通常部分冠詞や複数不定冠詞が消失する規則がある．また，sous の後の無冠詞も普通名詞においては稀なことではないことからも，普通名詞が無冠詞で使われる場合とほぼ同じ規則が，商品名 Mediator にも適応されていることがここにみてとれる.

以上，*Le Monde* における商品名 Mediator の用例を見る限りにおいては，冠詞の使用は普通名詞のそれに準じているように推察できる．確かに，*Le Monde* 以外の新聞雑誌，またブログなどにおいても，商品名 Mediator が冠詞で限定されているケースは非常に多い.

(16) Servier a commercialisé le Mediator, Servier doit donc mettre la main à la poche pour "déterminer les conséquences dommageables qui s'en sont suivies".[9]

(17) J'ai déja arrêté le médiator[10], mais même en gardant le régime, je regrossis... [11]

(18) J'ai pris du médiator pendant plus de 10 ans pour perdre des kilos ainsi que ma mère de 87 ans et de ma sœur aînée qui a 65 ans.[12]

しかしながら，普通名詞と常に同じように冠詞が使用されるかというと，必ずしもそういうわけではない.

(19) En considérant l'ensemble de ces données, Mediator n'est pas un médicament anorexigène chez l'Homme.[13]

(20) En association à un régime adapté, Médiator constitue un traitement adjuvant : une

[9] http://www.lexpress.fr/actualite/sciences/sante/

[10] インターネット上の文章では本来存在しないアクセント記号がつけられ Médiator とされたり，小文字で mediator と書かれることが少なくない.

[11] http://www.atoute.org/dcforum/DCForumID17/211.html

[12] http://sante.journaldesfemmes.com/coeur-cardiologie/mediator/sylvie.shtml

[13] http://www.servier.fr/sites/default/files/MEDIATOR_les_faits_0.pdf

surveillance régulière clinique et biologique de chaque patient sera instaurée. [14]

(19)は，Mediator の製造，販売元である Servier のホームページから，(20)は，国立医薬品・医療用品安全管理機構 ANSM（Agence nationale de sécurité du médicament et des produits de santé)のホームページにある Mediator の仕様書から得た例だが，主語として機能する Mediator はともに無冠詞で使用されている．これはなぜだろうか.

4. 商品名と発話者の態度

4.1 定冠詞の使用

商品名に対する冠詞の使用を考える上で，他の固有名詞につけられる定冠詞と商品名 Mediator の定冠詞をまず比較してみよう．たとえば，国(la France)，地方(la Bretagne) ，河川(le Rhin)，山(les Alpes)を示す固有名詞は，地図上では無冠詞だが，文を構成する段になると，定冠詞が義務的になる[15]．GARY-PRIEUR (1994) は，これらの固有名詞の定冠詞は単に統語的な要請によるもので，発話行為からは独立した定冠詞であると論じている．またこれらの固有名詞は同名の対象がひとつしか存在しないために指示上の唯一性が保証されており，そのために定冠詞が使われていると GARY-PRIEUR (1994)は指摘する. 他方, 人名や町を示す固有名詞は, 定冠詞が名前の一部である Le Pen，La Rochelle のようなものを除けば，文に組み込まれる際に通常定冠詞を必要とはしない．従って，仮にこのような固有名詞が定冠詞で限定されるような場合には，発話行為の結果つけられる有標な冠詞となる．たとえば(21)では，定冠詞をつけることで，「かの Miss Partridge」というニュアンスが出る.

(21) A — ... c’est Miss Partridge ?
B — Quoi ? LA Miss Partridge ?
A — (...) vous connaissez Miss Partridge comme s’il s’agissait d’une star.
B — Bien sûr ! Tout le monde en parle ! (GARY-PRIEUR 1994, p.101)

はたして Mediator の定冠詞は，国名の定冠詞と同列に考えられるだろうか？それとも人名のようにニュアンスをともなった有標の定冠詞だろうか？少なくとも *Le Monde* における le Mediator の定冠詞の使用を見る限りにおいては，その高い頻度からも，またその意味からも，(21)のような特別なニュアンスを伴った有標の定冠詞であるとは考えにくい．それでは，国名の定冠詞と同じかと言うと，確かに，双方とも統語構造に入れるために定冠詞が使用されているようには見える．しかし，商品名は，国名や地方名とは決定的に異なる点がある．それは，指示の点である．国名や地方名は唯一の対象を指示し，対象の唯一性ゆえに定冠詞が使用され

[14] http://afssaps-prd.afssaps.fr/php/ecodex/notice/N0127383.htm

[15] ただし，女性名詞の国名が前置詞 en や de に後続する場合には無冠詞になるなどいくつかの例外はある.

ているが，それに対して，大量に生産される商品を指す商品名は，同じ名前 X で呼ばれる商品が無数にあり，対象の唯一性を保証するために定冠詞が使われているわけではない．そう考えると，修飾句での限定がない le Mediator の定冠詞は，むしろ普通名詞につけられる総称の定冠詞に近い．しかし，le Mediator の総称性と普通名詞の総称性は全く同質ではない．なぜならば，普通名詞の場合，たとえば L'homme est mortel における l'homme は homme と指示される対象が様々であるものの，homme1, homme2, homme3...の差異を無視して l'homme とひとくくりにして提示するのに対して，商品名 le Mediator の場合は，金太郎飴のように互いに全く差異のない商品 Mediator が複数集まってできた集合を指しているからである．このような違いはあるが，le X の形式からは，l'homme のように差異のある要素 X1, X2, X3...を同じ X とみなして le X としているのか，それとも le Mediator のように 全く同じ X, X, X...から成る集まりを le X とみなしているのかは全く判断できない．このことは，構成要素が全く同じものであろうと，要素間に多少の差異があろうと，同じように le X と提示することを許す定冠詞名詞句の幅広い許容性を示していると言い換えることもできよう．そして，この定冠詞名詞句の寛大さこそが，時として定冠詞の使用を拒むことになる．

上で見た(19)，(20)では，Mediator は無冠詞だったが，これらを定冠詞で限定することは文法的には十分可能である．にもかかわらず，発話者は，定冠詞ではなく，あえて無冠詞を選んだ．換言すれば，商品名では冠詞の有無の選択が発話者にまかされているということである．商品名を限定する定冠詞は，国名のように義務的ではなく，かつ人名のように有標でもない．それは，商品名をカテゴリーとして提示するのか，それとも名前として提示するのかという発話者の態度を示すマーカーなのである．そう考えると，Mediator が無冠詞で使われていた(19)，(20)では，発話者は，差異のある X1, X2, X3 を同じカテゴリーとして引き受ける可能性も秘めた le X の形ではなく，あくまで X という名前として Mediator を提示したかったということが窺える．2 つの例はともに製造，販売する企業によるテクストから採取されたものだが，これは偶然ではないだろう．実際，企業側が商品を紹介するテクストでは，商品名が無冠詞で使用されることが非常に多い．

4.2 商品名と無冠詞

企業側が商品を紹介するテクストにおいては，商品が無冠詞で登場していることが多い．たとえば，Danone のホームページ[16]で紹介されている商品名 Danette，Activa および Taillefine は，名称にかかわらずすべて無冠詞で登場している．

(22)　Danette est une crème dessert familiale, qui se décline en pots individuels ou familiaux.

[16] (22)は http://www.danoneetvous.com/Vos-marques/Toutes-mes-marques/Danette，(23)は http://www.danoneetvous.com/Vos-marques/Toutes-mes-marques/Activia#opentable，(24)は http://www.danoneetvous.com/Vos-marques/Toutes-mes-marques/Taillefine#opentable から採取した．

(23) Activia contient les deux ferments traditionnels du yaourt, plus un ferment probiotique exclusif : le bifidus actiRegularis

(24) Taillefine est une gamme de produits frais allégés en matières grasses et en sucre pour vous faire plaisir en toute liberté.

車の名前には，通常なんらかの冠詞がつけられることが多いものの，仕様をアピールする製造販売側のテクストや広告では，同様に無冠詞のケースが多い．(25)では 4008，(26)では Bipper，(27)では Mégane R.S.が，それぞれ車名である．

(25) 4008 est le partenaire idéal quel que soit l'environnement de conduite et les conditions d'adhérence de la route. Pour toujours plus d'évasion, ce véhicule est un véritable symbole de liberté.[17]

(26) Pour offrir davantage de volume et d'accessibilité à vos marchandises, Bipper dispose d'une cloison modulaire de sièges escamotables Multi-Flex, d'une porte coulissante latérale et de portes battantes s'ouvrant à 90 degrés à l'arrière.[18]

(27) Mégane R.S. dispose d'un moteur essence 2.0 16v turbo affichant une puissance de 265 ch (195 kW) à 5 500 tours/min et un couple de 360 Nm dès 3 000 tours/min. [19]

商品名は，しばしば企業名を前置した複合語の形でも登場するが，それでも依然として無冠詞であることが多い．(28)では，DS4 が Citroën の車名である．

(28) Citroën DS4 propose une silhouette de coupé surélevé à quatre portes.[20]

商品を製造，販売する企業側が，商品名を無冠詞で紹介するのは，商品名を特定の商品と結びついた名前として保持したいという意図の表れであろう[21]．VAXELAIRE (2005)は，固有名詞を普通名詞化させないようにするには冠詞で限定しないことであると指摘しているが，冠詞限定こそが固有名詞が普通名詞化する第一歩になると言っても過言ではないだろう．無冠詞での提示は，商品名 X が普通名詞化してしまわないようにするための企業側の抵抗でもあるのだ．しかし，その一方で，冠詞で限定した商品名を使って商品を提示する企業もあり，必ずしも冠詞の使用が商品戦略に悪影響を及ぼすとは一様に受け取られていないこともわかる．つまり，冠詞の使用には揺れがある．

(29) Chaque cm2 de la Golf a été minutieusement pensé en plaçant le niveau d'exigence toujours

---

[17] http://www.peugeot.com/fr/produits-services/voitures/peugeot-4008

[18] http://www.peugeot.com/fr/produits-services/utilitaires/peugeot-bipper

[19] http://www.rfi.fr/static/partenaires/RFI_renault/pge_renault_rfi.html?v=4

[20] http://www.citroen.fr/actualites/citroen_DS4/#/actualites/citroen_DS4/

[21] VAXELAIRE (2005)は，Maïzena（ユニリーバ社が製造するトウモロコシでんぷんの商標名）の箱の裏には versez Maïzena と無冠詞で書かれているのに対して，一般の人々は versez de la Maïzena と言い，部分冠詞を付けて de la farine のごとく扱っていることを指摘している．

plus haut.[22]

揺れは冠詞の使用だけではない．商品名の存在自体，固有名詞と普通名詞の間を揺れ動いている．興味深いことに，Mediator に関する政治的癒着を論じた次のテクスト[23]では，1 つの例外を除いて, 登録商標であることを示す®マークとともに le Mediator で提示されている. つまり，このテクストを書いた発話者は，定冠詞で限定することで商品名を普通名詞のように扱いながらも，®マークを付記して登録商標された名前であることも同時に明示しているのである．これは，商品名が固有名詞と普通名詞の中間にある存在であることを発話者がまさに表現していることにほかならない.

(30) Ce n'est que le 29 septembre 2009 que la CNPV va enfin considérer le signal comme inacceptable, alors que le laboratoire continue à plaider pour le maintien du Mediator ®.

ちなみに，このテクスト中の唯一の例外は，Mediator の薬害事件に類似した事件を指す de nouveau « Mediator »である(cf. (31)). ここでは，Mediator は薬そのものではなく，「役所と製薬会社の癒着」という拡張した意味でメタファー的に使われているので，もはや®マークは必要がないと発話者が判断したのだろう.

(31) Le rapport devrait constituer un élément majeur dans la réflexion du Ministre de la santé qui s'est engagé à "rebâtir un nouveau système du médicament, un nouveau système de sécurité sanitaire, avec un objectif : qu'il n'y ait pas demain de nouveau « Médiator »".

様々な例を見ると商品名の表れ方にはいささか揺れがあるものの, それぞれの発話者の中では, 首尾一貫した判断があるのかもしれない.

4.3 商品名の普通名詞化

商品名の普通名詞化が進むと，本来特定の商品を指していた商品名が特定の商品との結びつきを離れ，その商品が所属するカテゴリー全般を指す普通名詞になってしまうことがある．普通名詞化した商品名の例としては，ボールペン一般を指す bic やカートを指す caddie が有名だが, escalator, klaxon, airbag など，もはや特定の商品の名前とはまったく考えられないほどまでに一般に普及している名詞もある. このような普通名詞化が起きる原因は 2 つあると KAPFERER (2004, 2007)は言う．1 つには，これまで存在しなかった新商品であるために，商品名がそのまま普通名詞として流布するようになった場合で，もう 1 つには，ある商品が市場のほとんどを独占しているような場合である．さらに商品名の普通名詞化が進むと，類似商品をも含んだカテゴリーを指示するのみならず，商品のある特徴に焦点をあてた対象や性質を指すようになる場合もある．Camembert の形から「円グラフ」を意味するようになった camembert や使い捨てティッシュの Kleenex から「大切にされずにすぐに捨てられる」を意味するようになった

[22] http://www.volkswagen.fr/fr/models/golf/points_forts.html
[23] http://news.doctissimo.fr/Sante/Mediator-le-rapport-de-l-IGAS-accable-Servier-et-les-autorites-sanitaires-23021

kleenex[24]のような商品名がそのいい例であろう．

企業は，商品名が普通名詞にならないように日々努力をしている．たとえば，自社商品名の頭文字が小文字で新聞，雑誌などに掲載された場合には，大文字で書くように企業自身が抗議をすることはよく知られている．KAPFERER(2007)は，1) 対象を指示する商品名以外の語を作る，2) 商品名だけでなく必ず普通名詞とともに使うようにする (un chariot Caddie)，3) 商品名から派生語を作らせない(scotcher)，4) メディアで自社商品名が普通名詞扱いされるのを見たら常に即座に訂正を要求する，5) ブランド名と競合しそうな他社商品との差別化を常に図るなどの努力を常に企業側が怠ってはいけない，と説いている．また，商品名が法的保護の対象である登録商標である場合には，(30)でもみたように，その事実を®をつけて示すこともある．Nestléのホームページでは，商品の紹介において，商品名が登録商標であることを明示するために，すべてに®を添えて記載している．

(32) MENIER® vous propose également ses succulentes boissons chocolatées, issues d'une recette douce et onctueuse au bon goût de chocolat pour commencer la journée en douceur !

(33) PERRIER® est une eau minérale naturelle gazeuse centenaire, dont la pétillance unique a su conquérir le monde entier.

企業側は，商品名が自社の特定の商品とのみ結び付けられた名前であることを主張する努力をおしまない．しかし，そのような企業側の意図とは裏腹に，商品名はとりわけ社会の変化から影響を受けて意味が変容することがある．

4.4 意味の拡張と時事性

商品名は，ひとたび人々の間で話題になると，意味の変化にもさらされる．Mediator においても，意味の拡張は，薬が発端で起こった薬害事件を指すメトニミー(cf. (34))，さらに Mediator に限らず役所と製薬会社の癒着を指示する類似事件を指すメタファー(cf. (35))にまで既に拡張していることは既に上でもみたとおりである．

(34) *"Le Mediator comme le Distilbène sont des scandales de santé publique qui doivent faire l'objet de procès et non pas se résoudre dans des cabinets d'assureurs et de négociateurs",* affirme l'association de femmes exposées in utero au Distilbène et atteintes depuis d'un cancer. (*Le Monde*)

(35) L'objectif de la réforme est *"qu'il n'y ait pas demain* de nouveau Mediator*"*, avait résumé le ministre de la santé, Xavier Bertrand, le 23 juin. (*Le Monde*)

「役所と製薬会社の癒着」という拡張した意味で Mediator が今後も安定して使われ続けるか

[24] kleenex は，*Le grand Robert de la langue française* に以下のような記載がある．
Appos. Fig. (avec un nom de personne). Qu'on utilise et dont on se débarrasse (comme on jette un kleenex). « Une de ces jeunes comédiennes kleenex » (*Télérama*, 4 mai 1988, p. 37).

は，今の時点では全く定かではない．商品名に限らず，新聞，雑誌などマスメディアで使われる固有名詞は，時事問題と密接に結びつき，その事件が世間をにぎわしている間は，メタファー及びメトニミー的な意味拡張が次から次へと生まれる可能性が高い[25]．川口(2011)では，2011年5月ニューヨークのソフィテルで起こったDominique Strauss-Kahnの事件を受けて，同年9月の*Le Monde*に「女性の気持ちを無視してとびかかる」を意味するfaire son DSKという表現が早くも登場したことを伝えているが，このfaire son DSKは，まさに話題性による固有名詞の意味変化を如実に示している．ただし，事件が報道されなくなると，表現もすたれてしまう可能性が高く，ゆえにこの種の表現は一時的な表現にとどまることが多い[26]．

逆に，意味的拡張が安定して使われるようになるためには，kleenexやcaddieのように普通名詞として辞書の一項目としても記載され，一般語彙項目の目録に登録されなければならないのだが，これは商品名としては大失敗に終わったことを意味する．なぜならば，普通名詞化は自社商品との特定の結びつきを離れてしまうことを意味するからである．商品名は企業が十分な調査の上で専門家に依頼して莫大な費用をかけて特定の商品に付けた名前であり，企業が売りたいのはあくまでも自社が製造販売する商品である．従って，時間とお金をかけて作った名前が競合する他社製品を指示したり，または名前に新たな意味が加わってしまっては，もはや名前としては機能しなくなってしまうことは言うまでもない. とはいうものの, 現実のことばは, 現実界を柔軟に引き受けてしまうために，たとえ命名者がきちんと管理しようとしても，実際には管理しきれないというのが実情だろう．

5. おわりに

商品名の冠詞は，統語上の制約によるものではなく，商品名を普通名詞として意識する発話者の態度に起因する．商品名は，名前であるにもかかわらず，普通名詞のごとく冠詞を付けることに全く違和感を感じさせない奇妙な名詞である．おそらく，この特殊性は，固有名詞のように特定の対象に付けられた名前でありながらも普通名詞のように指示対象が複数存在するという商品名の二面性に起因しているにちがいない．ただ，この二面性は，ともすると商品名を特定の商品から引き離し，別の対象を含んだカテゴリーを指す普通名詞へと簡単に導いてしまう危険性をもはらんでいる．だからこそ，企業は，普通名詞化の始まりともとれる冠詞限定を拒絶し，特定の名前としての商品名を保とうとする傾向があるのだろう．しかし，ある語が元

[25] LECOLLE (2009)では，Outreauという地名が，そこで起きた事件の結果，「近親相姦」から「誤審」へと意味が変わっていくことを時系列的に提示する．GARY-PRIEUR (2009)は，LECOLLE (2009)と関連させながら，地名の固有名詞は，時事問題と密接に結びつきながら，そこで起こった事件などを談話的に解釈させる対象を指示するとしながらも，一過性の解釈である可能性が高いことと指摘している．

[26] (33)においてde nouveau « Mediator »とギメが使用されていたのも，まさに一時的なメタファーであることを示すマーカーであると解釈できる．

来固有名詞なのか，それとも単なる普通名詞なのかという事実関係は，多くの発話者にとってあまり重要ではない．それゆえ，商品名が語を取り巻く社会や環境と密接に結びつき，発話者の意識を反映しながら普通名詞化していくことは，ある意味ごく自然なこととも言えよう．

参考文献

De Mulder, W. (2000), “Nom propre et essence psychologique. Vers une analyse cognitive des noms propres ?”, *Lexique* 15, 47-62.

Gary-Prieur, M.-N. (1994), *Grammaire du nom propre*, Pairs, PUF.

Grary-Prieur, M.-N. (2009) “Le nom propre, entre langue et discours”, *Le nom propre en discours*, Paris, Presses Sorbonne Nouvelle, 153-168.

Jonasson (1994), *Le nom propre. Constructions et interprétation*, Louvai-la-Neuve, Duculot.

Kapferer, J.-N. (2006), *FAQ: La marque*, *La marque en questions : réponses d’un spécialiste*, Paris, Dunod.

Kapferer, J.-N. (2007), *Les marques, capital de l’entreprise*, 4e édition, Paris, Eyrolles, Editions d’Organisation.

川口順二 (2011)「固有名詞をめぐって」『藝文研究』101-2 (慶應義塾大学), 241-256.

Lecolle, M. (2009), “Changement de sens du toponyme en discours : de *Outreau* "ville" à *Outreau* "fiasco judiciare"”, *Le nom propre en discours*, Paris, Presses Sorbonne Nouvelle, 91-106.

Molino, J. (1982), “Le nom propre dans la langue”, *Langages* 66, 5-20.

長沼圭一 (2004)『フランス語における有標の名詞限定の文法 ― 普通名詞と固有名詞をめぐって ― 』，早美出版社.

中尾和美 (2009)「ブランド名の命名論」『お茶の水女子大学人文科学研究』5，53-67.

中尾和美 (2013) 「記号としての商品名 ― 香水名の記号論的分析」『フランス語をとらえるフランス語学の諸問題 IV』，三修社，229-242.

Petit, G. (2006), “Le nom de marque déposée : nom propre, nom commun et terme”, *Meta* LI, 4, 690-705.

Vaxelaire, J.-L. (2005), *Les noms propres – Une analyse lexicologique et historique*, Paris, Honoré Champion Editeur.

アイロニーの談話戦略
フランスの新聞・雑誌におけるアイロニーを例として[1]

西脇 沙織
慶應義塾大学大学院博士課程

1. はじめに

フランスの新聞・雑誌を読んでいると，アイロニーの使用が少なくないことに気づく．次は，フランスの日刊紙 *Le Monde* に掲載されたルポルタージュにおいて観察されたアイロニーである（下線部筆者）．

(1) (北朝鮮での金一成の生誕 100 周年記念行事の準備をしている作業者たちについて) Dans la nuit, le travail se poursuit jusqu'à l'aube à la lueur des projecteurs. Ça et là, dans les étages, les étincelles des soudeuses éclaboussent les ténèbres. La plupart des ouvriers dorment sous des tentes dans les jardins publics voisins. Beaucoup sont des étudiants — «volontaires» bien entendu —, depuis l'été, les universités sont désertées. (*Le Monde*)

これは，「当然志願者である」と言って「当然志願者ではない（無理やり作業させられている）」を意味しているアイロニーだが，なぜジャーナリストは新聞や雑誌の記事の中でしばしばアイロニーを用いるのだろうか？本稿はこの問題を考察することを目的とする．そのためにまずアイロニーとはどのような言語表現なのか，どのように定義されるべきなのかを検討する．次にアイロニーを一種の談話戦略とみなす観点から，フランスのジャーナリズムの言説の中でアイロニーがどのようなコミュニケーション上の機能を持つのかを考察する．

2. アイロニーの定義

実際のテクストの中でのアイロニーの使用や機能について見ていく前に，どのような言語現象をアイロニーとみなすのかをはっきりさせておく必要がある．アイロニーを定義する際には 2 つのことがポイントとなる．ひとつは，意味の構造の問題，もうひとつは目的の問題である．

2.1 反対の意味

まずは，中心的な問題となる反対の意味という概念に関する問題について，見ていくことにする．アイロニーといえば，大雨の日に Quel beau temps ! と言って Quel mauvais temps ! を意味す

[1] 本稿は，2012 年 3 月 5 日に慶應義塾大学で開催された日本フランス語学会大学院生のためのフランス語学研究会で発表した内容を一部修正したものである．

るように，あることを言ってその反対を意味することだと一般に考えられている．このような考えは，レトリックの伝統においても見られ，たとえばDumarsaisは次のように書いている．

« L'ironie est une figure par laquelle on veut faire entendre le contraire de ce qu'on dit : ainsi, les mots dont on se sert dans l'ironie, ne sont pas pris dans le sens propre et littéral. » (1730 : 112)

しかし，Cicéronやが指摘しているように，多くのアイロニーが言われていることの反対を意味する一方で，言われていることの反対を意味していないように見えるアイロニーも多く存在する[2]．たとえば，Paulは頭がいいかどうか聞かれてPaul est gentil.と言えば，この発話は一般にアイロニーであると解釈されるが，この発話はPaul est gentil.の反対であるPaul est méchant.を意味しているわけではなく，Paulはばかであるといったようなことを意味していると考えるのが妥当であろう．

フランス語学の分野におけるアイロニーの定義に関する議論も反対の意味という概念でアイロニーを定義することへの疑問に端を発しており，反対の意味という概念を拡大・発展させるか，反対の意味という概念を放棄して，アイロニーを定義し直すか，という２つの大きな流れができている．具体的には，前者は発話の意味 (内容) の分析，後者は発話行為の分析に特化したアプローチである．前者の代表は，Berrendonner (1982)であり，字義的意味と非字義的意味が反対になるという一般的なアイロニーの定義を，Ducrot (1980)を援用して，論証の矛盾という概念に置き換えている．たとえば，Paulは頭がいいかどうか聞かれて，Paul est gentil.と言えば，字義的意味のレベルでは，ポジティブな結論が導かれるのに対し，Paul est bête.などといった非字義的意味のレベルでは，ネガティブな結論が導かれ，両者が矛盾の関係にあると説明される．後者の代表は，Sperber &Wilson (1978)，Ducrot (1984) (2010)で，反対の意味という概念を排除して，発話行為の特徴からアイロニーを捉えようとする．この枠組みでは，アイロニーは話し手が自分以外の誰かの発話を引用する発話であると考える．たとえば，Paulは頭がいいか尋ねられて，Paul est gentil.と言うとすれば，話し手は，頭が悪いが人がいいことを誇りにしているPaul自身の発話を引用していると説明することができる．

ただし，発話の意味と発話行為は異なる分析レベルに位置する問題であり，お互いに排除しあうものではない．Carel (2011a)の分析は，アイロニーの意味に関してはThéorie des blocs sématiques (TBS)，発話行為に関してはThéorie argumentative de la polyphonie (TAP)の枠組みを用いて，両レベルを考慮している[3]．

2.2 批判とからかい

もうひとつのポイントは，アイロニーは人をからかったり批判するために使われるというこ

---

[2] 古典レトリックにおけるアイロニーの捉え方について，フランス語で書かれたものとしては，Le Guern (1976), Perrin (1996)が詳しい．

[3] 両理論については，Carel (2011b)参照．アイロニーについての記述は8章にある．

とである．この点については，研究者の間で意見が一致している．しかし，からかいや批判というあいまいな概念をどう定式化して，どのような位置付けで自身のアイロニー論の中に取り込んでいくかという点で若干の違いはある．たとえば，Kerbrat-Orecchioni (1980)は，アイロニーを常にからかいや批判という目的の為に用いられるという点で，語用論的な転義であるとして，目的の問題を自身のアイロニー論の中心に据えている．また，Sperber &Wilson (1978), Ducrot (1984) (2010)ら，アイロニーを引用発話として捉える研究者は，話し手によって引用される元の発話は，常に話し手がおかしい，ばかげている，と考えている発話である，とすることで，からかいや批判というアイロニーの目的を説明している．Paul est gentil.の例で言えば，たとえば，話し手は頭が悪いことを気にせず，人がいいことを誇りにしている Paul の楽天的な発話をおかしいと思いながら，引用していることになる[4].

2.3 本稿におけるアイロニーの定義

それでは，反対の意味という概念をどう扱うか，批判やからかいという目的をどう扱うかという 2 つのポイントをふまえて，本稿においてどのような発話をアイロニーとみなすかということについて見ていくことにする．本稿では，反対の意味を「非明示性」という概念で，批判やからかいという目的については，「攻撃性」という概念で捉えなおすことを提案する．まとめると，アイロニーは「攻撃性を非明示的に伝達する発話」で，次の 2 つの条件を満たすものであることになる．

(i) 攻撃性：話し手の期待が破られている状況があり，話し手はその状況に対して不満，あざけりなどの否定的感情を持っている．

(ii) 非明示性：否定的感情とそれが向けられる状況は発話の明示的要素（構成的意味論のレベルで得られる意味）のみから想定することができない．言いかえると，否定的感情とそれが向けられる状況は発話の非明示的要素（語用論的推論によって得られる意味および意味の要素）によって想定される．

先ほどの Paul est gentil.と言って，Paul est bête.を意味する例で説明すると，(i)については，「頭はいいのが望ましい」という話し手の期待が破られている状況があり，話し手はその状況に対して，あざけりなどの否定的な感情を持っていると考えられる．(ii)については，Paul est gentil.という発話の明示的要素のレベルでは，「頭はいいのが望ましい」という期待が破られている状況も，それに対する話し手の否定的感情も想定できない．よって，この発話は攻撃性を非明示的に伝達しているので，アイロニーであるとみなすことができる．以上のように，本稿では，攻撃性と非明示性の 2 つの条件にあてはまる発話をアイロニーとみなし，考察の対象とする．

---

[4] Ducrot (1984)(2010)では，話し手は引用元の発話を対しておかしい，ばかげている，と考えているのに加えて，話し手はそれにもかかわらず，引用元の発話に同意するふりをする，としている．

3. アイロニーの使用と機能

アイロニーをどのような言語表現とみなすかが分かったところで，実際にフランスの新聞・雑誌の中で観察されたアイロニーを分析していくことにする．コーパスとしたのは，*Le Monde*, *Le Figaro*, *Libération*, *Le Canard Enchaîné* の 4 つの新聞, *Le Magazine du Monde*, *Libération le Mag*, *Le Nouvel observateur* の 3 つの雑誌で，前述の(i)攻撃性，(ii)非明示性の２つの条件に当てはまる発話をアイロニーとみなして，177 のアイロニーの例を収集した．

3.1 アイロニーの使用

例文の分析の結果，フランスのジャーナリズムにおけるアイロニーの使用にはひとつの傾向があることが分かった．それは，書き手がある言説を攻撃したいのだが，攻撃の正当性を裏付けるための十分な証拠を持っていない時にアイロニーが使われる傾向があるということである．

以下に再掲する(1)は，典型的な例である(下線部筆者)．

(1) (北朝鮮での金一成の生誕 100 周年記念行事の準備をしている労働者たちについて) Dans la nuit, le travail se poursuit jusqu'à l'aube à la lueur des projecteurs. Ça et là, dans les étages, les étincelles des soudeuses éclaboussent les ténèbres. La plupart des ouvriers dorment sous des tentes dans les jardins publics voisins. Beaucoup sont des étudiants — «volontaires» bien entendu — , depuis l'été, les universités sont désertées. (*Le Monde*)

これは，北朝鮮の様子を特派員がルポルタージュとして報告した記事で，金一成の生誕 100 周年記念行事の準備をしている作業者たちについて書かれた部分の一部である．アイロニーになっているのは，下線部の — « volontaires » bien entendu — である．この発話は，「当然志願者である」と言って，「当然志願者でない」という反対のことを意味する典型的なアイロニーであると解釈されるだろう．前述のアイロニーの基準にあてはめると，人を強制的に作業させているにもかかわらず，その人たちが自ら望んで作業を行っていると言い張るべきでないという書き手の期待が破られた状況があり，書き手はその状況に対して，ひどい，許せない，等といった否定的感情を向けていると考えられる．また，当該の状況とそれに対する否定的態度は発話の明示的要素からは想定できない．ここで注目したいのは，書き手は，北朝鮮の政府は国民に強制的に作業をさせているのに，国民が自ら進んで作業をしていると言い張っていると思っていて，そのことを批判つまり攻撃したいのだが，書き手は，国民が自ら望んで作業を行っていないということを証明するのに十分な証拠を持っていないということである．もしかしたら，北朝鮮の人たちが本当に自ら望んで作業をしているということも考えられなくはない．もしそうだとしたら，書き手の批判は誤解に基づいた的外れなものになってしまう．つまり，ここでは書き手はある言説を攻撃したいのだが，攻撃の正当性を裏付けるための十分な証拠を持っていないのである．これと似たようなケースが(2)である(下線部筆者)．

(2) (高額な年俸のためならどこにでもプレーしに行くと思われるサッカー選手に対し

て) Kerimov [オイルマネーにより有名選手を多数獲得しているロシアのダゲスタン共和国のサッカークラブのオーナー] rêve d'ajouter à sa feuille de match le Portugais Cristiano Ronaldo. Pour l'instant, la star du Real Madrid a décliné tout en prévenant les médias : «Ne soyez pas surpris si je viens jouer un jour en Russie». La douceur du climat caucasien, sans doute. (*Le Magazine du Monde*)

ここでは，高額な年棒のためには極寒の地に行くこともいとわない，というサッカー選手の姿勢を攻撃したいのだが，ジャーナリストは Ronaldo の真意を知らない．(3)でも，(1)，(2)と同様の説明が可能である(下線部筆者).

(3) (自分の所有しているホテルやレストランなどの商業施設の近くに無理やりバス停を作ろうとしていると思われるモンサンミシェルの市長に対して) Miracle: un an et demi plus tard, l'appel d'offres lancé par Syndicat mixte auprès de quatre groupes privés candidats à la Délégation de service public retient une «variante» proposée par Veolia [バス会社] de faire partir les navettes au nord. Au pied de chez Monsieur le maire. (*Le Magazine du Monde*)

ここでは，ジャーナリストは，急にバスの出発地点が変更になった原因を市長の私益のためであると疑っているが，確実な証拠を持っていない.

3.2 アイロニーの機能

ここで，攻撃の正当性を裏付けるための十分な証拠を持っていないのだが，ある言説を攻撃したい時にアイロニーが使われる傾向にあるのはなぜか，という疑問が起こる．これについては，ジャーナリズムの言説において重要な要素の一つである真実性を保つためにアイロニーの非明示性が利用されているからだと考えられる．ここでポイントになっているのは，語用論的推論によって得られる発話の非明示的要素は取り消し可能であり，つまり，アイロニーの伝達する攻撃性も取り消し可能だということである．再び例文の(1)について考えてみよう．ここでは，— « volontaires » bien entendu — とアイロニーを使って書いたことで，明示的には攻撃をしていないので，書き手の批判が誤解に基づいた的外れなものになることはない．また，もし，後になって，学生たちが自ら進んで作業していることが分かった場合でも，「お前は間違ったことを書いていたぞ」とか「お前の批判は的外れだったぞ」と糾弾される危険を回避することができる．書き手は，「 — « volontaires » bien entendu — は当然志願者であるということを意味しているのだ」と主張すればいいからである．しかし，「学生たちを強制的に作業させているにもかかわらず自主的に作業していると言い張るとはひどいことだ」と十分な証拠がないのに書いてしまったら，真実性を保証できないし，言い逃れをすることもできなくなる．(2)，(3)についても同様の説明が成り立つ.

3.3 アイロニーの標識

ここで，もう一つの疑問が浮かぶ．それは，アイロニー解釈の難しさに関わる問題である．アイロニーは話し手の真意が誤解されかねない「危険な仕事」(Barbe (1995))と形容されることもある．せっかく書き手がアイロニーを使っても，その発話がアイロニーであることを読者が認識しなければ，コミュニケーション上の機能も意味がなくなってしまう．この危険は回避されうるのだろうか，もしそうだとしたらどのように回避されるのだろうか．この問題に答えるためのポイントは，アイロニーの使用にはアイロニーの存在を知らせる標識を伴っているということである．再び(1)を例にとると，ここでは，ハイフン，二重かっこの 2 つの書記記号と bien entendu という強調の表現がアイロニーの存在を知らせる標識として使われているのが分かる．(3)では，Miracle という語自体が強い表現で，(1)と同じく強調表現がアイロニーの標識になっている[5]．(2)では，逆に sans doute という控えめの表現によって，話し手が La douceur du climat caucasien という表現に対して距離を置いていることを示すことで，アイロニーの存在を知らせている．これらの標識がなくても，百科事典的な知識などを利用して当該の発話をアイロニーと解釈することは依然として可能であろう．しかし，標識を取り除いた場合，この発話をアイロニーとして解釈することがより難しくなることは直観的に支持されると考えられる．このように，標識を用いてアイロニーの存在を明確に知らせることで，アイロニーが言説の中で十分に機能を発揮できるように配慮されているのだと考えられる．

以上の観察をまとめると，アイロニーのコミュニケーション上の機能について一つの見解が得られる．それは，攻撃性を非明示的に伝達するというアイロニーの性質がフランスの新聞・雑誌において，真実性を保ちながら記事に攻撃性を持たせるための談話戦略として利用されているということである．ここでいう談話戦略とは，話し手がある発話を介して達成しようとするさまざまなゴールに首尾よく至るために用いる，言い方の様態にかかわる一種のテクニックのことを指す．

4. おわりに

本稿の目的は，なぜジャーナリズムの言説においてアイロニーがしばしば用いられるのか，という問題について考えることであった．この問いに対しては，アイロニーの攻撃性を非明示的に伝達するという性質が真実性を保ちながら記事に攻撃性を持たせるための有効な談話戦略となりうるから，という答えを与えることができるだろう．これにより，フランスのジャーナリズムの言説におけるアイロニーのコミュニケーション上の機能のひとつを示すことができたのではないだろうか．修辞言語のまだ探求されていない特徴のひとつに機能の多様性があるが

[5] アイロニーの標式としての書記記号については，Myers (1990)を参照．また、強調表現がアイロニー解釈を容易にすることが Roberts & Kreuz (1995)，Okamoto (2006)らの実験によって報告されている．

(Gibbs & Colston (2007)), この問題を考える上でも，談話戦略としてのアイロニーあるいは修辞言語一般の機能についての考察を進めていくことは, ひとつのアプローチとして有効であろう.

付記:本研究は平成 24 年度慶應義塾大学博士課程学生研究支援プログラムの助成を受けたものである.

参考文献

Barbe, K. (1995), *Irony in Context,* Amsterdam, John Benjamins.

Berrendonner, A. (1982), *Eléments de pragmatique linguistique*, Paris, Minuit.

Carel, M. (2011a), "Ironie, paradoxe et humour", Maria-Dolores Vivero Garcia (ed.) *Humour et crises sociales. Regard croisés France-Espagne*, Paris, L'Harmattan, 57-75.

Carel, M. (2011b), *L'Entrelacement argumentatif*, Paris, Honoré Champion.

Cicéron (1966), *De l'orateur*, traduit par Bornecque, H. & E. Courbaud, Paris, Belles Lettres.

Ducrot, O. (1980), *Les échelles argumentatives,* Paris, Minuit.

Ducrot, O. (1984), *Le Dire et le dit*, Paris, Minuit.

Ducrot, O. (2010), "Ironie et négation", Vahram. A & Wienen.U (eds.) *Ironie et un peu plus – Hommage à Oswald Ducrot pour son 80ème anniversaire* –, Berne, Peter Lang, 169-180.

Dumarsais, C. (1815), *Des tropes*, Lyon, Amable Leroy.

Fontanier, P. (1967), *Les Tropes de Dumarsais, avec un commentaire raisonné*, Genève, Slatkine.

Ferenczi, T. (2005), *Le journalisme*, Paris, Presses Universitaires de France.

Gibbs, R. & H. Colston (eds.) (2007), *Irony in Language and Thought : A Cognitive Science Reader*, Hillsdale, Lawrence Erlbaum.

Kerbrat-Orecchioni, C. (1980), "L'ironie comme trope", *Poétique*, 41, 108-127.

Myers, G. (1990), "The Rhetoric of Irony in Academic Writing", *Written Communication*, 7-4, 419-455.

Le Guern, M. (1976), "Eléments pour une histoire de la notion d'ironie", *Linguistique et sémiologie*; 2, 47-59.

Okamoto, S. (2006), "Perception of Hiniku and Oseji : How Hyperbole and Orthographically Deviant Style Influence Irony-Related Perception in the Japanese Language", *Discourse Processes*, 41-1, 25-50.

Perrin, L. (1996), *L'Ironie mise en trope*, Paris, Kimé.

Roberts, R. & R. Kreuz (1995), "Two cues for verbal irony : hyperbole and the ironic tone of voice",

Metaphor and Symbolic Activity, 10-1, 21-31.

Sperber, D. & D. Wilson (1978), "Les ironies comme mentions", *Poétique*, 36, 399-412.

副詞 juste とその周辺

小熊 和郎
西南学院大学

1. はじめに

フランス語に ni plus ni moins という言い方がある.「以上でも以下でもない」ということは,潜在的には「以上」や「以下」が考えられるということであろう．人はことばによって，常にそれ以上のことを言ったり（あるいは理解したり），言い足りなかったり（あるいは理解が及ばなかったり）するということだ．例えば，C'est du vol, *ni plus ni moins.* という例文が辞書に挙っていて「それは盗み以外の何物でもない」と訳されている[1]. ni plus ni moins は文脈によっては,「まさに」とか「正真正銘」とか「〜としか言いようがない」などという訳し方も可能だろう．考えてみれば不思議なことだ．C'est du vol. だけでは不足で「以上」や「以下」を先回りしてわざわざ考慮し，かつそれらを否定し，最終的に言葉（du vol）の本来の（と話者が考える）意味との <一致> を発話は志向しているのである．本稿では，ni plus ni moins の用法とも通底する juste の副詞用法を中心に，文脈（co-texte, contexte）上にどのような制約や展開がありうるのかを観察し，語彙を通して言語活動の一端を考察してみる.

1. juste の分類

1.1. 用法, 周辺マーカー

まず，フランス語の副詞 juste の語義区分を提示する．① 正確ニ，的確ニなど動詞の様態を表す用法（類義 : correctement），② チョウド，マサニ，キッカリなど，一致を表す用法（類義 : précisément, exactement など），③ ヤット，ホンノ，セイゼイ，タカガ，カロウジテ，ギリギリなどと訳され，不十分さと否定的な含みを持つ用法（類義 : seulement, pas plus）に大きく分かれる．かかり方によって解釈が複数可能となることもあるが，比較的明瞭な例を挙げる.

(1) a. chanter juste「正しい音程で歌う」
　　b. frapper juste「的に命中させる」「ことの核心をつく」

(2) a. dire juste ce qu'il faut.「きっかりと必要なことを言う」

[1] 小学館ロベール仏和大辞典の plus の項．ni plus ni moins に関しては，Abe & Maejima (1995) が詳しい.

b. juste au moment où「ちょうど〜のときに」

(3) a. savoir juste écrire son nom「やっと名前を書けるだけ」

b. C'est juste Paul qui est capable de ....「ポールだけが …できる」

(1) や (2) は，想定されるしかるべき基準との質的，量的一致を示す．(3) では一致はあるもののそれ以上ではないという評価が下される．以下では，副詞 juste の前置用法に焦点を当て，多様な用例を整理し，そのかかり方（文の構成要素，文全体，発話者の態度）のバリエーションパターンと共通性を見ていく．

意味解釈は，文中のどの要素にかかるのかだけでなく，文中位置の制約（例えば Ça coûte 10 euros *juste*.「ちょうど 10 ユーロだ」vs. Ça coûte *juste* 10 euros.「たった 10 ユーロだ」）にも関連する．また本来形容詞の juste が，本稿取り上げるように副詞用法であるところにも，juste の柔軟性は見てとれる[2]．ところで，形容詞 juste から副詞接辞 -ment とともに派生した副詞は justement であり，justement には複数の用法がある．動詞の様態を示す用法[3]以外にも，Bruxelles et al. (1982) がその有名な論文で「語用論的用法 emplois pragmatiques」とした二つの用法，すなわち先行文脈（状況や話し手の思惑）との「一致 coïncidence」を表す場合と，先行する文脈の流れを「逆転」させ反対方向の結論へと導く用法を併せもっている[4]. 同論文では「逆転 inversion」用法を主に論じているが，結論部の論述では，「一致」と「逆転」の両者を統一する視点についても模索している．形容詞の juste，副詞の juste, justement は，いずれも柔軟な振る舞い，意味的可塑性を示しつつも核となる安定性をもっていると考えられる．

本稿は，juste とその周辺マーカーの構文・意味・文脈特徴を検討し，<一致>（チョウド，…）と<否定の含意>（ヤット，…）の二面性をどのように理解するかを中心とした問題設定を行う．この過程で，特に juste のかかる要素と意味の関連，juste が否定含意をもつ場合に類義の seulement, simplement, à peine, とりわけ tout juste とどう重なり，どう異なるかなどを検討し，関連するマーカーについても考察を伸ばしてみる．

1.2 D. Leeman (2004)

1.2.1 かかり方：構成要素，文

[2] 形容詞の juste にも基準との<一致> 用法（un système de taxation juste < justice, se faire une idée juste < justesse）と並んで，<不十分> を含意する用法（des chaussures [un peu / trop] justes）がある．

[3] 様態の副詞 justement は，対応する二つの名詞と密接した意味をもつ．一方では justice に関連する意味「正当に」（例. Pierre a répondu *justement* aux demandes d'attribution de bourse = Pierre a été *juste* dans sa réponse …），他方では justesse に対応する意味「的確に」，「正確に」（例. Pierre a répondu *justement* (= avec justesse) au Q.C.M. がある（Serça (1996) の例）. Bruxelle et al. はこれらをまとめて描写用法（emploi descriptif）と呼び，語用論的用法（emploi pragmatique）と対立させる．

[4] それぞれの例を挙げておく．［一致］Il va venir ; *justement* le voici.「彼は来るよ．ほらちょうど来た」（小学館大）［逆転］- Tu devrais aimer la campagne, tu y es née. – *Justement* (, je la déteste).「あなた田舎好きでしょ．田舎生まれなんだから」「だから嫌いなのよ」（Bruxelle et al.）

上記の問題を考えるきっかけになった D. Leeman（2004）は，発話副詞（adverbe d'énonciation）とみなせる juste について，辞書に記載されていない (4) や (5) のタイプが存在することに注意を喚起している．この場合，juste を tout juste にすると不自然な発話になるという．他方，(6)「食事時間は 15 分しかないよ」，(7)「彼は今着いたばかりだ」では，tout を付加しても問題はないようだ． この指摘は極めて興味深く，juste と tout の関連性，juste と tout juste の違い，(c'est) juste que … や (c'est) tout juste si … の構文へと観察を拡げていくように私たちを誘う．

(4) A : Tu es prête ?
B : Je ferme {juste / ? tout juste } les fenêtres.

(5) Je voudrais {juste / ? tout juste} faire une petite remarque.

(6) Tu as {juste / tout juste} un quart d'heure pour bouffer.

(7) Il vient {juste / tout juste} d'arriver.

(4) は，出かける準備が出来たかと問われて，「あとはちょっと窓を閉めるだけだ」という場面，(5) は，「気づいたことをちょっと述べるだけだが …」という意見提示の前置きになる[5]．(4) (5) はともに文全体にかかり，自らの行為が意図するところ（出がけに窓を閉める，指摘をする）が「瑣細」なこと（すぐ終わる，深刻な内容ではない，など）であり，相手が「懸念」するには及ばないという態度を発話者が表明するマーカー（発話副詞[6]）だという．この場合，tout の付加は不自然に響く[7]．

(8) a. J'ai *juste* téléphoné.
b. J'ai *tout juste* téléphoné.

(8a) の複合過去形 J'ai juste téléphoné は，「ちょっと電話した（だけ）」と「今電話したところ」の二通りに解釈される．前者の解釈では tout の付加は許されないが，後者の解釈（= Je viens (tout) juste de téléphoner）なら容認される．

同様に，H. Bat-Zeev Shyldkrot が「限定用法」とした次の例は，実は二通りに解釈できる．

(9) a. Il a *juste* pris trois pommes.
b. Il a *juste* une voiture.

(9) a. は文構成要素の trois pommes にかかり，「３個だけ取った（それ以上は取らなかった）」という理解ももちろんあり得る．その場合，c'est juste trois pommes qu'il a pris の変換が可能だ．

---

[5] このタイプの juste は日本語のチョットの用法に近い．

[6] 「発話副詞 adverbe d'énonciation」と大雑把に言っておく．- ment 接辞をもつ副詞を，Guimier (1996) は，adverbe endophrastique / adverbe exophrastique とに大きく分類するが，いわゆる「文副詞」は実は両者にまたがっている．後者については発話内容（dit）にかかるもの，発話行為（dire）にかかかるもの，発話意図（visée de discours）にかかるものに分類し下位分類を行っている．同じ形態素にも様々な用法があり，juste も同様と考えられる．「文副詞」が Guimier の分類の中では一筋縄にはいかないかなり異質な要素の集合であるという点が，Leeman を悩ませる問題の出発点になっている．

[7] Leeman は，Blanche-Benveniste (2001) の例文を引用しそれぞれの解釈の複数性を注釈した上で，juste と tout juste は (4) (5) のように交代できないもの，交代できるものがあることを指摘する．Leeman, p.18 の説明参照.

しかしそれだけでなく，(4) (5) とアナロジカルに juste が il a a pris trois pommes 全体にかかり，背景にある別のパラダイムに開かれる解釈がある．例えば，盗みを非難されている「彼」を話者が擁護し，「人殺しをしたわけでも，麻薬に手を出したわけでもなく，たかがリンゴを三個盗んだに過ぎない」という文脈．この場合，Il n'a fait que prendre trois pommes. というパラフレーズが可能になる．tout を加えた il a tout juste pris trois pommes. にすると，リンゴの量限定の解釈（三つだけ）になる．同じく，(9) b. Il a juste une voiture. は，所有する車数の制限解釈以外に，「彼の財産（ce qu'il a）が車１台程度」という，文全体（主語と述語の間の述定関係 "il" - "avoir X"）に juste がかかる読みが考えられる（= son seul luxe est d'avoir une voiture）．この場合も tout juste は車の数量を限定するのみと言う．

文副詞は，通常は (10) heureusement や (11) franchement のように文頭に位置することができるが，juste は不可．(4) (5) は文全体にかかるが，?? Juste, je ferme …や ?? Juste, je voudrais … にはならない．この点について代わりに，c'est juste que … という構文の可能性があることを Leeman は指摘している[8]. C' は que 以下を受けているのではなく, sujet vide と記述される.「どういうつもりで発話するかと言えば」と漠然と発話意図を指しているものと思われる．juste に文頭遊離構文はないのだが，c'est juste que … が機能的にいわば等価と考えられる[9].

(10) Heureusement, il (n') est (pas) venu.

(11) Franchement, il (ne) travaille (pas) beaucoup.

(4) a. C'est juste que je ferme les fenêtres.

(5) a. C'est juste que je voudrais faire une petite remarque.

(9) c. C'est juste qu'il a pris trois pommes.

(9) d. C'est juste qu'il a une voitrue.

上例 c'est juste que … は，juste が焦点化を受けているというわけではない．例えば (4a) は，*c'est juste (et non entre autres choses) que je ferme les fenêtres の「強調構文」の解釈にはならない．(10) (11) にあり (4) (5) にはない否定にかかる用法の問題については，2.3. で再考する．

他方，(6) Tu as (tout) juste un quart d'heure pour bouffer. は (4) や (5) と異なり文構成要素（un quart d'heure）にかかる．juste un quart d'heure は,「わずか 15 分（しかない）」の意味となり，juste を seulement あるいは ne … que に置き換えることに違和感はない．この場合，juste に tout を付加した tout juste（や à peine）も可能．この事実から，tout juste を否定含意（他を排除する「制限用法」）の seulement X (= pas plus que X) と同一視する誘惑にかられるが，この点については後に 3.2. で検討する．なお，(4) (5) の juste を seulement にすると，他を排除する制限の勢いが

[8] 逆に，* c'est heureusement que，*c'est franchement que はない.

[9] que の挿入に関しては，Peut-être que …, Heureusement que …，* Malheureusement que …，* Franchement que … など語彙ごとに振る舞いの違いがある.

強くなり，seulement ではなくむしろ simplement の方が juste に近い印象がある[10].

(4) b. Je ferme {seulement / simplement} les fenêtres.

(5) b. Je voudrais {seulement / simplement} faire une petite remarque.

(4) (5) のタイプの juste（? tout juste）を「制限用法１」とし，(6) (7) のタイプの (tout) juste の「制限用法２」と区別したい．(9a) (9b) は「制限用法１」と「制限用法２」の二つの解釈が可能ということになる．「制限用法１」は，simplement と相性がよく，「制限用法２」は seulement（あるいは à peine）と交代するが，日本語ではいずれにもダケが現れ見分けにくい面もある．

1.2.2. 時間用法：チョウド～シテイル，チョウド～シタバカリ，チョウド～スルトコロ

次に，juste の用法のうち時間に関わるものについて検討する．(12) venir de，(13) être en train de[11]，(14) être sur le point de との組み合わせを特権化してみる．いずれも，日本語の（マサニ）チョウドが当てはまる．

(12) Il vient *juste* d'arriver.「彼はチョウド着いたところだ」

(13) On était *juste* en train de sortir, quand il a commencé à pleuvoir.
「チョウド出かけようとしていたら，雨が降りだした」

(14) Quand il m'a appelé, j'étais *juste* sur le point de lui écrire.
「彼が電話してきたとき，私はチョウド彼に手紙を書こうとしていた」

取りあえず (13) と (14) については，同時性（<一致>）ということが言える．正確には部分的同時性ということになるかもしれない．何との（部分的）同時性か？(13) は事行（q：出かけようとする）がちょうど展開しているそのときに生じた事態（p：雨が降り出す），(14) は quand 節で表される事行（p：彼が電話してくる）が成立したとき，主節の事行（q：手紙を書こうとする）のプロセスがちょうど展開しようとしているという解釈になる．(13) も (14) も事行 q は未然であるが，準備段階が展開中であると考えてよい[12]．いずれも juste は単なる同時性だけではなく，同時に生じていることに「意味」があることを juste が表しているように見受けられる[13]．確かに，時間的関係（同時性）だけなら juste を加えなくても表現できる．(13) は外出と

---

[10] Charolles & Lamiroy (2007) は，「文法化」によって様態の副詞から対立の接続表現（mais の用法）へと変化した simplement は，seulement と交代できる文脈であっても解釈が異なると説明している．seulement は（mais と同様に）先行文が導く方向性(結論)との評価上の対立を表すが，simplement は対立的な観点というよりは，メタ発話となる je dis simplement，すなわち dire の様態副詞としての用法を引きずっているとして次の例を挙げる：“Ce n'est pas plus difficile de publier qu'avant. *Simplement*, on ne veut plus de ce que nous écrivons. On fabrique des cadavres” (Libération). simplement は前文脈（経済状況はあまり変わっていない）から特に出版へのプラス要因を引き出すわけではなく，出版困難についてのsimple な説明を述べているに過ぎない．ついでながら，simplement は seulement と異なり tout との相性がある．Je ne suis pas malade ; a. Je suis *(tout) simplement* fatigué. b. Je suis *(ø / *tout) seulement* fatigué.

[11] 同じ être en train de でも，後述の Il est *juste* en train de gagner du temps.（時間稼ぎをしているだけ）のタイプの「概念限定用法」は，(13) の「時間限定用法」とは異なる．

[12] (13) は終点含意動詞 sortir ゆえに未然，(14) は être sur le point de の意味により未然．(13) は展開相の動詞を置くこともちろん可能である（on était *juste* en train de jouer au football）．

[13] 杉山（2005）は，場所の前置詞に前置される juste について，位置の正確さとともに話者がその位置関係に「何らかの『意味』があるとみなし」，例えば Il y a un arbre *juste* en face de la maison の「ちょうど正面に」には「鳥のさえずり

雨，(14) は彼の電話と私が手紙を書くことの間に，「折しも」という文脈依存の解釈を入れないと juste の存在が理解できないように思われる．言語においては同時性と対立が深く関わっていることはよく知られているが[14]，同時性が juste によって強調されるということは，いずれにせよ共有される瞬間（T_x）に光が当たり，他のとき（$T_{i,j,k,\ldots}$）との間に主観的対比が生じる可能性がある．これがおそらく，「折悪く」とか「ちょうどうまい具合に」などの付随的解釈を生じさせるものと考えられる．

(12) venir de の場合はどうか？juste は発話時との近接性を強調し，「今」との隔たりを縮小していると言えるだろう．逆に言えば，「たった今」，「ちょうど今（ちょうどそのとき）」に当該事行（q）が成立したということは，一方では事行 q に「今（T_0，T'_0）[15]」とは現実的に異なる時（$T_i \neq$（T_0，T'_0））の指定を行いつつ，同時に $T_i \simeq T_0$ あるいは $T_i \simeq T'_0$ との連続性，同一性をも担保していることになる．この同一化による <一致> は，談話上の解釈としては「うまい具合にチョウドよく q」であったり，「あいにくタッタ今 q」などの効果をもたらすことも考えられる．完了，未完了を問わず，juste は当該事行（T_i）が同一化されうる時（事行 p のとき T_x，発話基準の T_0 や T'_0）を指定する．同一化されうるということは，実は異なる時をもつということでもある．異なる時をもつがゆえに基準時との主観的 <一致> が可能となり，主観的 <一致> であるがゆえに，文脈上の読みに何らかの評価的 <（不）一致>，すなわち「運良く（悪く）」を付随的に生み出す可能性をもつことになる．

2. 概念，時間，主体

1.2.1. で，文構成要素にかかる juste と文全体にかかる juste の区別，1.2.2. では時間軸での限定用法を見てきた．もう一度整理してみよう．

2.1. 三つの用法：A, B, C

用法を大きく A（文構成要素にかかる），B（文全体にかかる），C（時点にかかる）に分類する．この分類は相互排他的ではなく，構文上あるいは文脈上複数の読みを許容することもある．

A. 文構成要素の概念との <一致> と要素が成す範列（paradigme）の <制限> を行う．

A1. 動詞

(1) a. chanter *juste*. b. frapper *juste*.

A2. 補語

(2) a. dire *juste* ce qu'il faut. b. *juste* au moment où

が聞こえる」，「部屋に日があまり射さない」，「家を見つける目印になる」などの文脈が考えられるという鋭い指摘をしている．

[14] 例えば，tout + ジェロンディフ（Il conduit tout en regardant la télé）．

[15] T_0 は発話時，T'_0 は発話時を過去にずらした基準時（半過去）の場合．

(9) a. Il a *juste* pris trois pommes. (= C'est *juste* trois pommes qu'il a prises [pas plus][16])

A1.の juste は「的確に」を意味する様態副詞となり, 他には calculer, deviner, raisonner, voir, viser, toucher, dire などの動詞と組み合わされる.「歌う」なら「音程（リズム...）」のようにプロセスが要請する概念的規範との <一致> を示す[17]. 否定文（ne pas chanter juste「音程がはずれている」）で規範とのズレを示したり, 疑問の対象（juste chanter ?）にすることもできる.

A2. は, 補語に発話の焦点を与える用法で, (9a) のパラフレーズ（c'est juste trois pommes qu'…）に示したように, (2a/b) も C'est juste ce qu'il faut que …や C'est juste au moment où … que … のように分裂構文の解釈が与えられる.

否定化すればそのスコープは焦点部分にかかるが, ne pas dire juste ce qu'il faut は,「言うことが的をはずれている」（的確さの否定, 規範とのズレ）とも取れるし, juste x を階層（x', x''）を成す範列の第一歩（最低限）と捉えれば,「必要なこと以外（余計なこと）を言う」（dire même x', x''）とも取れないわけではない. juste au moment où については, Ce n'est pas juste au moment où …「タイムリーではない」という規範とのズレ（<一致> の否定）の解釈の可能性（A1 タイプ）はありうるだろうが, 例えば L'ascenseur est arrivé juste au moment j'allais appeler では否定形 *L'ascenseur n'est pas arrivé juste au moment où… は不自然で, 後述 C. の時間用法になると考えられる.

(9a)「たった３つだけ取った」の否定形 Il n'a pas pris juste trois pommes は,「（それ以上）他にも取った」ことを示唆し, 範列要素の <制限> 解除を表すことになる. (9a) は一応 il a seulement pris trois pommes. とパラフレーズ関係にあるから, 否定発話は il n'a pas pris seulement 3 pommes mais plus. と近いものと理解できることになる. ただし, seulement に比べてメタ否定（相手の言の否定）のニュアンスも残る. 疑問発話についても同じことが言えるだろう.

B. 文全体にかかり, 話者は主体間での <一致> と <制限> を目指す.

(4) Tu es prête ? — Je ferme *juste* les fenêtres. (= *C'est juste qu'*il me reste à fermer les fenêtres)

(5) Je voudrais *juste* faire une petite remarque.

(9) c'. C'est grave, ce qu'il a fait ? — Mais non : *c'est juste qu'*il a pris trois pommes.

d'. Il a beaucoup d'argent ? — Penses-tu ! *C'est juste qu'*il a une voiture[18].

(15) Tu t'en vas déjà ? Tu t'ennuies ? — Non, *c'est juste que* je dois aller chercher mon fils à l'école.

---

[16] juste は過去分詞に前置するが, 目的語にかかる読みで, Il a pris *juste* trois pommes. の語順もある. ここで検討する (9a) の解釈は, 1.2.1. で論じた（ ）内のパラフレーズの「制限用法２」で,「制限用法１」の Il *n'a fait que* prendre trois pommes. C'est *juste* qu'il a pris trois pommes (9c)ではない. 後述後述 (9c').

[17] juste における概念的規範との <一致> は bien（il chante *bien*）のそれとは異なる規定を与えなければいけないが, この点について詳しく論じる余裕はない.

[18] Leeman は (9c'), (9d') の c'est juste que … ではなく, c'est juste si … の例を挙げている. C'est (tout) juste si … のパラフレーズは, より文構成要素の <制限> 解釈に傾く.

どのような範列の構成要素として当該プロセスが位置づけられるかを文脈に読み取る必要がある．(4) では出かけるに際して時間がかかるかどうかを対話相手が気にしている文脈であり，(5) では（コロックなどで）相手との緊張関係を和らげる趣旨の発言であった．このタイプでも，話者の行動を <制限> すると同時に，主体間での了解と <一致> を図っていると juste の機能を解釈することが可能だろう[19]．この意味で，(9c'/d') の文脈では juste が文構成要素（trois pommes, une voiture）ではなく主述関係を <制限> している．つまり，質問に対する相手の発言に表れている通り，話者がリンゴ３つを取るのは重大な過失ではない（9c'），車１台は金持ちのうちには入らない（9d'）とする，当該事行とそれが意味するところとの話者間の <一致> が文脈の要請となる．(15) は，会話を切りあげて立ち去ろうと話者が，「子供を迎えに行く」という，相手が無理なく理解してくれると思われる理由が juste とともに使われている．

A では「(概念) 規範」や「(量的) 基準」との <一致> が問題であったが，B では主体間の <一致> を話者が目指している．この場合の <一致> は発話内容そのものというより，発話主体間の調整に基づく <一致> とみなすことができるのではないか．Leeman は，(4) (5) (15) のように「婉曲」と感じられるこの juste の用法には，発言を相手が「否定的」に受け取ることを懸念する話者が先取りし，これを取り除くために「それほど大したことではない」（相手にとって脅威となるものではない）と否定する意図が含まれているという仮説を立てる[20]．(9) についても，問いかける相手が可能性として予測するだろうことを否定するのがこの用法の機能ということになる．発話行為は主体間の <一致> を目指すので，中立的な疑問，否定の変形はできない．仮にあるとしても，必然的にメタ疑問，メタ否定，すなわち相手の発話意図を取り込んだミメーシスとしての疑問，否定になると思われる[21]．

C. 時間軸上の焦点化

(12) Il vient *juste* d'arriver.

(13) On était *juste* en train de sortir, quand il a commencé à pleuvoir.

(14) Quand il m'a appelé, j'étais *juste* sur le point de lui écrire.

1.2.2. で記述したこの用法は，(1) 時間的 <一致> とその主観的評価（être en train de, être sur le point de），(2) 事実上の時間的 <不一致> というベースのもとでの時間的接近と <一致>，その

[19] Abé & Maejima (1995) は，ni plus ni moins の用法を，(a) 量の可変性の否定，(b) 程度の可変性の否定，(c) 述定関係の適切性（pertinence de la predication）に分類し，対象自体の plus ou moins に関わる (a)(b) に対して，対象について話者と相手の間に存在する視点の相違が潜在する比較構文に (c) を関係づけている．例えば，Jean est plus (= plutôt) laborieux qu'intelligent. は，laborieux と intelligent の程度を比較しているのではなく，表現の適切性を表し視点の相違が背後に読み取れる．主体が介入するこのタイプの plus ou moins には，相手の立場を配慮する「婉曲」の効果があり，このタイプの ni plus ni moins は視点の差異を「無効化」し，「肯定を強調」すると Abé & Maejima は説明する．B 用法の juste は，<制限> による「婉曲」と <一致> による話者の主張の両面性があると言える．

[20] "Un emploi « atténuatif » de l'adverbe *juste* consiste à présenter le contenu de l'énoncé comme n'ayant pas l'importance que l'interlocuteur serait tenté de lui attribuer (en l'absence de *juste*)" (Leeman, p.19)

[21] tu fermes juste les fenêtres ? (t'es sûr de ce que tu dis là ?), tu ne fermes *pas juste* les fenêtres (ce n'est pas simplement les fenêtres, contrairement à ce que tu dis). なお，2.3. では pas juste ではなく，B 用法の juste pas の可能性について論じる．

主観的評価（venir juste de）を行う．疑問と否定の変形には馴染まない．(12') Il ne vient pas *juste* d'arriver (mais il est arrivé depuis longtemps). Il vient *juste* d'arriver ? (= tu dis que … ?) も (13'/14') On n'était pas *juste* en train de / sur le point de… Est-ce que vous étiez *juste* en train de / sur le point de … ? も相手の発言をなぞったメタ発話になる．

ところで，être en train de は時間限定用法だけでなく，概念の境界を区切る用法があることを注 11 で指摘した．être juste en train de … の概念限定用法，すなわち，「ちょうど〜している」ではなく「〜しているに過ぎない」の意味のときは，疑問や否定の記述的対象になりうる : Il est *juste* en train de gagner du temps.（彼は時間稼ぎをしているに過ぎない）は，Est-il juste en train de gagner du temps.（単なる時間稼ぎなのか？）や Il n'est pas juste en train de gagner du temps.（時間稼ぎをしているだけではない）が可能だ．この場合，juste は seulement の解釈に近い．構成要素限定 seulement x（例．Il boit seulement de l'eau）の用法では，x と述語の関係（Il boit de l'eau），さらに x 以外（= x'）について否定（Il ne boit pas de café, pas de lait, pas de vin, …）の情報があり，疑問化と否定化は x'がスコープで，x が前提，x'が主張ということになる[22]．juste x の概念限定用法でも同じことが言える．

2.2 juste と場所表現

juste が文構成要素にかかる場合（A 用法）のうち，動詞や目的語以外では様々な場所の前置詞との組み合わせの制約が面白い．この問題について論じた杉山（2005）は，前置詞句を cible,（本稿では対象と呼ぶ）と site（本稿では基準と呼ぶ）の関係に基づき，(1) 近・遠関係（près de, loin de）(2) 相対的な位置関係（à droite / gauche de, en face de, à côté de, autour de），(3) 含有関係（au milieu de, au fond de, au bout de, au bord de）(4) 全体・部分関係（au-dessus de, au sommet de）に分類し，juste（と tout）との共起可能性とその「意味」について検討している．この分類は杉山の先行論文（2004b）強意の副詞 tout + 場所を表す前置詞句を論じる際に持ち出されたもので，本稿で論じている juste との関連では次の二点が注目に値する．

(16) a. ??juste {près, loin} de X.
b. juste à côté de X.

(17) a. juste {devant, derrière, en face de, à droite de, à gauche de} X.
b. juste {au milieu, au fond, au bout, au bord, au-dessus de, au sommet de} de X.

1. juste près や juste loin は特殊な文脈[23]で存在しないわけではないようだが，空間的位置関係（être situé près / loin de X）を表す場合には不適切である．この点を，杉山は「〜の近く／〜から遠く」には基準 X と対象 Y の関係に「正確さ」が欠ける，すなわち本稿の言い方では X-Y

[22] 前提と疑問・否定の関係については，古典的な Il continue de fumer（pp：Il fumait avant, p：il ne fume plus maintenant）の例を挙げておく．疑問・否定のスコープは主張（p）となる．
[23] Viens *juste* près de moi. Reste *juste* loin de moi. いずれも歌詞の一部.

の関係に <一致> と呼べるものがないことを指摘している．換言すれば，X …. Y の空間配置の中でこの地点が près de X，この地点が loin de X と言える基準値がないからだということになる．X と Y が重なってしまったらもはや près de ではなく，逆に loin de は無限に距離を拡げていくことができる．

とはいえ, 日本語で「すぐ近く」に当たる表現として juste près があってもよさそうに思える．juste との組み合わせで可能性を探れば，(16b) juste à côté があるが[24]，à côté は本来 devant（前方）や derrièrre（後方）などと対立する「側方」で，その対象領域が「(すぐ）隣」から「近く」へと転位したと考えられる[25]. 確かに, juste à côté にすれば基準と対象の間に何も介在しない「すぐ隣」>「すぐ近く」の関係が成立する．

2. 基準と対象の相対的位置関係（前後，左右，正面）を表す (17a)，広い意味での全体と部分の関係（中心，奥，先，縁，上部，…）を表す (17b) はともに juste を許容する．しかし，文脈によっては juste が容認されない場合もあり, いずれも基準と対象の間に想定される関係の <一致> だけでなく，<一致> から「意味」を引き出す必要があることを杉山は指摘する（注 13 参照）．例えば，空間からの転位による比喩的な使い方 (18a) (18b) では，対象と基準の間にあるべき関係の <一致> もそこから引き出される「意味」も見いだされないので不可であるとしている（杉山, id. p.102）.

(18) a. *Il a été courageux *juste* en face de ses lourdes responsabilités.

b. *Chaque auteur exprime ce qu'il pense *juste* au fond de lui-même.

場所表現と juste の共起については, 杉山が指摘する通り何らかの基準との <一致> とそのことから話者が引き出す評価的「意味」がおそらく重要であると思われる．「意味」は本稿の言い方では，範列を前提とする <制限> によっても補強される．juste devant, juste au milieu は，近似的な値（plus ou moins devant, plus au moins milieu）を排除するからである[26].

2.3 juste と否定化，疑問化

ここで A, B, C それぞれのタイプの juste について，構文的，意味的変異の可能性を再度整理する．疑問文・否定文での振る舞いは各用法により異なる制約が生じることを見た．上記分類の A は，スコープが基準との <一致> にあるか（il ne chante pas *juste* ; est-ce qu'il chante *juste* ?），や <制限> にあるか（pas *juste* trois pommes ; juste trois pommes ?）などの違いはあるが，中立的な疑問・否定が可であった. ただし, <一致> の不在や <制限> の解除が意味を持つために, C'est

[24]「すぐ近く」は *tout* près, *tout* à côté (cf. **tout* loin, **juste* loin) も対応するだろうが，ここでは tout についてはふれない.
[25] voisins「(すぐ）隣の人」が les voisins de palier / du dessus / du dessous など，限定に緩やかな広がりがある「隣の人」になることもアナロジカルに捉えられる．ちなみに，les voisins d'à côté だと「(すぐ）隣人」になる.
[26] 杉山は，des grilles *juste* autour du parc *vs.** une forêt *juste* autour de la maison の違いを観察し，juste autour が「ぴったりと接触」する必要性（本稿のいう関係の（完全な）<一致>）の有無に起因させている（p.107）．「公園の周囲にくまなく鉄柵」があることから前者には <制限> なしの <一致> の（侵入不可能の）「意味」を読み取ることができるが，「家を完全に囲む森」に役割的「意味」を見いだすのは容易ではない.

juste … que の分裂文にするなど，それなりの使用条件を必要とする.

構成要素がスコープになり，否定では，pas は juste の前（左）に位置する．juste が対象の基準への <一致> を表すとすれば，pas juste は対象の基準への <不一致> を表す（chanter faux, avoir pris plus）．これは，2.2. で検討した場所表現についても言えるだろう．pas juste devant は「すぐ前」ではなく，例えば「そこし離れた前」であったり，「やや斜め前」であったりすることになる．それらの <（不）一致> に「意味」が見いだされなければ，当然，否定も疑問も解釈できない.

Leeman が注目した，文全体にかかる主体間調整の B 用法はどうであろうか．上例 (4) (5) (9) (15) から否定形は考えにくいのだが，インターネットで検索すると次のような事例が出現する.

(19) （コカコーラをガス抜きで飲むことを推奨されて）Oui, moi aussi ça m'arrive de le débuller. Mais perso, je ne ferme *juste pas* à fond le bouchon, le gaz s'échappe. (Internet[27])

(20) （虐待を受けている女性の発言） *Je voudrais juste qu'ils ne me frappent pas, de leurs gestes ou de leurs paroles. Je voudrais juste avoir du calme...!! Ne pas avoir à me défendre ! Que personne ne me fasse de mal ! Je voudrais juste ne pas avoir peur, rien qu'un instant...!!! (Internet[28])*

(21) （アプリケーションのバージョンアップの宣伝） non, je ne vous ai pas oubliés, je n'ai *juste pas* eu de temps à consacrer à l'application. (internet[29])

(19) - (21) はいずれも，pas が juste の後（右）に来る．すなわち，「栓をきちんとしない」，「私をぶたない／恐怖を抱かない」，「時間がなかった」という否定内容に juste がかかり，それらの話者あるいは他者の行為は，相手が考えるかもしれないほど「大げさなこと（むずかしいこと）」ではないことを主張する．pas seulement の意味になる場合の pas juste と違って，juste pas は「それ以上」を暗に主張しない.

最後に，C. 時間用法について再確認しておく．既述の通り，venir juste de と（時間用法の）être en train de は，相手の発話そのものを対象として取りあげる場合（メタ発話）を除いて否定や疑問を拒否する．être sur le point de についても事情は同様である.

(12) a. ［否定］Il ne vient pas *juste* d'arriver (c'est faux, ce que tu dis là).

b. ［疑問］(Ah bon ?) Il vient *juste* d'arriver ?

(13) a. ［否定］On n'est pas *juste* en train de … (il n'est pas vrai que …).

b. ［疑問］Est-ce que vous êtes *juste* en train de …(vous voulez dire ça) ?

---

[27] http://forum.doctissimo.fr/sante/anorexie-boulimie/droguee-coca-light-sujet_153622_2.htm

[28] http://anabutterfly.over-blog.com/10-index.html

[29] https://itunes.apple.com/jp/app/enigmes-a-gogo/id430700459?mt=8

ただし，être en train de p が展開相（シテイルトコロ）ではなく，話者にとって「望ましくない」事行が展開しているという解釈（概念用法）の場合，juste は simplement（seulement）の限定用法に近くなり，否定や疑問では p 以上の内容が存在することが話者の念頭に置かれる．

(13) c. ［否定］Il n'est pas *juste* en train de gagner du temps.
（単に時間稼ぎをしているだけではない）

d. ［疑問］Est-il *juste* en train de gagner du temps ?
（単に時間稼ぎをしているだけだろうか）

以下のインターネット検索例では，être en train de V は分類 A の構成要素（動詞句）にかかる概念用法とみなしてさしつかえないように思われる．(22) では，基準となる「言うことだけ」では話者の真意には足らず，後続する「それを本当に思うこと（Ce n'est pas que des paroles, *je* le pense honnêtement）」こそがそれ「以上」を内容とする真の発話意図を明らかにする．(23) でもすべての女性宛の平凡なメールではない「より個性化」したメールを推奨している．いずれも pas juste の語順になる．(24)でも être en train de に「いつものからかいメッセージ」は決して好ましくないから，juste によってそれ「以上」の意味があるかどうかを問うている[30].

(22) Je crois que nous avons une chance de gagner cette année. Je ne suis *pas juste en train de* le dire. Je le crois sincèrement.

(23) Personnalisez le message. Cela lui montre que vous n'êtes *pas juste en train de* lui envoyer un mail que vous envoyez à toutes les femmes que vous trouvez. Faite mention de quelque chose que vous avez vu dans son profil pour compléter votre email.

(24) Est-ce que S. M. va révéler (…) quelque chose qui a été maintenu en mystère pendant près de 50 ans ? Ou est-il *juste en train de* nous taquiner, comme à son habitude ?

3. juste vs. tout juste（simplement / seulement）

3.1 B 用法の特徴

[30] Bourdin (1981) は，英語の副詞 just をそのかかる範囲によって，just 1（均質領域 = 時間領域），just 2（異質領域 = 概念領域）に分類し，それぞれをさらに「限定（Restriction）」と「焦点化（Focalisation）」の二つに下位区分する（2×2＝4分類）．フランス語と同様に，「時間」に関わる just 1 は否定と親和しない (? Tim has *just not* finished reading his speech. / ? Tim is *just not* reading his speech) が，just 2 は否定化が可能．さらに，just 2 (R) は only, merely を同義とし，be + ing の Tim is *just* reading his speech は，「ニュースを読んでいる最中」(just 1 (R)) という意味だけではなく，「ニュースを読んでいるだけ」の解釈 (just 2 (R)) にもなり，後者の否定形は Tim is *not just* reading his speech (he's also acting it out)「体で表現もしている」）ことを指摘する．

他方 just 2 (F) は，absolutely, totally, purely and simply を同義語としてもち，Tim is *just* unable de read his speech「とにかくニュースをまともに読めない」の例を挙げる．否定では just 2 (R) の語順 not just とは逆に，just 2 (F) は just not の語順になる．前者の語順を取れば，just 2 (R) Tim has *not just* finished reading his speech (he's also left the auditorium)「ニュース放送が終わったばかりではない（もうとっくにスタジオを後にしている）」，後者の語順を取れば，just 2 (F) (We can't go on with the rest of the programme, there's nothing we can do about it …) Tim has *just not* finished reading his speech「とにかくニュースが終わっていない (ので先に進むこともできない)」の解釈に変容する．être en train de の時間用法は，Bourdin の just 1 (F)，概念用法は just 2 (R) に当たる．

再び用法 (4) (5) に戻り，別の観点から (6) (7) と比較してみよう．今度は juste が tout juste で言い換えられるかどうかが問題となる．

(4) A : Tu es prête ?

B : Je ferme {juste / ? tout juste} les fenêtres.

(5) Je voudrais {juste / ? tout juste} faire une petite remarque.

(4) (5) は対話関係の中で「窓を閉める」，「軽い指摘をする」が，相手を待たせたり発言に重大な異議を唱えるものではないとする話者の婉曲的態度を示している．Je ferme *tout juste* les fenêtres / Je voudrais *tout juste* faire une petite remarque はそれ自身可能ではあるのだが，それぞれの文脈的背景は異なる．tout juste はどちらかと言えば，相手の非難を前提としこれに対する強い弁解の姿勢を示しているように感じられる．

なるほど (4) (5) で話者は juste により発話の効果を <制限> しようとしているのであるが，だからといって ferner les fenêtres や faire une petite remarque 以外のことを取り立てて否定の対象としてはいない[31]．日本語では (4)「あとはちょっと窓を閉めるだけ」，(5)「気づいたことをちょっと述べるだけだが …」という「だけ」の訳が可能なので seulement と同義としたくなるのであるが，Je ferme *seulement* les fenêtres. Je voudrais *seulement* faire une petite remarque. とは，(4) (5) の場面（出がけ，研究会での発言）では言いにくい感じがする．これは，juste には必ずしもない他性（それ「以上」）を積極的に排除する seulement のメカニスムによるものかもしれない（注 10.も参照）．

(4) (5) の juste には他性を排除しようとする強い意志はないことは，次の c'est {tout juste / à peine} si … の焦点化が中立的なこの文脈では全く的はずれで，不可能であることからも窺うことができる．

(4) b. *C'est {tout juste / à peine} si je ferme les fenêtres.

(5) b. *C'est {tout juste / à peine} si je voudrais faire une petite remarque.

Leeman は，c'est tout juste si … が相応しい次のような (4) の文脈を提示している．

(4) c. A : Mais enfin, qu'est-ce que tu fabriques ? (On en a encore pour longtemps ? Alors, ça vient ?)

B : C'est *tout juste* s'il me reste à fermer les fenêtres.

(4) とは異なり，(4c) には「ぐずぐずするな」という話者 A の表明が強くあり，B は A が想定する当該事行を含む範列と他性の排除を強く意識する発話となる．

3.2 <制限> 用法と <一致> 用法

[31] 先の区別（1.2.1）に従えば，(4) (5) の juste は「制限用法１」で，それ「以上」を否認する seulement や tout juste は「制限用法２」ということになる．

3.2.1 juste の両義性, tout juste の一義性

「制限用法１」(B 用法) は他性を積極的に排除するものではないことを見た．と同時に，juste には対象を明確に限定する用法があったことも忘れてはならない．(6) (7) はいずれも時間の幅の短さを強調している．それぞれ，à peine や seulement を使って (6a) (7a) のように言い換えることもできる．

(6) Tu as {juste / tout juste} un quart d'heure pour bouffer.

(7) Il vient {juste / tout juste} d'arriver.

(6) a. Tu as {à peine / seulement} un quart d'heure pour bouffer.

(7) a. Il vient {à peine / seulement} d'arriver.

(6) のように juste が数量表現に前置される場合は，表現された数量（時間，金額，…）の達成と同時に，不十分さの含意を持っているのが一般的と言える[32]．(7) の venir de は $T_i \simeq T_0$ で示される近接性の表現だが，発話時との主観的 <一致>（$T_i = T_0$）と事実上の <一致> の否定（$T_i \neq T_0$）を juste が際立たせる．(6) (7) で juste は tout juste と有意義な文脈上の区別を見いだすことができない．また，(6/7 a) が示すように <一致> とともにそれ「以上」の否定を含む à peine, seulement とも置き換えることができる．

seulement や à peine の否定的読みと親和することに加えて，(6) では食事時間が 15 分であること（ホンノ 15 分ダケ）は常識に照らし合わせれば短い時間であるという言語外認知，(7) では到着直後の人は次の活動に移るまで余裕を必要とするという私たちの慣習（マダ着イタバカリ）も読みの方向性に影響を与えることは配慮すべきであろう．tout juste は明らかにそのような否定方向に解釈を導くが，juste には単純な <一致> 解釈もありうるので，数量表現や近過去についても，juste と tout juste を弁別する文脈を構築することは可能であると思われる[33]．

実際，次例 (25a) について，juste が優先的に <一致> の読みになるか，<制限> の読みになるかについては曖昧だということを Blanche-Benveniste は指摘している．

(25) a. mon père disait toujours on pourrait vivre *juste* en Alsace.

b. mon père disait toujours on pourrait vivre *juste* en Alsace, on a tout.

vivre juste en Alsace は「まさに (折よく) アルザスで暮らす vivre exactement en Alsace」とも「(よそにわざわざ行かず) アルザスで暮らす」ともとれるが，(25b) の「(アルザスには) 何でもある on a tout」が付け加わることで，後者の解釈に傾くと Blanche-Benveniste は言う．このような場合，tout juste により積極的に <制限>（他性の排除）の意味へと導くことができる．

---

[32] ただし，(9 a/b) の解釈の両義性について見た通り，juste は必ずしも数量表現に直接かかわるわけではなく，文全体を対象とすることもある．

[33] Tu as {juste /? tout juste} 2 heures pour déjeuner. juste は exactement「チョウド２時間」と解釈すべきだろう．また，「(うまい具合に) チョウド～したところだ」という venir de の文脈も可能．例．Au pub je zappe et je tombe sur un beau film à Canal +, et ça tombe bien il *vient juste de* commencer. (インターネット)

tout juste が à peine, seulement の解釈を与えるとする Blanche-Benveniste の例をさらに二つ挙げておく．(26) は「やっと目覚めかけている」，(27) は「やっと名前が知られるようになった」とでもなるだろうか．juste / tout juste を対比すると，juste だけの場合は必ずしも「ちゃんと目覚めていない」，「まだ知名度が確立していない」などのネガティブな評価にはならない．

(26) son petit-fils était *tout juste* en train de se réveiller.

(27) à vingt quatre ans, Aznavour on sait *tout juste* qui c'est.

以上見たところから，juste には <一致> と <制限> の両義性があると結論づけられる．一方 tout juste は <制限> に特化される．時刻をいう次の対比はこの点をはっきりと示す．

(28) a. Il est 3 heures juste.（ちょうど３時だ）

b. Il est juste 3 heures.（まだ / ちょうど３時だ）

c. Il est tout juste 3 heures.（まだ３時だ）

d. ?Il est 3 heures tout juste.

規範的には，(28a) と対比される (28b) は「まだ３時だ」の <制限> 解釈とみなされるが，ネイティヴに尋ねると実際は (28a)「ちょうど３時だ」と同じ意味で用いることもできるという[34]．(28c) は「まだ３時だ」の解釈になるが，tout juste の後置 (28d) は奇妙に響く．

(29) a. Je veux {juste / tout juste} ton bonheur.

b. Je {ne veux juste que / ? ne veux tout juste que} ton bonheur.

(30) Il {ne faut juste qu' / ? ne faut tout juste qu'} un peu de temps.

ne que … による制限と juste が共起するのは，(29b) で Je veux *juste* ton bonheur, et *que* ça が冗長的ではないからであろう．逆に，tout juste は ne que に意味的に重なる部分があるということになる (? Je veux *tout juste* ton bonheur, et *que* ça)[35]．ne que を取り去った Je veux juste ça. / Je veux tout juste ça. は，素朴には両方とも seulement に置き換えられるので juste / tout juste は同じように見えるが，実は <制限> の意味が違っているから，両者を ne que や seulement (simplement) の文脈に挿入することで差異化が生じてくる．

(30) a. Il suffit (tout) juste d'un peu de temps.

b. Il faut (tout) juste un peu de temps.

(30) のように (tout) juste が用いられる文脈では，Il suffit も il faut も結果的には「少しの時間ダケデ十分」と解釈される．Il suffit は意味上常に他性を含意するので juste と tout juste は文脈によらずほぼ同一だが，il suffit（十分条件）と il faut（必要条件）は当然ながら異なっていて次例 (31) の il faut は juste に固有の使い方で tout juste は使えない．il faut には il suffit にはない他性を

[34] 同様のことが ça fait juste 10 euros. についても言える．

[35] 同様に，je veux *juste seulement* …, je veux *juste simplement* … の連鎖もあるが，? tout juste seulement, ? tout juste simplement は奇妙に響く．

考慮しない読みもあるからである．エイプリルフールの日に嘘のニュースを伝えた後，「次の点ダケハ言っておかなければならない」と主張している．

(31) J'aurais pu encore écrire des dizaines de lignes concernant une pareille bonne nouvelle, mais je *dois* quand même *juste* vous rappeler la date à laquelle j'écris ce mot : 1 avril 2008. (Internet[36])

3.2.2 tout juste

次に考察すべきは，tout juste の tout の機能は何か，なぜネガティブな評価になるか，c'est (tout) juste si 構文の条件，… などの問であろうが，本稿でこの点についてこれ以上追求する余裕はない[37]．ただ，tout juste は多くの場合，何らかの基準点を超える値を想定し，それ「以外・以上」を否定している．取りあえずは，tout juste X は juste X が構成する他性を含む事例（$x_{i,j,k,\ldots}$）を唯一の事例（x_i）に <限定> することと捉えておきたい．他性を含む事例（$x_{i,j,k,\ldots}$）が方向性を持っている場合，例えば数量表現（小→大）や時間表現（前→後）は tout juste の特権的な出現環境になる．しかし，次のようなケースはどのように考えるべきか．

(32) Cette expérience doit être effectuée à l'automne, *tout juste* au moment où les feuilles changent de couleur. (Internet[38])

(33) Ne cherche pas le bonheur il est *tout juste* devant toi. (Internet[39])

時間の一点を焦点化する (32) や 場所表現の (33) のようなタイプに，方向性に基づく <制限> はなく，tout juste はある時（t_i）や場所（l_i）との juste による <一致> の単なる強調とも見える．しかし，何らかの他性の可能性とその排除という否定的要因も考えられるのではないだろうか．すなわち，(32) では実験が遅過ぎたり早過ぎたりしてはいけない（$t_{i,j,k,\ldots}$の排除），(33) では眼の前の幸福をさしおいて遠くに探しに行くには及ばない（$l_{i,j,k,\ldots}$の排除）など，相手の反応（時期を逃す，遠くを求める）を先取りし否定する読み（時期を逃さない，遠くを求めない）が tout の引き金になっていると考えたい[40]．

---

[36] http://justicepournatacha.blogspot.jp/2008_04_01_archive.html　なお，このタイプの用例は英語の have to とともに用いられる just にも認められるようだ．友澤宏隆（2010 : 84）は，My ex-husband *just* had to buy the most expensive one という例を挙げ「私の前夫は一番高いものを買わないと気がすまなかったので，いつも一番高いものを買うことしかしなかった（そしてそれは自分にはどうしようもないことであった）」と注釈し，「(話者または相手が) それを避けることなく，やむおえない現実として受け入れる」という解釈を与えている．

[37] J-J. Franckel (1989) chap. *Tout* : 321-351, J-Cl. Anscombre (2007), 杉山 (2003, 2004a, 2004b) などの考察が参考になる．Leeman は，c'est tout just si … の構文の構成要素，tout と si を簡単に分析し成句の総合的意味の把握を試みているが，十分には説得的でない．なお，c'est {à peine / (tout) au plus / par hasard / rare / un miracle / bien le diable / du tonerre / tant mieux / tant pis} si など事実とそれに対する評価を導く c'est … si 構文の "…" に入る語彙の共通点についての検討も必要だろう．

[38] http://www.theforestacademy.com/experiences/d-ou-viennent-les-couleurs/

[39] http://heouiijulie.skyrock.com/3077014951-Ne-cherche-pas-le-bonheur-il-est-tout-juste-devant-toi-3.html

[40] juste / tout juste の <制限> が果たして同じ意味をもつのかはさらに考察する必要がある．例えば，a. Paul est *juste* un ami.（ポールは単なる友だちに過ぎない）/ b. Paul est *tout juste* un ami.（ポールは友だちと呼べるかどうか …）を比べると，a.の「友だち」であることは，「友だち以上の関係（愛人，…）」を拒否する読みになり，(b) は「友だち」として

4. justement の用法:<逆転> と <一致>

ここまで，副詞 juste について <一致> と <制限> という二重の性質を検討してきた．最後に副詞 justement にもある二重性について簡単に見ておく．S. Bruxelle et al.（1982）の研究で有名になった「逆転」の副詞 justement は，先行文脈にある対話相手の論拠を逆手にとる．この点で，対話相手の発言を必ずしも必要としない，いきなり発話が可能な副詞 juste とは文脈条件が違うことをまず確認しておく．

(34) の最後のセリフ a. は justement のみの単独用法で，先行する Y の「田舎で生まれた」（論拠）を受け，Y が導く方向とは逆に justement は「田舎生活は嫌い」を志向している．一方 b. では「田舎生活は嫌い」（結論）が明示化されている．

(34) X : Je n'épouserai pas ce type, je ne veux pas finir mes jours en rase campagne.
Y : Pourtant tu devrais aimer la campagne, tu y es née.
X : a. *Justement*.
b. *Justement*, je la déteste.

ところで，justement には「逆転」用法と並んで「一致」用法がある．相反するようにも思えるこの二つの用法は，ここまで論じてきた just の <一致> 用法と <制限> 用法の二重性と類似する面も持っている．

S. Bruxelle et al. (1982) を再検討した Serça (1996) は，発話副詞の justement[41]は，それが結びつける二つの要素（P, Q）を，(1) 逆方向（non に近い），(2) 同一方向（oui に近い），(3) 異なる方向（à [ce] propos に近い）とあらゆる方向転換ができることを示している．下例 (34) a. – c. が X の発話を受けた話者 Y による新たな三種類の方向付け (1)(2)(3) に対応する．

(34) X : Viens à ma soirée, il y aura sûrement ton copain Paul car j'invite sa femme.
Y : a. *Justement*, cette fille, je ne la supporte pas.
b. *Justement*, cette fille, j'avais envie de la rencontrer.
c. *Justement*, cette fille, je l'ai rencontrée hier au soir chez Renée.

この事実から一般化して，Serça は justement を「相手の発話を再利用」するマーカーという規定をしている[42]．justement の話者が，相手の発話意図とは独立して自在に自らの発話方向を

の度合いが境界値となる読みとなる．Cf. Leeman (p.19).

[41] 動詞にかかる副詞の用法もある．J'ai été *justement* puni（公正に）．Pierre a répondu *justement*（的確に）．副詞 juste の例 (1) に対応する用法である．

[42] "*Justement* marque une réappropriation du discours de l'autre." Serça (p. 31). ただし，先行する S. Bruxelle et al. (p.163) も「一致」用法と「逆転」用法を統一する観点について見通しを立て，二つの考え方が可能だとしている．(1) 先行文脈 P を話者が自分の都合に合わせて利用する．アプリオリには相手との「一致」も「対立」もない．(2) 相手の論拠 P との「一致」から出発して，その談話上の方向性を相手とは異なる結論に用いる．「一致」が基本的価値になる．Serça は (1) の考え方を採用していると考えられる．

定めることができるというわけだ．(34) の文脈で言えば，a〜c. 以外にも，X の発話に出現する要素や要素間の関係（soirée について，X の家について，Paul について，その妻について…）を話題にして justement は無数の発話のきっかけとなるだろう．

justement Q は，ただ前文脈 P との何らかの <一致> を指令するだけで，話者はそこからかなり自由に発話 $Q_{i,j,k,\ldots}$ を引き出せる．juste X は（前文脈ではなく）自らの発話を対象とし，当該事例 X（juste がかかる対象）と X から導かれる基準 Y との <一致> を指令すると考えることができる．しかし，基準 Y は既に見たように，質的違いを持つ事例のパラダイム（$X_{i,j,k,\ldots}$）の中に置かれている．juste X の場合は tout juste X と違い，他性は必ずしも前景化したり排除されたりするわけではない．従って，X と基準 Y との <一致> のみに光が当たる場合も，他の潜在的可能性（$X_{j,k,\ \ldots}$）を単に考慮する場合も，考慮するだけでなく積極的に排除する場合もあり，<制限> 解釈も１と２に分ける必要があった．justement には，出発点にある主体間の他性が必ず存在するが，他性は「逆転」用法のように必ずしも対立するわけではなく，<一致> することも単にずれていることもある．

おわりに

本来形容詞である juste は，1.「公正さ」「正義」「正確さ」などの規範との <一致> とともに，2.（un peu や trop をともなった）<限定> 用法が核としてある．同様の多義性が副詞 juste にもある．副詞 juste の意味を <一致> と <制限> の総合と捉え，juste がかかる対象を，A. 文構成要素，B. 文全体，C. 時間の三つに分類し，<一致> と <制限> のどちらの要素が関与するか，あるいは際立つかを記述し検討した．A. は，動詞修飾の場合は目標となる規範との <一致> が明らかで，その他の補語の場合は <一致> と <制限>（他性の排除を行う：「制限用法２」）の間に様々な均衡があり，基本的に疑問や否定（pas juste）とも馴染む．B. は主体間の了解を目指しての <一致> と <制限>（他性を考慮する：「制限用法１」）と特徴づけられ，否定・疑問とは一般的に馴染まないが，juste pas の否定形は可能である（pas juste は不可）．C. は，完了（近接過去）と未完了（展開相，将然相）があり，前者は <一致> を目指して基準時との差異を解消する方向へと <制限> し，後者は基準時との <一致> を焦点化するが，いずれも時間的同時性だけでなく，<制限> から生じる主観的意味（不都合，好都合）を備えている点に注意を払った．この場合は，疑問・否定とは馴染まない．

次に，juste と交代できる tout juste の文脈化の可能性と制約を論じた．juste は基本的には<一致> がその役割であり，<制限> は有標項と考えられる．逆に，tout juste は <制限> を前景化する．tout simplement / * tout seulement や ne … que juste / ? ne que tout juste の対比は，seulement や ne que の本来の働きである他性排除と積極的に <制限> を示す tout juste の冗長性によって説明できるという見通しを得た．「強意」の tout（+ 形容詞，+ 副詞，+ 場所表現）や C’est (tout)

juste si … の tout, si, juste の複合的働きについては，今後さらに考察の余地がある．

最後に，副詞 juste との関連で justement の「逆転」用法を広い観点から統一する視点について論じた．必ず先行する相手の発言や　状況を受けて出現する justement は，初期条件として主体間の他性を前提とし，論証理論による説明の枠組みが記述するように発話の目指す方向は「一致」したり，「逆転」したりするが，単に話題導入の引き金に過ぎないこともある．

参考文献

Abe, H & A-M. Maejima, (1995), "A propos de *ni plus ni moins*", 『言語と文化』3（東北大学言語文化部），345-359.

Anscombre, J-Cl. (2008), "*Il est tout jeune, ce Nølke* : contraintes sémantiques régissant l'emploi de *tout* + *Adj.*", *L'énonciation dans tous ses états*, Birkelund M., Mosegaard Hansen M.B., Noren C. (Ed.) 561-586.

Bat-Zeev Shyldcrot, H. (2001), "Grammaticalisation, changements sémantiques et quantification", *Travaux de CERLICO* 14, 11- 34.

Blanche-Benveniste, C (2001) "*juste* et *plein*, *tout juste* et *tout plein*", in. *Langage et référence. Mélanges offerts à Kerstin Jonassan à l'occasion de ses soixante ans*, Uppsala Studia Romanica Upsaliensa 63.

Bourdin, Ph. (1981), "Quelques remarques à propos de l'adverbe *juste*", *Semantikos* 5-2, 12-32.

Bruxelle, S. et al. (1982), "*Justement*, l'inversion argumentative", *Lexique* 1.

Charolles, M. & B. Lamiroy (2007), "Du lexique à la grammaire : *seulement, simplement*, *uniquement*", *Cahiers de Lexicologie* 90.

Culioli, A. (1997/1999),"A propos de la notion", *Pour une linguistique de l'énonciation Tome 3*, Ophrys.

Franckel, J-J. (1989), chap. "Tout", *Etudes de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz.

Guimiler, C. (1996), *Les adverbes du français. le cas des adverbes en -ment*, Ophrys.

Leeman, D. (2004), "L'emploi de *juste* comme adverbe d'énonciation", *Langue Française* 142, 17-30.

Nølke H. (1990), "Les adverbiaux contextuels : problèmes de classification", *Langue Française* 88, 12-27.

Serça, I. (1996), "A propos de justement", *L'informatin grammaticale* 71.

泉邦寿 (1993)『フランス語の語彙と表現　一歩進んだ意味の世界』，バベル・プレス．

杉山利恵子 (2003)「«tout + 形容詞» の意味と制約」『文芸研究』91（明治大学），232-250.

――― (2004a)「«tout + 副詞» の意味と制約」『文芸研究』92（明治大学），191-208.

――― (2004b)「tout + 場所を表す前置詞句」『文芸研究』94（明治大学），98-112.

――― (2005)「場所の前置詞句を強める tout / juste」『文芸研究』95（明治大学），98-112.

友澤宏隆 (2010)「限定の含意 : 副詞 just の意味と談話機能」,『言語文化』47（一橋大学)，75-93.
林博司 (2007 / 2009)「日本語とフランス語における緩和語法（１）（２）」『国際文化研究』27 & 33（神戸大学国際文化研究科)，53-71. & 39-60.

Transmettre があらわす伝達と全体性

須藤 佳子
日本大学

はじめに

動詞 transmettre は様々な伝達をあらわす.

― 伝言：*Transmettre un message, le bonjour, etc.*

― 病気の伝染：*Transmettre un virus, la peste, etc.*

― 受け取ったものを渡す：*Transmettre une lettre, etc.*

― 権利などの移譲：*Transmettre le pouvoir, une maison, etc.*

― 伝統などを伝える：*Transmettre une tradition, le goût pour la littérature, etc.*

― 物理現象の伝播 ：*Transmettre l'électricité, le mouvement, la chaleur, etc.*

Normand (2002) はこの動詞の特徴として，主語の指示対象が事行にたいして主体的な関与をしないということを挙げている．機械による伝達を表すときは言うまでもないが，主語の指示対象が人間であるときにも，自らの意志で責任をもって遂行するという主体的な関わり方をせず，没個性的で他の人と交換可能であるという．また著者によれば transmettre の直接目的語が document のように具体物を指すようにみえるものであっても，対象となるのは，その書類が伝える情報や内容であり，あくまで抽象物であると述べている．このように Normand は，動詞の特徴を主語の指示対象の主体性の低さと対象の抽象性によりとらえているため，サッカーやラグビーなどにおけるボールのパスについてこの動詞を用いる transmettre le ballon という表現は，不適切であるという (*op. cit.* p.150).

> Il paraît ainsi peu pertinent (malgré le *Petit Robert*[1]) de parler de *transmettre le ballon*, objet concret qu'on reçoit parfois sans l'avoir voulu mais dont on est, à ce moment du jeu, le passeur responsable.

確かに試合中のパスは責任をともなった主体的な行為であるので，Normand が指摘する動詞の特徴とはそぐわない．しかしながら，実例にあたってみると決して珍しい表現ではないことがわかる．とすれば，矛盾にみえる transmettre le ballon という表現が一体どうして使えるのかと問うてみなければならないだろう．

---

[1] Petit Robert では，« faire passer (un objet matériel) d'une personne à une autre »という定義のところで，« joueur qui transmet (le ballon), au rugby » という用例があげられている.

本稿では，この表現がなげかける疑問に答えるべく，動詞の本質的な意味構造について考察する．

1. 分析

Transmettre は，目的語や文脈により donner，envoyer，passer などと競合する．中でも passer とは少なからぬ用例で競合する．たとえば以下のように挨拶の伝言 (1) やメッセージの伝達 (2)，病気の伝染 (3)，権利の移譲 (4) をあらわす例などで，transmettre はほぼ意味を変えることなく passer と入れ換えることができる．

(1) Je vous {(a) transmets / (b) passe} le bonjour de Paul.

(2) Je lui ai {(a) transmis / (b) passé} le message de mes parents.

(3) Il m'a {(a) transmis / (b) passé} son microbe.

(4) Il a {(a) transmis / (b) passé} sa maison à son fils.

そこで，passer との比較を中心に transmettre の意味を検討していく．以下，動詞の主語，直接目的語，間接目的語の指示対象を，それぞれ X，Y，Z と表記することにする．

Passer について，様々な用法を検討し統一的な説明を試みた Franckel *et al.* (1997) によれば，この動詞には以下のような共通の操作があるという．

> La forme schématique que l'on peut associer à *passer* est formulable comme suit : étant donné une discontinuité sur une continuité première, *passer* reformule cette discontinuité comme continuité.
>
> Cette caractérisation fait apparaître trois niveaux :
>
> 1) Une continuité première : celle-ci peut par exemple se présenter comme une trajectoire, un mouvement, un écoulement et correspondre, plus largement, à un état de référence ;
>
> 2) la présence d'une discontinuité qui peut prendre des formes très diverses (obstacle, point d'observation, hiatus, hétérogénéité) ;
>
> 3) la reformulation de cette discontinuité comme continuité.

Passer があらわす X と Z の関係を連結ととらえれば，連結以前に断絶が前提とされるのは当然としても，そのさらに前段階に連結を設定しているところが興味深い．ここでは著者たちが説明する様々なバリエーションには立ち入らないが，連結→断絶→連結という 3 段階でとらえていることは transmettre を考察するうえでも示唆的である．Transmettre もまた，断絶を前提とした連結だけでは説明できないからである．しかしながらその結び付けは passer とはかなり違う．議論を先取りすれば，transmettre では二つの異なるレベルが問題となると考えている．以下ではおもに，二つの動詞の Z との組み合わせの可能性を比べることにより考察していこう．

まずは，transmettre と passer の両方が目的語としてとれるが，どちらと共起するかによって意味が変わるものを見ていこう．

(5) Ma grand-mère m'a {(a) transmis / (b) passé} son disque.

(6) J'ai {(a) transmis / (b) passé} une lettre à Marie.

まず (5a) (5b) を比べてみる．(5b) の自然な解釈は，「貸す」という所有権の移動を含まない物理的移動である．一方 (5a) では物理的移動に加えて所有権の移動が含まれる．しかしより重要な違いは，後者においてYがXの「形見」という意味合いがあることだ．もちろん (5a) ではXとZが親族関係にあることがこの意味あいを強めているのだが，たとえそれが明示されていなくても近い意味あいが読み込まれる．

次に (6a) (6b) を比べてみよう．(6b) は (5b) と同様，手紙の単なる物理的移動をあらわすのに対して，(6a) の自然な解釈は，Xが誰か他の人から預かったYをZに渡したという意味になる．Xが媒介をあらわすということは，意味の類似する他の動詞と比べてみると明らかである．

(6c) J'ai envoyé une lettre à Marie.

(7) J'ai {(a) transmis / (b) donné} un cadeau à ma fille.

(6c) の自然な解釈は Je が手紙の送り手であるだけでなくその手紙を書いた本人であるのに対して，(6a) のそれは手紙の書き手を別に想定させる．同様に (7b) では，Je が贈り物の主であることを想定させるのに対して，(7a) は誰か別の人の代わりに届けているように解釈される．対象としてYを選び受け手Zを選択しているのは，Xではなく，伝達の場にいないこの主体である．Transmettre があらわれる発話において，(5a) における親族関係，(6a) における伝達の場にいない主体との関係という，Yの移動が行われる特定の時空間に還元できない結びつきが示されていることが注目に値する．

passer の用例のうちYの移動が状況依存である場合は，transmettre と入れ換えることは難しい．

(8) Elle m'a {(a) ?? transmis / (b) passé} l'envie de bâiller.

(9) Il m'a {(a) ? transmis / (b) passé} son tic de langage.

(10) Mon collocataire m'a {(a) ? transmis / (b) passé} sa mauvaise habitude.

いずれも，Xの状態や振る舞いYが無意識的な模倣によってZに移ることをあらわし，XとZが同じ場にいるという状況的な結びつきが要因となって Y の伝達がなされている文脈である．Transmettre の発話 (8a) (9a) (10a) はどれも容認度が低い．

同様に，passer の用例のうち物理的移動のみをあらわす文脈でも transmettre と入れ換えることはできない．

(11) Jean a {(a) ?? transmis / (b) passé} le sel à Paul.

(11a) は「塩を（とって）渡す」という文脈では非文に近い．しかしインフォーマントによれば，渡される塩に特別な価値（宗教的な価値のある聖なる塩など）を認める文脈では容認可能だという．同じように，次の (12a) も「ポールの話を伝えた」という意味では容認度が低いが，

Normand (2002) でも指摘されているとおり，Y が伝説的な逸話と解釈できれば transmettre も容認される．

(12) On m'a {(a) ?? transmis / (b) raconté} l'histoire de Paul.

ある塩が伝達に値する特別な価値を持つためには，そのような価値を構築する枠組みとコミュニティーが想定されなければならない．また，ある逸話が伝説になるには，それを語り継ぐ話者集団が必要であり，その場合 X による Y の Z への伝達（図式化すれば＜Y：X→Z＞）はそれ以前とそれ以降の伝達の連続性の中に位置づけられることになる．

つまり (11a) (12a) が容認されるとすれば，それは受け手が新たな送り手となって順繰りに続いていくリレー式伝達（＜Y：Xi→Zi=Xj→Zj=Xk→Zk...＞）であり，順序立てて並ぶひとつのまとまりとしてとらえられた伝達者の集団が想定できる場合である．このことは，transmettre が用いられるためには個別の事項を超えた全体的枠組みが要請されるということを示している．

また先に (5a) や (6a) で Y の移動が行われる特定の時空間に還元できない結びつきがあることをみたが，これも全体レベルでの結びつきととらえることができる．

つまり，transmettre は二つの異なるレベルを導入するのである．X による事行の実現という「個」のレベルと，特定の時間や場を超え X と Z を結びつける枠組みという「全体」のレベルである．個のレベルでは passer と同様に X と Z の間に断絶が前提とされるが，全体のレベルでは両者は連続するものとしてとらえなおされる．

1.1「全体」としての系統

順序立てて並ぶひとまとまりとしての伝達者集団は，なんらかの系統を構成する．このことをもうすこし詳しく検証してみよう．すでに述べたが，病気，権利，情報をあらわす目的語とは，transmettre も passer も共起できる．しかし，文脈によってはどちらかしか容認されない．まず，権利の移譲をあらわす場合を見ていこう．

(4) Il a {(a) transmis / (b) passé} sa maison à son fils.

(13) Il a {(a) ?? transmis / (b) passé} sa maison à son fils pendant les vacances.

(14) Le roi a {(a) transmis / (b) ? passé} le pouvoir au prince.

X と Z が組み込まれる系統 (嫡系) が明示される (14a) では transmettre が自然に容認され，反対に系統の連続性が問題にされない一時的受け渡しをあらわす文脈 (13a) では不自然となる．

先に (11) (12) について考察したことと関連するが，(14a) のように伝達するに値する価値をあらわす目的語が transmettre と結びつきやすい．フランスで大統領が交代するときに行われる様々な権限の移譲を passation des pouvoirs というのにたいして，権限のなかでも核兵器発動コードの伝達は transmission (transmettre) であらわされる．例えば以下の例において transmettre を passer に換えることは不自然である．

(15) Le président sortant a informé le président élu sur les dossiers chauds ou ceux qui lui

tiennent particulièrement à cœur et lui **transmet** le code nucléaire, véritable symbole de la puissance de la fonction présidentielle. (*Rue 89* 16-05-2007)

核兵器発動はまさに大統領権限の象徴そのものである．そして，前大統領（X）と次期大統領（Z）が歴代大統領系譜の連続性のなかで関係づけられているということが transmettre によりあらわされる．

このようにtransmettreが用いられる発話では, XとZが組み込まれる全体レベルが導入され, そのレベルではXとZは連続したものとしてとらえられなければならない. 以下の例においてtransmettreの容認度が低いのは，そのような全体が想定しにくいからであろう．

(16) Suite à l'échec à l'élection, le parti conservateur a {(a) ? transmis / (b) passé} le pouvoir au parti démocrate.

伝達されるべきYの価値は，かならずしもXにとって好ましいとは限らない．ウィルスのように害を及ぼすものである場合もある．しかしいずれの場合でもYには伝達される自律的な動因（それが構築された価値によるものであっても，生物的な力であっても）があり，それがXに依存しないということが重要である．

それでは病気の伝染をあらわす場合を見ていこう．

(3) Il m'a {(a) transmis / (b) passé} son microbe.

(17) Il m'a {(a) ? transmis / (b) passé} son rhume.

ウィルスの伝染をあらわす (3a) (3b) はどちらも容認できるが，風邪の感染については passer との組み合わせ (17b) の方が自然である．一方，感染経路が問題とされやすいエイズ感染にはtransmettre le sidaが常套表現として使われるが, 感染経路とはすなわち順序立てて並べられた伝達者集団のことである．

さらに，遺伝性疾患をあらわす目的語を passer との組み合わせるのは不自然である．

(18) Il m'a {(a) transmis / (b) ? passé} une maladie génétique.

遺伝子により親から子へと伝達される遺伝は, 風邪ウィルスの感染のように状況依存ではなく，血のつながりが生む家系という伝達者の集合体を前提とする．いずれも，YがZに伝わるだけでなく，その伝達をささえる枠組みが前提とされ，そのような枠組みとして何らかの系統が導入されるというのがpasserにはないtransmettreの特徴である．

系統としてはこの他，教育的あるいは宗教的なものもある．

(19) Il m'a {(a) transmis / (b)? passé} la connaissance philosophique.

(20) Le curé m'a {(a) transmis / (b)? passé} la foi.

どちらもpasserはやや不自然であるのに対し，transmettreは問題なく容認できる．(19a) では教師Xと生徒Zの間の知識Yの伝達をささえる教育という枠組が，(20a) では司祭Xと信者Zの間での信仰Yの伝達をささえる宗教という枠組みが導入されている．

ここまで，transmettre がリレー式伝達をあらわす場合に，「全体」として X と Z が属する系統が導入されることをみた．Transmettre が導入する全体には，いくつかのバリエーションがある．以下それをみていこう．

1.2「全体」のバリエーション

1.2.1 移動を意図する別の主体がいる場合

すでに観察したとおり，transmettre が伝言をあらわす場合 (1a) や預かったものを渡すことを意味する場合 (6a) では，X と異なる主体の存在が前提とされる．事行が X にかかわりなく定められているということは，X のレベルに先んずる意図主体（I とする）のレベルがあるということだ．言いかえれば，事行<Y ： X→Z>は，<Y:I→X→Z>という「全体」の流れに組み込まれるよう解釈しなおされるということである．

なお，transmettre が挨拶の伝言をあらわすときには，tutoiement とはそぐわないということを指摘しておこう．

(1) Je vous {(a) transmets / (b) passe} le bonjour de Paul.

(1') Je **te** {(a) ? transmets / (b) passe} le bonjour de Paul.

(1'a) が不自然なのは，レベルの二重性に起因する距離感のためと考えられる．

しばしば transmettre は「媒介」という概念と結びつけて記述されることが多いが，伝達を意図する主体が X の他にいるかどうかという問題は二次的な問題であるということがわかる．実際 (21) のように，X が自ら伝達を意図し、そのため媒介とは考えにくい例も多くある．重要なのは，別の主体にしろ，系統にしろ，個別の事行のレベルとは別の全体レベルが導入されるということである．

1.2.2「全体」としてのメカニズム

メッセージの受け渡しが電報によってなされる以下の例では，Y を選択し送り手 Z を定める意図主体は X 自身である．

(21) Transmettre un message télégraphique / transmettre télégraphiquement une nouvelle. (*TLF*)

しかしながら，Y が電子コード化され送信される一連のメカニズムは，X の意志によるコントロール外であり，その点で以下のような物理的伝達と近い．

(22) Les nerfs **transmettent** l'excitation aux centres nerveux. (*Lexis*)

(23) Le mouvement **est transmis** aux roues par un arbre moteur. (*id.*)

(21) においてもあらかじめ成立しているメカニズムのなかで, X と Z は Y の発信者と受信者という役割を担っている．そして transmettre le bonjour のタイプの例と同様に，メッセージの送信の場と受信の場とが分断されており，X と Z の間に発話の場は作られない．伝達の全体的な枠組みが，X に依存せずに決まっているという点に，これまでの例との共通点を見出すことができる．

1.2.3「全体」としての組織

Y が dossier などである場合には，全体として一つのまとまりとして動く組織が問題となる．この場合，Y の物理的移動<Y : X→Z>は，その組織で Y が取り扱われるための X と Z の役割分担として読み込まれる．

(24) Comme le veut la procédure, le consulat **a transmis** le dossier pour instructions au procureur de la République du tribunal de Nantes, qui exerce la tutelle en matière d'état civil pour les expatriés. (*Rue 89* 18/06/2008)

(25) En cas de nouvelle infraction, l'Hadopi **transmet** le dossier à un juge, qui peut vous condamner à une amende ou ordonner la suspension de la connexion à Internet des « pirates » pendant un mois. (*Rue 89* 28/09/2010)

(26) Ils (les orphelins haïtiens) n'avaient donc reçu aucune aide et aucune recherche ne semble avoir été entreprise pour s'assurer de la présence, de la santé et de la vie même, des enfants dont les dossiers ont pourtant **été transmis** aux services de Bernard Kouchner. (*Rue 89* 25/01/2010)

(24) では Comme le veut la procédure という表現が明示するように，伝達のプロセスやルートは，X が伝達を行うかどうかに関わらず，あらかじめ組織レベルでとりきめられている．(25) は，不正ダウンロードを取り締まるための公的機関 Hadopi（Haute autorité pour la diffusion des œuvres et la protection des droits sur Internet）の説明の一部である．Hadopi（X）と判事（Z）は不正ダウンロードを取り締まるという共通の目的のため連携する．X は不正ダウンロードを行った者の書類を Z に送り，Z はその人のインターネットへのアクセスを切断するなど制裁を加えるという役割分担がなされている． (26) ではプロトコールにしたがって Y が Z に渡されたのに対して，Z がなすべきことをなしていないことを批判する文脈である．

このように X と Z は，組織という全体において連携し，事行はその組織が Y に対してもっている目的（文書の作成や審議など）にそうものとして解釈される．言い換えれば，組織のレベルから見れば事行は目的達成のための手段とみなされるということである．

また Normand (2002 : 149) において不適切な例として挙げられている transmettre un tract, une affiche, un livre は，インフォーマントによれば，受け手が対象にたいして何か（レイアウトのチェックなど）をする義務をする負う文脈であれば容認できるという．X と Z が共通の目的をもって役割を分担するという組織性や目的性を読み込めれば容認可能になるというところが興味深い．

実際，transmettre が容認される文脈では，X と Z の間に単なる＜送り手―受け手＞を超えた関係が要請される．以下の例文を比べてみよう．

(27) La police **a diffusé** dans la rue les photos du prisonnier évadé.

(28) La prison **a transmis** aux enquêteurs les photos du prisonnier évadé.

(27) と比べて，(28) では，写真の配布が脱走囚の行方を調べるという目的のために行われ，受け手もその目的に合わせて特定されていることがはっきりしている．＜刑務所—捜査員＞は，＜送り手—受け手＞であるだけでなく，共通の目的のために連携して，組織的に結びついている．つまり，(28) には (27) にない目的性があり，X と Z がその部分となるようなひとつのまとまりを持った連携組織の存在が想定されているということだ. Transmettre があらわす事行は，その組織による目的達成のための作業工程としてとらえられることになる．Diffuser にはこのような特徴がないため，動詞を入れ換えた下の (28') は容認度が下がる．同様に，(27') の文脈は transmettre にとっては非特定的すぎて組織性が問題にできないので容認度が下がる．

(27') ?La police **a transmis** dans la rue les photos du prisonnier évadé.

(28') ?La prison **a diffusé** aux enquêteurs les photos du prisonnier évadé.

ここでの組織性とは，必ずしも会社や機関などに限らず，複数が共通の目的をもち連携する結合体に対して広く用いている．したがって，目的性と組織性は互いに補完しあう概念であり，X の伝達の個別性にたいして全体性を導入している．

ここでは transmettre がどのような「全体」を導入するのか，そのバリエーションを検討した．いずれの場合にも，導入される全体のレベルは，X が事行を行うかどうかにかかわらず決まっており，X はその構成や規則の外におかれている．そのような全体のレベルから，X の個別の事行がとらえなおされる．

1.3 仮説の提示

ここまでの考察から，動詞 transmettre について次のような仮説を導くことができる．

仮説 ： transmettre は，X の行う事行が，それに依存しない全体の観点から目的志向的にとらえなおされるということをあらわす.

X とは別の意図主体の存在が明らかな場合にはその主体の観点が，そのような主体の存在が問題とされない場合には X を含む全体の観点が導入される．X が行う事行は，前者の場合にはその別の主体の意向にそうものとして，後者の場合にはデフォルトでその全体に固有な仕組みと目的に則ったものとしてとらえられる．全体は，Y の伝達価値を構築しそれをささえるコミュニティとしての系統，一連のメカニズム，ひとつのまとまりとして機能する組織などであり，そのレベルでは，X と Z は連続性のなかでとらえなおされる．

2. Transmettre le ballon は可能か — 実例の検討

それでは，ここまでの考察をもとに，本論の冒頭で言及した transmettre le ballon の実例を検討しよう．既にふれたとおり Normand (2002) では transmettre le ballon が容認し難い例として挙げられている．確かに，彼女の主張するとおり Y の抽象性と X の主体性のなさが動詞の特徴であるとすれば，ボールをパスするという具体的かつ主体的行為にはそぐわないであろう．しか

しながら，辞書にも記載されているこの表現は，調べてみると決して珍しいものではない．ただし用いられるのはサッカー，ラグビー，ハンドボールなどチームで行う球技に限られ，ボールを使うスポーツでも卓球やテニスにおいては用いられない．また団体球技であっても，transmettre が用いられるのは同じチーム内のボールの受け渡しに限られ，相手チームとのボールのやりとりには用いることはできない.

ここでは, サッカーの試合における実況中継のスクリプトを検討する. 調査対象としたのは, ボルドーのサッカーチーム Girondins の web サイト[2]と，ボルドーチームのファンによるブログ[3]に掲載されていたスクリプトである. ブログは公式サイトのものを転載していると思われるが, もとのページが見当たらずブログにしかなかった一試合のスクリプトを加えた．ブログには, フランスチームの試合のスクリプトもあったのでこれも加えてある. 合計 37 試合の実況中継のスクリプトを調べたところ，8 試合（公式サイトから 6 試合，ブログから 2 試合分）のスクリプトにおいて transmettre のこの用例が 11 例見つかった. このことからまず, transmettre (le ballon) が決して珍しい表現ではないということがわかる.

さらにこれらの例には興味深い傾向が見出された．すなわちボールを渡される Z のポジションが特定のものに偏っていることだ．11 例のうち 8 例が，Z がフォワードである場合だった．その他, Z がミッドフィールダーであるのが 2 例, Z がゴールキーパーである例が 1 例あった．Z がフォワードであった例のうち半数の 4 例は，Z がシュートしており，そのうち 1 例はゴールが決まっている．その他の 4 例は，Z がさらに別のフォワードにパスをしようとし，うち 1 例は Z からボールを受け取った仲間（Z1 と記す）がゴールを決めている．Z がミッドフィールダーである 2 例のうち，1 例は Z がシュートし，もう一例はフォワードに渡そうとしている．面白いことに，11 例いずれも，transmettre がゴール付近でのパスをあらわすために用いられている．しかも，Z がキーパーである 1 例を除くすべてにおいて，ボールが Z に渡ったその先にゴールを想定できる場合に動詞があらわれている.

以下はゴールが決まった例である．（例文の後カッコの中の FW，MO，GB は，それぞれフォワード，ミッドフィールダー，ゴールキーパーをあらわす.）

(29) BUTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTTT!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

Jussiê récupère le ballon côté gauche et le **transmet** à Gourcuff qui frappe en première intention à l'entrée de la surface. Le ballon vient mourir dans le soupirail côté droit de Doni qui malgré son plongeon ne peut que constater les dégâts.[4] (Z : FW)

---

[2] http://www.girondins.com/

[3] http://les-bordelais-flingueur.skyrock.com/

[4] 原文ママ．出典は，2008 年 10 月 1 日の対 AS Roma 戦のスクリプト．試合開始から 18 分後．Doni は相手チームのゴールキーパーである.

(30) BUT de Giroud pour la France ! Le contre exceptionnel des Bleus au bout du bout du temps additionnel ! Sissoko s'échappe sur la gauche, il **transmet** à Ribéry dans le bon tempo, qui centre du gauche en retrait vers Giroud, dont la tête décroisée laisse Casillas sans aucune réaction ![5] (Z : MO/FW, Z1 : FW)

(29) では, Z (Gourcuff) がボールを受けた後シュートしゴールを決めている. (30) では, Z (Ribéry) がゴール付近にいる Z1 (Giroud) にシュートさせるためにセンタリングをし, Z1 がゴールを決めている.

以下の例では, 得点にはつながらないものの, Z がシュートをしていることが明らかである.

(31) Obertan encore lui enrhume Riise grâce à sa technique balle au pied. Il **transmet** le ballon à Gourcuff qui frappe aux 20 mètres. La ballon passe sur le côté droit des buts de Doni.[6] (Z : FW)

(32) Saivet récupère et **transmet** à Bellion, seul, mais sa frappe passe loin au-dessus.[7] (Z : FW)

Transmettre によりあらわされているのはいずれも, ゴールが決まるかどうかは別として, シュートが期待できる選手へのパスであり, シュートを導く重要なパスといえるのである.

このことは, 前節の分析により導き出された仮説からどのように説明できるだろうか. 試合中の同一チームのボールの流れを「全体」としてみれば, その目的はゴールを決めることによる得点の獲得である. あるパスについて transmettre が用いられのは, ゴールを決めるという目的からいわば逆算されたときではないだろうか. 結果的にはゴールに至らなくても, 解説者が, X が Z にボールを渡すことを得点獲得に向けた役割分担として目的志向的にとらえる場合に, transmettre があらわれると考えられる.

では, Z がキーパーである以下の例はどう考えたらよいだろうか.

(33) Superbe geste de dégagement de Tremoulinas qui **transmet** à Olimpa. Bordeaux maitrise.[8] (Z : GB)

この例文があらわれるのは, X が相手チームからボールを奪い味方のキーパー (Z) にボールを渡すことで相手チームの攻撃をかわしている場面である. 続く発話 (Bordeaux maitrise) に明示されるように, この状況ではゴール付近の緊張を沈静化させ情勢を安定することが目的であり, その目的にそった連携がおこなわれていると解釈できる.

このように, コーパス内の transmettre で表現されたパスはいずれも X の主体的な行為をあらわしている. しかし, X のレベルでは責任をもって遂行する行為であっても, チーム全体の観点からすれば目的に対する手段として与えられた役割を果たしているにすぎないととらえることもできる. Normand (2002) がこの表現に見出した矛盾は, この動詞が全体の観点を導入する

[5] 2012 年 10 月 16 日, フランス対スペイン戦. 試合開始から 90 分後. Casillas は相手チームのゴールキーパー.
[6] (29) と同じ, 2008 年 10 月 1 日の対 AS Roma 戦. 試合開始から 14 分後.
[7] 2012 年 1 月 14 日, 対 Valenciennes 戦, 試合開始から 89 分後. 文中の seul はノーマークをあらわす.
[8] 2008 年 11 月 8 日, 対 Auxerre 戦, 試合開始から 77 分後.

と考えることにより解消されることになる.

おわりに

本稿では伝達動詞 transmettre の意味構造を考察した. そして transmettre le ballon という一見矛盾をはらむように見える表現は，個別と全体という観点の二重性からとらえることで説明できることを示した.

参考文献

Debray, R. (2001), "Communiquer moins, transmettre plus", *Les diagonales du médiologue : transmission, influence, mobilité*, Paris, Bibliothèque nationale de France, coll. « Conférences DelDuca », 7-29.

Franckel, J.-J., Paillard, D. & E. Saunier (1997), "Modes de régulation de la variation sémantique d'une unité lexicale. Le cas du verbe *passer*", *La locution : entre lexique, syntaxe et pragrmatique*, Inalf, Klincksieck.

Méchoulan, E. (dir.), (2005), *Transmettre, Intermédialités,* 5.

Moser, W. (2005), "Transmettre et communiquer. Chassés-croisés conceptuels à partir de Régis Debray", *Intermédialités,* 5, « *Transmettre* », 191-206.

Normand, N. (2002), "Transmettre, dit-on ; mais quoi ?", *Linx*, 47, 147-158.

小熊和郎 (2009)「Mettre の柔軟性と制約」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』52, 1-26.

フランス語と日本語における指示と照応
談話モデルの観点から

東郷 雄二
京都大学

1. はじめに

談話理解において指示 (référence) と照応 (anaphore) が重要な役割を果たしていることは誰もが認めるところだろう．指示と照応については過去に膨大な研究の蓄積がある．しかしながら例えば，Un homme est entré dans la salle d'attente. Il s'est assis à côté d'une vieille dame. における un homme → il という代名詞照応を例に取ると，代名詞 il は先行詞 un homme を「指している」または「受けている」という考え方がいまだに支配的ではないだろうか．このような考え方を代表するのはテクスト言語学の立場を採る Halliday & Hasan (1976) だろう．

> Substitution, on the other hand, is a relation within the text. A substitution is a sort of counter which is used in place of the repetition of a particular item. For example, in
>
> [3:1]a. My axe is too blunt. I must get a sharper one.
>
> b. You think Joan already knows? — I think everybody does.
>
> *one* and *does* are both substitutes : *one* substitutes for axe, and *does* for knows. And whereas in reference there is no implication that the presupposed item could itself have figured in the text, and in many instances we know it could not have done, this IS implied in the case of substitution. Thus, in [3:1 a and b] it would be entirely possible to 'replace' *one* by *axe* and *does* by *knows*. (Halliday & Hasan 1976)

照応過程を「代用」(substitution) と呼ぶ Halliday & Hasan は，例文 [3:1 a]で one を axe で置き換えることができ，[3:1 b]では does を knows で置き換えられると述べている．言うまでもなくここで著者たちの念頭にあるのは逆の操作で，不定代名詞 one は axe の代用で，動詞句照応形 does は knows の代用だと考えているのである．「代用」という概念は，照応過程を単語と単語の関係だと見なしていることを示している．

ところがこのような見方では説明できない現象がたくさんあることも知られている．

(1) The car came racing round the corner although the lights were on red. I suppose *he* must have overlooked them. (Bosch 1983)

(2) ［メガネ店の張り紙］Si vous trouvez moins cher, je *les* casse. (Cornish 1999)

(3) one had a uh … I don't know what you call *them*, but *it*'s a paddle, and a ball … is attached to the paddle, and you know you bounce *it*. (Chafe 1980)

(4) A German shepherd bit me yesterday. *They* are really vicious beasts. (Nash-Webber 1977)

(1)では代名詞 he の先行詞がない．このような場合，the car との連想関係で he が導出される連想照応と見なされることが多い．しかし，連想照応で用いられる照応形は定名詞句に限られ代名詞は不可だとされるが，(1) ではそれにもかかわらず代名詞が用いられている．(2) は状況から je casse les prix 「値引きをする」の les prix が代名詞化されていることがわかるが，先行詞がないことに変わりはない．(3) は実験でビデオを見せられた被験者が，見たものを思い出して言語化している例である．them には先行詞がなく，おまけに直後に単数形の it に置き換えられており，数の揺れが観察される．(4) では they の先行詞は a German shepherd だと考えられるが，先行詞は単数で照応代名詞は複数で，数が一致していない．これらの例では照応過程を単語と単語の関係という表層の統語的関係と見なすことができないのは明らかである．このような事例は「推論に基づく照応」 (inferential anaphora cf. Webber 1978) と呼ばれることがあるが，そう呼んだだけでは問題は解決しないので，どのよう推論過程がそこにあるかを明らかにしなくてはならない．そのためには一定の理論装置が必要とされる．本稿ではメンタル・スペース理論を改変した談話モデル理論に基づいてこれらの事例を考察する．

なお本稿で考察の及ぶ範囲は３人称代名詞 (il, ils, elle, elles)に限定する．指示代名詞 ce や中性代名詞 en，le premier， ce dernier など照応機能を果たす語は他にもあるが，ここでは考察の対象とはしない．

2. 照応過程と談話情報の累積性

前節で次の例を挙げたが，そもそもこのケースは何の問題もない照応なのだろうか．

(5) Un homme est entré dans la salle d'attente. *Il* s'est assis à côté d'une vieille dame.

Halliday & Hasan 流に代用という考えを単純に適用すると，il は un homme の代用なのだから，置き換えることができるはずである．

(6) Un homme est entré dans la salle d'attente. *Un homme* s'est assis à côté d'une vieille dame.

ところがこうすると一つ目の un homme と二つ目の un homme は別の人を指すことになり，(5) とは意味が変わってしまう．この事実は代名詞 il が先行詞の単なる代用ではないことを示している．(5)の il を何かで置き換えるとすれば，次のようにしなくてはならない．

(7) Un homme est entré dans la salle d'attente. *L'homme (qui est entré dans la salle d'attente)* s'est assis à côté d'une vieille dame.

これなら元の (5) の意味を保持できる．ところが不思議なことに il の代わりに納まったのは l'homme (qui est entré dans la salle d'attente) という定名詞句である．第１文の不定名詞句 un

homme はいつの間にか定名詞句に変化している．少し考えれば誰にでもわかるこの問題を正面から取り上げたのは，筆者の知る限り Õim (1973) しかない．

この事実は次のような直感にも合致している．un homme は不定名詞句であり，il は定代名詞である．不定と定が同一指示の関係を結ぶことはありえない．そもそも「不定」とは，ざっくり言えば，「どれ / 誰を指しているのかわからない」という状態で，「定」とは「どれ / 誰を指しているのかわかっている」という状態である．どれを指しているのかがわからなければ，そもそも同一指示など成り立つ訳がない．同一指示は定と定の間でなければ成立しない[1]．したがって，(7) で il と l'homme (qui est entré dans la salle d'attente) が同一指示というのは，どちらも定なのだから理に叶っている．

それでは (7) ではどうして不定がいつの間にか定に変化したのだろうか．この問に答えるためには**談話情報の累積性**を考える必要がある．従来の言語研究の大部分は，文を最大の単位とする文・文法 (grammaire de phrase) であるため，文の境界を越える照応過程をうまく扱うことができない．形式意味論の量化子もその作用域は文を越えないので，同じ問題に直面する[2]．談話を扱う談話文法 (grammaire de discours) は文の境界を越える言語現象を解明しなくてはならない．そこで鍵となる概念が談話情報の累積性である．これはかんたんに言えば，「談話の進行に従って文の表す意味は次々と記録媒体に書き込まれて蓄積されてゆく」ということである．

この概念を次のモデルで説明してみよう．まず３つの文から成るミニ談話を考える．

(8) a. Un homme est entré dans la salle d'attente.
b. Il s'est assis à côté d'une vieille dame.
c. Il portait un pardessus gris.

名詞句によって談話世界 (univers de discours) に導入される指示対象を談話指示子 (discourse referent) と呼ぶ[3]．第１文によって un homme に対応する談話指示子 a が談話世界に導入される．la salle d'attente は談話の調整作用 (accommodation) によって，談話世界に最初から存在しているものと理解される[4]．この時点で談話世界 (UD) は次のように構成される．

UD1 : [a, b]　ただし，a = un homme,　b = la salle d'attente

第２文によって une vieille dame の談話指示子 c が導入されると，談話世界は次のようにアップデートされる．

---

[1] Combien de *pommes* voulez-vous ? — J'*en* voudrais trois. では，先行詞 pommes も代名詞 en も不定なので，不定と不定の間で照応過程が成立しているが，同一指示ではないことに注意されたい．同一指示は外延に関わるが，ここでは内包の同一性だけが成り立っており，しばしば identity of sense anaphora と呼ばれる．

[2] この課題を解決しようとしたのが動的意味論 (dynamic semantics) だが，一階述語論理と同じように不定名詞句を変数として扱っているため，根本的な解決にはなっていない．

[3] discourse referent という用語を初めて用いたのは Karttunen (1976) である．談話指示子は言語外的指示対象ではなく，話し手と聞き手の心の中に構築される実体 (entity)である．

[4] accommodation については Lewis (1979)を参照．

UD2 : [a, b, c]　ただし，a = un homme,　b = la salle d'attente,　c = une vieille dame

ここで注意しなくてはならないのは un homme に対応する談話指示子 a の変化である. 文が表す情報は関係する談話指示子にタグとして付加されると考えよう．小包に荷札をくくり付けるように，談話指示子には文が表す意味が書き込まれたタグが次々と付加される．このように考えると，第２文 (8 b) の il が表しているのはもはや un homme ではない．その談話指示子には，すでに第１文の情報 x est entré dans la salle d'attente が書き込まれている．したがって (8 b) で il が表しているのは，次の枠内の談話情報全部を総合したものということになる[5].

a = un homme a est entré dans la salle d'attente.

しかしこれを言語的に表現しても，*un* homme qui est entré dans la salle d'attente にしかならず，(7) で il を置き換えた *l'*homme qui est entré dans la salle d'attente にはならない．談話情報の累積性を実現するためには，情報が付加される指示対象は「定」である必要がある．どれだかわからない指示対象にいくら情報を付加しても，情報はただ分散するだけで累積された情報にはならないからである．ここで次の談話解釈規則を仮定しよう．

談話解釈規則

談話世界に不定名詞句によって導入された談話指示子は，それ以後の談話においては変数ではなく定数として扱われる．

Russell 以来, 形式意味論においては伝統的に un homme のような不定名詞句は∃x [homme(x)] という変数を含む存在量化表現として扱われて来た．しかし談話理解のプロセスを解明するためには，この規則が示すように定数として扱う必要がある．

これは私たちが物語を理解するときの次のような直感にも合致している.「昔々あるところに，お爺さんとお婆さんが住んでおりました．お爺さんは山へ芝刈りに，お婆さんは川へ洗濯に行きました」という物語の冒頭では，名詞句「お爺さん」「お婆さん」は意味からして不定名詞句であり，その談話指示子は最初は変数として談話世界に登録される．しかし，二度目の「お爺さん」「お婆さん」はもはや不定ではなく定名詞句である．さっき物語に導入した「そのお爺さ

[5] 見てすぐにわかるように，これは Kamp & Reyle (1993) の談話表示理論 (Discourse Representation Theory) 風の書き方で，細かい約束事を省略した簡略表記であることを断っておく．談話表示理論は談話情報の累積性を表現できる理論装置である．ただし，談話表示理論において照応は，変数と変数の同一関係と見なされており，その点で本稿の立場とは異なる.

ん」「そのお婆さん」であり，どこの誰でもかまわない不定のお爺さん・お婆さんではない．このことは，不定（すなわち変数）として談話世界に導入された談話指示子は，それ以後，定として扱われることを示している．

(8) のミニ談話に戻る．(8 c) Il portait un pardessus gris.では新たに談話指示子 d = un pardessu gris が導入されるが，それはさておき重要なのは主語 il の変化である．(8 a)の un homme は (8 b)では il = l'homme qui est entré dans la salle d'attente へとアップデートされた．同じ談話指示子は (8 c) において，il = l'homme qui est entré dans la salle d'attente et qui s'est assis à côté d'une vieille femme へとアップデートされねばならない[6]．

3. 談話理解の心的モデル：談話モデル理論

前節でその概要を見た談話情報の累積性をモデル化するために，談話モデル (modèle du discours) という理論装置を考える．詳細については東郷 (1999, 2000, 2001, 2002)を参照していただきたい．概要は次のとおりである．

談話モデルとは Fauconnier のメンタル・スペース理論に基づく談話理解のための心的モデルであり，共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域の３つの下位領域で構成される．共有知識領域はさらに百科事典的知識領域とエピソード記憶領域に分割される．

百科事典的知識領域には，私たちが世界について持っている知識とそれにまつわる談話指示子が登録されている．

(9) a. Christophe Colomb découvrit l'Amérique en 1492.

b. Le chat est carnivore.

この領域には Christophe Colomb や l'Amérique のような固有名，le chat のような類名と，それに関する情報が登録される．エピソード記憶領域はより個人的で，話し手の生活圏に属する事物や友人・知人，また個人的体験情報が登録される．

(10) a. Paul m'a téléphoné hier soir.

b. Tu te souviens du restaurant où nous sommes allés la semaine dernière ?

エピソード記憶領域は Paul のような固有名，「先週いっしょに行ったレストラン」などの体験的情報を収める領域であり，百科辞典的知識領域よりも局所的で流動的な記憶領域である．

発話状況領域は発話の場の心的表示であり，ここにはデフォルトで話し手と聞き手，および発話の場に知覚可能な事物が登録される．

(10) Attendez-moi ici un moment.

(11) 「その時計，どうしたの」「これは誕生日にもらったんだ」

---

[6] 同じように談話情報の累積性を考えたモデルとしては Langacker (2001) があるが，残念ながらその考察は断片的であり，実際に動かせるように実装されていない．

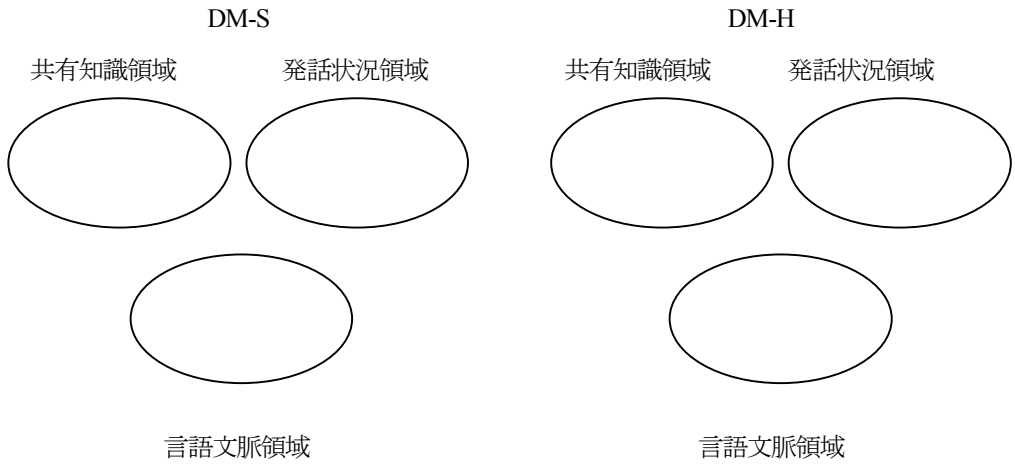
(10)の moi, ici のような直示表現は典型的な発話状況領域の要素であり，また un moment もまた「今から少しの間」のように発話時点を基準として理解されるため，発話状況領域を解釈領域とする．また (11) のように日本語の指示詞コ・ソ・アはその直示用法において，発話状況領域を空間分割する．

最後に言語文脈領域は談話開始時において白紙状態で，談話の進行に従って談話指示子と文の意味情報が書き込まれてゆく領域である．

(12)　Une femme entra dans le hall.　Paul avait vu cette femme chez une amie.

不定名詞句 une femme によって言語文脈領域に談話指示子が導入され，後続文の cette femme はその談話指示詞を照応的に指す．このように照応過程は基本的に言語文脈領域において処理される．なお，このようなモデルを考える以上，文脈照応の場合でも照応表現が指すものは先行文脈に存在するのではなく，聞き手の心的モデル内に探索されることに注意しておこう．

談話モデルには話し手側のモデル (DM-S)と聞き手側のモデル (DM-H) を想定する．



このような言語観においては，発話とはその中に含まれた様々な言語的マーカーによって，聞き手の心的状態をアップデートする操作と捉えられる．たとえば不定名詞句は聞き手のモデル DM-H に新たな談話指示子を登録せよという指令と考えることができる[7].

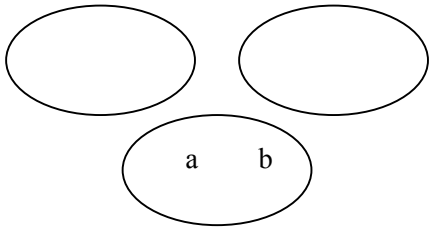
このモデルを用いてミニ談話 (8) を表現すると次のようになる．なお以下では図式の煩雑化を避けるため，聞き手側のモデル (DM-H) のみを表示する．

まず Un homme est entré dans la salle d'attente. という発話によって，a = un homme, b = la salle d'attente のふたつの談話指示子が言語文脈領域に登録される[8]．すでに述べたように，a と b は変数ではなく，言語文脈領域においては以後定数のように振る舞う．a にはこの時点で [a est

[7] Fauconnier (1994) や坂原 (2000) を参照のこと．

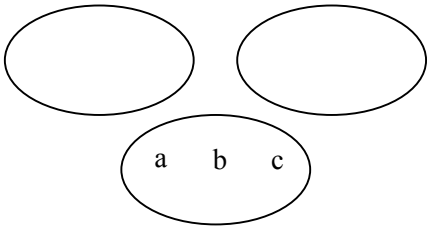
[8] すでに指摘したように，b = la salle d'attente は明示的な指令による導入ではなく，調整 (accommodation) によってあたかも既に導入済みの要素であるかのように聞き手に理解される．これは談話的な前提の押しつけに他ならない．

entré dans la salle d'attente]という情報が付加されている.



a = un homme　b = la salle d'attente
[a est entré dans b]

次に Il s'est assis à côté d'une vieille dame. が処理されるが，まず il は定表現解釈規則[9] によって，すでに言語文脈領域に登録済みで，[男性，単数]という素性を持つ談話指示子を探索せよという指令である．これに対応するのは a であり，a = il と理解される．また不定表現 une vieille dame によって新たな談話指示子 c が登録され，次のような構成にアップデートされる.



a = un homme　b = la salle d'attente
c = une vieille dame
[a est entré dans b]
[a s'est assis à côté de c]

最後の Il portait un pardessus gris.では新たに d = un pardessu gris が導入され，a に [a portait d] が付加されるが，どのような操作かはすでに明らかと思うので，更新された図式は省略する.

4. 複数の領域にまたがるハイブリッド型指示

このように登録される情報の由来・性格によって３つの下位領域を持つモデルを考える利点は，指示表現の働きを今までよりも正確に記述し説明することができるという点にある．この点を日本語の指示詞コ・ソ・アを例に取って示してみよう．コ・ソ・アの用法は現場指示（直示)，文脈指示（照応)，観念指示の３つに分けることができる.

(13)　現場指示

a. 「これは何ですか」「それは新型のパソコンです」

b. あそこに木があるでしょう．あの木まで競争しましょう.

現場指示にはコ・ソ・アのすべてが用いられ，話し手からの近・中・遠という距離原理と，１人称・２人称・３人称という人称原理によって空間分割される[10].

---

[9] Fauconnier (1994)を参照.

[10] 指示詞コ・ソ・アの現場指示用法において，距離原理と人称原理のどちらがより本質的かという点については，さまざまな議論が重ねられているが，ここではその問題には立ち入らない.

(14)　文脈指示

a.「大学の近くに進々堂という古い喫茶店があるんですよ」「その / *この / *あの喫茶店はどれくらい古いんですか」

b.［TV ニュースで］昨夜，京都市左京区で民家が焼ける火事がありました．この /? その /*あの火事で二人が軽い火傷を負いました．

文脈指示ではデフォルトでソが用いられるが，(14 b) のようにコが好まれる場合もある[11]．

(15)　観念指示

a. これはあの /*その /*このアインシュタインでも解けなかった問題だ．

b. 去年那覇で入った沖縄料理店，覚えていますか．あの /*その /*この店はとてもおいしかったですね．

観念指示ではアのみが用いられる．(15 a) は共有知識領域の中の百科事典的知識領域に登録済みの談話指示子「アインシュタイン」を指している．(15 b) は共有知識領域の中のエピソード記憶領域に登録されている「沖縄料理店」を指している．(15 b) では一見すると先行詞があり文脈指示ではないかと思われるかもしれないが，「あの」は文脈に存在する先行詞を指すのではなく，話し手と聞き手が共通に体験し，記憶の中に蓄えている談話指示子を指すので，観念指示と見なすべきである．

このように考えれば，日本語の指示詞コ・ソ・アは談話モデルの領域に次のように割り振られて機能を分担していることがわかる．

(16) a. 現場指示 コ・ソ・ア　　発話状況領域

b. 文脈指示 ソ　・コ　　言語文脈領域

c. 観念指示ア　　共有知識領域

a. から c. へと進むに従って用いられる指示詞の数が減少しているのは，物理的な現場から言語的な文脈へ，さらに記憶としての観念へと抽象度を増すに従って，領域分割が困難になるためである．また現場指示で遠称と近称の区別をする言語においては，観念指示に用いられるのが必ず遠称であることも同様に理解されよう．

このように領域分割して指示の問題を考える利点は，複数の領域を発動させるハイブリッド型の指示をうまく扱うことができるという点である．詳細については東郷 (2000) を参照していただきたいが，ひとつだけ例を挙げておこう．

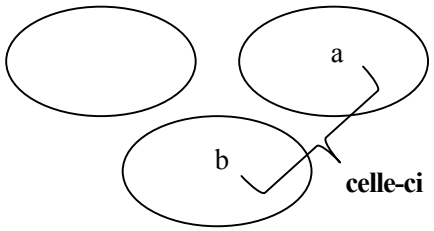
(17) A : [駐車場で自動車を指差しながら]　C'est ta voiture ?

B : [別の自動車を指差して]　Non, ma voiture, c'est *celle-ci*.

指示代名詞の celui / celle は性数の変化があることからもわかるように，文脈指示が基本的用法

[11] 文脈指示におけるコとソの選択原理についてもさまざまな議論があるが，ここではその問題には立ち入らない．

である．言い換えれば「モノを指す」用法ではなく，「コトバを受ける」のが基本である．この例では celle-ci の celle の部分が先行文脈の voiture という単語の代用である[12]．したがってこの部分は言語文脈領域で働く文脈指示ということになる．ところが celle-ci の ci の部分は指差し行為を伴って目の前にある自動車を指しているのだから，これは現場指示である．すなわちこの例の celle-ci は，言語文脈領域から言語的情報を引き出しながら，発話状況領域で直示を行なっている．この意味で celle-ci は言語文脈領域と発話状況領域の両方にまたがるハイブリッド型の指示と見なすことができる．celle-ci の指示のメカニズムを図示すると次のようになる．



a : 発話の場にある車 (-ci)
b = voiture (celle)

a は発話の場に存在する物理的実体としての自動車であり，b は言語文脈領域に書き込まれた単語としての voiture である[13]．意味論的に考えれば b = voiture は内包しか持たず，a = ［発話の場にある車］は外延しか持たないので，両者を結合した celle-ci によって内包と外延がそろった完全な指示表現となる．

5. token – type 指示

ここで本稿の冒頭で挙げた次の例を見てみよう．先行詞と照応詞の数の不一致という問題のある例である．同様の例をもう一つ挙げる．

(18) A German shepherd bit me yesterday. *They* are really vicious beasts. [= (4)]

(19) ［数歩先にガラガラヘビが一匹いるのを見て］

a. Watch out! *It* bites without warning.

b. Watch out! *They* bite without warning.

(19)では (19 a) のように it を使えば先行詞と数が一致するが， (19 b) のように they を使うことも可能である．このような照応の例を扱うには token – type 指示というメカニズムを考えなくてはならない．

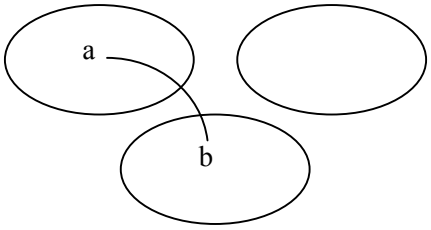
(18) を例に取ろう．昨日私を噛んだシェパードは特定の一頭の犬であり，限定された時空間

[12] もう少し正確に言うと，celle は voiture という単語の意味的素性 [+singulier, +féminin] とその内包のみを継承する．celle が単独では用いられず，-ci / -là や，de Paul / que j'ai achetée などの補足語を必要とするのは，それらの補足語によって外延が与えられるためである．

[13] より正確には言語文脈領域に書き込まれるのは ma voiture に対応する談話指示子で，celle はその主要部名詞 voiture の意味的素性と内包を受け継ぐ．

に存在している．このように把握された個体を token と呼ぶ．これに対して (18) の後続文 *They* are really vicious beasts. の they を名詞句に復元すると，*German shepherds* are really vicious beasts. となり，これは総称文である．したがって主語の German shepherds は特定の個体を指すのではなく，犬種としての「シェパード」を指す．犬種としての「シェパード」は限定された時空間に存在するのではなく，時空を超えた類型として存在している．この類型が type である．(18)では第１文の a German shepherd (= token) をトリガーとして German shepherds (= type) が引き出され，第２文の主語 they はこれを指している．このような照応を token – type 指示と呼ぶ．第１文の a German shepherd と第２文の they (= German shepherds) は数が一致していないだけではなく，token と type という entity レベルが異なるのである．したがって第１文の a German shepherd を they の「先行詞」と呼ぶのは適切ではない. 照応過程のトリガー (déclencheur) と呼ぶべきだろう[14].

心的領域を分割する談話モデルを用いると，token – type 指示のように entity レベルが異なる照応もうまく扱うことができる．(18) を図示すると次のようになる．



a : German shepherds (type)

b : a German shepherd (token)

(18) の第１文 A German shepherd bit me yesterday. の不定名詞句 a German shepherd によって，言語文脈領域に談話指示子 b が書き込まれる．共有知識領域の a は犬種すなわち type としての German shepherds を表す談話指示子である. これは共有知識領域内の百科事典的知識領域にあらかじめ格納されている．私たちは「この世にはシェパードという犬種が存在する」ことを知っているからである. a と b を結ぶ弧はメンタル・スペース理論で用いられているコネクタの一種で，token – type コネクタと呼ぶ. b と a はコネクタで結合されているので， b を起点として a に至ることができる．第２文 They are really vicious beasts. の主語 they は，こうしてたどり着いた共有知識領域の a を指している．

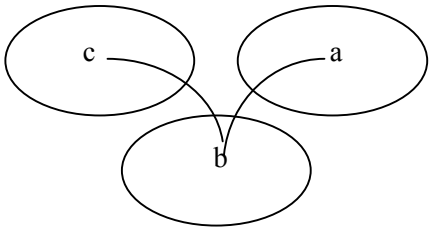
さらに複雑な経路をたどる指示の様態もある．

(20)　[目の前のパソコンを指差しながら] このパソコンはうちにもある.

この文の意味はもちろんうちの家にも同一の個体があるという意味ではなく，同一機種たとえば東芝 dynabook の別の個体がうちにあるという意味である．目の前のパソコンは token であ

[14] 本稿と同じく照応過程の分析に心的モデルの立場を採る Cornish (1999) は，antecedent という呼び方は適切でなく，antecedent-trigger とするべきだと主張している.

り，うちにあるパソコンも token である．しかし両者を繋いでいるのは type としての東芝 dynabook だから，ここでは token → type → token という指示の流れがあることになる．



a : 目の前のパソコン (token)
b : 言語化された「このパソコン」 (token)
c : 東芝 dynabook (type)

a は発話状況領域に存在するパソコンで token である．a は「このパソコン」として言語化されることで言語文脈領域に b として書き込まれる．a と b を結んでいるのは通常の ID コネクタである．b は共有知識領域にある type としての「東芝 dynabook」をさす c と token – type コネクタで結合される．これにより言語文脈領域の b =「このパソコン」は type としての「東芝 dynabook」を指すことができる．つまり (20) の「このパソコン」は目の前の token を指すと同時に type としての機種をも指すという二重の指示を行なっているのである．

それでは (20) で「うちにもある」と述べられている，話し手の自宅にある token はどうなるのだろうか．実はこれは上の図では表現されていないが，「うちにもある」という述語によって c (= type) から新たに切り出されていると考えられる．なぜなら「うちにもある」というのは，局所的空間での存在を述べていて，type は局所的空間には存在できず，存在できるのは token に限られるからである．しかし切り出された token には言語表現が与えられていない．

実はフランス語の照応にも同じような type からの token の切り出しを観察することができる．

(21) a. Elle a vu une robe dans la vitrine. Elle est entrée et l'a achetée noire.
b. Jean cherchait une bonne. Finalement, il l'a choisie espagnole. (Olsson-Jonasson 1984)

(21 a) を例に取ると，第 1 文の une robe は token である．しかし店に入って彼女が買ったのは，ショーウィンドウに飾られていた token ではなく，色違いの黒いドレスである．したがってここにも，ショーウィンドウに飾られていたドレス (token) → type としてのドレス → 彼女が買った黒いドレス (token)という指示の経路がある．興味深いのは第 2 文の代名詞 l' (= la) は token としての une robe を先行詞としながら，type レベルのドレスをも指しているという事実である．これは (20)で「このパソコン」が token 指示と type 指示の両方を同時に行なっているのと平行的である．

また (21 a)で彼女が購入した token レベルのドレスに相当する言語表現がないことに注意されたい．Elle a acheté という特定の時空で生起する一度切りの出来事を表す述語によって token が切り出されていると考えられる． Elle la porte aujourd'hui. と続けた場合，la でそのドレスを

照応できることがそれを示している.

(21 b)では chercher が内包動詞であるため，Jean cherchait une bonne. の目的語 une bonne が内包的文脈で非特定解釈されるというさらに複雑な問題があるが，基本的には (21 a)と同じように分析することができる.

6. 量化をともなう指示と照応

指示と照応のなかには量化 (quantification) の操作を考慮しなくてはならないものがある．まず明示的に量化があるケースを見てみよう.

(22) Tous les soirs à 6 heures un héron survole notre chalet. (Olsson-Jonasson 1984)[15]

この文には次のふたつの解釈が可能だとされている.

(23) a. Il y a un héron qui survole notre chalet tous les soirs à 6 heures.

b. Tous les soirs à 6 heures quelque héron survole notre chalet.

(23 a)は特定の１羽のサギが毎日飛来するという意味で，(23 b) は特定の１羽とは限らないという意味である．Olsson-Jonasson は (23 a)には次の (24 a)の文を続けることができ，(23 b)には (24 b)が続くとしている.

(24) a. Il fait son nid dans le parc du château.

b. Ils font leur nid dans le parc du château.

このケースでは tous les soirs が全称量化子を含み，不定名詞句 un héron がそのスコープ内に入るかそれとも入らないかという伝統的な作用域関係として扱うことができる．それぞれの論理式を示す.

(25) a. $\exists x\,[\text{héron}(x) \wedge \forall y\,(\text{soir}(y) \rightarrow \text{survoler-notre-chalet}(x) \wedge \text{in y à 6 heures})]$

b. $\forall y\,[(\text{soir}(y) \rightarrow \exists x\,(\text{héron}(x) \wedge \text{survoler-notre-chalet}(x) \wedge \text{in y à 6 heures}))]$

(25 a) は un héron の広い作用域読みで，(23 a) の意味を表している．(25 b)は un héron の狭い作用域読みで，(23 b) の意味に対応する.

ここでは (25 b) を特に取り上げる．(25 b) では un héron が tous les soirs の作用域に入っているので，次のような状況の集合が表現されていることになる.

$$\text{tous les soirs} \left\{ \begin{array}{lcl} \text{sit 1} & \rightarrow & \text{héron 1} \\ \text{sit 2} & \rightarrow & \text{héron 2} \\ \text{sit 3} & \rightarrow & \text{héron 3} \end{array} \right\} \text{Ils font leur nid…}$$

sit は tous les soirs によって量化される状況で，それぞれの状況には１羽のサギが含まれる[16].

---

[15] もともとの出典は Lyons, J., *Semantics* vol.1, Cambridge 1977 である.

[16] ここではわかりやすいように，状況ごとに含まれるサギは異なる個体して番号を振っているが，部分的に同じ個体でもよい．たとえば，一昨日来たサギと今日来たサギとがたまたま同一個体であってもかまわない.

状況ひとつ当たりに含まれるサギは１羽なので不定名詞句単数の un héron が用いられているが，状況が複数化されるので，結果的に得られるサギは複数となる．un héron の状況への分配的解釈と考えてもよい．こうすればこの文に Ils font leur nid dans le parc du chateau. を続けられることが理解できる．先行詞は単数 un héron だが，状況への全称量化の結果として複数化され，ils で受けることができる．先行詞と照応的代名詞の数の不一致はこうして解決される．

次の例も同じように分析できる．

(26) A : Why didn't you write to me?

B : I did … started to, but I always tore *them* up.

この例には them の先行詞すらないが，started to (write a letter) の省略と理解できるので先行詞 a letter を復元することができる．しかしこれは単数形である．この例では always が全称量化子として働き，(25) と同様に a letter を複数化するために them の照応が可能になる．

次に日本語の次のような例を見てみよう．

(27) a. 子育ての秘訣はその子の個性を伸ばしてやることだ.

b. 餡の塩加減はその日によって微妙に変えています.

c. その日の気分でメガネを着替える.

d. その場の思いつきでものを言ってはいけません.

こういったソ系指示詞の用法の問題点は，現場指示，文脈指示，観念指示という，従来の指示詞の用法のどれにも納まらないという点にある．指示対象が現場にあるわけではないので現場指示ではない．先行詞がないので文脈指示でもない．また観念指示はア系指示詞に限られるため，観念指示とも考えられない．分類することができないのである．

日本語学ではこのようにどこにも分類できない指示詞の用法を「あいまい指示」として片づける傾向がある．典型的なあいまい指示は次のようなものである．

(28) A : どちらへお出かけで.

B : ちょっとそこまで.

ただしこの用法は現場指示で，「そこ」「そのへん」のような場所表現に限られるので，(27) のケースとは異なる．

金水・岡崎・曹 (2002) は (29) を匿名指示もしくは空欄指示，(30) を logo 指示としている．

(29) a.「誰それ」「どこそこ」「その場しのぎ」などの慣用句

b. その日の気分でメガネを変える.

(30) その日が何の日か知っていて行ったわけではないのに，私が旅先に着いた日が有名な祭りの日や行事の当日だった，ということがよくあった.

金水・岡崎・曹 (2002)は，(30)の logo 指示用法について，話し手の一回一回の思考内容を直接引用的に書き表すと「この日が何の日か」となり，指示対象は固定的で指示的であるが，そ

の思考内容が引用節中に現れると「この日」の固定性が邪魔になるので,「その日」に書き換えられたのだと説明している．この説明の妥当性はひとまず置くとして，(27) で挙げた例は引用節に現れているわけではなく独立節であり，この説明は当てはまらない．また (29) の匿名指示・空欄指示のメカニズムにも十分な説明は与えられていない.

本稿は (27) は「あいまい指示」などではなく，隠れた量化 (covert quantification) の結果として表れたソ系指示詞だと考える．次を例として説明しよう.

(31)　子育ての秘訣はその子の個性を伸ばしてやることだ．[= (27 c)]

この文は子育ての秘訣を一般論として，もしくは教訓として述べたものである．一般論・教訓は多くのケースに当てはまる事柄を言う．あなたの子育てにも，私の子育てにも当てはまるのである．つまり「あらゆる子育てのケースに当てはまる」のであり，子育ての状況の集合が次のように形成されると考えることができる.

$$\text{(隠れた量化子)}\left\{\begin{array}{lcl} \text{sit 1} & \rightarrow & \text{子供 1} \\ \text{sit 2} & \rightarrow & \text{子供 2} \\ \text{sit 3} & \rightarrow & \text{子供 3} \end{array}\right\}\ \text{その子}$$

sit はひとつひとつの子育ての状況に当たる．ひとつひとつの sit に一人の子供が含まれている．ひとつひとつの sit を取り上げれば，そこに含まれる子供は特定の子供であろう．ところが状況が複数化されることで子供も複数化され，結果として不定指示もしくは「あいまい指示」のように見えるのである.

同じように状況が複数化される (25 b) には tous les soirs という明示的な量化表現があったが，(31) にはそれに相当するものがない．ここでは文末の「やることだ」というモーダル表現が導く隠れた量化が働いていると考えることができる. このようなソ系指示詞が使えるためは，文が一般論を述べていたり習慣文であったりして，意味的に状況の複数化が可能でなくてはならない．その証拠に文末を次のように一度きりの出来事を表す形に変えると,「その日」は特定の日を指すことになる.

(32)　餡の塩加減はその日に変えた.

またソノに後続する名詞は,「日」「年」のような時間単位表現や,「場」のような場所表現,「都度」のような回数表現がよく用いられるのも，これらの語がもともと状況の複数性を導きやすいためだと考えられる．また「その場その場で」とか「その日その日で」のように，反復形式が用いられるのも状況の複数化をイコン的に表していると見なすことができる．これが固定化すると「その日暮らし」「その場かぎり」のような慣用句になる.

なおこのような指示詞の用法はソ系に限られる.

(33)　子育ての秘訣はその /*この /*あの子の個性を伸ばしてやることだ.

コノやアノを用いると特定の子供を指すことになる.

よく知られているように, 次のようないわゆる束縛照応読みもソ系指示詞にしか見られない.

(34)　どの国もその /*この /*あの領土を守る権利がある.

ここでも明らかに「どの国も」による全称量化が働いており，その点で (33) のような用法と類似する.

隠れた量化による指示や束縛照応などの量化が関係するとき，日本語ではソ系指示詞しか用いることができない．これはなぜかというのは興味深い問題だが，本稿の射程を越えるので別の機会に譲りたい[17].

7. 指示形容詞による総称

では最後に指示形容詞を用いた総称名詞句について考えてみたい．この問題についてはフランス語学研究畑では「周知の指示形容詞」(démonstratif de notoriété) という呼び名のもとで，次のような例を中心に取り上げられてきた.

(35)　Toutes choses, doucement, tendrement, se laissaient aller à l'existence, comme *ces femmes lasses qui s'abondonnent au rire* et disent « C'est bon de rire » d'une voix mouillée. (Sartre, *La Nausée*)

この問題はフランス本国よりも日本で盛んに議論され，春木 (1990)，東郷 (1991)，Haruki (1993)，井元 (2000)，小田 (2003)，春木 (2012) などの論文が相次いで発表されている．本稿ではそこで問題とされた論点を追うのが目的ではなく， (35) のように関係節を伴う ces N qui … 型とは異なるタイプの指示形容詞による総称名詞句を取り上げる.

Bowdle & Ward (1995) は英語圏で指示形容詞を用いた総称文を扱った数少ない論文のひとつであるが，彼らは関係節を伴う ces N qui … 型には一顧だにせず，次のようなタイプの総称名詞句に話を限っている.

(36)　A : My roommate owns an IBM ThinkPad.
　　B : *Those IBM ThinkPads* are quite popular.

(37)　A : My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever pappy.
　　B : *Those Labradors* are extremely loyal, you know.

(36 b) (37 b) は IBM ThinkPads や Labradors というクラス全体について何らかの属性を述べているので，総称的に用いられていることはまちがいない．このタイプは (35) と異なり関係節を伴わず，また文の主語として用いることができるという特徴がある[18].

---

[17] この問題に対しては堤 (2002) が独自の世界モデルを用いて説明を試みている．堤の提案する 3 つの世界のうち, Wo は談話モデルの発話状況領域に，Wp は言語文脈領域に，Ws は共有知識領域に大まかに対応すると考えられる．これをヒントにすると，量化は言語文脈領域でしか行えず，言語文脈領域のデフォルト指示詞はソ系指示詞なので, 量化の関係する照応はソ系指示詞に限定されるということになる.

[18] (34) のような関係節を伴う ces NP qui… 型が主語として用いられないという点については春木 (2012) を参照.

しかし Bowdle & Ward (1995) では忘れられている重要な点がひとつある．それは通常の総称文は単独で用いることができるが, (36 b) (37 b) のようなタイプの総称文は単独で用いることはできず，他の発話への応答にしか用いられないという事実である．

(38) a. *Labradors* are extremely loyal.

b. **Those Labradors* are extremely loyal.

(38 a) のような裸複数名詞 Labradors による通常の総称文は単独で発話でき，また談話の冒頭の発話になることができる[19]．しかし指示形容詞による総称文 (38 b) はそれができない．(36 b) の those IMB ThinkPads，(37 b)の those Labradors はそれぞれの話し手 A の発話への返答としてのみ成立する総称表現である．つまり those N という形式はそれ自体では総称表現たりえないのであり, 話し手 A の発話に含まれた an IMB ThinkPad や an adorable Labrador retriever puppy の存在を前提とする一種の照応表現と考えなくてはならない．つまりそれぞれにおいて次のような照応過程が働いているということである．

(39) a. [(36 b)] an IMB ThinkPad → those IMB ThinkPads

b. [(37 b)] an adorable Labrador retriever puppy → those Labradors

(35) のような「周知の指示形容詞」には先行詞は存在せず，このような照応過程も働いていないので，これとは別のタイプと考えるべきである．この点は後で再び取り上げる．

Bowdle & Ward (1995) の興味深い点は，(36) (37) タイプの指示形容詞を用いた総称文について，次の３つの制約があることを明らかにしているところである．フランス語学の周知の指示形容詞をめぐる議論では，このような制約に触れられたことは知る限り一度もない．

まずこのタイプの総称文の述語は，話し手の評価を表すもの (evaluative) でなければならない．

(40) A : My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever pappy.

B : * *Those Labradors* were first bred in Newfoundland, you know.

(36) (37) の述語 be quite popular，be extremely loyal は評価的だが[20]，(40 B) は客観的な歴史的事実を述べているだけで評価的ではない．このような述語については those N は総称名詞句として働かない．

２つめの制約は，指示形容詞による総称文の主語名詞句は，聞き手もよく知っているクラスを表すものでなければならないというものである．

(41) A : My brother just bought a small car.

---

[19] 総称名詞句はこの他に，定冠詞単数を用いた The labrador is …，不定冠詞 A labrador is…があり，これらも単独の発話あるいは談話の冒頭で用いることができる．本稿ではこれらの総称名詞句のちがいについては触れない．

[20] こでは popular や loyal がそれ自身の意味において評価的というより，quite，extremely という主観的尺度を表す副詞が述語の評価性を高めていると考えられるが，この問題についてはこれ以上立ち入らない．

B : *Those small cars* are dangerous!

(42) A : My brother just bought a red car.

B : **Those red cars* are so garish!

(41 B)の small cars は「小型車」という文化・社会的に確立された集合を指しているが, (42 B) の red cars はそうではない.「赤い車」という確立されたクラスは存在しない. このような名詞句は指示形容詞による総称文で用いることができないという.

最後の制約は, 主語に基本レベルカテゴリー語[21]は使うことができず, それより下位の subordinate レベルの語でなくてはならないというものである.

(43) A : My roommate just bought a dog.

B : **Those dogs* make great pets.

(44) A : My roommate just bought a Labrador.

B : *Those Labradors* make great pets.

(43 B) の dogs は基本レベルカテゴリーであるため使うことができないが, (44 B)の Labradors は犬の下位種で基本レベルカテゴリーより一段下のカテゴリーであるため可能となるとされる.

Bowdle & Ward (1995) によるこれらの制約の指摘は興味深いが, 残念なことに彼らはなぜ those N にこのような制約が課せられるのかを説明していない. これら３つの制約はそのままフランス語にも当てはまるようである.

(45) A : Mon cousin est revenu du Canada avec un adorable chiot de labrador.

B1 : *Ces labradors* sont vraiment fidèles à leur maître, tu sais.

B2 : **Ces labradors* ont été d'abord élevés à Terre-Neuve, tu sais.

(46) A : Mon frère vient d'acheter une petite voiture.

B : *Ces petites voitures* sont dangereuses !

(47) A : Mon frère vient d'acheter une voiture rouge.

B : **Ces voitures rouges* sont dangereuses !

(48) A : Mon cousin vient d'acheter un labrador.

B : *Ces labradors* sont d'excellents compagnons.

(49) A : Mon cousin vient d'acheter un chien.

B : **Ces chiens* sont d'excellents compagnon.[22]

Bowdle & Ward (1995) では説明されていなかったこの制約を, 談話モデルを用いて説明する

---

[21] 基本レベルカテゴリー (basic level category) については Rosch (1978) を参照.

[22] ただし, (49 B) には Gary-Prieur (1998) が正しく指摘しているように, ces chiens のサブクラス読みが可能である. つまり先行文脈でラブラドールが話題になっており, そのラブラドールという犬種を指すために ces chiens を用いる場合である. このサブクラス読みであれば (49 B) は総称文として成立する. ここではこの読みは問題にしない.

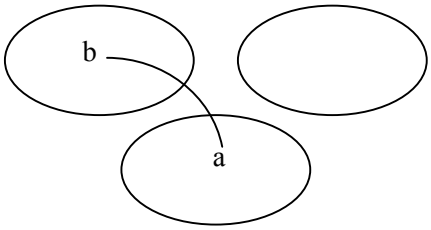
ことを試みてみたい．まずその入り口として次の日本語の例を考える．

(50) A : ほら，去年の夏に沖縄に行ったときに，那覇で入った沖縄料理店があったでしょう．

B : ああ，あの沖縄料理店はとても美味しかったですね．

すでに述べたように，B の発話の「あの沖縄料理店」は文脈指示ではなく観念指示である．A は自分の発話によってBに共有知識領域のなかのエピソード記憶領域を探索するようにうながしている．B はこの指令に基づいて自分の談話モデルのなかの共有知識領域内のエピソード記憶領域を探索する．すると A が「去年の夏に沖縄に行ったときに，那覇で入った沖縄料理店」という記述を与えた談話指示子が見つかったので，「あの沖縄料理店」と言っているのである．

このとき B の談話モデルは次のようになる．



a は話し手 A の発話の「去年の夏に沖縄に行ったときに，那覇で入った沖縄料理店」によって聞き手 B の言語文脈領域に登録された談話指示子である．b は B の共有知識領域のなかのエピソード記憶領域に直接体験によってすでに登録済みの談話指示子を表す．a と b は ID コネクタで結合される．B の発話の「あの沖縄料理店」は b を指している．

このとき次の２点が重要となる．

(I) 聞き手のエピソード記憶領域を呼び出すには，「ほら，○○があったでしょう」のような呼び水表現が必要である[23]．

(II) 呼び水表現によって探索される談話指示子は，共有知識領域のなかのエピソード記憶領域にあらかじめ登録済みである．

これを念頭に置いて指示形容詞による総称文をもう一度見てみよう．

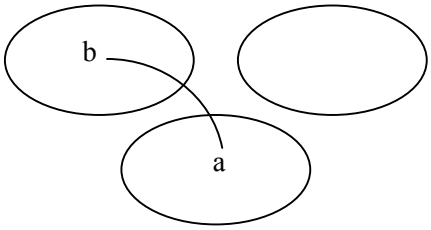
(51) A : My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever pappy.

B : *Those Labradors* are extremely loyal, you know.

ここで呼び水表現として働いているのは A の発話である．すでに述べたように，ここには an adorable Labrador retriever pappy → those Labradors という照応過程があり，呼び水表現のなかの名詞句が一種の先行詞となっている．そして (those) Labradors の指示対象は B のエピソード記

[23] ただし，独り言の場合は，「しまった，あの書類を持って帰るんだった」のように，呼び水表現なしでいきなり観念指示のアが用いられることがある．ここで問題にしているのは対話場面であり，このケースは考えない．

憶領域にある．談話モデルで示すと次のようになる．



a : an adorable Labrador retriever pappy
b : Labradors (type)

(50) の日本語の例では，a＝「去年の夏に沖縄に行ったときに，那覇で入った沖縄料理店」も b ＝ 「あの沖縄料理店」も token であり，両者は ID コネクタで結ばれていた．しかし，(51)の a は token だが b は type で，両者を結んでいるのは token – type コネクタである．

一般に総称文に現れる総称名詞句は共有知識領域内の百科事典的知識領域にあると考えられる．総称文はその名詞句の表すクラス全体について恒常的に成り立つ性質を述べるものであるので，この想定は妥当なものと考えられる．

(52) a. *Dogs* are loyal.

b. *The cat* is carnivorous.

しかし (51)のような指示形容詞による総称文では，those N の N に相当する談話指示子は，百科事典的知識領域ではなくエピソード記憶領域に登録されている．このように考えれば，指示形容詞による総称文の特徴をうまく説明することができる．

まずこのタイプの文は単独で用いたり談話の冒頭で用いることができないが，それはエピソード記憶を呼び出すためには呼び水表現が先行しなくてはならないからである．(51)は文脈指示をトリガーとする観念指示であり，文脈を必要とする．

次に述語が評価的でなくてはならないのは，エピソード記憶領域の特性に由来する．百科事典的知識領域は (52) のように万人にとって時空に関係なく成り立つ恒常的性質を表す情報が格納される領域である．これにたいしてエピソード記憶領域はより個人的・体験的色彩が強い情報が格納される．述語が評価的でなくてはならないのはこのためであると考えられる．

小田 (2003) は筆者の談話モデル理論を用いて周知の指示形容詞を分析しているが，そこでは周知の指示形容詞を「名詞句 Ce N によって導入される指示対象をデータベースの中の百科事典的知識に参照させる用法」(p.43) と定義している．小田のいう「データベース」は筆者の「共有知識領域」と同じものである．井元 (2000)も「百科事典的知識」と言い，春木 (2012) も「長期記憶（長期記憶＋百科辞典的知識）」という操作概念を用いて説明を試みている．小田 (2003) ，井元 (2000) ，春木 (2012) の議論は主にフランス語の ces N qui…型に焦点を当てているのだが，この構文で発動されるのが「(擬似的な) 百科事典的知識」であるというのは妥当な分析だと思われる．筆者もその分析に賛成である．

しかしながら Bowdle & Ward (1995) が取り上げた (51 B)のタイプの総称文は，百科事典的知識ではなくエピソード記憶を参照するものである. この点においてフランス語の ces N qui … 型の周知の指示形容詞とはその働き方において区別されなくてはならない.

次に Bowdle & Ward (1995) が指摘した「総称名詞句は聞き手によく知られたクラスを表すものでなくてはならない」という２つめの制約であるが，これはかんたんに説明できる．本稿では those N の N (those Labradors の Labradors) に当たる談話指示子はエピソード記憶領域にあらかじめ登録されていると考える．つまりこの表現を用いる話し手は，N に関して個人的体験や伝聞に由来する，抽象的ではない知識を有している必要がある．エピソード記憶領域には百科事典的知識領域よりも体験的・個人的色彩の強い情報が格納されるからである．とはいえ百科事典的知識を参照するふつうの総称文と同じく，N がクラスを表す type レベルの名詞であることには変わりない．N は話し手と聞き手のあいだで共有可能なクラスでなくてはならない．共有可能なクラスとは社会・文化的に確立されたクラス（つまり，「ああ，あれね」と思い浮かべることのできるもの）であり，その場限りのものであってはならない．これが２つめの制約が N に課せられる理由である.

最後に those N の N が基本レベルカテゴリーではなく，それより下位のカテゴリーでなくてはならないという制約については，次のように考えたい.

(53) a. Les chiens sont fidèles à leur maître.

b. 犬は主人に忠実だ.

このようなふつうの総称文で用いられるのは，フランス語では冠詞 (les, le, un) であり，日本語では「犬」のような裸名詞である．ところが those N には強い探索指令を持つ指示形容詞 those が含まれている．一般に指示形容詞は，発話状況領域か言語文脈領域にその指示対象を探せという指令だが，それだけにとどまらない．その領域内に存在する同種の N のなかから特定の N をピックアップせよという指令でもある．たとえば洋服店で Je prends *ce* pull. と言えば，それは店内にあるたくさんのセーターのなかから特定のセーターを選択することを意味する．「犬」のような基本レベルカテゴリーではこの操作は不可能で，一段下の下位カテゴリーならば犬に属するので同種ではあるものの，｛ラブラドール，チワワ，スピッツ，etc. ｝のように差異を持つクラスの集合が構築され，those はそのなかから特定のクラスを選ぶことになる．those N による総称が下位レベルのカテゴリーでのみ可能なのはこのような理由による.

興味深いことに同じ制約は日本語のア系指示詞にも観察される.

(54) a. 犬は主人に忠実だ.

b. ラブラドールは主人に忠実だ.

(55) a. *あの犬って主人にとても忠実だ.

b. あのラブラドールってものすごく忠実なんだってね.

裸名詞による総称は「犬」のような基本レベルカテゴリーでも,「ラブラドール」のような下位レベルカテゴリーでも等しく可能である．ところが「あの N」による総称では,「犬」は不可だが「ラブラドール」は可能である.

なお (55 b) は口語的で対話的な文例にしてあるが，これは意図的である．これを「あのラブラドールは主人に忠実だ」のように客観的な総称文にすると, 筆者の語感では容認度が下がる．これは日本語でも「あの N」による総称が，聞き手のエピソード記憶領域に訴えかけるものであるため, 聞き手を想定した対話的状況において用いられるからだ考えられる．英語の those N についても同じことが言える．Bowdle & Ward (1995) が挙げている文例がすべて対話であるのは理由のないことではない．なおフランス語の ces / ce を用いた総称について，Gary-Prieur (1998) は話し手と聞き手の関係を浮上させるものとして，やはりその対話的性格を強調している. 指示形容詞を用いた総称をめぐる議論では, この点はもっと重視されるべきだと思われる.

さて，Bowdle & Ward (1995) では次のような総称文も挙げられていて，ここまで見たラブラドールの例など同じように論じられている.

(56)　Those Mexicans!

同様の例はフランス語でも観察され[24]，井元 (2000)，小田 (2003)，春木 (2012)などでも取り上げられていて，周知の指示形容詞の１タイプとされることが多い.

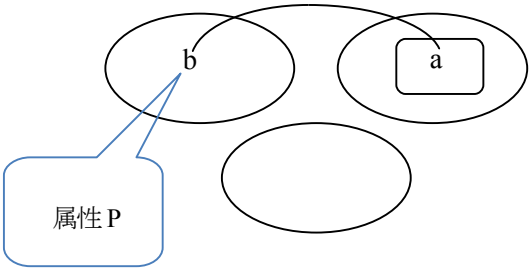
(57)　[ダム建設計画の事前環境調査で環境には影響しないと報告した調査団のニュースを見て]
Ah ! Ces experts !

日本語にするならば「あのメキシコ人って奴らは」「あの専門家という連中は」などとなり，ア系指示詞が用いられる.

このタイプの those N 総称は述語がないという事実に加えて，用いられる語用論的状況が今までのラブラドールの例とは異なることに注意しなくてはならない．(56) が用いられるのは例えばいっしょに働いているメキシコ人が仕事をさぼったときであり，(57) は環境調査を依頼された専門家が「環境には影響はありません」と発表したというニュースを聞いたときである．those N 総称は悪評価を下して非難する場合に用いることが多いが,「仕事をさぼる」「御用学者が権力側の意見を述べる」というような，話し手にとって非難すべき事態が状況のなかに必要とされる．このような出来事を「token 事態」と呼んでおく．一方，those N の N，つまり (56) の「メキシコ人」 (57)の「専門家」はエピソード記憶領域にすでに登録されているが，その談話指示子には話し手の体験に基づく悪評価の属性があらかじめ付属している．たとえば「メキシコ人」ならば「仕事がいい加減だ」,「専門家」なら「御用学者となって権力側の意見を述べる」という属性である．この属性を P としておく．Those Mexicans! 型の総称は，話し手のいる

[24] (57) の例は筆者の実際の見聞に基づく.

具体的状況に，P を改めて再確認させるような token 事態が生じたときに限り用いることができる[25]．談話モデルで図示すると次のようになるだろう．



a：発話状況領域にいるメキシコ人 (token)
b：エピソード記憶領域内のメキシコ人 (type)

発話状況領域に四角形で示した token 事態が起きる．そこには token としてのメキシコ人 a が含まれている．一方，エピソード記憶領域には type としてのメキシコ人 b が登録されており，b には吹き出しで示した属性 P がすでに付されている．端的に言って P は偏見に他ならない．token 事態への話し手の主観的評価 Q が P と一致し，P を再確認させるものであるときに Those Mexicans!「あのメキシコ人って奴らは」と発話される．

先に見た *Those Labradors* are extremely loyal, you know. 型の those N 総称には呼び水発話が必要であり，そのなかに先行詞が含まれていなくてはならないということはすでに述べた．このためこの型の文は談話冒頭の発話としては用いることができないのであった．ところが Those Mexicans! 型の those N 総称に必要とされるのは呼び水発話ではなく，呼び水事態，すなわち属性 P を改めて再確認させてくれるような token 事態である．このため token 事態さえあれば談話冒頭の発話として用いることができる．

Kleiber (1991) はマンガの「アステリックス」の次のような例を挙げて，ここには “généralisation déictique”と呼ぶことのできる操作があるとしている．これは基本的には本稿がすぐ上で述べた token 事態と属性 P の一致確認操作と同じものだと思われる．

(58) Ils sont fous, ces Romains !

また Gary-Prieur (1998) はおそらく次の例でも同じことが起きているとしているとする[26]．

(59) Elles sont délicieuses, ces poires.

このような操作が行われているという点において Ah, those Mexicans! 型の総称は Those Labradors are extremely loyal, you know. 型の those N 総称とは異なるタイプと見なすべきであり，またフランス語学でよく議論されてきた ces N qui … 型の周知の形容詞ともまた異なるとするべきなのである．

---

[25] ただし token 事態を自分で体験せずに，人の話を聞いて伝聞によって知った場合でも用いることができる．したがって，より正確には直接体験か伝聞によって，token 事態に接したときに用いるとするほうがよいかもしれない．

[26] On voit que la généralité est atteinte à travers la particularité, par la répétition de situations empiriques. (Gary-Prieur 1998)

8. おわりに

本稿ではメンタル・スペース理論に基づく心的領域の分割理論である談話モデル理論を用いて，英語・フランス語・日本語の指示と照応をどのように捉えることができるかを示した．本稿のような心的モデルに立脚すると，文脈指示も含めてあらゆる指示と照応過程において，指示対象は心的モデルのどこかの領域内にあると考えることができる．また token と type という entity レベルのちがいや，量化表現による量化の操作を想定することによって，先行詞と照応詞の数の不一致や先行詞の不在など，照応理論にとって問題となるような現象もうまく説明することができることを示した．

参考文献

Bosch, P. (1983), *Agreement and Anaphora. A Study of the Role of Pronouns in Syntax and Discourse*, Academic Press.

Bowdle, B. F. & G. Ward, “Generic demonstratives”, *BLS* 21, 32-43.

Chafe, W. L. (1980), *The Pear Stories. Cognitive, Cultural, and Linguistics Aspects of Narrative Production*, Ablex.

Cornish, F. (1999), *Anaphora, Discourse, and Understanding. Evidence from English and French*, Oxford UP.

Gary-Prieur, M.-N. (1998), “La dimension cataphorique du démonstratif. Etude de construction à relative”, *Langue française* 120, 44-50.

Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976), *Cohesion in English*, Longman.

Haruki, Y. (1993), “Sur le démonstratif à renvoi notionnel”, 『言語文化研究』19, 179-192.

Kamp, H. & U. Reyle (1993), *From Discourse to Logic*, Kluwer Academic.

Karttunen, L. (1976), “Discourse referents”, J. D. McCawley (ed) *Syntax and Semantics 7. Notes from the Linguistic Underground*, Academic Press.

Kleiber , G. (1991), “Du nom propre non modifié au nom propre modifié. : le cas de la détermination des noms propres par l’adjectif démonstratif”, *Langue française* 92, 82-104.

Langacker, R. W. (2001), “Discourse in cognitive grammar”, *Cognitive Linguistics* 1, 143-188.

Lewis, D. (1979), “Score keeping in a language game”, *Journal of Pholosophical Logic* 8, 339-359.

Nash-Webber, B. L. (1977), “Anaphora : A cross-disciplinary survey”, *Technical Report of Center for Study of Reading* 31, Univ. of Illinois.

Õim, H. (1973), “On the semantic treatment of predicative expressions”, Kiefer, F. & N. Ruwet (eds) *Generative Grammar in Europe*, Reidel.

Olsson-Jonasson, K. (1984), “A propos de la distinction spécifique / non spécifique des syntagmes nominaux indéfinis”, G. Kleiber (ed) *Recherches pragma-sémantiques*, Klincksieck

Rosch, E. (1978), “Principles of categorization”, Rosch, E. & B. B. Llyod (eds) *Cognition and Categorization*, Lawrence Erlbaum Association.

Webber, B. L. (1978), *A Formal Approach to Discourse Anaphora*, Ph.D. thesis, Harvard University.

井元秀剛 (2000)「指示性と周知性の関連について ― 『あの N』と ce N をめぐる対照言語学的考察」『フランス語学研究』34, 14-26.

小田涼 (2003)「周知の指示形容詞をめぐって」『フランス語学研究』37, 34-47.

金水敏，岡崎友子，曹美庚 (2002)「指示詞の歴史的・対照言語学的研究 ― 日本語・韓国語・トルコ語」生越直樹編『シリーズ言語科学 4　対照言語学』，東京大学出版会，217-248，.

堤良一 (2002)「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』122，45-78.

東郷雄二 (1991)「L’anaphore, cet obscur objet de recherche. ― フランス語の＜指示形容詞 CE+名詞句＞照応」『人文』37 (京都大学教養部紀要)，92-112.

東郷雄二 (1999)「談話モデルと指示 ― 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『京都大学総合人間学部紀要』第 6 巻，35-46.　(http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/discourse.pdf)

東郷雄二 (2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』第 7 巻，27-46.　(http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/discourse.kosoa.pdf)

東郷雄二 (2001)「定名詞句の『現場指示的用法』について」『京都大学総合人間学部紀要』第 8 巻，1-17.　(http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/defnpexo.pdf)

東郷雄二 (2002)「不定名詞句の指示と談話モデル」『談話処理における照応過程の研究』(科学研究費成果報告書 研究代表者東郷雄二)，1-35.　(http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/indefinite.pdf)

春木仁孝 (1990)「現代フランス語の『周知の指示形容詞』について」『言語文化研究』16, 77-95.

春木仁孝 (2012)「指示形容詞の概念指示用法について　『周知の指示形容詞』を中心に」坂原茂編『フランス語学の最前線 1 』，ひつじ書房，79-114.

Toujours と「やはり」
ステレオタイプ再確認型の副詞

渡邊 淳也
筑波大学

1. はじめに[1]

この論文は，フランス語の副詞 toujours の非時間的用法と，日本語の副詞「やはり」を中心的な対象として, それらの機能について考察することを目的とする.「やはり」とのかかわりで，一部，フランス語の副詞 décidément についても触れる．考察に際しては，Anscombre (2001) が提唱する「ステレオタイプ理論 (Théorie des stéréotypes)」に着想を得て，それらの副詞はステレオタイプ的な命題内容を再確認する機能を共有しているが，その再確認にいたる過程にはちがいがある，という対照を示すことになる.

以下では，まず 2 節で，ステレオタイプ理論の概略について確認する．3 節でフランス語の toujours について，4 節で日本語の「やはり」，およびそれとの関連においてフランス語の décidément について考察する．5 節はまとめである.

2. ステレオタイプ理論[2]

ステレオタイプ (stéréotype) とは元来, 活版印刷の原版をさす用語であったが, 言語学では, くりかえしもちいられる定型としての表現や意味をさすようになった．ステレオタイプの概念をもちいた研究のなかでも，本稿が参照するステレオタイプ理論は，Anscombre (2001) によって初めて整備された形で提示され，ことわざ，総称文，属詞構文，固定表現・熟語，肯定・否定，同語反復文・矛盾文，連結辞，語彙意味論など，多くの研究にわく組みを提供している理論である[3].

---

[1] 本稿は 2010 年 9 月 22 日～23 日にチュニジア共和国マハディアでひらかれた研究会，*Journées scientifiques tuniso-japonaises : La stéréotypie* において本稿筆者がおこなった研究発表，« *Toujours* et *yahari,* adverbes reconfirmatifs de la stéréotypie » の内容をもとにして，その後の考察をまとめなおしたものである．同研究会については，フランス語で論文集が編まれる予定であるが，大幅に遅れているので，ここにひとまず日本語で論文を執筆した．また，本稿は, 2008 年度～2012 年度科学研究費補助金･基盤研究 (C) 課題番号: 20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者渡邊淳也) ならびに 2012 年度科学研究費補助金･基盤研究 (C) 課題番号: 24520530「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」(研究代表者和田尚明) の助成をうけて進められた研究の成果の一部である.

[2] この節の記述は，渡邊 (2011) の一部をもとにして，増補・修正をほどこしたものである.

[3] ただし，Anscombre (2001) による一応のまとめを別にすれば，かならず準拠するべき標準理論といったものは存在

ステレオタイプ理論は，Anscombre が Ducrot とともに創始した言語内論証理論 (Théorie de l'argumentation dans la langue) の一時代を画したトポス理論 (Théorie des topoï) を淵源とするものであるが，重要な変遷を経ている．以下では，その経緯を見ておくことにしたい．

トポスとは，論証において，論拠から帰結への移行を可能にする前提的命題であり，<±P, ±Q>(P であればあるほど /P でなければないほど, Q である /Q でない) と定式化できるような，階梯的 (scalaire) な形式をとる．たとえば，(1) の論証は，(2) のようなトポスにもとづくものと説明される．

(1) Il fait beau : allons nous promener. (Anscombre 2001, p.68)

(2) <+ beau temps, + (agrément de) promenade > (*idem*)

さらに，(2) によって，(3) のような文の mais であらわされる逆接性が ((2) のトポスに反するものとして) 説明できる．

(3) Il fait beau, mais restons à la maison.

しかしながら，Anscombre がトポス理論を破棄した理由は，第 1 に，トポスを導入することで，言語外世界に関する知識を無際限に理論のなかにかかえ込まなければならなくなることである (これは，喜田 1996, p.59 が指摘する，Ducrot がトポス理論を破棄し，「意味ブロック理論」というあらたな理論に移行した理由と一致している．意味ブロック理論については，さらに Ducrot 2001 などを参照).

そして第 2 に，トポスの概念には階梯性が義務的にともなうことである．たとえば,

(4) C'est un singe, mais il n'aime pas les bananes. (Anscombre 2001, p.70)

においてトポス理論が仮定せざるを得ない <+ singe, + bananophile > というトポスは，その階梯性からして，「サルである度合い」という奇妙な想定が必要になり，不自然である．

それに対して，ステレオタイプ理論は，つぎのような定義から出発する．

(5) ステレオタイプの定義

ある辞項のステレオタイプは，その辞項に随伴する複数の文 (それらをステレオタイプ文 phrases stéréotypiques という) の開いた集合である．(*ibidem,* p.60)

話者はステレオタイプ文を，話者が属する言語共同体の観点，すなわち共同主観として提示するものであり，その際の言語共同体とは状況に応じて可変的なものである．

また，ステレオタイプ文は実際に発せられた文とはかぎらない．そのため，複数のステレオタイプ文が矛盾していたり，反義的であってもよい．たとえば,

---

せず，事例研究においては各人の理解による自由な応用がなされている現状である．ステレオタイプ理論の背景やさまざまな形態については Fradin et Marandin (1979), Schapira (1999), Amossy et Herschberg Pierrot (2007), Saïd (2010) を，事例研究については Schapira (2000) (2005), Anscombre (2003), Palma (2006), Leeman (dir.) (2008) , 渡邊 (2011), 藤田 (2012) を参照．とくに，Anscombre の退職記念論集でもある Leeman (dir.) (2008) には，多くの論考がよせられており，この理論の格好のパノラマになっている．

(6) Les extrêmes s'attirent. (*ibidem,* p.61)

(7) Qui se ressemble s'assemble. (*idem*)

の両者はたがいに反義的であるが，いずれもステレオタイプ文としてみとめられる．それどころか，ステレオタイプ文は，明確にまちがいであることさえある．たとえば，

(8) Le soleil se lève / se couche. (*idem*)

は，科学的には誤り (天動説) であるが，日常言語の共同体内で有効とされている．

ステレオタイプ文の潜在的性格の一環として，もうひとつ，後論のために確認しておきたいことは，Palma (2006, p.68) が指摘するように，ステレオタイプ文の内容を総称文としてではなく，個別事例に関して発話することは不自然になるということである．たとえば，総称文としての

(9) Les avocats connaissent les dossiers qu'ils traitent. (*idem*)

は自然であるが，個別事例に言及する場合のつぎの文，

(10) ?L'avocat de la défense connaît les dossiers qu'il traite. (*idem*)

は，当然すぎて，なぜわざわざ言うのか理解しづらい，という意味で不自然である．(10) の不自然さを救うには，たとえば (11) の comme tous les avocats sérieux のように，ステレオタイプを再確認するような内容をのべることをことわる表現をつけるとよい．

(11) Comme tous les avocats sérieux, l'avocat de la défense connaît les dossiers qu'il traite. (*idem*)

以上でみてきたように，ステレオタイプは話者が直接断定する対象ではなく，単に引きあいに出す共同主観であり，いわゆる「衆の声」(*vox publica*) である．ここにポリフォニー理論 (théorie de la polyphonie) との接点がある．

また，ステレオタイプ理論と言語内論証理論のあいだで共通している重要な考えかたは，ある辞項の意味を，その辞項をふくむ言説の連鎖のなかに見いだそうとすることである．言語内論証理論が，ある辞項 (や文など，言説の切片 segment de discours) の意味を，その辞項に関して展開可能な論証のなかに見ようとしたのと平行的に，ステレオタイプ理論においては，ある辞項の意味を，それに随伴するスレレオタイプ文のなかに見ようとするのである．たとえば，フランス語の mauvaises herbes や日本語の「雑草」に随伴するステレオタイプ文の端的な例は，

(12) On arrache / élimine les mauvaises herbes.

(13) 雑草を抜く / 刈る．

というものであろう．これらの文は，mauvaises herbes や「雑草」という辞項をめぐってきわめて頻繁にもちいられるだけでなく，それらの辞項の定義そのものを構成しているといえよう

(つまり，抜くからこそ「雑草」なのである)[4]．このように，ステレオタイプは，言語の意味決定にとって，根幹的な意義をもっていると考えられる[5]．

3. Toujours

3.1 Toujours の語義分類と本質的機能

まず，副詞 toujours の語義分類を確認しておこう[6]．多くの辞書や先行研究は，3 つの大きな分類をたてている (cf. Cadiot et alii 1985, Franckel 1989, Némo 2000, Mosegaard Hansen 2004)．分類とあわせて，代表的な例文を 2 つずつ示す．

(I) 永続用法 emploi permanent (syn. *tout le temps*)

(14) Les absents ont **toujours** tort. (proverbe)

(15) Au Groënland, il y a **toujours** de la neige. (Mosegaard Hansen 2004, p.41)

(II) 持続用法 emploi persistant (syn. *encore*)

(16) Pierre est **toujours** là ! (J'avais pourtant dit qu'il ne m'attende pas)

(Cadiot et alii 1985, p.105)

(17) Malgré le flair des chiens policiers qui suivent sa trace, le bandit court **toujours**.

(Scénario du film *La Porte des Lilas*)

(III) 非時間的用法 emploi non-temporel (syn. *en tous cas, cependant*)

(18) Allons au bistro ! On y sera **toujours** au chaud. (Cadoit et alii 1985, p.105)

(19) Authentique ou pas, elle est bien belle, cette estampe, **toujours**. (Franckel 1989, p.302)

永続用法は，日本語でいうと「つねに，いつも」に相当し，持続用法は「まだ，あいかわらず」，非時間的用法は「とにかく，いずれにせよ」といった訳語があてはまることからもわかるように，多義的な副詞であるといえる．

しかしながら，これらの分類のあいだには截然と境界を引くことがむずかしいこともある．たとえばつぎの例 (20) は，(21) のように非時間的に解釈することもできる一方，(22) のような永続の解釈も可能であり，混淆的な用法であることがわかる．

(20) Avec ou sans képi, un militaire est **toujours** un militaire. (*ibidem*, p.301)

(21) 制帽をかぶっていてもいなくても，軍人は軍人に変わりない．

(22) 制帽をかぶっているときも，かぶっていないときも，軍人はつねに軍人である．

---

[4] この例に関する議論は，川島浩一郎さんとの個人的討議に負うている．しるして感謝申しあげたい．

[5] さらに，ステレオタイプ理論は，慣習的な (ステレオタイプ的な) 連鎖の使用の集積によって文法がさだまってゆくという，コロケーション研究の基本発想とも接続可能なものであると考えられる．最近のコロケーション研究の例としては，藤村 (2009)，藤村・滝沢編 (2011) などを参照のこと．

[6] 副詞 toujours は，tous＋jours に由来し，Buchi (2007) によると初出年代が 1100 年ころ (*Chanson de Roland*) で，そこでは永続用法でもちいられていた．

混淆的な用法が存在することから考えると，toujours の機能を理解するには，どの用法であるかにかかわりなく，toujours が果たしている本質的機能を抽出し，図式化することが有用であろう．本質的機能とは，文脈におかれることによってさまざまな結果的解釈を生みだす祖型である[7]．そのような考えかたにもとづいて，渡邊 (1992) (2004) では，toujours の本質的機能は，つぎの (23) のようなものであるとした．

(23)　toujours の本質的機能

Toujours は，本質的に，「仮想されうる差異が排除され，実際には叙述内容が変わらず妥当する」(渡邊 2004, p.79) ことを標示する．

永続的用法においては，時間的なさまざまな差異が，叙述内容の差異をもたらしうる要因となるのに対して，toujours が差異を排除することになり，「つねに，いつも」という解釈が出てくる．また，持続的用法においては，確認時点以前との対比が，確認時点における差異をもたらしうる要因となるが，toujours によって差異が排除された結果，「まだ，あいかわらず」という解釈が生じる．また，非時間的用法においては，時間的ではない差異が，叙述内容の差異をもたらしうる要因となるが，実際には叙述内容は左右されないということが toujours によって示され，「とにかく，いずれにせよ」という解釈が生まれるのである．いずれの場合にしても，なんらかの差異が文脈上かならずあらわれており，それをふまえたうえで，toujours が，叙述内容に関しては差異を排除し，内容を (再) 有効化するところに本質があるといえる．

本稿がステレオタイプとのかかわりでとくに関心をいだくのは，toujours の非時間的用法である．次節では，非時間的用法について詳細に検討してゆきたい．

3.2 Toujours の非時間的用法とステレオタイプ

この節では，非時間的用法の toujours の文例をよりこまかに検討することにより，その機能を確認するとともに，ステレオタイプとの関係についてもあわせて考察したい．

以下では，前節でもみたいくつかの例を再度とりあげる．

(24)　[=(20)] Avec ou sans képi, un militaire est **toujours** un militaire.

すでにのべたように，(24) の例では，toujours は制帽をかぶっているか，かぶっていないかがもたらしうる差異を否定し，軍人というカテゴリーの均質性をあらためて主張するために toujours がもちいられている．その際，toujours がかかる命題が，« un militaire est un militaire » という同語反復文のかたちをとっていることが注目にあたいする．Schapira (1999) (2000) (2005), および Anscombre (2003) (2006) がいうように，同語反復文はステレオタイプ文の一種であると

[7] ただし，本質的機能は言語形式ごとに使用に先だってアプリオリにあたえられているわけではなく，むしろ使用の多様性に立脚して，事後的に形成され，更新される操作図式であると考えている．くわしくは渡邊 (2004, pp.84-87) の議論を参照されたい．

いえる[8].

つぎの例をみよう.

(25) [=(19)] Authentique ou pas, elle est bien belle, cette estampe, **toujours**.

この例においては，toujours は，版画が本物であるかどうかがもたらしうる差異を否定し，« Cette estampe est belle » という観点を有効化する機能を果たしてる．この観点の内容は，版画に belle という形容詞をむすびつけるという，たいへんありふれた形容であり，スレレオタイプ的な性質をおびているといえる.

もうひとつ，前節でとりあげた例を再検討しよう.

(26) [=(18)] Allons au bistro ! On y sera **toujours** au chaud.

この例においては，ビストロに行こうという話者の提案に関して，対話者からのさまざまな反論が予想され，それが話者の観点に対する不利な要素となる．Toujours は，それにもかかわらず，すくなくとも « On y sera au chaud » ということは言えるとして，対話者からの可能な反論への防禦をするために役立っている．そのようなわけで，この例をひく Cadiot らは，toujours に反駁的 (réfutatif) な，したがってポリフォニー的 (polyphonique) な性質をみとめているのである.

« On sera au chaud au bistro » という発話内容に関しては，なんの変哲もない，あたりまえの内容であり，ステレオタイプとかかわりがあるように思われる．ステレオタイプ的な文でありながら，対話者からの反論の可能性を経て，あえて発話するということが toujours の付加によって示されている．上記 (10)〜(11) で確認した，« ? L'avocat de la défense connaît les dossiers qu'il traite » が，« Comme tous les avocats sérieux » をつけることで発話しやすくなるという例と似ていて，(26) は，toujours をもちいることで，ステレオタイプ的な内容をあえて再確認することが告げられているのではなかろうか.

こんどは，少し性質がことなる例を見よう.

(27) — Qu'est-ce que tu veux ? demande le type. Des moules ou des frites ?

—Les deux, répond Zazie qui se sent folle de rage.

—Apportez **toujours** des moules pour la petite, dit le type tranquillement à la serveuse.

(R. Queneau, *Zazie dans le métro*, p.50)

この例においても，toujours の機能はまえの例 (26) と共通している．すなわち，toujours は，ザジによっていったん反対の態度をとられた内容に関して，話者のがわから (再) 反論するために役立っているのである.

しかし，ステレオタイプの側面に関していえば，ちがったところがある．この例では，toujours

[8] 同語反復文については，日本のフランス語学界ではさかんに研究されている．主要文献からごく一部をあげると，藤田 (1988)，大久保 (2000)，坂原 (2002)，阿部 (2008)，酒井 (2012) など.

が作用する命題内容は，ひろくみとめられる一般的な内容ではない．フランス社会において共有されているステレオタイプは，むしろ，「ムール貝はフライドポテトとともに出される」(« Les moules sont servies avec les frites ») というものであろう．ところが，ここでは，toujours によって弁護される見解は，それとはことなるものである．対話者であるペドロは，たわむれに，あたかもムール貝とフライドポテトが別に供されるべきであるかのように，ザジにたずねているのである (« Des moules ou des frites ? »)．そして，それがザジの反発を買ったあとでも，なお維持される考えとして toujours をともなって再提示している．したがって，ここでは，いわば「即興のステレオタイプ」とでもいうべきものが，アド・ホックに構築されているといえよう．

もうひとつの例を見よう．

(28) — « Tunis », observa Daniel, « ce n'est pas l'Algérie… »

— « C'est **toujours** l'Afrique », dit Jacques, en arrachant une bouchée de pain.

(R. Martin du Gard, *Les Thibault*, t.1, p.75)

この例には，toujours の本質である「差異の否認」が直接にあらわれている．この文で toujours が含まれる命題，« (Tunis,) c'est l'Afrique » は，対話者ダニエルのいう « Tunis, ce n'est pas l'Algérie » にくらべて包含的，一般的な命題であり，いっそうステレオタイプ的である．

これまでの観察から，toujours の非時間的用法にみられる特徴として，つぎのようなことがいえると思われる．

(29) Toujours の非時間的用法とステレオタイプ

Toujours の非時間的用法は，文脈的要素としてあらわれている「ことなる可能性」を経たのちで，命題内容が再確認されることをあらわす．その命題内容は，多くの場合ステレオタイプ的である．

4.「やはり」(「やっぱり」)

4.1 代表的な用法

以下では，日本語に目を転じ，副詞「やはり」，およびその話しことばでのヴァリアント「やっぱり」について考察する．

「やはり」は，語源要素「やわ（柔 / 和)」に由来すると推定されている．したがって，「やわな」，「やわら」，「やわらぐ」，「やおら」などと同語源であり，「静かに，じっとしているさま」(『日本国語大辞典』) を本義とする．

「やはり」には，便宜的に，文要素副詞としての用法と，文副詞として用法をみとめることができる．代表的な例文を以下にかかげる．

(I) 文要素副詞用法

(30) 日本で食べられる，そば，うどん，ラーメンなどにそれぞれ「通」が存在するよ

うに，韓国にもやはり「冷麺通」を自称する人たちがいる．

(『朝日新聞』2006 年 11 月 30 日)

(II) 文副詞用法

(31)　雨は少ないが，やはり梅雨だ．(森田 1989, p.1156)

(32)　やはり田中くんだった．後ろ姿で見当がついたよ．(*idem*)

まず，文要素副詞用法の例 (30) では，「やはり」によって日本と韓国における「麺通」に関する比較が成り立っており，フランス語でいうなら，« aussi », « également » といった「範列化副詞」(adverbes paradigmatisants, cf. Nølke 1993, p.27) に対応する．ここで「やはり」は，統辞的には「韓国にも」という連辞を作用域としているが，意味的には文全体に作用しており，日本と韓国における状況を平行的にとらえる解釈を生んでいる．その意味で，Nølke (1993) が範列化副詞を文副詞とあわせたカテゴリー，文脈副詞 (adverbe contextuel) を提唱していることは注目にあたいする．範列化副詞は，いわば，せまい作用域と広い作用域をあわせもっているのである．

つぎに，文副詞用法の例，(31) を考えてみよう．この例は，たとえば « On n'a pas beaucoup de pluie, **toujours** est-il que nous sommes en saison de pluie » のように，toujours をもちいて仏訳することができることからもわかるように，toujours をもちいた文と似た意味構造をもつ．すなわち，「雨は少ない」ということが，「梅雨だ」という命題に対して不利な要素として示されているが，それに対して，「やはり」は，「梅雨だ」という命題内容を維持する助けになっている．「(いまが) 梅雨だ」という命題は，日本社会においてひろく共有されるステレオタイプ的な内容であり，話者の属する言語共同体によってあらかじめ構築されている．そうした性質をもつ命題を，可能な反論から救うという機能は，toujours と類似しているといえる．

しかし，「やはり」には，toujours とちがうところがある．それは，「やはり」をもちいるには，かならずしも命題内容に対して不利な文脈的要素がなくてもよいということである．たとえば (32) の例では，単に後ろ姿から「田中くんだ」と推測したことが，しばらくあとに確認できたということが示されている．ここでは，相手が田中くんであることについて，一度も疑いが生じていなくてもかまわない．ただ，顔を見るまで確認できなかったというだけである．こうした場合，「やはり」は，とくに異質な要因を介在させないまま，予想と事実との一致を示している．

つぎの例では，

(33)　やはり予想通りと言うべきか，男性の方が「家事優先」の考え方が強い．

(北川直利『ミッション・スクールとは何か』p.115)

「やはり」が「予想通り」と共起していることからわかるように，当初たてていた予想が，そのまま調査の結果と一致したことが示されている．

Maynard (1993) は，つぎの (34) の例を引き，(35) のように説明している．

(34)　いまの奴は奥さんの両親と同居してでね，やっぱり気がねなんだよ．

(赤川次郎，Maynard 1993, p.129 に引用)

(35)　« *Yappari* in [(34)] evokes social knowledge that surrounds the relationships among in-laws ; a married man feels less than totally relaxed because he lives with his in-laws. »

(Maynard, *ad loc.*)

Maynard はさらに，この例は「やはり / やっぱり」の用法のいくつかの類型のうちのひとつであり，社会的知識と事実との一致をあらわすものであるとしている (*ibidem*, p.132)．その「社会的知識」が，まさしく本稿でいうステレオタイプに対応しているのである．

また，つぎの例では，

(36)　いくら弁解してみても，弁解はやはり弁解だった．(立原正秋『残りの雪』p.450)

「やはり」が同語反復文「弁解は弁解だった」と共起している．3.2 節でものべたように，同語反復文はステレオタイプ文の一種である．

これまでの観察から，「やはり」の本質的機能と，ステレオタイプとの関係についてまとめると，それぞれつぎの (37), (38) のようになる．

(37)　「やはり」の本質的機能

「やはり」は期待や通念が事実と一致することにより，維持されることをあらわす．

(38)　「やはり」とステレオタイプとの関係

「やはり」は，ステレオタイプ的内容の維持 (maintien) をあらわす．その維持にいたる過程では，ステレオタイプに反する観点を積極的に介在させてもよいが，とくにことなる可能性を想定しなくてもよい．

結論的にいうと，「やはり」も toujours も，ステレオタイプを再確認する副詞であるということは共通しているが，(38) の後半でのべた，「ことなる可能性を想定しなくてもよい」という点が，toujours の非時間的用法と「やはり」との相違点であるといえる．

4.2 特徴的な事例

「やはり / やっぱり」の用例は，つぎのような実例にみられるように，広告のなかに頻繁に出てくるということに気づく．

(39)　パンにはやっぱりネオソフト．

(40)　やっぱり斑鳩，斑鳩牛乳．

(41)　国際電話もやっぱりＮＴＴコミュニケーションズ．

青木 (2001) は (42) の例を引き，(43) のように説明している．

(42)　やっぱりキリンですね．飲みごたえ，違うね．(*ibidem*, p.95)

(43)　「＜やっぱり＞は，X がよいか，Y がよいか，など判断にためらいがあった後に，

はじめの判断に立ち戻り，結果的に Y を排する (「やっぱり X だ」) 形式です.」 (*idem*)

この種の「やっぱり」を考えると，前節で区別した，単なる期待や通念との一致をあらわす用法と, 他の可能性を想定したうえで排除する用法がないまぜになっているように感じられる. 実際,「やっぱりキリンですね」をフランス語に訳するなら，« C'est bien de la Kirin » / « En fin de compte, je choisis la Kirin » というように，ふたとおり考えられる．これは，消費者による変わらない愛顧 (fidélité) を喚起することと，競争を前提とした他者 (他社) 排除という，広告がもつ両面性と対応している [9]．そのように考えると,「やはり」が，広告という言説ジャンルと高い親和性をもつことが理解できる.

つぎに，もうひとつの特徴的な事例として，なんらかの言語外の事態への反応として発せられる「やっぱり!」という独立的用法を考えてみたい.

これにはつぎの (44)，(45) として示す，ふたとおりのタイプの文脈が考えられる.

(44) はげしい雨のなか，娘がずぶぬれになって帰宅した．その 5 分後，息子もずぶぬれになって帰ってきたのを見て，わたしは「やっぱり!」という.

(45) 東京に住むわたしは，きのう，書類を大阪から普通郵便で送ってもらった．きょう到着するとは思えない．郵便受けを見ると，思ったとおり，着いていない.「やっぱり!」

フランス語でいうなら，(44) のような場合は « Décidément ! »，(45) のような場合は，« C'est comme je me l'imaginais ! » のようになると思われる．« Décidément ! » は，おなじ事態が反復されたときに使われるのに対して,「やはり」は複数の事態の一致にも，予想と事態の一致にも使えるというちがいがある.

また，« Décidément ! » について，Ducrot *et alii* (1980) はつぎのような指摘をしている.

(46) « On peut observer que, dans la majorité des cas, les faits dont la répétition déclenche l'interjection *décidément !* sont des faits jugés regrettables, désagréables, négatifs : nos exemples en témoignent. Cette tendance est peut-être à relier à l'attitude, très générale dans notre civilisation, consistant à voir dans la « force des choses » un élément hostile (c'est la même attitude qui conduit à réserver d'habitude le mot *fatal* pour qualifier des événements indésirables) » (*ibidem*, p.137)

ここでふれられているように，« Décidément ! » が，のぞまそくないと判断されることにもちいられるのに対して，日本語の「やはり / やっぱり」は，のぞましいことにも，のぞましくないことにも，中立的なことにもひとしくもちいることができる．たとえば，上記 (32) の例 (お

[9] ただし，(42) においては「飲みごたえ，違うね」という部分が異質性を表立たせているので，どちらかというと競争的な側面が強く感じられる.

なじ場面で, 独立用法の「やっぱり!」をもちいることもできよう) では, 友人と出あうことは, むしろよろこばしいことである．このように，アクシオロジックに方向づけられているかどうか，という相違が，「やっぱり!」と « Décidément ! » とのもうひとつの重要なちがいであると思われる.

5. おわりに

以上，本稿では，フランス語の副詞 toujours，日本語の副詞「やはり」を中心的な対象として考察してきた．どちらもステレオタイプ再確認型の副詞であるが，toujours の非時間的用法は，いったんことなる可能性が文脈上たてられてから，それを排除することで，ステレオタイプがいわば復権させられるというかたちでの再確認をおこなっているのに対して,「やはり」は, ことなる可能性が介在せず，ただ予想が裏づけられるだけの場合でも使用されることがある, という点がちがっていた．Toujours の場合と「やはり」の場合で，ステレオタイプ的な内容の再確認にいたる経緯はちがうものの, いずれの言語にもこの種の副詞が存在するということは, 言語がつねにステレオタイプを下敷きにしながらも，実際の運用においてはステレオタイプと不即不離の絶妙な距離をたもとうとしていることを示しているのではなかろうか.

参考文献

阿部宏 (2008)「トートロジーと主観性について」『日本認知言語学会論文集』8, 212-222.

Amossy, R. et A. Herschberg Pierrot (2007), *Stéréotypes et clichés,* Armand Colin.

Anscombre, J.-Cl. (2001), “Le rôle du lexique dans la théorie des stéréotypes”, *Langages*, 142, 57-76.

Anscombre, J.-Cl. (2003), “Les tautologies en langue : pour une analyse stéréotypique de leur fonctionnement”, *Recherches en Linguistique et Psychologie cognitive* (Presses Universitaires de Reims), 20, 93-122.

Anscombre J.-Cl. (2006), “Polyphonie et classification des énoncés sentencieux”, *Le français moderne*, 74, 1, 87-99.

青木三郎 (2001)『ことばのエクササイズ』ひつじ書房.

Buchi, E. (2007), “Sur la trace de la pragmaticalisation de l'adverbe *toujours*”, *Langue française,* 154, 110-125.

Cadiot, A. et alii. (1985), “Sous un mot une controverse : les emplois pragmatiques de *toujours*”, *Modèles linguistiques,* 7-2, 105-124.

Ducrot, O. (2001), “Critères argumentatifs et analyse lexicale”, *Langages*, 142, 22-40.

Ducrot, O. et alii (1980), *Les mots du discours,* Minuit.

Fradin, B. et Marandin**,** J.-M. (1979), "Autour de la définition : de la lexicographie à la sémantique", *Langue française,* 43, 60-83.

Franckel, J.-J. (1988), *Études de quelques marqueurs aspectuels en français*, Droz.

Fuchs, C. (1988), "*Encore, déjà* et *toujours* : de l'aspect à la modalité" , N. Tersis et A.Kihm (éds.), *Temps et aspects*, 135-148.

藤村逸子 (2009)「N-gram の手法によるフランス語の基本的「定型表現」の抽出」峰岸真琴, 川口裕司 (編)『コーパスに基づく言語学教育研究報告』東京外国語大学, 3, 111-138.

藤村逸子, 滝沢直宏 (編) (2011)『言語研究の技法　データの収集と分析』ひつじ書房.

藤田知子(1988)「Une femme est une femme －X ÊTRE X 構文解釈の試みー」『フランス語学研究』 22, 15-34.

藤田知子 (2012)「Vous êtes théâtre ou cinéma ? 構文に関する覚書」『神田外語大学紀要』24, 57-76.

市村美和子 (2004)「モダリティ副詞「やはり」の情報統御機能について」『国文目白』43, pp.1-10.

喜田浩平 (1996)「語彙意味論と「論証」理論」『フランス語学研究』30, 59-65.

Leeman, D. (dir.) (2008), *Des topoï à la théorie des stéréotypes en passant par la polyphonie et l'argumentation dans la langue*, Université de Savoie.

Maynard, S. K. (1993), *Discourse modality,* John Benjamins.

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店.

Mosegaard Hansen, M.-B. (2004), "La polysémie de l'adverbe *toujours*", *Travaux de linguistique*, 49, 39-55.

Muller, Cl. (1999), "Encore et toujours les modificateurs aspectuels : de *encore* à *toujours*", Plénat, M. et alii (éds.), *L'emprise du sens,* Rodopi, 217-237.

Némo, Fr. (2000), "*Enfin, encore* et *toujours* entre indexicalité et emplois", Englebert, A. et alii (éds.), *Actes du XIIe congrès internationales de linguistique et de philologie romanes,* Niemeyer, 7, 499-511.

Nølke, H. (1983), *Les adverbes paradigmatisants*, Akademisk Forlag.

Nølke, H. (1993), *Le regard du locuteur,* Kimé.

大久保朝憲 (2000)「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文學論集』(関西大学), 49, 4, 23-40.

Palma, S. (2006), "Les locutions à polarité négative : une approche stéréotypique", *Langages*, 162, 61-72.

Saïd, M. (2010), *La stéréotypie*, Editions Universitaires Européennes.

坂原茂 (2002)「トートロジとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫 (編)『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II カテゴリー化』東京大学出版会, 105-134.

酒井智宏 (2012) 『トートロジーの意味を構築する―「意味」のない日常言語の意味論―』く

ろしお出版.

Schapira, Ch. (2000), “La phrase tautologique”, *Lingvisticae Investigationes*, 23, 2, 269-286.

Schapira, Ch. (2005), “Existe-t-il une polysémie propositionnelle ?”, O. Soutet (dir.), *La polysémie*, Presses universitaire de Paris-Sorbonne, 345-362.

渡邊淳也 (1992)「副詞 toujours の意味と用法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』7, 65-86.

渡邊淳也 (2004)『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.

渡邊淳也 (2011)「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』45, 79-86.